
F B I から来た女: 2 ~ 深緑・緑の章

ユーリ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

FBIから来た女：2）深緑・緑の章

【Nコード】

N1016B

【作者名】

ユーリ

【あらすじ】

ジンが逮捕された事をきっかけに、5つの組織『ペンデュラムアツド』が本格的に動き出した。これは、コナン達と緑の組織との、激しい戦いを描いた話である。この話は基本的にコ哀です。コ哀が嫌いだとか、意味不明の評価は容赦なく削除していきますので、ご了承ください。

ファイル112：怪盗3兄妹

スウェーデン ストックホルム

この町の酒場のカウンター席で、1人の男が酒を飲んでいた。

その隣に、ボウシを深く被りコートを羽織った男が座った。

その男に、最初の男がタバコの箱を渡した。

「ホラよ、工藤。5つの組織の情報が入ったIDカードだ。ただ、例の薬のデータだけはなかった。」

工藤と呼ばれた男、工藤優作はそれを受け取った。

優作

「イヤ、これだけあれば充分だよ。」

そう言って酒を注文し、本物のタバコを吸いながら、キャンディーの箱を男に渡した。

箱には今回の礼金が入っていた。

「しかし工藤。ちょっとこれからは難しいかも知れない。組織も警

戒しているし、それに上司の目も厳しくなってきたんだ。」

実はこの男、ICPOの捜査官。

そして、優作の知り合いであった。

そして、優作にペンデュラムアッドの情報を提供していた。

優作

「そうか。」

優作はそう呟いた。

「しかしオマエ、5つの組織の情報を集めてどうする気なんだ？ ウサじゃ、日本でおかしな推理を連発したそうじゃないか。どうせ演技なんだろうが、何でそんな事をする？ 一体何があったんだ。それに、息子さんの新一君も行方不明だっというじゃないか。まさか、スパイにでも転職する気か？」

それに対し、優作は笑って答えた。

優作

「アツハツハツハツ、まさか！ ただ、『命を懸ける価値はある』とだけは言っておこう。それに、小説家たるもの、芸の1つや2つはできんとな。」

「そうかい、じゃあオレは行くぜ。また情報が入ったら、連絡する。」

そう言って、彼は出ていった。

そして、優作も少し時間を置いて出る。

彼が向かったのは空港であった。

こうして、彼の息子のための地道な活動は続いていくのである。

江古田高校、屋上

怪盗キッド

「またアイツらが動き出す……スネイク達、緑の組織が……」

怪盗レディー

「今度こそ、ヤツらを叩き潰す……パンドラも見つけ出して……アタシ達の手で粉々に宝石をぶっ壊してやる……!」

キッド

「弥生、本当にいいのか?」

レディー

「何がよ、お兄ちゃん?」

キッド

「正直言って、ここから先の仕事はかなりキツくなる……ヘタしたら、ヤツらに殺されるかもしれない……怖くないのか?」

レディー

「怖くなんかないよ。だって、お兄ちゃんが一緒だもの!!」

キッド

「弥生……」

怪盗オルキッド

「2人とも、そろそろ行きましょう。」

キッド

「そうだな。」

レディー

「行きましょ、鈴ちゃん。」

ファイル113：復活までのカウント・ダウン

某刑務所

ジンはあれから、半年も刑務所の中にいた。

逮捕された他のメンバーに比べ、罪が重かったためだ。

ジン

「オレだ。どうだ、調子は？」

アメリカ

キャンティ

「順調よ、お父様。黒の組織からAPT X4869のデータ、奪い取りました。」

ジン

「上出来だな。よし、そのままダイヤの搜索に当たれ。赤、黄、紫、緑、青、桃、金、黒・・・コナン達を元に戻す力を宿す、あの8つ

のカラーダイヤを……何としても見つけ出すんだ……」

キャンティ

「了解しました、お父様。」

ピッ。

キャンティ

「行くよ、コルン！」

コルン

「ああ……」

イギリス

モスコ

「ここか……」

フランス

ミュール

「カラーダイヤの一つ、ブルーダイヤがある遺跡は……」

スペイン

ウオツカ

「よし・・・」

ブラジル

ライン

「フウ・・・」

オーストラリア

カシス

「森の中を探すのも、簡単じゃないやね・・・」

ドイツ

バン・ロゼ

「見つけた・・・」

エジプト

キルシュ

「あー、キツ……」

ロシア

風月

「寒いね……」

花鳥

「極寒の地、ロシアだからね……」

ジン

「アイツらの腕なら、早くて1週間あたりで見つけ出せるだろう・
・オレはその前に、この本を読み終えなければならぬ……この
『邪悪なパンドラのすべて』という、先代ボスが書き記した膨大な
量の本を……これを全部、隅から隅まで読まなければ……今の
あの方を倒す事は絶対にできん……アイツら全員の未来のため
も……オレは必ず、この本を読み終えてやる!!!」

ファイル114：刃、絶体絶命！！『前編』

刃は今日、繭美、幹彦、健太と一緒に、矢笠の車で群馬県に向かっていた。

流星観測に行くためだ。

ピュー・・・

繭美

「流れた！！あ、もう消えちゃった・・・」

鉄之助

「大丈夫、まだたくさん見られるよ。ここは回りに明かりもないし、空気も澄んでるから・・・」

ピュー・・・

繭美

「よし、今度こそ！」

刃

「なんて、張り切ってたけど・・・やっぱり子供ね。あつさり寝ちゃった。博士、もう少ししたらこの子達をふもとの宿に連れてってあげたら？」

鉄之助

「あ、流れた！おっと、フィルムが・・・」

刃

「やれやれ、聞いちゃいないわ・・・流れ星、か・・・本当に願いが叶うのなら・・・って、どうしたのよ、アタシ！弱気になってるの！？しっかりせい、リアン・ハートネス！！アンタは必ず元の姿に戻って・・・」

ボシユツ！！

刃

「！何？今の音・・・向こうから・・・ま、まさか！！」

ダッ！

タタタ・・・

「う、撃つな！撃たないでくれ！！！！」

刃

「！！！！」

サッ。

刃

「車が2台。それに・・・拳銃!!やはりさっきの音は・・・。」
刃の目の先に、ケースが見えた。

刃

「ジュラルミンケース・・・コイツら・・・」

「ど、どうしてこんな事・・・オレ達仲間じゃねえのかよ。」

「仲間く?」

バシュッバシュッ!!

刃

「!!」

「気がつかなかったのか?オマエら5分前から、『お荷物』に降格してただぜ。」

刃

「コ・・・コイツ・・・」

ズルズル・・・

ガササツ・・・

刃

「どうする?相手は1人だけど、拳銃を持っている・・・ESP制

御装置はメンテナンス中で使えないから、頼りはこの麻醉銃か。かなり接近しないと・・・」

ザザッ・・・

刃

「よし、これでヤツが車に乗り込もうとするところを・・・」

ブン！

ガラガラ・・・

「よし。」

ザッザッ・・・

刃

「（来た。）」

ザッ・・・

「！」

刃

「（バレた？）」

ダッ！

バシユッバシユッバシユッ！！

刃
「!！」

ザザザザ・・・

「女!？」

ザッ!

刃

「(くそっ!どうしてバレたの?)」

「お嬢ちゃ〜ん。逃げててもムダだぜ〜。オレの顔を見たからには、生かしておけないんだ〜。」

刃

「(他に人は出てこない・・・誰かがアタシがいるのを知らせたワケじゃないんだ・・・よほどカンがいいヤツなの?何にしても、1人でよかった。最悪の事態は避けられそうだからね・・・ヤツがアタシを追ってくるのも、都合がいい。このままこの森の中で仕留めてやる!森の方が死角が多くてやりやすい。(さあ、追ってきなさい!!)」

ザッ!

ガサガサ・・・

「フフン、やはり逃げてくか・・・残念だぜ。ホントは狩りを楽しみたいトコだが、やらなきゃいけない事ができちゃった・・・」

ガラ！

「よくアイツがいるのを知らせてくれたな。オマエ達は本当に優秀だよ。仲間を気取ったゴミ共とは雲泥の差だ。褒美にアイツをくれてやる。好きなようにしていいぞ。さあ、どっちが行く？相棒！」

刃

「おかしいわね・・・懐中電灯の光が見えない・・・確かにヤツが入ってきた気配はしてるのに・・・明かりなしでアタシを見つけれれるのか？」

ダッ！

刃

「バカな！ヤツが夜目が利くっていつの？それとも・・・！気配が、消えた・・・」

ピカッ！

刃

「！」

『バウツ！！』

刃

「い、犬！？」

ガッ！

刃

「あがつ！！左足が・・・ぐっ・・・このお！！」

パシユツ！

ドサツ！

刃

「こ、この子はヤツの犬？ヤツの代わりにアタシを・・・それじゃ、ヤツは・・・？ア、アタシの恐れていた最悪の事態に！？みんな！！」

バリン！

バリン！

パシユツ！

「クツクツクツ・・・女が1人でこんな所にいるはずないからな。悪いな、兄ちゃん・・・今夜だけは静かな夜を贈りたかつたんだ・・・娘がいらないなんて警察に駆け込まれちゃ、記念の夜が台無しだからな・・・」

刃

「くそ・・・携帯は圏外か・・・なら、これで・・・」

ピッ。

刃

「誰でもいい。返事をして・・・健太君・・・幹彦君・・・繭美ちゃん・・・誰かあ!!!」

ファイル115：刃、絶体絶命！！『中編』

刃
「誰か、誰か返事を・・・」

幹彦
「？刃・・・ちゃん・・・？」

刃
「幹彦君！あなた達、今車の中？」

幹彦
「ああ。」

刃
「そのままジツとしてて。絶対動かないでよ！！（少なくとも、3人は無事か・・・今のうちにアイツをこっちに引きつければ・・・）」

幹彦
「何なんや・・・（！誰か近づいてくる・・・博士か？）」

カツ！

「フフン。どうやら、これで片づいたらしいな・・・後はコタケが、あの娘を・・・」

キャイン・・・

「！ま、まさか・・・コタケが・・・？バカな！！」

ダッ！

刃

「キャーン・・・これをこの犬の声と思ってくれればいいけど・・・さあ、アンタの犬はやつつけたのよ・・・アタシを追いかけてきなさい・・・」

『ワンワン！！』

刃

「何！？（も、もう1匹、犬がいたの！？）」

『アウン・・・』

刃

「鳴き声が移動していない・・・まだあのワゴンの中？くそ・・・人間だけなら、この犬をうまく隠せばなんとか森を利用して逃げられるのに・・・麻酔針はもうない・・・それに左足をかまれ大量出血したから、全力疾走もできない・・・追いつかれたら、確実に殺られる！！」

「コタケ！」

『ワンワン!!』

刃

「来た!!」

「コタケー。．．．くそ！コウメ!!」

ガラッ!

コウメ『グルルル．．．』

刃

「何ですって!!博士が!?!」

幹彦

「崖の下に．．．」

健太

「全然動かなくて．．．」

繭美

「博士、死んでもたんかな?」

刃

「ア、アホ!まだ死んだとは限らない!!宿に帰って、助けを呼ぶのよ。それと、警察に電話して。拳銃を持った凶悪犯が、山中を逃走してるって．．．」

繭美

「拳銃！？刃ちゃん！刃ちゃんはどこにいるの！？」

刃

「心配しないで。アタシは今、ヤツを尾行してるの。ヤツに気づかれるとまずいから、通信機はこれで切る。ヤツの隠れ家が見つたら、こつちから連絡するから・・・それより、博士よ。博士の命はあなた達にかかっている。全力で宿に行くのよ、いい！」

繭美・幹彦・健太

「うん！」

刃

「よし！！走って！！」

繭美・幹彦・健太

「わー！！！」

ダッ！！

ピッ。

刃

「あの子達はこれで安全でしょう・・・後は・・・博士・・・お願い、生きてて・・・」

コウメ『ワン！！』

「コタケ！！コタケがやられるなんて・・・あの娘、いつたい・・・？ん？血だ・・・コタケに外傷はない。するとヤツの血か・・・コウメ！よく覚える・・・オマエの姉妹をヒドい目に遭わせたヤツの血だ・・・たつぷり仕返ししてやらなきゃいけねえんだ・・・」

コウメ『クンクン・・・』

「いいか？」

コウメ『ワン！！』

「よし行け！！」

健太

「おい、今どれぐらい来た！！」

幹彦

「まだ半分も来てないよ・・・」

健太

「くそ！グニヤグニヤ曲がってて、ちつとも下に着かへんな・・・」

幹彦

「しょうがないよ、急な山道なんやから。」

健太

「けど、こんなモタモタしてたら博士が死んでまっぞ・・・ん？おい！！」

幹彦

「どうしたん？」

健太

「ここ……ここからまっすぐ突っ切ったら、より速く宿に着くんやないか？」

幹彦

「ム、ムリやろ！こんな急なト……危険すぎるよー！」

健太

「やっぱそうか……」

繭美

「……なあ、やってみよう。」

健太

「ま、繭美！？」

幹彦

「危ないって！」

繭美

「ちよつとぐらい危なくなっただって平気や！博士は死にかけてるんやで！ーそれに刃ちゃん、言うてたわ。博士の命は、ウチらにかかってるて……」

健太

「やってやるうー！ワイらは浪花の少年探偵団なんやー！」

幹彦

「そつや！博士が危ないのに、こんな事でビビってられるか！！」

繭美

「健太！幹彦！」

健太

「ええかー。下に小さく見える光が宿のある村や！！あそこまで走る！！覚悟はええかー！！！」

繭美

「（小さな光・・・お星様みたいや・・・お星様・・・みんなと博士と・・・刃ちゃんを守つて・・・）」

健太

「3、2、1！！！」

繭美・健太・幹彦

「だああああああああああああああ！！！！！」

刃

「ハア、ハア・・・ダメだわ・・・犬がいたんじゃ・・・この足ではとても逃げきれない・・・犬は陸上で最強のハンター・・・犬には猫科のハンターのような駿足はないけど、彼らのように獲物を獲り逃がしてしまう事は絶対がない・・・なぜなら彼らには、ケタ外

れの嗅覚があるからだ。たとえ犬より速い足を持ち、一時その目を逃れられたとしても、意味はない・・・彼らは決して慌てず、ゆっくりと・・・そして何日でも臭いをたどり追跡をかけ・・・最後には、見も心もズタズタになった獲物の体にその牙を食い込ませてしまふ・・・ちくしょー！！アタシもヤツらの牙にかかって・・・」

ズルツ！

刃

「キヤツ！！」

ズザザザザ・・・

ドサツ！

刃

「殺られちゃうのかな・・・」

ピュー・・・

刃

「あ・・・流れ星・・・ハハ・・・こんな時に流れ星だなんて・・・ん？」

ガバツ！

刃

「た・・・建物！助かった！！人がいれば・・・イヤ・・・せめて、電話さえあれば。！！窓ガラスが割れ、老朽化してる・・・これは、廃屋・・・ダメだわ・・・これじゃ、電話も人も・・・」

カッ！

刃

「！き・・・来た・・・」

刃

「き、来た・・・クソッ！！犬さえいなければ、ここに隠れる事もできるのに・・・やっぱり、逃げるしかないか・・・しかし、人と犬がペアになっっていたら遅かれ早かれ・・・なんとか2つに、分断しないと・・・」

「！建物・・・人はいないようだが・・・まずいな・・・人家が近いつて事だ・・・モタモタしてられんぞ。急げ、コウメ！！コイツは廃屋か・・・さて、娘はどっちに・・・。！縁の下？」

刃

「ハア、ハア・・・」

「逃げきれないと思って隠れたか？それとも、縁の下を抜けて建物の反対に逃げたか？クソ、二手に別れて追うしかないか・・・よし、コウメ。中に入って娘を追え！オレは建物の反対に回る。遊ぶ余裕はなくなつたぞ。見つけたら、即、咬み殺せ。」

コウメ『バウツ!!』

健太

「イテテテ!!」

繭美

「大丈夫? 健太・・・」

健太

「ちよつとすりむいただけや。さあ、行くで!!」

幹彦

「やっぱりムチャやって・・・もう何回も転んでるやないか・・・ボクや繭美ちゃんかてキズだらけ・・・それに今度こそ、スリ傷なんかじゃ済まないかも・・・」

「コイツは学校だったのか・・・民家まではもう少しあるが・・・まだ校内なかにいるのか? それとも民家に逃げ込まれたか? クソく、コウメがいないとハツキリしねえ・・・早く出てこい、コウメ・・・」

刃

「！（来た。感じるわ、獰猛な獣の気配・・・だけど計算通り、犬1匹だわ。この子を倒して活路を切り開く。来なさい。勝負よ！！）」

「

クルクル・・・

ピッ。

刃

「（止める！ヤツの牙を！！）」

コウメ『ガウッ！！！』

ダッ！！

サッ！

ガキッ！

刃

「止めた！咬め。そうよ、もっと強く！！！」

スッ！

バッ！

刃

「くっ！！！」

ギリギリギリギリ……

ドサツ！

刃

「や……やった……よし、死んでない。失神しただけだわ……この子はヤツの命令を聞いてるだけ……殺したらかわいそうだからね。……一息ついてるヒマはなさそうだわ……第2の脅威が近づいている……」

「遅い……いったいどうなってんだ。まさかコウメまで……コウメ！コウメ！くそ！小娘が！！」

バリッ！

「こうなったら、オレが必ず見つけ出して殺してやる！！」

ヒョコ！

刃

「まずいわね……だいぶ熱くなってるわ……あの執拗な性格……何をするかわからないわ。関係ない人を巻き添えにしないように、アタシがなんとかするしかない……だけど……まだあの子がいる……あの子が来ないなら、学校に隠れてやり過ぎす事もできるのに……」

「オ、オマエは・・・コ、コウメ・・・!?イヤ・・・コタケ!!」

コタケ『バウツ!!』

刃

「来たか・・・麻醉が切れた後、きつと追ってやって来る・・・予想はしてたけど、思ったより早かったわね。これで元の状態に逆戻り。相手の武器は拳銃と犬・・・こっちは丸腰。勝ち目はなし、か・・・クソ!どうすれば・・・ん?あれは?」

ガサツ!

刃

「廃寺らしいわね。行ってみるか・・・とりあえず、ヤツらとの距離を開けなきゃいけないし・・・何か武器になる物でもあればいいけど・・・」

ザツザツ・・・

刃

「こりゃあ、想像以上にボロボロね・・・特に鐘つき堂なんて・・・ん?」

『危険。腐ってます。立ち入り禁止。』

サツ・・・

刃

「・・・」

トッ！

ミシ・・・

ボロツ！

刃

「腐りがかなり進行してる・・・柱の中までボロボロだわ・・・！これは、一か八か・・・ヤツらを捕まえる事ができるかもしれないわ！！」

ガゴツ！！

刃

「こんなもんかしら・・・これで楔ができた。後はこの石で・・・勝負よ！！」

「小娘め、逃がさねえぞ・・・たとえどこかの家に逃げ込んでても、その家のヤツらごとく皆殺しにしてやる！オレと相棒をコケにした罰だ・・・。！ここを下ったか・・・」

ザッザッ・・・

「!ヤツの血だ・・・まだ乾ききってない。近いな・・・」

ニヤ・・・

ザツザツ・・・

ジャリ!

「!木クズ・・・?イヤにあるな・・・!何だ?」

ヒヨイ!

「ヤツの・・・シャツ?」

刃

「(今だわ!!!!どうかうまく・・・いってえ!!!!)」

ガッ!

ミシッ!

バキバキバキッ!!

ゴオオオオン!!

「!!!!くそ!!!!どうなってんだ!?!出せ!!!!」

コタケ『バウツバウツ!!!!』

刃

「や……やった……」

ドンドン……!

刃

「それじゃあ自慢の犬も拳銃も役には立たないでしょう……腐った梁のヒビに、楔を打って広げたのさ……よく成功したわよ……鐘つき堂までいっちゃってもおかしくないし……」

ガバツ!

刃

「そうだわ! 健太君達は!？」

健太

「イテエー!!! みんなケガはないか!!!」

繭美

「大丈夫!」

幹彦

「後少しや、がんばろう!」

健太

「おつよ! ワイらで博士を助けるんや! よーし、行くぞ!」

繭美

「1、2の……」

カッ！

幹彦

「！」

キキツ。

「ボウズ達！そんなトコで何してんだ！ん？おいやーっ、オマエらキズだらけじゃねえか！」

こうして、犯人の男は逮捕され、アタシと博士は無事に助け出された・・・

もちろん、アタシ5人全員、全治1ヶ月の重傷であったため・・・

寝屋川病院で1ヶ月の入院生活を余儀なくされたのでした・・・

ファイル117：演劇女優誘拐事件『前編』

コナン達は白野美保と瀬藤銀一の通っている、山王学園に招待された。

美保が部長を務めている、演劇部の劇練習を見学させてもらえる事になっていたのだ。

哀

「へー、ここの演劇部そんなに人気なんだ！」

銀一

「うん、中等部の時にうちの部の劇が金賞を取ってからね。」

美保

「元々私が趣味で部を作ったんだけど、スゴく人気が出たからみんな張り切っちゃってね……」

ユリ

「でも、なんで今日呼んだの？本番の時に呼べばいいのに……」

美保・銀一

「フッフッフ……それはねえ……」

刃 「ええ〜っ!!アタシが劇のヒロインに〜!!?」

哀

「ホントなの?美保ちゃん。」

美保

「ええ、今回の劇は義経と静御前を使ったオリジナルでね・・・その義経役にリアンちゃんがピッタリなのよ!」

松葉

「確かに・・・リアンちゃんはいつも髪型がポニーテールだから、イメージ的にも合ってると思うけど・・・」

コナン

「内海さんじゃダメなの?」

美保

「ダメよ〜!だって、義経の幼少期の役よ?内海さん年いってるからダメよ〜!!」

銀一

「(っ)って、内海さんも20代なんだけどな・・・(」

刃

「わかったわ、アタシやってみる!」

美保

「そこなくっちゃ！」

銀一

「じゃあ、静御前役は誰がいいかなあ？」

松葉

「アタシがやるわ。一時期、女優になりたかったし。」

美保

「決まりね！じゃあ、部室でみんなに紹介するわ！」

演劇部 部室

美保

「じゃあ、我が山王学園演劇部の部員達を紹介するわ！まず一番左が、武蔵坊弁慶役の熊谷正直君！」

くまがえ まさなお
熊谷正直

「ごんちは！」

哀

「なんか体がゴツツイね・・・」

銀一

「パワー系の役ばかりだからね、彼・・・」

美保

「彼、こんな顔してるけど、私達の中で一番の人情家なのよ！」

正直

「美保、その紹介いい加減にやめてくれ……」

美保

「あら、そのセリフは剣道で私に一度でも勝ってからにしてくれる？」

哀

「やっぱり美保ちゃん、剣道強いのね……」

美保

「その左が常盤役の……」

エル

「エル・シーバスよ。」

美保

「そして伊勢三郎役が銀一で、私は静に仕える巫女役よ。」

銀一

「他の人は、右から真柄敦盛君まがら あつもりと駿河良明君すまが よしあき。」

美保

「あとの人達はそれぞれの家にいるわ。今日は私達のパートだけだから。」

銀一

「じゃあ、練習始めよう!」

練習中

熊谷

「そのオマエ!今すぐ太刀を置いて立ち去れい!!」

刃

「・・・」

熊谷

「聞こえておらぬか!?!」

ズバツ!!

ヒラリッ。

熊谷

「何!?!」

刃

「たああああ!!」

バコツ!!

ドサツ・・・

熊谷

「む、無念・・・」

刃

「フウ・・・」

美保

「カット！さすがね、名演技だわ！！」

刃

「ありがとう。」

美保

「じゃあ、しばらく控え室で休んで。あとで銀一が呼びに行くから。」

刃

「うん！」

刃は走っていった。

タタタ・・・

控え室

刃

「のど渴いちゃった。ジュースを飲もうと。あら？扉が開いてる・・・」

刃は扉を開けた。

チャツ。

刃

「不用心だなあ・・・」

その時・・・

ボタン。

扉が閉じた。

刃

「えっ？」

バツ！！

刃

「うっ！！」

刃は後ろから口を塞がれた。

ジタバタ・・・

「・・・」

刃

「うう・・・（ク、ク口口ホルム・・・！！み、美保ちゃん・・・

助け……て……!!!()」

ガクツ……

ドサツ……

刃は倒れ込んでしまった。

「フッフ……」

男は刃を背中にかついだ。

ガバツ。

バタン。

コツコツ……

男は刃をどこかに連れ去った。

ところかわって、練習中の美香達。

美香

「あなた達が例の山賊か!!」

駿河良明

「その通り!悪いがここを通すわけにはいかんだ!」

真柄敦盛

「大人しくしてもらおうか？」

美香

「そんな挑発に誰が乗るか！弁慶、八郎、いくわよ！！」

熊谷

「おお！」

深雪

「任せて！」

美香

「ハアアアアッ！！」

パンパンパンパン！！

美保

「うんうん、みんな順調ね！」

哀

「美保ちゃん、この劇はどいうストーリーなの？」

美保

「ある時、山賊に義経がさらわれちゃってね、静が弁慶や三郎、鷲尾七郎、片岡八郎を連れて助けに向かうの。」

ユリ

「すごい内容ね・・・」

松葉

「それで、どついつ風になるの？」

美保

「えっとね、常盤の所に脅迫状が届いてね……」

タタタタタ……

バン！

銀一が駆け込んできた。

銀一

「美保、大変だよ！！」

美保

「え？どうしたの？銀一……」

銀一

「控え室に行ったら、ノートパソコンが置いてあって、それにこんな画像が……」

銀一はパソコンを開いた。

美保

「こ、これは……！！」

哀・コナン・松葉・ユリ

「リ、リアンちゃん……！！」

パソコンには、刃の姿が写っていた。

美保

「手足を縄で縛られてる……!!」

コナン

「ゆ、誘拐……!!」

哀

「このパソコンいつ見つけたの？」

銀一

「控え室に彼女を呼びに行った時だよ……それと、部屋に薬品の匂いがしてたよ……」

松葉

「薬品の匂い？」

銀一

「うん……たぶん、クロロホルムだと思う……」

美保

「誘拐する前にクロロホルムをハンカチに染み込ませてリアンちゃんに嗅がせ、眠らせたのね……」

ユリ

「それで、他には何かないの……？」

銀一

「画像の下に脅迫状があるんだ。読んでみるね。『義経・刃は預かった。返してほしくば、身代金3000万を持って指定の場所まで来い。運び役は後で連絡する……』」

哀

「リアンちゃん……」

美保

「許さない……」

哀・コナン・松葉・ユリ・銀一

「え？」

美保

「私の親友をこんな目に遭わせるなんて、絶対に許さない!!必ず見つけ出して、私が叩きのめしてやる!!……」

美保が壁に拳をぶつけると、壁にヒビが入った。

銀一

「美保……」

美保

「待ってて、リアンちゃん!!必ず助け出してあげるからね!!……」

それからしばらくして、刃は目を覚ました。

刃

「う、うん・・・」

ムクツ・・・

刃

「!」

グツグツ・・・

刃は体を動かそうとしたが、ムダだった。

刃

「ん！んん！！（て、手足が縛られてる！そ、それにしゃべれない！！口にガムテープが貼られているんだわ・・・！！一体アタシ、どうなったの？そうだ、思い出したわ！確か控え室に行った時、中に入ったら急に扉が閉まって・・・それに驚いていたら、いきなり後ろから口を塞がれて・・・そしたら、急に気が遠くなって・・・嗅がされた薬は睡眠薬の中でも高い威力のクロロホルムだから、1時間以上は眠っちゃうし・・・その間なら、ゆっくりとアタシを縛り上げる事ができる・・・でも、どうしてアタシ誘拐されたの・・・？）」

すると、男の声が聞こえてきた。

「起きたか・・・もう少し眠っているかと思ってたが・・・」

刃はパッと振り向いた。

刃
「！！（こ、この人がアタシをさらった誘拐犯・・・！！し、しまった！顔を見ちゃいけない・・・！！）」

刃は顔をそらした。

バツ。

「心配するな。ジツとしていてくれれば、何もしないよ。」

そう言うと、男は刃に近寄り、口のガムテープをはがした。

ピリッ。

刃
「プハッ！！あなたいつアタシの事を・・・？美保ちゃんと仲がいい事もどうして・・・？」

「新聞で見たのさ、君がああ娘と写ってる写真をね。そして、今日あの学校前で君を見たんだよ。」

刃
「それで、アタシが控え室に来るのを待ち伏せしてたのね・・・？」

「察しいいな。さすがは、京都の女子高生名探偵白野美保の助手兼親友といったところか。」

刃
「身代金の運び役は誰にするつもり・・・？」

「決まっているさ、白野美保だよ。」

刃

「どうして、美保ちゃんに・・・？」

「オレは3年前に殺人事件を起こして、あの娘に捕まったのさ・・・
無論、逮捕したのはアイツの母や部下だがな・・・」

刃

「それって、逆恨みなんじや・・・？」

「そうとも言うな。とりあえず、また口を塞いでおこうか。騒がれると困るからね。」

そう言うと男はガムテープをピーッと切り、刃に近づいてきた。

刃

「あ・・・ああ・・・キャアアアアッ！！！！」

ペタッ。

刃は口にガムテープを貼りつけられた。

刃

「んゝ、んゝ・・・（美保ちゃん・・・助けて・・・助けてっ！！！！）
！！」

ファイル118：演劇女優誘拐事件『中編』

ピリリ・・・ピリリ・・・

美保

「犯人から電話だわ!!」

美保は受話器をとった。

ガチャッ。

美保

「もしもし・・・」

「白野美保か・・・剣野刃は預かった・・・」

美保

「彼女の声を聞かせて!!」

「いいだろう・・・」

刃

「美保ちゃん・・・ごめんね・・・捕まっちゃった・・・」

美保

「刃ちゃん!!!!」

「彼女を助けたければ、身代金3000万をオマエが持って、清水寺に来い。警察には……」

美保

「ご心配なく、連絡する気は毛頭ないわ……そのかわり、もしちよつとでも彼女に危害を加えたらわかってるでしょうね……?」

「度胸がある娘だな。その勇気、後悔するなよ?」

美保

「フン!その言葉、そっくりそのままあなたに返してあげるわ!」

「……」

男は電話を切った。

ガチャ。

コナン

「美保ちゃん……」

美保

「みんな、警察には連絡しないで!彼女の命がかかってるんだから!」

哀・コナン・松葉・ユリ

「うん、わかった……」

銀一

「でも、リハーサルはどうするの？美保……」

美保

「そうね……私が彼女を連れて帰ってくるまで、代役をたてておこうかしら……じゃあ、新一君が義経役を、志保ちゃんが静役を……そしてアリスちゃんには私の代わりを任せるわ。」

コナン・哀・松葉

「わかった……」

美保

「じゃあ、母さんに電話しておきましょう。犯人が誰かわかるかしれないし。」

同じ頃、清水寺に監禁された刃と、彼女を誘拐した男。

「フッフ……本当にカワイイお嬢ちゃんだ……」

刃

「んっ、んんっ……」

刃は縄をほどこうとして、必死にもがいている。

「白野美保がやって来たら、この竹刀で気絶させて……フッフ……」

刃

「（この人、美保ちゃんも捕まえる気なんだわ……！…ど、どう

しろうつ・・・！縛られてちゃ、動けないよお・・・！！(んゝんん
ゝんんんゝつ！！！！」

美保は、京都府警に電話をかけていた。

電話には、彼女の母、琴葉が出た。

美保

「・・・なんですって！！あの近藤伸吾が3日前に出所してすぐ・・・あの時の暴走族のリーダーを殺した！？」

白野琴葉

「ええ、これでヤツは自分の親友を殺した暴走族全員に復讐した事になるけど・・・3年前に復讐の邪魔をした、あなたにも恨みを持っている！気をつけて、美保・・・これはヤツのワナよ！人質に取られてる刃ちゃんの名も危険だよ・・・！！」

ガチャ・・・

銀一

「美保・・・犯人の目星はついたのか！？」

美保

「ええ、近藤伸吾って男で、私が3年前に捕まえた男よ。剣道の腕前もある、クセ者だよ・・・そういえば、彼には大切な親友がいたっけ・・・あの事件で殺されちゃったんだけど・・・」

銀一

「美保、くれぐれも気をつけるよ……」

美保

「わかってるわ……心配しないで……」

清水寺

美保は清水寺にたどり着いた。

美保

「犯人が来いと言っていたのはここ……じゃ、この中にリアンちゃん……待ってて、リアンちゃん……すぐに助けてあげるからね!!」

再び、山王学園

コナン

「ねえ、銀一君と美保ちゃんは、演劇部のみんなとどういう関係なの?」

銀一

「ああ、実は演劇部のメンバーは全員、白野蘭学塾の生徒なんだよ。オレも含めてね。さらに、メンバー全員が特待生なんだ。」

コナン

「特待生？何の？」

銀一

「熊谷、真柄、天幕さんが編入の特待生で、駿河と鳳さんが飛び級の特待生。そしてオレとエルさん、美保が学費免除の特待生なんだ。」

哀

「へー……」

銀一

「（それより、問題は美保だ……近藤伸吾は剣道の腕があるヤツ……美保、大丈夫だろうか……）」

清水寺

美保は清水寺の中に飛び込んだ。

美保

「刃ちゃん!!」

美保の目線の先には、座り込んでいる刃の姿があった。

刃

「ん、んんむうん……!!（み、美保ちゃん……!!）」

美保

「待ってて！今助けに行くから……」

美保は走りだそうとした。

しかしその時、小刀が飛んできた。

ズバツ！！

美保

「痛っ……！！」

小刀は美保の右肩をかすめた。

美保

「近藤！どこにいるの！？出てきなさい！！」

美保は叫んだ。

近藤伸吾

「フン……やはり気づいていたか……」

ザツザツ……

美保

「近藤……！！あなたの狙いは私だったんでしょ？だったら、最初から私を狙えばいいじゃない！！どうして、関係ない刃ちゃんまで巻き込んだの！！」

近藤

「そりゃあ、オマエを確実におびき寄せするためさ……」

美保

「この卑怯者……!!」

近藤

「どつとでもいいな。」

近藤はそう言うと、竹刀を取り出した。

近藤

「ホラ、オマエも出せよ……伸び縮み式の竹刀をよ……」

美保

「言われなくても……」

スツ……

近藤

「オレと勝負してもらうぞ、白野美保……オレが負けたら、この子は返してやる……だが、もし負ければ……」

美保

「もし、負ければ……?」

近藤

「オマエも人質になってもらう。」

美保

「望むところよ……その勝負、受けて立つわ……」

近藤

「いざー!!」

美保

「勝負!!」

ドンツ!!

美保

「ハアツ!ハアツ!!ハアアツ!!!」

パンパンパンパン!!

近藤

「ぐっ・・・ぐっ・・・あ・・・」

勝負は美保が優勢だ。

美保

「そこお!!」

ガツ!!

近藤

「!!」

スパンツ!!

美保が勢いよく振った竹刀が、近藤の竹刀を叩き斬った。

カランカラン・・・

美保は竹刀の先を近藤に突きつけた。

近藤

「・・・」

美保

「あなたの負けよ。降参しなさい・・・」

近藤

「フッフ・・・それはどうかな？」

美保

「えっ？」

ギラッ！！

ズバッ！！

美保

「キヤアッ！！」

美保は右の頬を斬られた。

ブシュッ！！

右の頬から血が吹き出る。

美保

「ど、どういふ事・・・！？」

近藤

「ククク・・・この竹刀の中には、真剣を仕込んであったのさ・・・

」

美保

「な、なんて卑怯な!!」

近藤

「これも、無惨に殺された親友の仇討ちのためだ!!」

近藤は美保に斬りかかってきた。

ザシュツ!!

美保

「うっ!!」

ザンツ!!

美保

「ああっ!!」

ドシュツ!!

美保

「づぐっ・・・!!」

美保は次第に追い詰められていく。

体中が刀傷だらけだ。

美保

「ハア、ハア、ハア……」

近藤

「それい!!」

ザンツ!!

スパンツ!!

美保

「キヤアツ!!し、竹刀が……!!」

カランカラン……

ピタツ!

美保

「う!!」

近藤は真剣の先を美保に突きつけた。

近藤

「終わりだな。白野美保……」

美保

「く、くそお……」

ファイル119：演劇女優誘拐事件『後編』

美保

「そこお!!！」

ガッ!!

近藤

「!!！」

スパンツ!!

カランカラン・・・

ピタッ。

美保

「あなたの負けよ。降参しなさい・・・」

近藤

「フッフ・・・それはどうかな？」

美保

「えっ？」

ギラッ!!

ズバツ！！

美保

「キヤアツ！！」

ブシュツ！！

美保

「ど、どういふ事・・・！？」

近藤

「ククク・・・この竹刀の中には、真剣を仕込んであったのさ・・・

」

美保

「な、なんて卑怯な！！」

近藤

「これも、無惨に殺された親友の仇討ちのためだ！！」

ザシュツ！！

美保

「うっ！！」

ザンツ！！

美保

「ああっ！！！！」

ドシュツッ!!

美保

「うぐっ・・・!!ハア、ハア、ハア・・・」

近藤

「それい!!」

ザンツ!!

スパンツ!!

美保

「キヤアツ!!し、竹刀が・・・!!」

カランカラン・・・

ピタッ!

美保

「う!!」

近藤

「終わりだな。白野美保・・・」

美保

「く、くそお・・・」

近藤

「おらぁ!!」

スパンツ!!

美保

「キャアツ!!」

ザシュツ!!

美保

「うっ!!」

ズバツ!!

美保

「あうっ・・・!!」

ドサツ・・・

美保

「ハア、ハア、ハア・・・」

近藤

「そろそろ、楽にしてやるぜ・・・」

グアツ!!

刃

「んんんうっ！！！（やめてえっ！！！）」

ブンッ！！

ガキイイイ！！

近藤

「な、何！？」

美保

「これだけは使いたくなかったけど、仕方ないわよね・・・刃ちゃんを助けるためだもの・・・」

近藤

「テメエ・・・まぐれでオレに勝てると思ってるのか！！」

グアッ！！

美保

「『風手双掌』は風をも捕らえる双手の掌！万槍を弾く、鋼の門！
れいどのたて
！氷・空盾！！！！」

バキイイイン！！

近藤

「な・・・オレの真剣を受け止めただど！？ならば、ガキの方からやるまでだ！！」

ダッ！！

刃

「んんっ!!」

ダンッ!!

美保

「『「くおつてっそ黒王鉄鼠』は封蛇ほうじやの鼠! 蛇をも砕く、戦慄の獣!!」

ガキイイ!!

パラパラ・・・

近藤

「なっ・・・真剣が粉々に・・・」

美保

「刃ちゃんには、指1本たりとも触れさせん!!」

近藤

「くそっ・・・何だ、その動きは・・・何だ、その業はー!!!?!」

美保

「中国拳法・功夫カンフーよお!! 氷・鉄拳れいどの「ぶし!!!!」

ドゴォ!!

近藤

「ぐあああーっ!!」

ドザアアア!!

ダッ！

美保

「刃ちゃん！大丈夫？」

美保は刃に駆け寄ると、ガムテープをはがした。

ピリ・・・

刃

「美保ちゃん、ありがとう！」

近藤

「どうして・・・どうしてオレには助けられなかったんだ・・・」

美保・刃

「！！！」

近藤

「なぜオレの邪魔をするんだ！！このまま死なせてくれよ！大切な親友を失った悲しみが、オマエらにわかるか！？復讐だけが、殺されたアイツにしてやれる事だったんだ！！」

それを静かに聞いていた美保は、怒鳴り声をあげた。

美保

「甘ったれんじゃねえ！！このドアホ！！！！」

近藤

「ぐっ!!」

美保

「アンタはただ復讐に・・・自分に酔っているだけよ!!!」

刃

「美保ちゃん・・・」

美保

「近藤・・・あなたにできる事は、たった1つしかないでしょ!!」

近藤

「オレに、できる事・・・?」

美保

「彼の分まで生きるのよ!!罪を償って、あなたは生きていかなきゃいけないのよ!!」

近藤

「フ・・・そうだな・・・」

その後、美保の通報を受けた警察が到着し、近藤は誘拐罪と銃刀法違反で京都府警に逮捕された・・・

最後に近藤は、美保に告げた・・・

君のように、親友を守りたかった・・・

ちなみに、美保達演劇部の劇は大幅に変更が加えられ、青年探偵団

のメンバーも特別出演する事になった・・・

そして、美保とリアンの友情は一段と深まったのだった・・・

そう・・・

源義経と武蔵坊弁慶のように・・・

ファイル120：同窓会の悲劇『前編・1』

紅子

「どうして連れてってくれないのよオ！同窓会に！！」

ひめがわ けいさく
姫川啓作『42』 『紅子の父 兵庫県警姫路署刑事部長』

「どうしてって、オレの同窓会だろ？」

紅子

「12年前は連れてってくれたじゃない！！」

啓作

「だから、仕事休むワケにはいかねえし、もし大きな事件でもあったらどうするんだよ！！」

紅子

「事件が起こったって、お父さんが遊びに行ってたら、捜査できないじゃない！！アタシ達だっで行きたいよね？コナン君！」

コナン

「う、うん……」

啓作

「だ、だからだな、その代わりにこうして美味しい物でも御馳走してやるうと……」

紅子

「じゃ、御馳走ナシでいいから、温泉連れてって！」

啓作

「バ、バカ言うな！最近の国内旅行は、海外旅行より値段が高いんだぞー！！それを3人分も払わなきゃならん、オレの身にもなってるー！！」

紅子

「・・・それが本音ね・・・」

啓作

「・・・あ！？」

ダツ！！

「強盗ーっ！！銀行強盗だあっ！！」

タタタ・・・

啓作

「おのれえ！！」

タツ！

ダツ！

紅子

「あつ、ちよつと2人とも！！」

啓作

「待たんか！逃がさんぞー！！」

タタタ・・・

「くそーっ、来るなあ！撃つぞーっ！..!」

コナン

「!..!」

カチッ!

ドカッ!

ヒュオオオ!

ガッ!

カランカラン・・・

啓作

「おりゃあああっ!..!」

ドッ!

ドサッ・・・

スッ・・・

ズルズル・・・

紅子

「わっ、スゴい！！銀行強盗捕まえたのね、お父さん！！」

啓作

「ああ、まあな！しかし、コナン君・・・オマエ、あんな強固な煉瓦をどうやって蹴った・・・？」

コナン

「け、啓作さんが撃たれると思って慌てて蹴ったら、たまたま拳銃を弾いただけだよ・・・」

紅子

「え〜っ！コナン君、お父さんの命を救ってくれたの？するとお父さんは、お礼の意味も含めて、命の恩人を温泉に連れてってあげるべきよね！それで、アタシはコナン君の保護者としてついていくわね！」

啓作

「それとこれとは、話が別だ！！」

「姫川君！」

啓作

「？」

「何してるの？こんな所で・・・」

啓作

「泉美・・・？オマエこそ、何でここに？」

「私の会社、この近くだもの・・・食事してきたのよ！」

紅子

「長谷部さん……ですよね？」

「あら、ひよっとして紅子ちゃん？」

紅子

「はい！」

「久しぶりねえ……また同窓会の温泉に来るでしょ？」

紅子

「もちろん、行く事になってます！」

啓作

「お、おい！誰が……」

「楽しみにしてるわ！」

啓作

「おい、泉美！ちよつと待て！紅子はだな……」

スタスタ……

啓作

「オマエなあ……」

紅子

「フフーン」

コナン

「ねえ、啓作さん・・・銀行強盗が持ってた拳銃、回収しなくていいの？」

啓作

「あ、そうだった・・・」

啓作

「あれ？おかしいな・・・強盗の拳銃、確かにこの辺に転がったはずなんだが・・・」

紅子

「ないの、お父さん!？」

啓作

「まさか、向こう側の道路にいた誰かが騒ぎの間に持ち去ったんじゃない・・・」

コナン

「(なんて事だ!ちょっと目を離れたスキに・・・いったい、誰が・・・)」

1週間後

プアン……

ガタンゴトン……

紅子

「やっぱり旅行で食べる駅弁って最高ね！」

啓作

「……ったく、なんで同窓会に子供連れで行かなきゃいけないんだ……」

紅子

「いいじゃない！12年前だってアタシを連れてってくれたでしょ？」

啓作

「あん時や、オマエが小さかったから、置いてくワケにはいかなかったんだよ！」

紅子

「今回はコナン君が命を助けてくれたから、お父さん同窓会に出席できたのよ！」

啓作

「まあ、それはそうだが……」

コナン

「啓作さん！そういえば、あの消えた拳銃って見つかったの？」

紅子

「そうよ。署にも1週間見つかったっていう連絡なかったし、いったいどうなったの？」

啓作

「それがな、かなり真剣に捜査しているが、まだ犯罪に使われた形跡もなく、まったく手掛かりがないんだ・・・あの拳銃は『スミス・アンド・ウェットソン・N689』という名前なんだが、あの銀行強盗も拳銃には疎いヤツでな・・・高いお金を出して買ったのに、本物なのかモデルガンなのかもわからないんだよ・・・」

紅子

「フーン・・・モデルガンならいいけど・・・」

コナン

「（イヤ、あの拳銃の銃口は詰め物で潰されてはいなかった・・・そのスジから高値を出して買ったのなら、たぶん本物だ・・・）」

温泉旅館『弁慶』

紅子

「
」

啓作

「しかし、久しぶりだなあ！」

「ホント！12年前にここで同窓会をやって以来よね！」

「ああ、我が柏大学柔道部の同期生が顔をそろえるのはな！！！」

啓作

「しかし思い出すぜ・・・あの辛かった猛練習の日々を・・・」

「よー言うわ！めったに練習に来えへんかった男が！！！」

「そうそう、『天才に練習は無用！』とか言つて、サボつてばかりだったもんね、姫川君！」

「結局、公式戦で1勝もできなかったのは、君だけだったんだよね？」

啓作

「だから、あれはだな・・・」

スツ・・・

紅子

「やっぱり・・・大学時代オレは無敵だったって自慢してたのは、ウソだったのね、お父さん？」

「よお紅子ちゃん、久しぶり！！！」

「私はこの前会ったけど、ホントに大人っぽくなっちゃって!」

紅子

「あ、どうもどうも」

啓作

「オマエ、今までどこ行ってたんだ?」

紅子

「露天風呂よ!」

啓作

「露天風呂で、オマエ!あそこは混浴だぞ!」

紅子

「大丈夫よ、誰もいなかったから・・・ね、コナン君!」

コナン

「う、うん・・・」

啓作

「オマエら、一緒に風呂入ったのか!？」

紅子

「そうよ!コナン君ったら照れちゃって、連れてくの大変だったんだから!」

コナン

「・・・」

紅子

「でも楽しかったよね、背中流しっこしたりして！」

コナン

「・・・!!」

ブツ!!

紅子

「あら鼻血？お風呂でのぼせちゃったのね・・・」

啓作

「コイツ、オマエの裸見て興奮したんじゃないかねえのか？」

紅子

「まさかあ・・・コナン君はまだ子供よ！」

フキフキ・・・

コナン

「（啓作さんに正体バレたら、殺されるな。絶対・・・）」

「ああ、この子ね！優作君の次男坊は！」

「カワイイ子やんか！新一君の小さい頃によく似てる！」

コナン

「は、初めまして・・・」

黒金刃くろがね やいば 『42』 『中学体育教師』

「オレは柏大学柔道部のエースやった、黒金や！よろしゅうな、ボ
ウズ！」

中村純なかむらじゅん「41」『書店経営』

「じゃーボクは、柔道部1の勝負師、中村純！いわゆるポイントゲ
ッターってヤツだよ！！」

長谷部泉美はせべいすみ「41」『電化製品会社勤務』

「私は柔道部きつての美人マネージャー、長谷部泉美！！」

黒金さやかくろがね「41」『高校数学教師』

「同じくマネージャーで柔道部のアイドルだった、旧姓・峰川みねがわさや
か！今はこの人の妻兼高校教師をやってまーす！」

鬼丸剛志おにまるこうし「42」『長野県警勤務』

「ワシは主将でチームの大黒柱だった鬼丸だ！現在、長野で刑事を
やっとなる！！」

啓作

「そしてオレが！！兵庫県警姫路署刑事部長の姫川啓・・・」

泉美

「あ、それ大学時代のアルバム？」

さやか

「そう、みんなで見ようと思って持ってきたの！」

紅子

「あ、見てもいいですか？」

さやか

「どうぞ!」

啓作

「コラ、人の話を聞けーっ!!」

泉美

「あ、これ都大会で優勝した、20年前の写真ね!」

純

「優作も啓作も香澄君も、みんな若いなあ・・・」

啓作

「そういえば、鬼丸と泉美はこの頃、確かつき合ってたんだよな?」

刃

「そやさや、あん時は2人で泣いたよな、中村!ホンマ、柔道部のマドンナやったもんな、泉美はな・・・」

さやか

「コラコラ、今は私の亭主でしょ?」

刃

「はいはい・・・」

啓作

「で?オマエら、まさか今も・・・」

泉美

「バカねー!とっくに切れたわよ、こんなヤツ!それに剛志の結

婚相手は決まってるのよねー」

刃

「ホ、ホンマか？」

さやか

「結婚するの、鬼丸君！」

剛志

「ああ、もつとちゃんとした形でみんなに話したかったんだが、一応年内に式を……」

啓作

「それで、相手は？」

剛志

「上司の娘さんだよ！半年前に見合いしたんだ……今度みんなに紹介するよ……」

泉美

「あーあ、それにひきかえ、かつてのマドンナは未だオールドミス……オマケに景気が悪くて、会社の人員整理でクビ切られそうだし……ホント……死にたい気分だわ……」

さやか

「え……!？」

泉美

「なーんて、ウソウソ！ちょっと言ってみただけ！」

紅子

「あれ？この写真、12年前にここに来た時のじゃないですか？ほら、アタシも写ってる！！」

さやか

「ああ、そうそう！この卓球場で撮った写真よ！」

剛志

「そうだ！これからみんな卓球やらないか？」

啓作

「お、いいな！やるやる！」

さやか

「でも私達、夕方花火を見に行く予定でしょ？」

刃

「大丈夫や！花火は6時半からやから・・・」

剛志

「6時ぐらいに切り上げれば、間に合うよ！」

泉美

「私パス！なんか疲れちゃったから、部屋で休んでるわ・・・」

啓作

「相変わらずだな・・・自分勝手というか、マイペースというか・・・」

純

「人に流されたくないだけですよ、彼女は・・・」

剛志

「とにかく卓球だ、卓球！」

啓作

「なんか久しぶりに腕が鳴るな！」

刃

「体育教師の面目にかけても、負けへんで！」

コナン

「・・・」

ファイル121：同窓会の悲劇『前編・2』

卓球場

カコーン、カコーン・・・

パキッ！

カッ！

啓作

「ゲッ！！」

刃

「よっしゃ！今度ももらったでえ！！」

ガタ・・・

剛志

「ん？どうした？」

純

「トイレだよ！」

剛志

「次はオマエの番だから、早く済ませてこいよ！」

純

「ああ……」

ピシヤ！

紅子

「あの……鬼丸さんって確か、全国大会で個人優勝されてますよね？」

剛志

「ああ、大学3年の時に一度だけな！」

紅子

「じゃあ、やっぱり鬼丸さん、柔道部で一番強かったんですね！」

剛志

「イヤ……オレよりも数段強いヤツが、3人いたよ……結局ソイツらには、一度も勝てなかったからなあ……」

紅子

「へー、そんな人達いたんだ……」

剛志

「紅子ちゃんもよく知ってるヤツらだよ！その内の1人はこの宿にも来てるし……」

紅子

「だ、誰ですか？その人達……」

刃
「それっ!!」

カコーン!

カッ!

啓作

「わっ!!」

ドテッ!

啓作

「変化球なんてきつたねえぞ!!」

剛志

「フッフ・・・それはな・・・」

ガラッ!

剛志

「・・・!?!?どうした?やけに早いな・・・」

純

「イヤ、別に・・・」

コナン

「・・・」

さやか

「はい、刃さん」

カコーン！

刃

「ホイ、さやか」

カコーン！

啓作

「オマエらなあゝ……2人でいつまでチンタラ楽しんでんだよお・

……」

コナン

「ねえ、もう時間なんじゃない？」

□

1
2

1
1
1

1
0
/
2

9
3

8
4

7
5

6

□

刃

「アカン！もう6時過ぎてるでー！！」

さやか

「大変！早く行かなきゃあの花火会場、込んじゃうのよねー！！」

剛志

「じゃ、ワシはラケットやネットを返してくるから、先に行つて場所取つといてくれ！」

啓作

「おーし、わかったー！！」

タッタツ・・・

啓作

「ハッホッ、ヘッホッ・・・」

紅子

「あっ！？泉美さん起こすの忘れてたー！！」

啓作

「ほつとけよ！もう始まつちまうぞー！！」

純

「きつと誰かが起こしてるよ・・・」

紅子

「でも、みんな忘れてたら・・・とにかく行つてくるー！！」

コナン

「ボクも！」

タツ！

啓作

「あ、おい!!！」

タタタ・・・

啓作

「・・・ったく・・・ほっときやいいものを・・・」

タタタ・・・

紅子・コナン

「ハアハアハア・・・」

ドーン・・・

紅子

「あちゃー、始まつちやった・・・」

紅子

「早く起こさなきゃ・・・」

ドタドタ・・・

トントントン・・・

タタタ・・・

紅子

「204号室・・・ここだわ！」

コンコン！

紅子

「泉美さん！花火、もう始まっていますよ・・・」

コンコン！

紅子

「泉美さん、開けますよ・・・」

剛志

「あれー？誰かと思ったら、紅子ちゃんとコナン君・・・」

紅子

「鬼丸さん・・・」

剛志

「先に行ったんじゃないのかい？」

紅子

「泉美さんを起こしに来たんですけど・・・」

剛志

「ああ、それならやめとけやめとけ！泉美のヤツ、他人に起こされると機嫌が悪いから・・・」

紅子

「鬼丸さんはどうしてここに？」

剛志

「卓球で汗かいたから、風呂に入ってたんだ！そしたら君達の走る音が聞こえてな・・・変だと思ったんだ・・・この宿にはワシらしか泊まっとらんから・・・」

トントントン・・・

刃

「ん？」

剛志

「何だ、オマエら！まだいたのか？」

刃

「なーんや、オマエも風呂で汗流しとったんか・・・」

剛志

「ああ、ワシはオマエらとちがって、大浴場の方だったけどな・・・」

「

さやか

「でも紅子ちゃん、泉美を起こさなくて正解だったわよ！彼女は寝起き最悪だから！！」

刃

「けど、起こさんかったら起こさんかったで・・・怒るやろなあ・・・アイツ・・・」

紅子

「込んでるわね・・・コナン君、手を離しちゃダメよ！」

コナン

「う、うん・・・」

啓作

「おい、紅子！ここだここだ！！ん？オマエらだけか？」

紅子

「あれ？さっきまでみんな一緒だったのに・・・」

コナン

「さっきの人混みではぐれちゃったんだよ・・・」

純

「じゃあボク、ちょっとその辺を探してくるよ！！」

啓作

「あ、おい、中村!!」

タタタ・・・

紅子

「なんか、せわしない旅行ね・・・」

啓作

「ああ・・・」

啓作

「・・・つたくう！せつかくオレと中村が良い場所取ったってのに、誰も来やしねえんだから!!」

剛志

「悪い悪い・・・」

啓作

「中村は中村で、みんなを探しに行ったつきり帰ってこねえし・・・」

純

「ゴメン・・・場所わかんなくなっちゃって・・・」

刃

「まーまー、酒飲んで忘れてまお!!」

啓作

「だいたいオマエら、勝手に行動しすぎるんだよ!」

コナン

「ねえ、泉美さんまだ起きてないの?」

さやか

「あら、そういえばそうね・・・さすがにもう起きてもいい頃なのに・・・」

刃

「アイツきつとスネてるんやで・・・花火見に行かれへんかったもんやから・・・」

啓作

「・・・つたく、どいつもこいつも!」

剛志

「仕方ないの・・・みんなで我らが柔道部のマドンナを起こしに行くとするか!」

啓作

「ワガママ女も、みんなで起こせば怖くないってか?」

刃

「おいおい、泉美の前じゃ禁句やぞ・・・」

コンコン!

刃

「おい、泉美！ご飯やでえ！！泉美い！！」

コンコン！

刃

「おかしいなあ・・・おい、まだ寝てんのかあ？」

チャツ！

刃

「明かりつけるで・・・」

パツ！

コナン・紅子・啓作・刃・さやか・純・剛志
「！！！！」

刃

「泉美！！！！」

紅子

「あ・・・あ・・・」

さやか

「泉美い！！」

ダツ！

剛志

「触るなあつ！！この部屋には、刑事のワシと姫川以外は入っちゃ
いかん！！紅子君！早く警察を！！」

紅子

「は、はい！！」

タタタ・・・

啓作

「こめかみに弾痕・・・右手には拳銃・・・」

コナン

「け、啓作さん！！もしかしてその拳銃って、あの銀行強盗が持っ
ていたヤツなんじゃないの！？」

啓作

「何っ！？・・・確かに拳銃は、スミス・アンド・ウェッソン・N
689！！しかも銃身には、何かが当たったようなキズがある・・・
しかも、泉美はあの現場にいた！！じゃあ泉美は、最初から使う目
的があつて拳銃を拾ったというワケか・・・という事は、この同窓
会へは自殺するつもりで・・・！！？」

剛志

「イヤ、結論を出すのはまだ早い・・・警察が来るのを待とう・・・
」

啓作

「何っ！？警察が来るまで2時間かかるだど！？」

紅子

「うん・・・今日はこの辺、祭りが多くて道が込んでるんだって・・・」

啓作

「仕方ない、オレ達で検死するしかないな・・・紅子！確かオマエ、カメラ持ってきてたな？」

紅子

「うん！部屋に行って取ってくる！」

タタタ・・・

剛志

「まさか、ワシらが泉美の検死をするハメになるとはな・・・」

啓作

「ああ・・・」

パシヤ！

啓作

「足の指まで硬直し始めている・・・死んでからかなり時間がたってるな・・・一応、死斑も調べてみるか？」

剛志

「この大量出血じゃあ、死斑はあまりアテにならないかな・・・」

バサツ！

啓作

「お、おい！泉美のヤツ、下着を着けてないぞ！どついつ事だ！？」

剛志

「さ、さあ・・・」

コナン

「おかしいのは、それだけじゃないよ！」

啓作

「何？」

コナン

「ほら、泉美さん、大きい方の浴衣を着てるよ・・・それに拳銃を握ってる手の指は、引き金から外れたまま固まってる・・・」

啓作

「フム・・・うーん、わからん事だらけだな・・・今わかった事は、泉美が死んだのは7時間以上前だって事だけだ・・・」

刃

「今から7時間前って事は、午後3時頃・・・オレらが泉美と別れて、卓球場へ行った頃やないか・・・」

剛志

「ああ・・・おそらく泉美はその後1人でこの部屋に戻り、隠し持っていた拳銃で頭を撃つたんだろう・・・」

さやか

「でも、どうして泉美が・・・なんで自殺なんか・・・」

刃

「そういえば泉美、言うてたな・・・『ホント、死にたい気分だわ・・・』って・・・きつと、思い詰めてたんや・・・だからあんな事を・・・」

コナン

「・・・ねえ、どうやって頭を撃ったの？泉美さん・・・」

啓作

「んな事、決まってるだろ！こつやつて、頭に拳銃を突きつけ・・・
。。。。!?!?」

ダツ!

剛志

「おい、姫川!どうした!?!」

啓作

「・・・!!おい、鬼丸!!普通拳銃で自殺する時、頭に銃口を密着させるよな?」

剛志

「あ、ああ・・・」

啓作

「だったら、傷口にあるべきものが、ここにはない・・・」

剛志

「そ、そうか!!火傷の跡!!」

啓作

「ああ、そうだ!拳銃を撃つ時、銃口から弾丸と一緒に高温の熱風が吹き出る・・・頭に密着させて撃つのなら、必ず火傷の跡が残るはずだ!!それが無いって事は・・・」

剛志

「だ、誰か別の人間に撃たれたって事か!？」

啓作

「ああ・・・誰かが自殺に見せかけて、泉美を射殺したんだ・・・この旅館にいた・・・誰かな・・・!!!!」

剛志

「!!!!」

刃・さやか

「!!!!」

純

「!!!!」

紅子

「あ・・・」

コナン

「・・・」

ファイル122：同窓会の悲劇『後編・1』

啓作

「ああ・・・誰かが自殺に見せかけて、泉美を射殺したんだ・・・この旅館にいた・・・誰かがな・・・!!!!」

剛志

「!!!!」

刃・さやか

「!!!!」

純

「!!!!」

紅子

「あ・・・」

コナン

「・・・」

刃

「ま、まさかオマエら、オレらを疑ごうてるんとちゃっつやるな!？」

剛志

「おいおい、勘ぐるなよ・・・さっきも言っただろ？泉美が死んだの

は午後3時頃・・・ワシらと別れた、すぐ後だ・・・3時から6時過ぎまで卓球場にいたワシらには、犯行は不可能だよ！あの時唯一卓球場から出たのは、トイレに行った中村だけだが、あの時は5時をかなり回っていたし、しかも1分足らずで戻ってきた。中村にも犯行は無理だな・・・」

刃

「ほんなら、まさか外部犯か!？」

剛志

「ああ、かもしれんな・・・窓の外は屋根づたいにどこへでも行けるし、入り口のドアはカギがかかってなかった・・・外部から誰かが侵入した可能性は充分にある・・・とにかく、宿の人に話を聞いてみよう！誰か怪しい人物を目撃してるかもしれないから！」

「不振な人物のお・・・3時頃といえば、お昼休みでワシらは出払ってた頃ですし・・・おお！そういえば1人おったかのお!!！」

剛志

「それはどんなヤツだ!？」

「子連れの若いおなごじゃ！ひどくあわてた様子で、わき目もふらずに2階へ駆け上がったいった!!！」

剛志

「その女の特徴は!？」

「ホレ、アンタらの後ろにおる・・・その子らじゃよ!!！」

紅子

「！」

コナン

「ハ・・・ハハ・・・」

紅子

「ほら、花火が始まるから泉美さんを起こしに戻った時よ！その後、泉美さんの部屋に行って、中に入ろうとしたんだけど・・・」

剛志

「ワシが止めたんだ！泉美は寝起きが悪いから、起こさん方がいいと思っただけ・・・」

啓作

「鬼丸・・・オマエ、そんな時間までこの宿にいたのか？」

剛志

「ああ、卓球で汗かいたから、大浴場でひと風呂浴びてたんだよ・・・先に花火の席を取りに行ったオマエと中村には悪いと思っただけ・・・」

コナン

「ねえ、中村さん。ちょっと聞きたい事が・・・」

ガッ！

啓作

「おい、中村！オマエ何か隠してるな？オマエ、夕方からずっとお

かしいぞ！」

純

「ボ、ボク、見たんだよ……卓球場からトイレに行った時に……死んでるはずの泉美を……2階の窓からものすごい顔で卓球場をにらんでいた泉美を……！」

啓作

「……。鬼丸、後は任せた！ちよつとトイレに行つてくるわ……」

剛志

「お、おい……」

タタタ……

コナン

「ねえ、おじさん！まだ外部犯だと決めつけるのは早いんじゃないの？だって泉美さんの殺され方って……ちよつと、聞いているの？」

ゴッ！！

コナン

「え！？」

啓作

「うるせえ！ガキがゴチャゴチャぬかしてんじゃねえ！！フン、何

が外部犯だ！！外部からたまたま侵入したヤツが、自殺に見せかけて殺したりするか！！犯人は内部の人間だ！！つまり、オレの親友の誰かなんだよ！！どんな理由で、どんなトリックを使ったのかは知らねえが・・・この事件だけは許せねえ！！必ずオレが暴いてやる！！絶対にな！！！！」

コツコツ・・・

コナン

「（啓作さんの言う通りだ・・・犯人は、あの4人の内の誰か・・・おそらく、あの時妙な事を口走ったあの人だ！！だが、あの人にはアリバイがある・・・みんなと卓球場にいたという、完璧なアリバイが・・・気になるのは、泉美さんが持たされていた拳銃の引き金に指がかかっていなかった事・・・それに、泉美さんが下着を着けていなかった事と、大きい浴衣に着替えてたのも引つかかる・・・）ん？弁慶の立ち往生・・・そうか、弁慶だ！犯人はこれを使ったんだ！！やっとなわかったぞ！犯人の使ったトリックが・・・」

109

啓作

「（なぜだ・・・犯人はこの中にいるはずなのに、どうして全員にアリバイがあるんだ？オレ達は3時から6時過ぎまで卓球場にいた。誰にも殺す機会はない・・・気になるのは、中村が言った『泉美を見た』というあの言葉・・・なぜ中村はあんな事を・・・？）」

コナン

「ねえ、啓作さん！」

啓作

「ん？」

コナン

「卓球やらない？」

紅子

「何言ってるのよ、こんな時に！」

コナン

「けっこうスゴいんだよ、ボクのシェイクハンド！でもダメだよね、こんな時間に卓球なんて……だって、汗かいたら着替えなきゃいけないもんね！」

啓作

「（汗……着替える……シェイクハンド……？そういうえば泉美、大きい方の浴衣を着ていたな……下着も着けずに……そして拳銃を握っていた右手の人差し指は、引き金にかかっていなかった……まさか泉美、殺される前に犯人とのんきに卓球を……？バカバカしい、そんな事して何の意味が……待てよ！！確か昔、香澄と警察学校に通っていた頃……）」

コナン

「ねえ、紅子姉ちゃん！弁慶つてさ、立ったままで死んだんだよね？」

紅子

「そうよ！弁慶はたった1人で並みいる敵を斬りまくり、無数の矢を浴びて立ったままで亡くなったのよ！」

啓作

「そ、そうか……そうだったんだ！！」

剛志

「おい、姫川！大声出して、どうしたんだ？」

啓作

「フッフフ・・・やっとわかったんだよ・・・泉美を殺した犯人がな
！！」

剛志

「何っ！？」

刃・さやか・純

「ええっ！？」

紅子

「だ、誰なの！？お父さん！！」

啓作

「泉美を殺したのは・・・オマエだ！！！！」

ビシッ！！

ファイル123：同窓会の悲劇『後編・2』

啓作

「泉美を殺したのは・・・オマエだ!!!」

ビシッ!!

剛志

「な・・・!?!」

刃

「何やて!鬼丸が泉美を!?!」

紅子

「・・・」

剛志

「おい、冗談はよせ・・・泉美の死亡推定時刻に、ワシはみんなと卓球場にいたじゃないか!!」

啓作

「ああ、オマエのアリバイは完璧だよ・・・本当に泉美が午後3時に殺されたとしたらな!!!確かに泉美の遺体は足の指まで硬直し始めていた・・・だからオレも死後7時間以上はたっていると推定したんだが、例外はある・・・急激な運動をしている最中に急死した場合だ!その場合、筋肉中の蛋白質が固まりやすくなり、死亡推定

時刻が通常よりもはるかに早く出る・・・そう、あの豪傑・・・武蔵坊弁慶のようにな!!」

紅子

「じゃあ、弁慶の立ち往生って・・・」

啓作

「ああ・・・立ったまま死ぬのはあり得る事だと、医学的にも証明されているよ・・・」

剛志

「おいおい、遺体があったのは泉美本人の部屋だぞ？あそこでワシが泉美にどんな運動をさせたっていうんだ？」

啓作

「泉美が運動させられたのは、彼女の部屋じゃない・・・卓球場だ！オマエは泉美に卓球をさせたんだよ！殺す直前までな!!」

剛志

「ぐっ・・・」

啓作

「おそらくオマエは、卓球場で泉美と2人で会う約束をしてたんだ。だが、その前にオレ達を卓球場に誘った・・・当然、泉美は怒って自分の部屋に戻る・・・6時が過ぎてみんなが出払った後、泉美はオマエの待つ卓球場に1人でやって来た・・・そんな泉美にオマエは卓球でもやろうと誘い、しばらく運動させた後、泉美が部屋に戻るように仕向けて、泉美の部屋で頭を打ち抜き、殺したんだ・・・死亡推定時刻を大幅にズラして、完璧なアリバイを作るためにな！泉美を部屋に帰るように仕向けた方法は、おそらく泉美のすぐに

カツとなる性格を利用したんだろう・・・その証拠に、泉美はラケットを持っただまま慌てて部屋に戻っている・・・拳銃を握っていた右手が、シエイクハンドの握りのまま硬直していたのもそのせいだ！つまり、中村が5時過ぎに見た泉美は真正銘の本物・・・あの時はまだ生きていたんだ・・・2階から卓球場を見下ろして、鬼丸が1人になるのを待ってたんだよ・・・泉美が殺された本当の時間は、花火が始まった6時半頃・・・花火の音に合わせてぶっ放したと考えた方が自然だ！しかし、まだ鬼丸には遺体の汗を拭き、着替えさせるといふ作業が残っていた・・・汗をかいていたのがわかると、トリックがバレかねないからな・・・下着は脱がせるしかなかったが、浴衣を取り替える事はできた・・・そう、予備の浴衣にな！だが、その作業中に思わぬ邪魔が入ってしまったんだ・・・紅子とコナン君が泉美を起こしに来た事が、それだったんだ！オマエは作業を途中で止め、部屋の窓から屋根づたいに廊下に出て、風呂上がりを装って、2人が部屋に入るのを止めたんだ・・・そしてオマエは、みんなと花火会場に行く途中でこっそり旅館に引き返して、残りの作業を終えたんだよ・・・自殺に見せかけるために、泉美に拳銃を持たせたのもその時だ！もっとも、泉美の手はすでにシエイクハンドの握りのまま硬直していて、引き金に指をかけられなかったようだがな・・・」

剛志

「フッフッフ・・・確かにオマエの推理は面白い・・・だが、証拠があるのか？ワシがやったという証拠が・・・」

啓作

「バカ言え！こんなトリックを使えるのは、この中じゃ刑事のオレか紅子かオマエだけだ！！」

剛志

「そら見る！オマエや紅子ちゃんにも可能性はある……それにそんな知識、本で調べれば誰にだってわかる事だよ……」

啓作

「テ、テメエ……」

コナン

「バカだなー、啓作さん！この名刑事さんが犯人なワケないよ！」

啓作

「名刑事？」

コナン

「だってそうでしょ？この人、血塗れの泉美さんを見ただけで、死んでるってわかつちやっただよー！」

啓作

「はっ！！」

剛志

「なっ……」

啓作

「そういえばオマエ、あの時……泉美に触れもしないで『触るな』って言ったよな？そしてその後オマエが紅子に呼ぶように頼んだのは、救急車ではなく警察だった！つまりオマエは知ってたんだよ、もう手遅れである事を……なぜなら、オマエが殺したんだからな！！」

ガッ！

純

「よくも・・・よくも泉美を!!」

ダアン!

剛志

「うるせえ!!ワシだって殺したくなかったよ!泉美と20年間つき合ってきたんだからな!!見合いをする半年前まで、ワシらはつき合っていたんだよ!!」

さやか

「ま、まさか・・・結婚の邪魔になるから泉美を・・・?」

刃

「何でや?何で泉美と結婚したらんかったんや!!」

ダアン!

剛志

「ぬかせ!!ワシだって結婚したかったよ!何度もプロポーズしたさ!!だが泉美の答えはいつもノーだった!20年間ずーっとな!!仕方なく見合いた相手と結婚が決まるうかという時に、泉美はワシの結婚相手に嫌がらせをしたんだ・・・そして挙げ句の果てには、2人で撮った写真を送ると言い出した!ワシは、写真をすべて買うから同窓会に持ってこいと持ちかけた・・・それがあの日だ!オマエが強盗を捕まえた日、ワシは泉美と会って別れたばかりだった・・・ワガママな泉美をこの先どうするか考えていたワシの足下に、あの拳銃が転がってきたんだ・・・その時、とっさに今回の計画を思いついた・・・写真の受け渡し場所の卓球場で、ワシは

泉美にこう言っちゃったんだよ・・・写真はオマエの荷物から抜き取ってあるってな!!」

啓作

「なるほど、それで泉美は慌てて部屋に戻ったのか・・・ラケットを持ったまま・・・そしてオマエは、その後を追って射殺した・・・」

剛志

「ああ、そつだ!ワシの人生をメチャクチャにした、あの悪魔をな!!」

啓作

「フン、どっちが悪魔だか・・・」

ガッ!

剛志

「黙れ、キサマに何がわかる!?!キサマに何が!?!?」

啓作

「・・・わからねえな!」

グイッ!!

啓作

「どんな理由があろうとも、殺人を犯す人間の気持ちなんかなあ!!」

バッ!!

ズドンッ・・・!!

啓作

「わかりたくもねえよ!!!」

紅子

「お、お父さん・・・」

剛志

「あ、相変わらず、腕は落ちていないようだな・・・」

啓作

「バーロー！オマエが弱くなったただけだよ！！心も、そして体もな
！！！！」

剛志

「ああ・・・そうかもしれない・・・」

その後、警察が到着し犯人は逮捕された・・・

啓作さんは1週間近くショックで元気がなかったが、すぐに元気を
取り戻し、職務に復帰している・・・

この日哀は、いつになく上機嫌だった。

なぜなら、コナンとデートする事になっているからだ。

そして、今は電車の中である。

哀

「
」

ユリ

「哀ちゃん、今日はいつになく上機嫌ね・・・」

哀

「だって、コナン君とデートなんだもの！うれしいに決まってるじゃない！」

『まもなく南杯戸、南杯戸へ。南杯戸遊園地へは、ここでお乗り換えです。』

哀

「あ、着いたわ。乗り換えね。」

南杯戸駅

ユリ

「後はこの直通電車で10分か・・・」

哀

「どうする、ユリ？時間が余っちゃったわ。待ち合わせまで1時間半もあるよ。」

ユリ

「え、そんなに？じゃあさあ、南杯戸町を少し探検してみない？」

哀

「あ、名案！お店を見て回らましょ！」

キイイイイ・・・

ブティック『ダブル・フェイス』

「フム、ここだよい。」

カツ。

「クラリツサ。」

クラリツサ・アーゲリア

「ハッ、アイ様。」

エオナル・アイ・コーデリア

「店の中までついてくずともよいぞ。」

クラリッサ

「わかりました。逃げないでくださいね。」

アイ

「私がいつ逃げた？」

クラリッサ

「今までに999回も逃げました。」

アイ

「ウム、そうであったな。」

クラリッサ

「ですから、ここで見張ってます。欲しい物が決まりましたら、声をおかけください。」

アイ

「ウム、クラリッサも自由に町を回ってよいのだぞ。」

クラリッサ

「ホッホッホ、その手には乗りませぬ。」

ブティック内

アイ

「（フム・・・日本はなかなか穴場だな。良い品を置いている店が多い・・・こうなると、是が非でも自由に買い物したいが、どうやってクラリツサから逃げ出せばよいか・・・？財布もクラリツサが持っておるしの・・・）」

「いらっしやいませー。」

哀とユリが店に入ってきた。

アイ

「！ホウ・・・」

ユリ

「ねえ、哀ちゃん。これなんかどう？」

哀

「わあ、ステキな服・・・（着てみたいなあ・・・でも今日こんな
の着ていったら、コナン君は驚くだろうな。）」

アイ

「フム、それが気に入ったのか？だが・・・私の服も負けてはおらぬぞ！」

哀

「あ、本当・・・」

アイ

「よければ、私の服とお主の服、取り替えっこせぬか？私もお主の服を着てみたい。背格好も同じだ。少しの間だけ、互いのおしゃれを楽しもうではないか？」

哀

「うん、いいわ！楽しそう！」

アイ

「おお、本当か？助かるぞ。さ、早く着替えようぞ。」

哀

「うん！」

哀

「あゝ！！いない！！あの子、どこ行ったの！！？」

ユリ

「哀ちゃん、カバンもないわ！！」

哀

「え、ウソ！？あの中に、財布や・・・ユリの『RING』も入ってるのよ！！さ・・・探すのよ、ユリ！！！」

ユリ

「うん！！！」

ダッ！

クラリツサ

「お待ちくだされー!!」

哀

「キヤアアアア!」

ビッターン!!

哀は引き倒された。

哀

「な、何するのよ!?!」

クラリツサ

「逃がしはしませぬ、アイ様!!危ないのです!今度ばかりは逃げられてはダメなのです!!」

ユリ

「哀ちゃんに何すんのよ!?!」

ドカツ!!

クラリツサ

「ガハツ!!」

クラリツサ

「な、何ですと!?!アイ様と服を交換した!?!では、先ほど出て行かれた方がアイ様!?!」

ユリ

「そついう事になるわね。」

クラリツサ

「な、何という事だ！まずい、非常ーにまずい！！」

ユリ

「まずいのはこっちの方よ！！」

クラリツサ

「君達、アイ様がコーデリア王国の王女と知っての事か！？」

ユリ

「そんなの知らないわよ！盗まれたのはこっちよ！！」

クラリツサ

「お願いします！アイ様を探してください！！」

ユリ

「最初に私達に謝るのが礼儀じゃない！？」

クラリツサ

「お願いだ！小娘共にはもつたいないほどの金をやる！！」

ユリ

「アンタ、私と会話する気ないでしょ！？殴り飛ばすわよ！！」

クラリツサ

「王女様は・・・命を狙われておるのだ・・・」

哀・ユリ

「命を・・・狙われて・・・!？」

『つい先ほど、携帯で知らされたのです。アイ様の命を狙う者が日本に来てると!!アイ様が王位を継いだのは、つい最近の事。しかし、女性が王になる事に最後まで反対している者達もいたのです。王位継承を辞退するよう説得する者もいました。でもアイ様は絶対に辞退されなかったのです。反対派は、それならば王女様の命を奪おうと・・・』

タタタタタ・・・

ユリ

「まったく、冗談じゃないわよ!なんで私達が・・・」

哀

「まあまあ、命を狙われてちゃほっとけないでしょ?」

ユリ

「それはそうだけど、哀ちゃんも少しは怒りなさいよ!」

哀

「うん、でもね・・・私はなんか・・・あの子、助けてあげたいのよね。誰かに似てる気がして・・・」

ユリ

「あ！」

哀

「どうしたの、ユリ？」

ユリ

「今、大切な事に気づいたわ・・・」

哀

「え？」

ユリ

「哀ちゃんが王女様の格好をしてるって事は・・・」

哀

「あ・・・」

ザザア！！

「見つけたぞ！アイ王女！！命を頂く！！！！」

哀

「やっぱり！！！！！！」

「覚悟を・・・」

ドギヤアアアアア！！

哀・ユリ

「キヤアアアア！！！！」

ダダダダダ・・・

哀

「ユリ、私とは別行動で王女様を探して！私が囿になる！！」

ユリ

「え・・・でも危ないわ！！」

哀

「お願いね！！」

ダッ！

ユリ

「あ・・・ちよ・・・哀ちゃん！！」

アイ

「フム・・・満足じゃ。自由に好きな物を買える事は、楽しい事よのお・・・」

ユリ

「そう・・・でも、お楽しみはそこまでよ！！」

アイ

「あ・・・！！あ、安心せよ、使ったお金は必ずクラリッサに払わせる。服も後で返す。だから、もう少し自由を・・・」

ユリ

「ダメよ!!あなたの代わりに、哀ちゃんが命を狙われてるの!!」

アイ

「・・・何じゃと!？」

「さあ、王女はどこだ!？」

哀

「知らないって言ってるでしょ!?!」

アイ

「く・・・何という事じゃ・・・」

ゴソゴソ・・・

ユリ

「よし、あつた!(：RINGの力を使えば、あんなヤツ簡単に・
・)とにかく、アイツは私が倒すから、あなたはここから出ないで
ね。」

アイ

「下がれ、ユリとやら。お主、このエオナール・アイ・コーデリア
に恥をかかせるつもりか!？」

ユリ

「え・・・?」

アイ

「私の命を狙う者よ！エオナルル・アイ・コーデリアはここにおる！その者は私とは関係ない！！とっととその薄汚い手を放すのじゃ！」

「何！？」

哀

「出ちやダメ！隠れて！！」

ユリ

「ちょっと・・・あなた！！」

アイ

「ユリ、下がれと言っておろう。私とて、半端な覚悟で誇り高き王位を受け継いだワケではない！！我が命愛しさに関係ない者を盾にしては、末代までバカにされるわ！！さあ、撃つなら私を撃て！！我が血に流れる誇りは、何者にも汚されぬ！！それとも・・・王の首をとる事に、今さらながらおびえたか？」

「ぐ・・・おおおお・・・くたばれー！！！」

ドンドンドンドンドンドンドンドンドン！！

ギョオオオオ！！

ユリ

「シールド：RING・・・ネオ・バリアグラス！！！」

カツ!!

ボボボボシユアアアア!!

アイ

「な・・・?」

「にいい!?!」

ダンツ!!

ユリ

「ウエポン：RING、スタンガントンファー!!!!」

ドガガア!!

「ぐああああ!!」

その後、2人は服を入れ替え、南杯戸公園で別れた。

哀とユリは、コナンと刃が待つ南杯戸駅に向かって走り出した。

それを見届けたアイ王女とクラリツサは、静かにその後を追いつめた・・・

ファイル125：瓜二つの王子と王女『前編・2』

南杯戸遊園地

南杯戸遊園地に着いた哀とユリは、コナンと刃と待ち合わせしている場所まで走っていった。

哀

「コナン君〜！」

ユリ

「お待たせ！」

コナン

「哀！」

刃

「待ってたわ。先客と一緒にね・・・」

哀

「へ？」

哀が刃の横を見ると、見覚えのある顔が2人いた。

哀

「コナー王子!!」

サルバドル・コナー・ホームズ
「や!!」

ユリ

「ハドスン大臣まで・・・」

ハドスン・ストーナー

「お久しぶりでございます。」

哀

「でも、どうしてこんな所に？」

コナー

「息抜きだよ。婚約者こんやくしやと一緒にね・・・」

コナーがそう言った時、アイとクラリツサが走ってきた。

アイ

「あ!!」

クラリツサ

「なんと!目的地は同じだったのですな。」

ユリ

「じゃあ、コナー王子が待ち合わせしてた相手ってアイ女王？」

コナー

「そうだよ。ボクとアイは、親同士が決めた許嫁なんだ。」

刃

「え？2人って同じ国の子なの？」

ハドスン

「ちがいます。コナー王子はホームズ公国、アイ王女はコーデリア王国出身なのです。」

コナン

「じゃあ、まさか政略結婚とか？」

アイ

「失礼な！！私とコナーは、お互いに愛し合って許嫁になったんだ
！！」

コナー

「／／／．．．／／／」

クラリツサ

「ただ、お2人の身を狙う危険な輩が最近増えまして．．．」

ハドスン

「公国と王国が落ち着くまで、日本にいる事にはしているのです。」

哀

「フーン．．．」

ユリ

「その輩はもう、この近くにいるんですか？」

ハドスン

「つい先ほど、輩が東京に到着したと連絡がありました・・・」

コナン

「・・・決めた！」

哀

「それなら私達が代わりに、王子と王女の服を着ますよ。元々顔もそっくりですし、入れ替わっても誰も気づかないでしょう。」

ハドスン

「わかりました、お任せします。」

クラリツサ

「では、いったんホテルに行きましょう。そこで服を着替えてください。」

ハドスン

「着替え完了です。」

クラリツサ

「2人とも、無茶はしないでくださいね。」

コナン

「わかってますよ。」

哀

「それでは、行ってきます。」

ホテルで着替えを終えたコナンと哀は、南杯戸遊園地に戻ってきた。

コナン

「さて、行くか・・・」

哀

「そうね。」

コナンと哀は手をつなぎ、遊園地の中に入っていった。

その2人を、怪しい人影が見つめていた。

「はい、ただ今コナーとアイの姿を発見いたしました。」

『よし、そのまま監視を続け、スキをついて2人を捕らえる。いいか、くれぐれも殺すなよ。絶対に生け捕りにするんだ。わかったな。』

「はい、わかりました。ボス・・・」

コナンと哀は、遊園地でのアトラクションを楽しんでいた。

自分達を監視する、怪しい人影が無数にいるとも知らずに。

人影はすべて、電話をかけていた男の仲間達であった。

男もいるし、女もいる。

どうやら、コナー王子とアイ王女の身を狙っているのは、この集団のようだ。」

しかし、その目的はまだわからない。

コナン

「次はどれに乗る？」

哀

「あれに乗ろうよ!」

コナン

「そうだな。」

コナンと哀は、うれしそうに走っていく。

それを見て、男は笑っている。

「(まるで子供みたいだな・・・)」

それはそうである。

今は本当の子供なのだから。

「おっと、こんな事をしてる場合じゃない。アイツらを見失わないようにしないと・・・」

男は電話で仲間達に指示を出すと、自分もゆっくりコナンと哀の後を追いかけた。

コナンと哀はたくさんのアトラクションに乗り、少し疲れていた。

コナン

「少し疲れたな。」

哀

「ええ。」

コナン

「何か食べようぜ。」

哀

「そうしましょ。」

コナンと哀は喫茶店の中で、コーヒーを飲んでいた。

コナン

「おいしいな。」

哀

「本当ね。」

そんな事を話している2人が、気づくはずもなかった。

自分達が座っている席の周りの席に、怪しい者達が座っている事に。

そして次の瞬間、コナンと哀は怪しい集団に取り囲まれていた。

ザザザザザザザザ！

コナン・哀

「！！！」

「ようやく見つけたぜ、コナー王子。」

「探しましたよ、アイ王女。」

コナン・哀

「……」

「おとなしく我らと一緒に来てもらいましょう。」

コナン

「誰が……おとなしくついていくかよ！！ディメンション……RI
NG、フラッシュボール！！」

カッ！！

「ぐわっ！？」

「眩しくて、目を開けてられない……」

コナン

「今のうちに逃げるぞー!!」

哀

「うん!!」

ダツ!

タタタタタ……

コナンと哀は走り出した。

スウウウウ……

「おのれガキ共め……逃がさんぞ……」

コナンと哀は、必死に走っている。

哀

「ねえ、このまま逃げきれるかしら?」

コナン

「どうかかな?あのディメンション:RING『フラッシュボール』の有効時間は、せいぜい数十秒……視界を取り戻したら、きつとすぐにまた追ってくるぜ……」

「待てー!!」

ト
ト
ト
ト
ト
ト
ト
ト
ト
ト
ト
ト

コナン

「やっぱしー!!」

哀

「じゃあ、今度は私の番ね!コナン君、私の背中に!」

コナン

「おう!」

ババツ!

哀

「デイメンション：RING、ターボシューズ!」

カツ!!

ドギヤ!!

「何だ!?急に速くなったぞ!!」

「焦るな!必ず追いつける。我々も同タイプの物を持っているから
な・・・」

「人気のない所まで、追いつけるぞ!他のヤツは別の方向に先回り
しろ!!」

「了解!!」

哀

「ハアハア……」

コナン

「アイツら、しつこいな……」

哀

「どこまで追ってくる気なのかしら……」

やがて2人は、人気のない所までやって来た。

「よし、そろそろいいぞ……」

ゴソ……

「デイメンション：RING、スリープボール！」

カッ！！

ブシューウウウウ……

コナン・哀

「わっ！！」

コナンと哀の周りに、煙が発生した。

コナン・哀

「ゴホゴホ・・・」

2人は勢い余って、煙を大量に吸い込んでしまった。

コナン・哀

「うう・・・」

コナンと哀は気が遠くなり、倒れ込んでしまった。

ドサッ。

「任務完了。」

男達はニヤリとした。

追いついてきた仲間達がコナンと哀を抱え上げると、集団はそのままどこかへと2人を連れ去っていった。

コナン

「ん……」

ヒンヤリ冷たい空気で、コナンは目を覚ました。

コナン

「う……ハッ！ここは……？あっ！哀！哀！！」

コナンは哀に近づき、彼女を揺すった。

哀

「う……ハッ！コナン君！！」

哀は頭をさすった。

哀

「頭が痛いわ……私達、いったいどうなったの？」

コナン

「たぶん、煙玉のような物を投げつけられて、その煙を吸い込んだんだよ……」

哀

「じゃあ私達、誘拐されたのね……」

コナン

「ああ・・・だけど幸い、拘束はされてないみたいだ。」

哀

「脱出しようと思えば、いつでも逃げ出せるわね。」

コナン

「まず、ここがどこなのか調べよう。」

哀

「ええ。」

コナンと哀は立ち上がり、自分達が閉じ込められている場所を探った。

コナン

「ここ、どこかの倉庫のようだな・・・」

哀

「ええ。どうやら私達、ホテルの中にいるみたいよ。」

コナン

「ホテルの中か・・・どこかに脱出できる場所と道具はあるか？」

哀

「ええ。ホラ、箱があるよ。それに、向こうに窓があるわ。」

コナン

「よし、それを使おう。」

コナンと哀は箱を運ぶと、窓の下に置いた。

コナン

「よし、オレの肩に乗れ。」

哀

「うん。」

哀はコナンの肩に乗った。

コナンは哀を窓に押し出す。

哀は窓から飛び降りると、周りを確認した。

哀

「見張りはいないみたいだわ。」

コナンも窓によじ登り、窓から飛び降りた。

コナン

「よし、逃げるぞ!!」

哀

「うん!!」

コナンと哀は手をつなぎ、走り出した。

しかし、2人は知らなかった。

2人がいた倉庫の中に、見張りが隠れていた事に・・・

コナンと哀は、必死に走っている。

コナン

「急いでここから逃げ出そう!」

哀

「そうね、追っ手が来る前に・・・」

しかし、そう甘くはなかった。

「見つけたぞ、2人とも!」

追っ手が目の前に現れた。

コナン

「そんなバカな!」

哀

「どうして!」

コナンと哀は後ろに下がろうとしたが、後ろからも追っ手がやって来た。

2人は追っ手に取り囲まれる。

しかし、機転を利かせて追っ手同士を激突させ、そのスキに駆け出

した。

「逃がすな!!」

追っ手は壁にあるボタンを押した。

すると、警報装置が鳴り響き、そこかしこから追っ手が現れた。

そして、コナンと哀を追いかけ回し始めた。

コナン・哀

「ハアハア、ハアハア・・・」

コナンと哀は、追っ手達から必死に逃げている。

しかし、追っ手は次第に数を増していった。

そして、とうとう行き止まりに追い込まれてしまった。

ドッ！

コナン・哀

「!!」

「ククク・・・」

「ここまでだな。」

「観念しなさい。」

そう言っつて、追っ手達は拳銃を2人に突きつけた。

コナン・哀

「う・・・」

コナンと哀は、おとなしく手を上げた。

すると、男2人がコナンと哀の後ろに回り込み、両腕を後ろに回して2人を床に押し倒した。

その後、女2人がロープを取り出し近づいてきて、コナンと哀の両腕を縛る。

そして足も縛り終わると、コナンと哀を背中に担ぎ上げた。

コナンと哀は、そのままどこかへと運ばれた。

コナンと哀は大きな部屋へと連れてこられ、中に投げ出された。

コナン・哀

「わっ！！」

ドサッ。

2人は何とか、起き上がる。

コナンと哀は、男達をにらみつける。

「ククク、そんなににらむなよ。」

「どうせオマエ達、王子と王女を守るための罠なんだろうっ?」

「見事に顔がそっくりだわ。」

コナン・哀

「え!!」

コナンと哀はビクリとした。

2人が罠だという事を、男達に気づかれてしまったからだ。

コナン・哀

「う・・・」

コナンと哀は、体がガタガタとふるえている。

「そうビクつくなよ。」

「ちゃんと利用してやっからさ。」

男達は、ニヤリとした。

刃

「コナン君達からの連絡、全然ないわね・・・」

コナー

「2人とも捕まっちゃったのかな？」

アイ

「まさか・・・」

ユリ

「あの2人なら、きっと大丈夫よ！」

しかし、その期待は裏切られた。

刃の携帯電話が鳴ったのだ。

刃

「はい、もしもし・・・」

「ずいぶんナメた事してくれるじゃないか、ボディーガードさんよ
お・・・」

刃

「あ、あなた誰!？」

「オレ達は、コナー王子とアイ王女を狙っている者だ。」

刃

「え!!！」

「さっそくだが、本題に入ろう。オレが使っている携帯電話、誰の物かわかるよな？」

刃 「コ、コナン君の・・・あ！しまっ・・・」

「フッフ、もう気づいてるぜ・・・今オレ達が捕らえているガキ2人が、罠だつて事もな！！」

刃 「そ、そんな！！バレてたの！？」

「丸バレなんだよ、言動で・・・さて、このガキ2人、どうしてやるうかな？」

刃 「ま、待つて！！言う事聞くから、2人を返して！！」

「フッフ、だったら話が速い・・・コナー王子とアイ王女、そこにいるんだな？」

刃 「は、はい・・・」

「その2人に、今から言う場所に来るように伝える。もし来なければ、ガキ2人の命はない・・・」

刃 「え・・・」

ユリ 「なっ・・・」

コナー・アイ

「!!!」

刃達の表情が、一瞬で曇った。

コナン

「そんなの絶対にダメだよ、刃ちゃん!!!」

哀

「コイツらの言う事なんか聞いちゃダメエ!!!」

コナンと哀は必死に叫ぶ。

「うるさい!!!」

男がどなると、男と女がやって来て、コナンと哀の口を手で塞いだ。

コナン・哀

「うぐっ、んむっ!!!」

刃

「コナン君、哀ちゃん!!!」

「いいか、遅れるなよ!!!」

刃

「待って、もう1回だけ2人の声を・・・」

ピッー!

男は電話を切った。

「ったく、うるさいガキ共だ・・・」

男はそう言うとガムテープを取り出し、コナンと哀の口にガムテープを貼りつけて、口を塞いでしまった。

コナン・哀

「ん〜!〜!〜!」

コナーとアイは、自分達の身代わりにさらわれたコナンと哀を救出するために、作戦を練っていた。

刃とユリは、コナーとアイを止める事はできなかった。

というより、元から2人を止める気などなかったのだ。

だから、少しでも相手の情報を得るために、2人はコナーとアイに話しかける。

刃

「ねえ、王子様と王女様。」

ユリ

「コナン君達をさらったヤツらって、いったい何者なの？」

コナー

「ヤツらはね、昔からウチのホームズ公国、アイのコーデリア王国と対立している、モリアーティ帝国の刺客なんだよ。」

アイ

「モリアーティ帝国の王様『デイスノートン・モリアーティ』はね、昔から私達の国をお互いに仲違いさせて、自分の国に力を蓄えようとしていたの。でも、いつも失敗していたわ。」

コナー

「だから今回、少しでも公国と王国より優位に立つために、ボクとアイをさらおうとしていたんだ。」

アイ

「王子と王女を人質に取れば、お父様達は否が応でもヤツの命令に従わざるを得ないからね。」

ユリ

「それでまず、アイ王女を狙ったのね。まさか、私と哀ちゃんに返り討ちにされるとは、ヤツらも計算外だったでしょうね。」

アイ

「ええ、私があなた達に会ったのは、はっきり言って幸いだったと言えるわ。」

コナー

「ついでに言えば、前にボクが来日した時にも、ボクを狙う輩が来てたらしいんだ。あいにくその時は、ボクを発見できなかったみたいだけどね……。」

ユリ

「それにしても問題は、捕まったコナン君と哀ちゃんだわ……。」

刃

「2人とも、無事だといえけれど……。」

コナン・哀

「うん、うん!!」

コナンと哀は閉じ込められている部屋の中で、緊縛を解こうと必死にもがいていた。

コナンと哀は背中合わせの姿で手足と体をロープでグルグル巻きに縛られて、ベッドの上に寝かされている。

コナン・哀

「ムウ!!」

2人は必死にもがいたが、キツく結ばれているらしく、縄は全くほどけなかった。

助けを呼ぼうにも、ガムテープを口に貼られていては大声を出す事もできない。

コナン・哀

「うう・・・」

コナンと哀は、俯いていた。

しばらくすると、電話がかかってきた。

刃は恐る恐る電話を取る。

刃
「も、もしもし……」

「今からコナー王子とアイ王女の2人を、北杯戸ホテルまで連れてこい。ちゃんと連れてきたら、2人は返してやる。」

刃
「待って、2人の声を聞かせて!!」

ガチャ!!

ツー、ツー……

刃
「そ、そんな……電話が切られちゃった……」

ユリ
「刃ちゃん、行こう。コナン君と哀ちゃんを助けに!!」

刃
「うん!!」

北杯戸ホテル

刃

「うっね・・・」

ピリリ・・・ピリリ・・・

刃

「もしもし？」

「約束通りに来たようだな。そのまま中に入り、4階まで上げられ。そこで我々は待っている。」

ツー、ツー・・・

刃達4人は、4階まで上がってきた。

ザッ！

「来たようだな。ついて来い。」

ガチャ！

「2人を連れてきて、ご苦労だったな。」

ユリ

「コナン君と哀ちゃんはどう？」

「ここにはいない。それに、オマエ達には悪いが、ここからは帰さん。」

部屋の中にいた男達が、一斉に拳銃を向けた。

刃

「何のつもり？」

「オマエ達も捕らえよと、指示が入った。悪いが、おとなしくしてもらおう……。」

ドンドンドンドン!!

ユリ

「シールド：RING、エアリアルウォール!!」

ガガガガガ!!

刃

「ウエポン：RING、エレクトリックブーメラン!!」

シュツ!

ガガガガガ!!

「フン……ナメるな!!」

ガッ!!

刃・ユリ

「キヤアアアア!」

ドガッ!!

刃・ユリ

「うう・・・」

「さあ、おとなしくしろ。」

ザザッ!!

「ん?」

コナー

「関係ない子を傷つけたな!!」

アイ

「アンタ達、もう許さないわ!!」

ガッ!!

コナー・アイ

「共鳴! Wガーディアン・RING!! ビーキング&ビークイン!
!!」

カッ!!

ボウン!!

「なっ・・・!?!」

コナー・アイ

「攻撃・指令っ！！！！」

ドガガガガガガガガガガガガガガガガガガガガガガ！

「があああああ！！！」

ドサツ・・・

その後、刃達が呼んだ警察が駆けつけ男達は逮捕され、コナンと哀も無事に救出された・・・

コナン

「それじゃあ、ここでお別れだね。」

哀

「こんな事があつたけど・・・あなた達、これから先大丈夫？」

コナー

「安心してよ。この事件を公表すれば、ボク達の味方についてくれる者も出てくるだろう。」

アイ

「もう、2人だけでは戦わないよ！」

コナン・哀

「じゃあ、また！！！」

刃・ユリ

「またいつか、どこかで!」

タタタタタ・・・

コナー

「いい子達だったな・・・」

ハドスン

「ええ、コナー様やアイ様の小さい頃によく似ています。」

アイ

「・・・ホウ、だとしたら・・・コナンや哀も、いずれ王子や王女になるやもしれんな。」

クラリツサ

「ハハッ、そうかも知れせんな。」

「何？強奪に失敗した!？」

「は、はい！申し訳ありません・・・!!」

「もう一度言いますよ、スネイク・・・どんな事があっても、あの宝石を手に入れるのです・・・剣野刃と金田一ユリが髪留めにつけている、あの宝石を・・・ビッグジュエル『バイオレットリアン』と『ゴールドンリリス』をね!!」

スネイク

「はい、わかりました・・・ディアナ様・・・」

どうせ殺されるのならば、私は隠し持っていた薬を自ら飲み、なんと体が縮んでしまったの！！

私が生きているとヤツらにバレたら、また命を狙われ、周りの人間にも被害が及ぶ・・・

阿笠博士に介抱された私は『灰原哀』と名乗り、転校生として帝丹小学校に転がり込んだ・・・

ではここで、私の心強い仲間達を紹介しましょう。

まずは最初の仲間であり、私の薬の最初の犠牲者、江戸川コナン君。今は私が想いを寄せている相手なの。

FBIの捜査官であり、仲間の中でも最強の剣野刃ちゃん。

剣術と雷を使わせたら、彼女の右に出る者はいない！！

京都に住む名探偵のカップル、瀬藤銀一君と白野美保ちゃん。

2人とも剣道、空手の有段者で、特に美保ちゃんは中国拳法も使いこなす！！

蝶一族のくノ一、桜野松葉ちゃん。

炎と蝶の忍法で、私達を助けてくれる。

元黒の組織の仲間で、実はクリスとは別人だった金田一ユリちゃん。母と姉の仇を討つべく、私達の仲間になってくれたの。

そして、もう1人・・・

7歳にして黒の組織の上位クラスの女の子、如月風月ちゃん。

彼女に関しては、いまだに疑惑が解けないでいるの。

そして今私達に、昆虫達の脅威が襲いかかろうとしている！！小さくなっても頭脳は同じ！

迷宮無しの女名探偵！！

真実は、いつも1つ！！！！

私の名前は灰原哀。

元黒の組織の科学者です。

今日はコナン君達仲間と一緒に、服部平次君の車で湖畔にキャンプにやって来ました。

ユリ

「ねえ、そのキャンプ場の近くに大きな湖があるって、本当？」

コナン

「うん、泳いだり魚釣りもできるんだってさ。」

刃

「楽しみね！」

平次

「エンジン付きのゴムボートも持ってきたから、準備はバッチリや！」

哀

「ねえ、準備がバッチリなのはいいけれど・・・なんかこの車、ずいぶん山奥に進んでない？」

平次

「おかしいなあ、道に迷わへんようにカーナビを作ってきたのに・

・・・」

レオン

「平次君が作ったカーナビじゃなあ・・・」

麻衣

「余計に心配だわ・・・」

刃

「オッホン！アタシも作るの手伝ったんですけどね・・・」

ピコピコ・・・

平次

「よかった、近くに村がある。そこへ行って道を聞く事にしよう！」

レオン

「なーんだ、古いけどちゃんとした町があるじゃん！」

コナン

「見て、あれお城だよ！」

哀

「六足町っていうのね、この町・・・」

麻衣

「でもこれで一安心ね、キャンプ場の場所を教えてもらえるし・・・」

「

風月

「あら？おかしいわねえ……『六足町』なんて町、地図に載っていないわよ。」

レオン

「そんなバカなー。」

麻衣

「ひょっとしたらその地図、古いんじゃないの？」

風月

「地図が古くても載ってるはずよ。この町だつてずいぶん古そうだし……」

スツ……

（おい、なぜだ！？あの子達、どうやってここに！？）

（さあ、わからん。こんな事は初めてだ。）

（結界の働きで、いかなる遭難者でもここへは来れんはずだが……）

（一応、蜂矢様に報告するか？）

（イヤ、いいだろう……見たところ、本当に迷い込んだだけのよ
うだ。）

(町の人間が機転を利かせて、うまくここから追い出すだろう。)

レオン

「あ、オモチャ屋だ！」

麻衣

「ここで聞いてみようか……」

小金玩具店

レオン

「なんだこりゃ？ 夙に独楽にビー玉……それにコケシ……」

麻衣

「コケシって、確か民芸品だよな？」

刃

「ニンテンドーDSとかPSPとか置いてないのかしら？」

哀

「あなた達ね、私達はオモチャ買いに来たワケじゃないのよ？」

小金屋

「フン、文句があるなら買わんでええ！ 何しろ寂れた町だからな。それよりアンタら、湖のキャンプ場ならまったく道がちがうぞ。んなら、ワシが車で先導してやってもいいが……」

平次

「え？ええんですか？」

麻衣

「これでやっとキャンプ場に行けるわね。」

刃

「このオモチャ屋、品揃えは悪いけどサービスはええよな！」

コナン

「ダメだよ、そんな事言っちゃ！」

ユリ

「コナン君だって結局、欲しいオモチャはなかったんでしょ？」

コナン

「あ、ボクはいいんだよ。この間、お祭りで播磨さんにこれ買ってもらったばかりだしね。」

ゴソゴソ！

スツ・・・

麻衣

「カッワイー！」

ユリ

「チヨウチヨのストラップか・・・」

コナン

「カワイイでしょ。キレイだから、しばらくアクセサリーに使うんだ。」

小金屋

「・・・」

平次

「じゃあそろそろ行きましようか？」

小金屋

「あ、そうだ皆さん。キャンプ場なんかよりもどうです？しばらくこの六足町に滞在してみても・・・」

コナン・哀・刃・ユリ・レオン・麻衣・風月・平次

「え？」

小金屋

「実は知り合いの人間が旅館の女将をやってます。彼女は大の子供好きで、なんと子供は宿泊代タダ！！ここは自然も豊かで、どのキャンプ場よりも楽しく遊べますよ。」

平次

「じゃあ、お言葉に甘えて・・・」

小金屋

「これが旅館までの行き先です。」

平次

「それじゃみんな、行くか。」

コナン・刃・ユリ・レオン・麻衣
「はい。」

哀

「・・・」

タタタ・・・

風月

「お兄さん、このコケシ9人分ください。」

小金屋

「はいよ、450円ね!」

風月

「ちょっと安すぎない?」

小金屋

「いやあ、お客さんにはサービスしないとね。そのコケシは1体50円だからさ。はい!」

風月

「ありがとうございます・・・」

タタタ・・・

小金屋

「・・・」

温泉宿『蝶屋』

おおむらさきあけは
大紫揚羽

「ようこそ坊ちゃん、お嬢ちゃん。私が蝶屋の女将、大紫揚羽です！君達のようにカワイイ子達なら、何日でも泊まってもらってかまわないわよ。」

平次

「あー、オレは・・・」

揚羽

「えーい、オマケ！あなたもタダでいいわ！ささ、奥へどうぞ。この旅館はスゴク景色のいい露天風呂と、おいしい料理が自慢なのよ。」

『絶好蝶の間』

コナン

「豪華な部屋だね！」

麻衣

「見て、景色も抜群よ！」

哀

「ねえ風月ちゃん、どう考えても怪しすぎるわよね。」

風月

「ええ、こんな高そうな宿に何日もタダで泊まれるワケないじゃない。だいたい、山奥だからって地図に載ってない町があるって事自体、納得できないわ。」

哀

「ええ、それにこの町の看板見たでしょ？『蝶屋』、『陽炎』、『蜻蛉』、『カミキリ』、『螻蛄』そして『蛭』……みんな虫に関する名前の店ばかりだったわよ。『小金屋』はたぶん、コガネ虫なんでしょうね。この町の名前だって『六足町』……ひよつとしたらこの町、足が6本ある『昆虫』と何か深いつながりでもあるのかしら？」

風月

「昆虫？まさか！人間の住む町と虫……合理的説明がつかないわ。」

「

コナン

「ねえ、早く露天風呂行こうよ！」

哀

「ちょっと待ってよ。あなた達だって、さっきのオモチヤ屋のお兄さんの態度の豹変ぶりを見たでしょ？怪しいと思わないの？」

刃

「別に。確かに優しくなったけど、おかげでタダで宿に泊まれるのよ。」

ズルツ！

哀

「もう、能天気な子達ね。私は万が一みんなの身に何かあったらと思っ
て、部屋にキック力増強シューズまで持ち込んだのよ。」

コナン

「なんだよ、そんなに心配して。なんなら、一緒にお風呂入る？」

レオン

「あ、それもいいな。一応混浴もあるらしいよ。」

哀

「バ、バカ、何言ってるの！」

コンコン！

平次

「あ、はい。」

ズブツ！

ドガツ！！

平次

「うわっ！！！」

哀

「な、何者よ、あなた！！まさか、その万が一が起こるなんてね！」

カチカチ！

パリパリパリパリ……

プクーツ！

哀

「行っけー！！」

ドガツ！！

ドゴオツ！！

ガシヤン！

バラバラ……

哀

「何よコイツ、いきなり襲ってきて！あら？鎧の中の人間は？」

コナン

「うわあああー！！」

哀

「！！！！」

バツ！！

コナン

「哀ちゃん!!」

哀

「コナン君!!」

銀野アカネ（ぎんのあかね）

「フツ、空蝉うつせみの術は、蝉忍軍だけの専売特許じゃない。私達トンボ忍軍も得意とする術よ。では、彦をいただきます。」

バツ!

タン!

アカネ

「さらば!!」

ゴオオオオオオオ...

哀・刃・ユリ・レオン・麻衣・風月・平次

「コナンくん!!!」

哀

「コナンくん!!」

ガサツ!

哀

「しまった!もう森の中に・・・ちくしょう!!」

平次

「そやけど、いったいどないなつとるんや!?!空を飛んどつたぞ!!」

刃

「それに見た?あのカッコ!!」

麻衣

「ええ、プリキュアに出てくる刺客みただつたわ!」

哀

「ん?あれは・・・」

揚羽

「あの子は!?!」

刃

「変なカッコしたヤツにさらわれたの!!」

揚羽

「やられたわ！ヤツらめ！まさか、白昼堂々とこの蝶屋に来るなんて！困ったわ・・・どうやって取り戻せばいいのかしら・・・」

平次

「決まるとるやろ、警察や！早く警察に通報せんと！！」

揚羽

「残念だけど、それはできないわ。」

平次

「おいおい、何言つとるんや！子供が誘拐されたんやぞ！！もうええ！オレらで通報するから、電話を貸してくれ！！」

揚羽

「それもできないわ。この町には電話がないのよ。それに警察だってそう。ここの駐在さんはあなた達の住んでる町の警察とちがって、大きな事件は扱えないのよ。」

刃

「ウソでしょ！？ここは21世紀の日本よ！？」

麻衣

「どうしてこの町だけ！？」

風月

「電話だけじゃないわ。ここは地図にも載ってなかったけど、この町には何か秘密でもあるの？」

揚羽

「ごめんなさい・・・それは言えないのよ・・・」

哀

「ねえ、揚羽さん。こんな質問、あまりにも現実離れしていてバカバカしいかもしれないけど、ここってひょっとして・・・忍者と何か関係のある町なの？」

揚羽

「!?!」

刃

「え、忍者？」

麻衣

「時代劇とかに出てくる、あの忍者の事？」

哀

「ええ、あれを見てよ。窓の外にこんな物が刺さってたのよ。」

「
<
>

哀

「この金具、トンボみたいな形をしているけど、ほら、これって手

裏剣に見えないかしら？」

刃

「ホントだ！さっきのトンボ女の仕業？」

麻衣

「ここに侵入する際に使ったのかしら？」

哀

「納得のいく説明をしてよ！」

揚羽

「そ、それは……」

小金屋

「女将……いや、揚羽様……ここは、彼らに本当の事を教えたらどうでしょうか？」

揚羽

「小金屋……」

小金屋

「今、我々がすべき事は、ヤツらにさらわれた彦を取り戻す事！1人でも多くの味方が必要です！！しかも、一見女子供と青年ですが、彼らこそ彦を守る伝説の『守護忍』！彼らにちゃんと訳を話せば、きっと我々の味方となり、この町を救うために力を貸してくれるはずです！！」

哀・刃・ユリ・レオン・麻衣・風月・平次

「？」

麻衣

「『彦』？」

哀

「『守護忍』？」

風月

「いったい、何の事・・・？」

揚羽

「・・・わかつたわ、本当の事を話すわ・・・そう、そこのお嬢ちゃん言う通り、この町は普通の町じゃない・・・」

シユルシユルシユル・・・

フアサ・・・

揚羽

「暮らしている人間全てが『忍者』の町・・・昆虫忍者『六足衆』の隠れ里なのよ！！！！」

哀・刃・ユリ・レオン・麻衣・風月・平次

「昆虫・・・忍者！！？」

揚羽

「ええ、忍者には甲賀や伊賀、秋水や春水のように色々な流派があるけれど、私達『六足衆』は、主に自然界の昆虫から色々な事を学び、術を編み出す昆虫忍者・・・戦国時代から約500年間、忍術や秘伝を守り続けるために、この地に住み続けているのよ。」

平次

「ウソやる！？500年もここに!？」

風月

「今までよく誰にも見つからなかったわね・・・」

小金屋

「先祖代々秘術に秘術を重ね、この里全体に結界を張っているからですよ。おかげで昆虫の擬態のようにこの地域全体が森と同化して、外部の人間がたどり着けないようになっていっています。たとえば人工衛星を使っても、発見される事はありません。」

哀

「でも、人工衛星でも見つけれないこの里が、どうして服部君の作ったカーナビに反応したのかしら？」

揚羽

「それは、あなた達が伝説の忍者だからでしょう。」

哀

「え？」

揚羽

「昔から、この里に伝わる伝説があります。『幾百年の年月を経て、この里が荒れて病みし時、黒き月の夜に『蝶の彦』とそれを守る『守護忍』が現れ、この里を救い治め続けるであろう』と・・・伝説にあるけど、あの蝶の根付けはまさしき彦の証！あの子こそ、伝説の蝶一族の彦なのよ!!どつりて今まで必死に探しても、見つからなかったワケね・・・まさか伝説の彦や守護忍達が、里の外の

人間だったとは……」

麻衣

「人違いよ！あれはお祭りで買ってもらったストラップ！」

刃

「コナン君が忍者の彦で、アタシ達が伝説の忍者なワケないじゃない！！！」

ユリ

「ねえ、それよりも……」

風月

「コナン君をさらったのは、いったい誰なの？」

哀

「さっき『ヤツらにさらわれた』って言ったけど、心当たりがあるんでしょう？」

揚羽

「ええ、それは……」

シユタン！

「大変です、揚羽様！！蜂矢が……蜂矢雀針がここにやって来ました！！！」

揚羽

「何ですって！？」

はぢやすすは
蜂矢雀針

「はい、揚羽さん！ご機嫌の方はいかがかしら？」

揚羽

「何がご機嫌よ、しらじらしい！いったいここへ何しに来たの？この手裏剣を使うトンボー族は、今はあなたの配下・・・彦をさらった黒幕はあなたね！八チ一族の頭主、蜂矢雀針！！」

哀・刃・ユリ・麻衣・風月

「何ですって！！」

レオン

「オマエがコナン君をさらったのか！？」

雀針

「あらまあ、カワイイ！ひよつとして、あなた達が守護忍なの？伝説もずいぶん大袈裟ね。こんな女や青年が、無敵の守護忍だなんて！この子達なんか彦を取り戻せっこないわね！心配してわざわざ見に来て、損したわ！」

哀

「やっぱりあなたがコナン君を！！」

雀針

「フフフフ、内緒よ、内緒！暦によれば、もうすぐ千年に一度の黒月の日。この日は私にとっても記念すべき日！きつとその時が来れば、あなた達にもわかるはずよ・・・」

ブロロロロ・・・

刃

「くそつ、絶対アイツが犯人よ！」

麻衣

「哀ちゃん、よかったの？黙って逃がしちゃって・・・」

哀

「仕方ないわよ、ここで下手に手を出して、コナン君の身に何かあったら大変だしね・・・」

揚羽

「そう、懸命な判断だったわ。『謀略』、『財力』そして『暴力』・・・あの女は自分の欲望のためなら、手段を選ばない卑劣な女よ！アイツがハチ一族の頭主になってから、平和だったこの里が一変したわ。今では里のほとんどの人間が、あの女に支配されている状態よ！」

小金屋

「それより揚羽様、早く彦を取り戻すための準備を進めないと！先程のヤツの話しぶり・・・ひよつとしたら、ヤツは黒月の日に祝言をあげる気かもしれません！」

揚羽

「そつね。」

哀

「え？祝言!？」

風月

「祝言って、もしかして結婚式の事？」

揚羽

「そうよ、蜂矢とさらわれた彦のね！」

哀・刃・ユリ・レオン・麻衣・風月・平次

「ええ〜!？」

揚羽

「当然じゃない!伝説の蝶の彦を婿にすれば、八チ一族は名実ともにこの里を支配できるからよ!」

麻衣

「でも、コナン君は小学1年生なのよ!？」

刃

「だいたい、コナン君があんなヤツのプロポーズ、受けるワケがないわ!！」

揚羽

「この里では形式だけの結婚も可能なのよ。それにいくら結婚を断ろうとも、きつと蜂矢の事だから、どんな手を使っても言う事を聞かせるでしょう・・・」

哀

「ねえ、黒月の日っていつなの?」

揚羽

「さあ・・・もうすぐ来るといふ事だけで、私達にもはつきりとした日にちはわからないのよ。なにせ千年に一度の事、伝説では『真つ黒な月が空に浮かぶ日』とだけしか記してないし、判別しようがないわ。だから、その日が今日かもしれないし、数ヶ月後かもしれないのよ・・・」

哀・刃・ユリ・レオン・麻衣・風月

「だとしたら一刻も早くコナン君を救わないと!!」

ダツ!!

揚羽

「あ、ちよつと!!」

哀・刃・ユリ・レオン・麻衣・風月

「目指すは蜂矢の城!!待っててね、コナン君!!」

哀

「・・・とは言ったものの・・・もしかして、また道に迷ったの?」

ユリ

「なんかずいぶん森が続くわねえ・・・」

平次

「せめて道案内だけでもしてもらえばよかったかな?」



哀

「わっ！毛虫がいつぱい！！！」

プスッ！

パァン！！

哀・刃・ユリ・レオン・麻衣・風月

「うわっっ！！！」

平次

「パンクやっっ！！！」

平次

「おかしいな、ちゃんと点検したはずなのに……」

チクッ！

刃

「イタッ！ん？」

十

刃

「見て、これ毛虫じゃないわ！鉄のトゲよ……！」

シュシュシュッ!!

カッカッカッ!!

刃

「キャッ!!」

タン!

「フッ、あんな毛虫マキビシに引っかかるとは・・・」

ザッ!

「伝説の守護忍も、」

「大した事ないでやんすね!」

「ボク達に会ったのが運のツキ!城へは一步も近づけないよ!」

哀・刃・ユリ・レオン・麻衣・風月・平次

「!!」

蜂矢城

兜甲吾郎かぶとこうごろう

「蜂矢よ、いったいどういう事だ。人を招いておきながら、こんな地下牢のような場所に押し込んで・・・」

美山鍬牙みやまくわが

「我々2大一族を、敵に回すつもりか!?!」

甲吾郎

「それよりキサマ、蝶一族のを彦をさらったと聞いたが、本当の事か!?!」

鍬牙

「その答え次第では・・・」

ガタツ!

甲吾郎・鍬牙

「同盟を結んだ我々が、城ごとキサマをぶっ壊し、八つ裂きにしてもいいのだぞ!?!」

ドガツ!!

ザンツ!!

甲吾郎

「フフフ、日頃仲の良くない我々が手を組むとは、思わなかった
だろ!？」

鍬牙

「キサマに黒月の儀式などされては、本当に八千一族に里を支配さ
れてしまうからな!」

ピン……

甲吾郎

「か、体が動かない……」

鍬牙

「こ、この術は……」

雀針

「アーハッハッハッ! 手を組んだのは、あなた達だけじゃないの
ですよ。」

ザザザザザザザザザザ……

甲吾郎

「キ、キサマ……」

鍬牙

「卑怯者め、コイツらとも手を組んだのか……」

雀針

「その通り! なんとしても黒月の儀式を無事に終えたいのでね!」

ジャキッ!

ザシュッ!!

雀針

「フフフ、もっと早く同盟を組んでいれば、こんな事にはならなかったものを……」

ガラッ……

雀針

「さあて、彦。もう、あなたを救いに来る者は誰もいませんよ。」

コナン

「だから、ボクは彦じゃないってば!!それに、誰も助けに来ないって言うのも間違いだよ!!きつと哀ちゃん達が助けに来るんだからね!!」

雀針

「フツ、あの弱そうな守護忍達の事?さっきこの城に向かっていると聞いたけど、ここまでたどり着く事さえ難しいはずよ。なにせ、この城に向かう途中のいたる所に、昆虫忍者の精鋭を、刺客として配置しているからね!」

「ガハハッ、逃げたってムダだぜ!!」

「この辺りは、あつしらの縄張りでヤンスからね！」

哀

「さっそく敵か・・・」

麻衣

「どっしよう、哀ちゃん。」

「さあ、ケガをしたくないならおとなしく・・・そこにいる蝶一族の彦を渡しな!!」

ビシッ!

レオン

「え!?ボク!?」

風月

「なんなの、この子ら!?!」

ユリ

「バカね、コナン君とレオン君をまちがえてるよ。」

刃

「やい、おっちょこちょいども!コナン君はとっくにマンタらの仲間がさるたやる!!」

ガンガン!

「わっ!」

「い、い、い、やめろってばー!!」

ドサッ!

「あいたた! マキビシが!」

哀

「なんか知らないけど、ずいぶん弱そうね。」

刃

「よし、いてまえ!」

麻衣

「ホントだ、メチャクチャ弱かったわね。」

刃

「ハチ一族つてのも大した事ないな!」

「ちょっと! ボク達をあんなヤツらと一緒にしないでよ!」

哀

「え?」

ゴキ田

「ワシは、ゴキブリ一族のゴキ田。」

ゴミニ子

「あつしは、ゴミ虫一族のゴミ子でヤンス。」

シジミ

「そして、ボクはチョウ一族のシジミ！」

ゴキ田

「アニキ！ウソはダメツスよ。」

ゴミ子

「アニキはアリ一族でヤンしょ？」

シジミ

「いいじゃない、別に！だってアリって地味なんだもん・・・」

刃

「じゃあ、蜂矢の手下でもないのに、なんでレオン君をさらおうとしたんや？」

シジミ

「それは、君達が彦を蜂矢の所へ連れて行くのかと思ったからだよ！あーあ、でも本物の彦はさらわれた後か・・・せつかく、彦を助けたお礼に叶えて欲しい願いがあったのにな。」

哀

「願い？」

シジミ

「そつだよ！『勝手によその町に出てはいけない』って掟を止めてもらつんだよ！だって、たまには町で遊んだり、買い物したいでしょ？？」

ゴミ子

「でも、彦が蜂矢の手に渡ったとなると、よけい暮らしがづらくなりヤスね。」

シジミ

「そうだね。」

刃

「ねえ、だったらアタシ達と一緒に取り戻しに行きましょう！あなた達だったら、この辺の道にも詳しいでしょ？案内するだけでいいからつき合ってよ！」

シジミ

「ダメダメ！！あの城に近づくのはマジでヤバイって！」

ゴミ子

「蜂矢の手下もウロウロしてるでヤンスし。」

ゴキ田

「この辺りにだって、罠が仕掛けてあるんだぞ！」

刃

「いいじゃない、近くまででいいからさ。」

カチツ！

ボゴツ！！

哀

ヒュウウウウウウウウウウウ・・・

ドサッ！

哀

「キャッ！」

シジミ

「わっ！」

哀

「あら？みんなは？」

シジミ

「さっきの穴はいろんな場所につながってるんだ。きっとみんなどこかで生きてるはずだよ！」

「はたしてどうかな・・・？」

ゴオオオオ・・・

ビュン！

哀

「わっ！」

・・・ッッ

アカネ

「ウフフ・・・また会ったわね、お嬢ちゃん。あの穴は、あらゆる地獄へとつながっているのよ。生きて城にたどり着けるとは思わな
いでよ！」

哀

「あ！さっきのトンボ忍者！！」

アカネ

「さきほどは彦を奪つために、不本意にも戦わずして去ってしまっ
たけど、甘く見てもらっちゃ困る！」

スラツ・・・

ギリリ！

アカネ

「本来トンボとは、ヤゴの時から一生捕食性の昆虫で、古来から武
士達は、その勇ましさと攻撃的な習性にあやかりたいとして、トン
ボの事を『勝ち虫』と呼んだほどよ！！」

ゴオオオオオ・・・

ザンツ！！

哀

「は、速い！！！」

ギユオオオオオ・・・

アカネ

「アハハハハ！！命乞いするなら、今のうちよ！！」

シジミ

「そうしようよ！！こんなに速くちゃ、ボク達に勝ち目はないよ！」

哀

「くっ！」

「フフフ・・・いや、もう遅い！一歩でも城に近づいた時点で、あなた達はすでに我々の敵！」

哀

「！！」

「この鎌の・・・生贄になってもらうわ！！」

ザンツ！！

哀・シジミ

「わっ！」

「ウフフ・・・観念しなさい！」

シジミ

「わぁ！鎌が宙に浮いてる！！」

哀

「ちがうわ、よく見て！」

「ええ！！」

ババツ！！

ジャツ！

哀・シジミ

「わっ！！」

アカネ

「スキあり！！」

ビュツ！

哀

「危ない！！」

ドン！

哀

「！！！！」

ドカツ！！

哀

「うっ！！」

シジミ

「大丈夫、君！！」

哀

「ええ、かすつただけよ!!ん？」

キラッ!

哀

「あれは……」

「 < > 」

哀

「あれは旅館の壁に刺さっていた手裏剣……そうか、あれはワイヤー!あのトンボ忍者は、飛んでたんじゃない!あのワイヤーを使って滑空してたんだわ!旅館の壁にも刺さっていたけど、あの手裏剣に糸を通し、それを伝って飛んだように逃げていったのね……」

アカネ

「フン、そんな事がわかったからといって、状況はいつこうに変わらないわよ。」

切子

「今あなたが考えるべき事は、遺言の言葉くらいよ!」

哀

「確かに、このままずっと2人の攻撃を避け続けるのは不可能だわ!なんとか手を打たないと……」

シジミ

「いったい、どう手を打つんだよ!? あのカマキリ一族の、間合いが広がる鎌!! そして、トンボ一族のスピード!! 聞くところによると、アイツはどんなに速い動きでも見える目の他に、あの頭のレンズのおかげでトンボのように360度見えるそうだよ! そんな2人が相手じゃ、もうどうする事もできないよ!」

ヒュンヒュン・・・

アカネ

「見える・・・見えるわよ、お嬢ちゃん・・・いくら必死に逃げ回っても、あなたのノロイ動きなど、すべて手に取るように見える! フフフ・・・おまけにじきにおとずれる、あなたの死に顔さえ見えているわよ!」

切子

「アーハッハッハッ!」

哀

「(くっ・・・どうすればいいの・・・!)」

ブン!

哀

「(いくら鎌を避けても・・・すぐにトンボ忍者の追い討ち攻撃を喰らってしまっ!...)」

バシユ！

トッー！

哀

「くく、あのトンボ忍者、なんて目をしてるのよ！あの高速移動の中でも、しっかりと私の動きは捕らえている……」

シジミ

「ああ、なんでもアイツは、自分の目をトンボと同じにするために、目を極限まで鍛えたらしいよ！」

哀

「え？トンボと同じ？」

シジミ

「そうだよ、だから、どんな動きでもしっかり見られるから、いくら素早く動いてもムダなんだ！」

哀

「……待てよ！もしトンボと同じ目なら、ひょっとして……」

切子

「フン！2人ともゴチャゴチャ言っていないで……この鎌の餌食となれえー！！」

ゴオオオオオ！！

哀

「キヤアアアアアアアアアア！！（よーし、一か八か！！このカマ

キリ忍者の攻撃を避けた後・・・」

ブンブン！

ゴオオオオオ！！

哀

「（すかさずトンボ忍者が襲ってくるけど・・・よし、ここぞ！！）」

ザッ！

ピタッ！

シジミ

「ちよっ、ちよっと君！！どうしたの、突然止まって！！」

ゴオオオオオ・・・

シジミ

「危ない！早く逃げて！！」

哀

「黙って見てて！そして、あなたもそこでジッとしてるのよー！」

ゴオオオオオ！！

バッ！

ゴオオオオオオオオオ・・・

切子

「チツ・・・!!」

シジミ

「ウ、ウソ!!なんで平気なの!?!」

哀

「思った通りだわ!トンボと同じように360度見えたり、優れた動態視力で獲物の姿を捕らえる、その目・・・だけど、逆に弱点の方もトンボと同じで・・・止まっているものを見るのは、苦手なのよ!!」

アカネ

「!!」

哀

「とにかく、初めてスキを見せたわ。このチャンス、生かさなきゃ!!」

パリパリパリ・・・

哀

「いっけえーっ!!」

ドゴオツ!!

ガッ!

アカネ・切子

「キヤーツ!!」

ドガア!!

ドサツ・・・

シジミ

「やったー!! スゴいよ、この2人を倒しちゃうなんて! さすがは伝説の守護忍だね!」

哀

「私は守護忍なんかじゃないわ。灰原哀、探偵よ! それより、先を急ぎましょう。こんなに強い刺客達がいるのなら、みんなが心配だわ!! 誰にも襲われてなきやいいけど・・・」

シジミ

「そうだね、急ごう、哀ちゃん!」

タタタ・・・

- 灰原哀&シジミVS銀野アカネ&鎌野切子 - x

剣野刃&服部平次VS?????

金田一ユリ&如月風月VS?????&?????&?????

笠原麻衣&ゴキ太VS?????

瀬戸川レオン&ゴミ子VS?????

バババババ・・・

ザザザザザ・・・

トトトトトトトトトトトト・・・

平次

「な、な、な・・・何なんや、コイツらは？！？」

ズドドドドト！！

田亀平八

「待てー！！我々タガメ一族から逃げられると思うなー！！」

ゴボゴボゴボゴボ・・・

甲野源五郎・松藻忠邦

「なあに、水中戦なら我々ゲンゴロウ一族とマツモムシ一族に任せろー！！」

ババババババ・・・

銀野ヤゴ子

「いいや、この場もまたトンボ一族のヤゴ忍に任せてもらおうー！ヤゴのようなジェット噴射の術で、すぐに追いついてやるー！！」

ヒュン！

ガッ！

ヤゴ子

「あいたたた！」

グイッ！

ババババババ・・・

平八

「おいヤゴ！」

源五郎

「オマエのジェット噴射を・・・」

忠邦

「こつちに向けるなあ！！！」

ヤゴ子

「そんなのムリよ！」

平八・源五郎・忠邦・ヤゴ子

「わああああああああ！！！」

バツシヤアアアアン！！

刃

「さあ、今のうちに逃げましょ！」

平次

「やったで、刃ちゃん！」

ババババババ・・・

平次

「イヤーしかし、備えあれば憂い無し！色々キャンプの道具を持ってきて、正解やったで！」

ババババババ・・・

刃

「！何あれ？水の上に・・・人影！？」

あめあしれいじ
雨足令治

「初めまして、お嬢さん。私は、アメンボ一族刺客の者。蜂矢殿の命を受け、あなた方の命を奪いにやって来ました。」

刃

「アメンボ忍者？」

平次

「なんかずいぶん弱そうやな！かまわず城を目指すで！」

ババババババ・・・

令治

「フツ。」

ザッザッザッ！

シャアアア・・・

ゴオオオオオ！！

平次

「うおーっ、滑つとる！！」

令治

「フッフ、この靴はアメンボの足と同じように、水を弾く物質でコーティングされているのです。アメンボこそ、水の忍者にふさわしい昆虫。水上歩行の他に、水面をモールス信号のようにたたいて、仲間と通信までする。それに、アメンボは弱くてカワイイ印象で見られがちですが・・・」

バツ！

ガシッ！

刃

「キヤアアア！！」

グイッ！

平次

「し、しもた！！刃ちゃん！！！！」

令治

「獲物を捕まえて体液を吸う、獰猛な一面も持っていますしね！フ

ツフツフツ・・・」

刃

「平次！助けてえ〜っ！！！」

ジタバタ・・・

令治

「イーッヒッヒッヒッ！まあ私は人間なので、ただ刺し殺すだけで
すがね！！！」

ペロツ！

刃

「うっ・・・平次、そのリュックに武器とかないのっ？」

ジタバタ！

平次

「あるワケないやろ？元々オレら、キャンプに来ただけやし・・・」

ガサガサ・・・

刃

「！平次、それよ！その袋、貸して！」

平次

「え？これ？」

令治

「なんだ、その粉は？」

刃

「これは魔法の粉よ！少しの量で効くといいんだけど……この粉をああなたの靴に振りかけると、あら不思議！」

サラサラ・・・

令治

「こ、これは！！」

ドブン！！

バシャバシャ・・・

令治

「し、沈む！！なんだ、その粉は！！？」

刃

「この粉は洗濯洗剤よ、『界面活性剤』入りのね！この界面活性剤が、あなたの靴の機能を無効化したのよ！！アメンボが水に浮く事ができるのは、足の毛についている油が水を弾いているからだけど、その足に油を分解する界面活性剤をつけると油が取れて、アメンボは突然水に浮けなくなるのよ！あなたの靴もアメンボと同じって言うから試してみただけど、うまくいったわ！」

平次

「なるほど、さすが刃ちゃん！」

刃

「ホンマはこないな事、やりたかなかったけどね・・・」

ピューー！

刃

「だって、界面活性剤をそのまま川に流すと、自然によくないでしょ？だから、ホンマはキャンプに持っていくのにも向いていないんですよ！」

ゴボボ・・・

平次

「そうか・・・家にあつた洗剤を、そのまま持ってきたからなあ・・・」

刃

「次からキャンプに持って行く洗剤は専用のやつに変えてね。それよりも、たまたま洗剤を持ってたから刺客を倒す事ができたけど、持ってなかったらどうなっていたか、想像もつかないわ！他のみんなが心配ね・・・みんなバラバラにはぐれてなきやいいんだけど・・・」

┌

- 灰原哀&シジミVS銀野アカネ&鎌野切子 - x

- 剣野刃&服部平次VS雨足令治 - x

金田一ユリ&如月風月VS?????&?????&?????

笠原麻衣&ゴキ太VS?????

瀬戸川レオン&ゴミ子VS?????

ファイル134：伝説の蝶彦（レジェンド・オブ・バタフライ・プリンス）『F

風月

「さつきから、森と湖ばかりが続くわね・・・」

ユリ

「ええ・・・」

風月

「はぐれたみんな、無事であるかしら・・・」

ユリ

「そうね・・・さらわれたコナン君、何もされてなきやいいけれど・・・」

風月

「ねえ、ユリちゃん。」

ユリ

「ん？」

風月

「もしかしてあなた、コナン君の事好きなの？」

ドテッ！

ユリ

「な、な、な・・・何言ってるのよ、風月ちゃん！！私はコナン君を仲間として慕っているだけで、恋愛感情なんて持ってないってば

「！・だいたい、コナン君には哀ちゃんがかちゃんといるじゃない！！
私が入れる場所なんて、ないよ・・・」

風月

「墓穴を掘ったね、ユリちゃん？」

ユリ

「あ・・・」

風月

「今度学校で発表しちゃおっかなあ？」金田「ユリちゃんは、江
戸川コナン君が好きです」って！」

ユリ

「やめてよ、風月ちゃん・・・ん？」

ギラッ！！

ゴオオオオオ！！

ユリ

「危ないっ！！」

バツ！

ドザア！

ユリ

「大丈夫、風月ちゃん！」

風月

「な、なんとか・・・」

ギョオオオ・・・

パシッ！

「なかなかやるじゃない！アタシの奇襲攻撃をかわすだなんて・・・
ウワサ通りの力ね・・・」

ユリ

「あなた、何者！？」

七星奈美ななほしなみ

「アタシの名は七星奈美！テントウムシ一族刺客の者よ！！」

風月

「テントウムシ・・・」

奈美

「アタシの忍法、天道虫型ブーメラン・・・受けてみなあ！！」

バババババ！！

ギョオオオオオ・・・

ユリ

「こ、今度は数が多い！！」

風月

「ナメるなよ・・・ウェポン：RING、ホームランバット!!」

カツ!!

ドカカカカカ!!

ユリ

「わっ、スゴい!!全部弾き飛ばした・・・」

風月

「物心ついた時から、お母さんにこの：RINGを持たされ、私はずっと野球の特訓をしてきた・・・いつの日か、本物のバットを持ち、メジャーリーグで活躍するために!!私の名は如月風月!!悪を許さない、野球少女よお!!!!」

ガガガガガ!!

奈美

「やるわね、あなた・・・でも、刺客がアタシだけだと思ったら・・・大間違い!!」

風月

「何!？」

シュツ!!

ザシュツ!!

風月

「うっ!!」

ユリ

「これは・・・針!？」

「その通り・・・」

ザッザッザッ!

さしがめはりと
刺亀針斗

「ボクの名前は刺亀針斗!サシガメ一族から派遣された刺客だ!」

奈美

「さあ、地上と空中からの同時攻撃・・・耐えられるかしら?」

風月

「くっ・・・」

ユリ

「風月ちゃん!私も加勢する!」

奈美

「させないわよ!」

パチン!

シユルシユル!

ユリ

「え?」

ぐるぐるぐるぐる!!

ユリ

「キャアアアア!!」

ドボン!!

風月

「ユリちゃん!!」

ユリ

「ネイチャー：RING、バブルスーツ!!」

カッ!

ユリ

「これで、私は大丈夫・・・さあ、出てきなさい!!」

「ククク・・・」

キラッ・・・

かわとびかげら
川飛影螺

「私は川飛影螺・・・トビケラー族刺客の者だ。私と勝負してもら
うよ。」

ユリ

「望むところよ!!」

奈美

「ハッ！！」

ギョオオオ・・・

風月

「くっ！！」

ドカカカカ！！

針斗

「スキあり！！」

ザシュツ！！

風月

「うっ！！」

奈美

「フッフ！友達の事が気かりで、戦いに集中できないのかな？」

針斗

「安心しな、すぐに逝かせてあげるよ。友達の所へね・・・」

風月

「どっという意味？」

奈美

「湖の中にいる刺客は、トビケラ一族の刺客川飛影螺・・・」

針斗

「水中戦では、30分もすれば獲物を倒しちゃうんだよ。君のお友達も、ね・・・」

風月

「大丈夫・・・ユリちゃんなら、きっと30分の間に刺客を倒せる・・・そしてそれは、この私も同じ事!!」

奈美

「フン・・・」

針斗

「ボク達をナメるな!!」

ゴオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!

風月

「キャッ!!」

針斗

「それぞれそれい!!」

ザシユツ!!

ザシユツ!!

風月

「うぐ……」

針斗

「ハハハ、もうあきらめな!!」

奈美

「あなたにアタシ達は倒せないわ!!」

風月

「そうかしら？私だった今、あなた達を倒す方法が浮かんだわよ！」

針斗

「フン、弱いヤツは何をしても弱いんだよー!!痺れ針の弾丸!!」

風月

「あら？弱いつて、誰の事を言っているのかしら!? シールド：RING、ネオ・エアリアルウォール!!」

カツ!

バシイイイン!!

奈美

「これは……盾!？」

風月

「そうよ!でも身を守るものではないわ!! 『自分の出した技が全部バリアーの中で跳ね返る』……自業自得の：RINGよ!!」

ズガガガガガガガアアン!!

針斗

「ぐああああー!!」

奈美

「な!？」

ドサツ・・・

針斗

「ぐう・・・」

風月

「次はあなたの番よ!! シールド：RING、ネオ・エアリアルウ
オール!!」

バン!!

奈美

「またこの技・・・だからどうだって言うのよ? それだったら、こ
つちから攻撃しなきゃいいだけじゃない!!」

風月

「それはどうかしら? ここで私があなたに攻撃を仕掛けたら・・・
どうなると思っ?」

奈美

「そんなの、迎撃を・・・!! (迎撃・・・できない!!?)」

風月

「チェック・メイトよ……ネイチャー・RING、パワーグロ
ブ！」

ガバア！！

バツ！

風月

「飛んでいけえ！！！」

ドカツ！

ゴオオオオ！！

奈美

「あ……あ……」

風月

「解除。」

フシュ！

ドカアアア！！

奈美

「キヤアアアアアアアッ！！！」

キラーン……

風月

「こっちは倒したよ、ユリちゃん・・・後5分間、がんばって・・・」

ユリ

「う・・・」

影螺

「フッフ、水中戦は辛いだろ？今まで私と戦えたヤツは、ものの30分で倒れていった・・・君も同じだと思ってたけど、なかなかしぶといね・・・」

ユリ

「当たり前でしょ！私は仲間を助けるために戦ってるんだから！」

ドンー！！

影螺

「フツ・・・」

ドンー！！

ドカツ！！

影螺

「ぐっ・・・」

ユリ

「か、勝った・・・」

影螺

「イヤ・・・相討ちさ。」

ユリ

「え？」

ピキ・・・

パリンー！

ユリ

「し、しまっ・・・」

影螺

「これで君は息ができない・・・かく言う私も、もう限界だ・・・」

ユリ

「ゴボボ、ゴボゴボゴボゴボ・・・（風月ちゃん・・・ごめんなさい・・・）」

風月

「ど、どうなってるの・・・？ユリちゃん、全然上がってこない・・・ま、まさか・・・」

『影螺は30分もすれば、獲物を倒しちゃうんだよ・・・』

風月

「そ、そんな・・・ユリちゃん、負けたの・・・？イヤ・・・イヤ
だよ・・・そんな事って・・・お願い・・・上がってきてよ・・・
ユリちゃんっ！！！！」

風月

「うえ〜ん！！ユリちゃんが死んじゃったよお〜！！クスン、クスン・・・」

ユリ

「ちょっと、風月ちゃん・・・人を勝手に殺さないでくれる？」

風月

「へ・・・？」

ザバア！

風月

「きゃ〜！！オバケエ〜！！！！」

ユリ

「誰がオバケよ！！足ちゃんについてるでしょ！！！！」

風月

「あ、ホントだ・・・」

ユリ

「まったく・・・」

風月

「それにしても、いったい誰が助けてくれたの？」

「アタシよ、アタシ！ある時は水中に潜む者・・・またある時は空を飛び交う者・・・果たして、その実態は！！！」

バシユン！！

松葉

「桜流蝶忍術のくノ一、桜野松葉！！！」

風月

「松葉さん！！どうしてここに？」

松葉

「この里は、アタシの母の生まれ故郷なのよ。アタシが生まれたのは大阪だけどね・・・そして、この里の蝶屋に住む揚羽さんは、母の従姉妹に当たるのよ。久しぶりに揚羽さんにあいさつしに来たら、コナン君がさらわれたっていうからね。ちょうどいいと思って、加勢に来たのよ！さあ、2人とも背中に乗って！！！」

ユリ・風月

「はい！」

トッ！

松葉

「行くよ！しっかりつかまってな！！！」

バサバサバサバサツ・・・

バビユン！！

麻衣

「まいったな。完全にみんなとはぐれちゃったよ。」

ゴキ太

「ああ、シジミのアニキとゴミ子はどこだろ？」

麻衣

「哀ちゃんもいないのに、敵が襲ってきたらどうしようっ。」

ゴキ太

「そうだなあー、そんな時や頼りにしてるぞ。」

麻衣

「え〜！そんなのムリよ〜！っていつか、あなた昆虫忍者でしょ！？」

ゴキ太

「オマエだって伝説の守護忍だろ！？パパッと敵をやっつけてくれよ！」

麻衣

「何か技とかないの！？1つくらい持つてるでしょ！？」

ゴキ太

「あるワケないだろ！！ワシの特技は腐った物を食べても平気な事ぐらいだ！他の2人だって似たようなものさ。ゴミ子のヤツの特技は屁をこく事で、シジミのアニキの特技は、ワシらみたいなヤツにも優しくしてくれる事・・・昆虫忍者の大半はそんなもんだよ、だ

いたい忍者といつても人間だしな・・・」

麻衣

「しかたないなあ。こうなったら、城目指して歩くしかないね・・・でも、どっちに行けば城に行けるのかしらね？いつのまにか辺りは砂だらけだわ・・・」

ズズズズ！

麻衣

「え？なにになに？」

ゴキ太

「なんか勝手に体が引き込まれていくぞ・・・」

ズズズズズ・・・

麻衣

「ま、まさか！」

ゴキ太

「これって・・・」

「ケケケ、2名様ご案内・・・一方通行の地獄へようこそ！！」

麻衣・ゴキ太

「アリジゴク忍者！！？」

ザアアアア・・・

「チツ！こつちに来たのは女の守護忍と、ゴキブリ野郎の方が！！
アリ忍者が来ていると聞いたので、どういたぶろうか楽しみにして
たのに・・・許さん！！人の楽しみを奪ったオマエらには、特別の
地獄を見せてやる！！！！」

ブンブンブンブン！！

ゴオオオオオ！！

ゴキ太

「ひえ〜っ！！」

麻衣

「キヤ〜ツ！！」

「忍法、砂嵐！！」

ゴオオオオオ！！

ゴキ太

「うわっ、砂が！！」

ズルツ！

ザザザ・・・

麻衣

「ああっ！！」

ゴキ太

「なんでこんなに滑るんだ！」

「アリジゴクのように、砂を飛ばして獲物を巣の底に落とすのさ！
さあーで、どっちが先に落ちるかな！？」

ゴオオオオオ！！

麻衣

「こんな時・・・こんな時、哀ちゃんだったら・・・。・・・よし・・・ごめんなさい、ゴキ太君！！！」

ガッ！

ゴキ太

「ゲッ！！何するんだ、裏切り者！！！」

ズザザザザ・・・

「ハハハ、伝説の守護忍といえどもしよせんは小娘、恐怖のあまりに仲間を見捨てたか・・・ん？」

麻衣

「きつと哀ちゃんなら、こつしたはずだわ・・・」

シャアアア・・・

「！？」

麻衣

「だって、哀ちゃんなら絶対に・・・仲間を見捨てて逃げたりはし

ないもの!!」

シャアアア!!

「何?ゴキブリ野郎の背をスケートボードのように!?!」

ゴキ太

「やるじゃないか!!」

麻衣

「ええ、アイツを避けて向こう側へ行くの!だけど、私は哀ちゃんほどスケボーがうまくないから・・・ごめんなさい・・・なんだかアイツとぶつかっちゃいそうなのよ!」

ゴキ太

「ウソだろ!?!」

ゴオオオオオ・・・

ゴオン!!

ゴキ太

「いってー!!」

麻衣

「スゴい石頭ね、鉄兜をしてる相手の方が気絶ちゃったわ!」

ゴキ太

「く〜!さっきホメて損した〜!しかもいったなあ、どうすればここから出られるんだろ?」

「おーい、こっちよう！コイツをどかして〜！」

土方ケラ美

「やあ！アタシはケラー族の者よ。揚羽の女将に頼まれて、力になりに来たのよ！アタシについて来な、城まで案内してあげる！」

ゴキ太

「え？抜け道でもあるのか？」

ケラ美

「いいやちがう、これから掘るのさ！」

ジャキツ！

バリバリバリバリ！！

ケラ美

「なんてったって、ケラの土を掘る能力は昆虫界1！！モグラと追いかけてこしたって負けないスピードを持つてるのよ！！しかも泳げるから、水脈にぶつかっても止まらないぜ！！！」

麻衣

「それはやめてくださいーいー！！！」

ギューン！！！！

「う．．．うーん．．．油断した．．．」

ピシピシッ！

バカッ！

ドサッ！

うすばねかけは
薄羽影葉

「まさか、ウスバカゲロウ一族のアタクシが、奥の手の空中殺法を出せないまま負けるとは．．．」

ガララ．．．

影葉

「あの外道忍者なら、このような負け方はしれないと思っけど．．．とにかく、蜂矢殿に報告せねば．．．」

ブウン．．．

蜂矢城

タタタ．．．

コナン

「いつまでもこんな所に閉じこめられてちゃ、哀ちゃん達に迷惑がかかる……なんとか、自力で脱出しなきゃ……」

「あら、どこに行くのかしら？」

コナン

「あ……」

ガッ！

ドサッ！

コナン

「う……」

「逃げられないように、手足を縛るときましようか。」

ギョツギョツ！

コナン

「は、放し……むぐっ！……」

ギョムツ！

「口も塞いで……」

コナン

「ん……！……」

「さあ、部屋に戻りましょうね。」

ヒョイ!

ザッザッザッ・・・

コナン

「ムウッ! ! ! !」

シャアアア・・・

スィー！

レオン

「おー、すごいなコレ！」

ゴミ子

「コレを使えば城までひとつ飛びでヤンスよ！このワイヤーはトンボ忍者をはじめとする空忍が、移動に使うワイヤーでヤンス！やっぱり忍者はここを使わなきゃでヤンス！」

ゴオオオオオ・・・

ビタアン！

レオン・ゴミ子

「わっ！」

ゴミ子

「あれ？体が動かないでヤンス！」

レオン

「そんなバカな、空中で金縛りなんて！」

ゴミ子

「じ、これは・・・！」

「飛んで火に入る夏の虫。忍法蜘蛛縛り！羽が退化して飛べないゴ
ミムシのくせに、空を飛ぶからよ！！！」

レオン・ゴミ子

「！！！」

やしやひめ
夜叉姫

「アタイは外道忍者、蜘蛛一族の夜叉姫！！六足町が戦乱の嵐に巻
き込まれると聞いて、蜂矢と同盟を組んだのよ！！！」

レオン

「ヤバい、早く逃げろ！！！」

ゴミ子

「でも動けないでヤンス！」

夜叉姫

「動けるワケないでしょ！あの兜と美山でさえ、この術に敗れたん
だからねえ！！！」

グイグイ……

レオン

「くそー！！！」

ゴミ子

「ちよっ、ちよっと、そんなに押さないでヤンス！そんなに押さ
れると……オ……オナラが……」

夜叉姫

「オナラ・・・？」

カッ！

ブオツ！！！！

夜叉姫

「！！アチチチチ！！何よ、この屁は！？」

レオン

「なんだ、スゴい術持ってんじゃん！」

ゴミ子

「自分でもビックリでヤンスよ！日常オナラがよく出るんでセーブしてたんでヤンスけど、まさかこんなに威力があったなんて。親からもらったこの装置のせいでヤンスかね！」

レオン

「何はともあれ、オレ達の勝ちだ！やい、夜叉姫！もう一発喰らいたくなかったら、オレ達を城まで案内しろ！！さもないと・・・」

ピタッ！

夜叉姫

「しますします、だから許してえ〜！！」

哀

「服部君ー！刃ちゃんー！」

タタタ・・・

平次

「おお、無事やったか！」

哀

「ええ、このベルトのボール、補充しなくちゃね。それより、他のみんなは？」

麻衣

「ここよー！！！」

ズボツ！

哀

「わっ！」

バサバサバサバサツ・・・

ユリ・風月

「私達はこっちー！！！」

レオン

「オレ達はこっちだぜー！！！」

ザツ！

哀

「松葉ちゃん！来てくれたのね！」

松葉

「ええ！」

刃

「何はともあれ、みんな無事でよかったわ……！」

哀

「さあ、みんな……いよいよ着いたわよ……！」

ザッ！

哀

「待っててね、コナン君！すぐに助けてあげるからね……！」

ビュオオオオオオ……

哀

「待っててね、コナン君！すぐに助けてあげるからね！！」

ビュオオオオオ・・・

ポッ！！

哀・刃・ユリ・レオン・麻衣・風月・平次

「！！！」

雀針

「ようこそ、守護忍の諸君。わざわざ来てくれるなんてうれしいよ。あなた達も、私達の式を祝いに来てくれたのね！」

レオン

「蜂矢！！！」

哀

「コナン君！！！」

ユリ

「鳥カゴみたいなのに閉じ込められてる！！！」

風月

「いや・・・むしろ蜂カゴじゃない・・・？」

刃

変わったわ!」

「今日からオレ達はオマエの家族だ!何かあったらなんでも手伝うぜ!」

シジミ

「ちよっ、ちよっとみんな!」

揚羽

「みんなに教えたのよ、シジミ君が守護忍と一緒に戦ってるって!」

シジミ

「揚羽さん!でも、みんな誤解してる。だってボク、里の掟を変えてもらうために・・・」

哀

「でも、ゴキ太君とゴミ子ちゃんが心配で、逃げずにここまで来たんじゃない。仲間の事を心配するのも、里を心配するのも同じ事。だから、もつと自分のやった事に自信を持った方がいいよ!」

揚羽

「守護忍殿!!!ここは任せて、城の方へ!!!」

哀

「わかった、ありがとう!行くわよ、みんな!!!」

刃・ユリ・レオン・麻衣・風月・平次・シジミ・ゴキ太・ゴミ子・夜叉姫

「おっ!」

ドガッ！！

「くせ者め！このドクバリを喰らえ！！」

パシユツ！

プス！

ドサ。

ガッ！

哀

「あ！！」

ドガガガ！！

哀

「う！！」

「フハハハハ！！どうだ、我々の蹴りの味は！！」

「我ら百足衆の蹴りは無敵なのだ！！」

ザッ！

ゴキ太

「わわわわわ！！」

シャアアア・・・

ズガガガッ！！

「わわわわわ！！」

ドシャ！

刃

「大成功！」

ゴキ太

「オレを殺す気がく！！」

麻衣

「でも、ホントに丈夫な体ね！」

哀

「コナン君！！」

ガラッ！！

哀

「いない！！どこ！！？」

コナン

「うわぁーっ！！」

哀

「上だわ！！」

ダン！！

スタツ！

雀針

「守護忍よ、よくぞここまでたどり着いたな！」

コナン

「哀ちゃん！！」

雀針

「戦いなさい、戦いなさい！我々昆虫忍者の、輝かしい未来のために！存分に戦え！！」

哀

「・・・」

雀針

「でも、さすがは守護忍！！まさか、ここまでやって来るなんて・・・
・だけど、私の野望の邪魔はさせない！！」

バツ！！

雀針

「ここが、あなたの墓場となるのよ！！」

哀

「野望？コナン君と結婚して、この里を支配する事か！」

雀針

「ええ！私がこの里の支配者となり、戦国時代から封印されてきたこの里の優れた技や術を世界各国に売り込むのよ！！」

レオン

「フン！なに時代遅れな事言ってるんだ！虫や忍者が現代で活躍できるワケねえだろ！」

麻衣

「そうよ、このハイテク時代に！」

雀針

「フッフ、勉強不足な子達ね！いい？テクノロジーのさらなる進歩は、昆虫の秘められた力によって成し遂げられるのよ！！においや音で情報を伝える技術！擬態や迷彩を応用した目に見えない兵器！今までの高価なだけで役に立たない兵器が、すべて生まれ変わる！」

バツ！！

雀針

「これからは、私の時代がくるのよ！！」

ブワツ！！

哀

「飛んだ！！」

雀針

「私は下忍とちがいワイヤーなど必要としない！！喰らいなさい！！」

ブン！

哀

「わっ！！」

シジミ

「気をつけて！！アイツの武器には、猛毒が仕込まれてるんだ！！」

哀

「でもアイツ、どうやって飛んでるの？ワイヤーは使っていないって
言ってるけど……」

ゴオオオオオ……

哀

「そうか、あの火！あの火から出る上昇気流を使って空を飛んでる
んだわ……」

雀針

「その通り！我こそは、火とんの術を得意とする伝説の守護忍『火
忍』と呼ぶにふさわしき忍者！！アンタ達虫ケラとは能力がちがう
のよ……」

ゴッ！

シジミ

「うわ……」

ゴミ子

「危ない、アニキ……」

ボウ……

雀針

「……！な！？爆炎火とんの術！？バカな！その術は伝説の守護忍
にしか使えないはず……。！そういえば、あなたの頭のコブ……」

「

ゴキ太
「？」

雀針

「影葉からの報告で、頑丈な伝説の守護忍『不死忍』の頭突きで敗れたとあったけど・・・まさか、あなた達2人が伝説の守護忍！？」

ゴキ太・ゴミ子

「ええっ！？」

雀針

「だとすると、この守護忍達と一緒にいるあなたも・・・」

シジミ

「知らないよ！この2人とは友達だけど、ボクは守護忍でもなんでもない。普通の忍者だよ！」

チャツ！

/ /
< < >
¥ ¥ | |
| |
¥ |

雀針

「そ、それは・・・チヨウ一族のりんぷん手裏剣！！その手裏剣を使うのはチヨウ一族！まさか・・・まさかあなた・・・チヨウ一族

の伝説の彦!？」

シジミ

「ええ〜っ!!!？」

「シジミが・・・チヨウ一族の彦!？」

揚羽

「そういえばあの子って、家族がいなかったわよね。」

小金屋

「ええ、捨て子だった彼を、アリー一族が育てていたのです。」

シジミ

「ちょっと待ってよ、投げやすい手裏剣を作ったらたまにこんな形になっただけ!勝手にボクを伝説の彦なんかにしなごうよ!」

雀針

「とにかく、あなたは後でじっくり調べる必要があるわね!2人と
も、そこでジツとしてもらおう!」

ドゴオッ!...

シジミ

「わっ!」

ドドドドドドドド...

哀

「なんてヤツなの、自分の城をぶっ壊したあ!」

雀針

「野望のためなら、城の1つや2つ惜しくはないわ!!」

ジャキツ!

雀針

「忍法、蜂針!!」

バツ!!

ガガガガガ!!

哀・刃・ユリ・風月・レオン・麻衣・平次・松葉・ゴキ太・ゴミニ

「わああああ!!」

雀針

「ホラ!死に損ない共、アンタ達も喰らえ!これは、刺さると死に至るスズメバチの毒針よ!!」

バババババ!!

ガガガツ!!

「ぐっう!!」

ガガガツ!!

「蜂矢様、こつちには飛ばさないでください!!」

雀針

「甘えた事を言うな！これしきでくたばる部下などいらん！これぞ『虫毒の術』！！強い者だけ生き残るのよ！！昆虫が4憶年にもわたってこの地球の環境に適応して100万種以上にも増え続けたのは、その進化のスピードのおかげ！さあ、この試練を乗り越えて共に進化しよう！！」

哀

「くそー、なんてヤツなの、味方まで！」

夜叉姫

「あんなヤツと同盟なんか組むんじゃなかったわ！」

哀

「そうだわ、夜叉姫さん！ちょっと力を貸してください！！」

夜叉姫

「え？」

哀

「みんな、ここに集まって！」

ザザザザザッ・・・

哀

「そう、合図をするから、これを持って一気に走るのよ！」

ボソボソ・・・

雀針

「フッフ、虫ケラ共が何を相談しているの。」

哀

「さあ、みんな！それぞれの方向に走るのよ！！！！」

「おーっ！！！！」

ダダダダダ・・・

雀針

「？何？突然散らばって・・・。！？ボール！？」

パリパリパリパリ・・・

哀

「いくわよ、蜂矢あ！！」

ゴオオ・・・

哀

「これでも喰らいなさい！！！！」

ドゴオツ！！

ガッ！！

雀針

「！！！！」

ビシッ！！

雀針

「しまった!!蜘蛛の巣!!」

ビタア!!

哀

「夜叉姫さんにボールに糸をつけてもらった後、みんなで引っ張って巣をはったのよ!」

「いくぞ、みんな!!」

「くっつかない縦糸を伝って登れ!!」

雀針

「ヒイツ・・・!!」

ババババババ!!

雀針

「く、苦しい!!止めて!!」

麻衣

「スゴい数ね!」

哀

「まるで、スズメバチを倒す時のミツバチみたいだわ!」

「うわああ!!助けて!!」

哀

「!!!」

ゴオオオオオ・・・

刃

「コナン君!!!」

ゴキ太

「アニキー!!!」

風月

「大変!崩れた時に火がついたんだわ!!!」

コナン

「もうダメ、熱い!!!」

シジミ

「こんな服脱ぎなさい、火がついちゃうよ!!!」

ガラッ!

ガラガラガラガラ・・・

コナン

「うわあああ!!!」

フワッ!

コナン
「！」

シジミ
「ぐっ……」

カツー！

>

パアアアア……！！

「」

パアアアア……！！

「飛んだ！！」

「シジミが飛んでる！！」

シジミ

「ウソだろ！？無我夢中でやったら、蜂矢のように飛べた！！」

「シジミが飛んでる。」

「それに見ろ、あの蝶の形の飾り！」

「やっぱり、シジミが彦だったんだ!!」

哀

「アリー族だと思っていたら、実はチョウ一族!!シジミ君ってまるで、幼虫の時アリに育てられる、チョウのクロシジミみたいね!!」

揚羽

「ねえ見て、火事によって赤くなったこの空・・・そして、空に浮かぶ蜂矢を攻撃している忍者達の月のような黒い塊・・・!赤い空と黒い月・・・これこそ伝説にある、『黒い月の夜』だったのよ!!」

シジミ

「さみしいね、もう帰っちゃうの？もうちょっとゆっくりしてけばいいのに。」

哀

「うん、みんなも心配してると思うし、学校もあるしね。」

刃

「それより、シジミ君の方もしばらく忙しくなりそうね！」

揚羽

「ええ、ここの里の立派な彦となるよう、いろいろと勉強してもらいます。」

シジミ

「だから、自由に里を出る夢は、しばらく先になりそうなの！」

ゴキ太

「オレ達も修行で忙しくなるな！蜂矢のヤツは、もうしないって反省してたけど……」

ゴミ子

「二度とあんな輩が現れないように、私達守護忍が強くなるとかなきゃね！」

ゴキ太

「しかしビックリしたぜ、ゴミムシって、体から100度の高熱の

有毒ガスを出すんだってな！まさか、その術の使い手がオマエだったとは！」

ゴミ子

「私もビツクリしたよ。スピードと並外れた生命力、ゴキブリってスゴい虫だったのね！」

小金屋

「服部殿、実はタイヤの他にカーナビも修理したので、おそらくもうこの里には来られないでしょう……」

平次

「そうか……ちょっと残念やな……」

シジミ

「ゴメンね、里の恩人なのに……」

コナン

「いいんだよ、でも何か困った事が起きたら、また力になるよ！」

シジミ

「あ、そうだコナン君、この蝶の髪飾り、君の持つてるストラップと交換しない？」

コナン

「え！？ダメだよ、こんな大事な物、もらえないよ……！」

シジミ

「いいんだよ、この髪飾りの役割は終わったんだし……それよりも、君達との思い出の方が大事なんだもん……！」

「じゃーねー!……!」

数日後

服部邸

コナン

「〜」

刃

「いいなー、コナン君……」

平次

「しかし、スゴい技術を持った里やったな!その飾りは、火事の熱で反応した『形状記憶合金』なんやけど、あれだけの設備でよう作ったもんや!」

コナン

「みんなも、あのコケシもらっとけばよかったのに!」

ユリ

「いららないよ、あんな物!」

松葉

「みんな、大変よ!!」

バン!

松葉

「アタシ、今日美術館に行ってたんだけど、あの背中に羽があるコケシは『羽虫ゴケシ』といって、非常に腕のいい職人が作った物で、オークションにかけると、時価数百万もするんだって!!」

哀・刃・ユリ

「ウソでしょー!!!?!」

レオン・麻衣

「もらっとけばよかったー!!!」

風月

「(そーっと、そーっと・・・)」

コナン

「風月ちゃん、どこ行くの?」

風月

「ギクツ!!」

ポロツ!

哀

「あゝ!!!」

刃

「羽虫ゴケシ!!」

ユリ

「隠れて買ってたわね〜!!」

麻衣・レオン

「渡しなさい!!」

風月

「きゃ〜!!」

哀・刃・ユリ・麻衣・レオン

「待ちなさ〜いっ!!」

風月

「きゃ〜ッ!!」

ドタバタドタバタ・・・

コナン

「ちよっ、ちよっとみんな・・・」

平次

「何やってんのかな、コイツら・・・」

松葉

「そうなると思って、アタシわびわび買ってきたのに・・・あの里から・・・」

その後、哀達と風月の追っかけっこは2時間近くも続いたという・

『蜂矢よ・・・里の支配に失敗したようね・・・』

雀針

「も、申し訳ありません・・・しかし、頼まれた情報は入手しました！ですから・・・」

『フン・・・』

ぐるぐるぐるぐる!!

雀針

「キヤアアアア!!」

『言い訳は、私のお腹の中ですなさい・・・』

ガバア!!

雀針

「キヤッ!!!!」

パクッ!!

グイッ!

バクバクバク・・・

ゴックンー!!

ペロリン。

ゴーゴン『ごちそうさま、雀針ちゃん。あなた、おいしかったわ』

スウウ・・・

ゴーゴン『それでは、そろそろ手下達にも頼もうかしら・・・あの9人が体内に所有するビッグジュエル・・・そしてダゴンの元から逃げた『女』・・・『IZUNA』の探索を・・・』

江戸川コナン・クリムゾンシーン

灰原哀・フルムーンシェリー

剣野刃・バイオレットリアン

金田一ユリ・ゴールデンリリス

瀬戸川レオン・フォレストシルバー

笠原麻衣・セルリアンホワイト

桜野松葉・ハートフルアリス

如月風月・レインボーアース

遠蘭鈴・ダークネスオルキス

ファイル139：伝説の蝶彦（レジェンド・オブ・バタフライ・プリンス）『1

名探偵コナン『レジェンド伝説の蝶彦』バタフライ

主題歌・Dream x Dream

挿入歌・君がいれば『クロスロードバージョン』

メインテーマ・名探偵コナンメインテーマ『クロスロードバージョン』

サウンド・名探偵コナン『クロスロード迷宮の十字路』オリジナル・サウンドトラック

ファイル140：封印された少女・イズナ

時は8年前に遡る・・・

ペンデュラムアッドのリーダー、ダゴンの所有：RINGだった少女、イズナ。

彼女は凶暴な人格を植え付けられ、ダゴン愛用の殺人兵器として、第一次組織大戦で多くのFBI捜査官を殺した・・・

しかし、その戦争が終結した後、彼女はダゴンに反発、自ら行方を眩ませた・・・

イズナ

「ハア、ハア・・・ここまで来れば、もう追っ手は来ないよね・・・

」

イズナはピタリと止まると、辺りを見回した。

キヨロキヨロ・・・

イズナ

「フウ・・・」

イズナはため息をつく。

イズナ

「ああ・・・私を作ってくださいった宮野愛様・・・あなたは今、どこにいらっしやるのですか・・・？」

イズナはそうつぶやくと、再び辺りを見回した。

イズナ

「・・・うん！！」

イズナは何かを決意したようだ。

イズナ

「そうだ、あそこに行こう・・・」

杯戸寺院

イズナは杯戸寺院にたどり着くと、中に入ってしまった。

その奥で、イズナは何やら念じていた。

イズナ

「私の体に埋め込まれし、7つのマジックボールよ・・・データを

失え!!!」

カッ!!

シューウウウウウウ・・・

イズナ

「これで、オーケー・・・後は・・・」

サッ!

イズナ

「6つのマジックボールよ、世界各地に飛び去れ!!!」

カッ!!

ババババババ!!!

イズナ

「後は、このマジックボール・・・私を作ってくださいった宮野愛様の末裔の元へ・・・届い・・・て・・・」

カッ!!

シュー・・・

イズナ

「来るべき時が来る日まで・・・私を封印せよ、宝箱!!!」

カッ!!

シユルルルルルル・・・

スポツ！

バタン！

ガチャ！

こうして、彼女は眠りについた・・・

そして月日は流れ、8年後・・・

1人の少女によって、イズナの封印が解かれる日がやって来たのであった・・・

ファイル140：封印された少女・イズナ（後書き）

オリジナル・キャラクターリスト『その1』

剣野刃ノリアン・ハートネス

瀬戸川レオンノ瀬藤銀一

笠原麻衣ノ白野美保

鳳美香

天幕深雪

月島弓雁

エル・シーバス

瀬川泉

妹尾波香

長谷川祐美

桜野松葉

蜂野鈴也

宮本フレア

佐々木メトロ

柳生清兵衛

風魔雷雑

平尾隆太

宝極真

金田一ユリ

如月風月

ファイル141：驚きの再会

コナンと哀は今日、杯戸寺院にやって来た。

哀に1週間前、不思議な出来事があったからだ。

哀の部屋に突然、黄色いビー玉のような物が飛び込んできたのだ。

その夜、夢の中で『杯戸寺院に行け』と言われたのである。

その夢がきっかけで、コナンと哀は杯戸寺院にやって来たのだった。

コナン

「ここが杯戸寺院か・・・」

哀

「な、なんか、不気味な所だね・・・」

コナン

「哀、入るぞ。」

哀

「えっ!!」

コナン

「夢のお告げが真実かどうか、確かめるんだろ？」

哀

「そ、そうだけど・・・」

コナン

「なら、ちゃんとついて来い。」

コナンは哀の腕を引っ張った。

哀

「えくん・・・」

コナンと哀は、杯戸寺院へと入っていった。

ストツ・・・

コナンと哀は、奥まで進んできた。

コナン

「けつきよく、何もなかったなあ・・・」

哀

「何かいたらイヤだよお!!」

コナン

「ん？」

哀

「ど、どうしたの Conan 君!!」

Conan

「ここに宝箱があるんだよ。ホラ・・・」

哀

「ホントだ!!」

Conan

「なんか入ってたりして・・・」

ガッ!

バチィッ!!

Conan

「うあっ!!」

哀

「だ、大丈夫 Conan 君!!」

Conan

「ああ・・・どうもこの宝箱、人が触らないようにバリアがかかってる・・・」

哀

「じゃあ、私でもムリなのかな?」

ガッ!

哀

「あれ……？」

「パアアア……」

「パカッ！」

哀

「宝箱……開いたよ？」

コナン

「ええ、なんで!？」

イズナ

「ふああ……よく寝た……」

コナン・哀

「!」

イズナ

「うーん……ん？あなた達、誰？」

コナン

「き、君こそ……」

哀

「どなた……？」

イズナ

「あ、愛様!!」

哀

「へ？」

イズナ

「愛様、お久しぶりですう〜!!」

コナン

「哀、知り合いか？」

哀

「ううん、知らない・・・それに私の本名は宮野志保！愛なんて名前じゃないわ!!」

イズナ

「『宮野』・・・？だったらまちがいないです!!」

哀

「はあ？」

コナン

「どづいつ事だ？」

「はいはい、議論はそこまで・・・」

コナン・哀

「!!」

シユルルルルルル・・・

ぐるぐるぐるぐる!!

コナン

「うわっ!!」

哀

「キャッ!!」

突然糸が飛んできて、コナンと哀を縛り上げた。

ギリギリ、ギリギリ……

哀

「く、苦しい……」

コナン

「何者だ、オマエ……」

おみなえし
女郎花

「私？私は緑の組織構成員の1人……女郎蜘蛛の女郎花!!」

コナン

「み、緑の組織だと!？」

女郎花

「その宝箱、ずっと開けようとしてたんだけどね。なかなか開けられなくて困ってたのよ。これでボスもお喜びになるわ。『IZUN A』を連れ戻す事ができるのだからね……」

コナン・哀

「イ、イズナ・・・？」

女郎花

「さあて、おしゃべりは終わりにしよう。アンタ達には悪いけど、顔見られてるからね。組織に連れ帰らせてもらっわ。」

コナン・哀

「く、くそお・・・」

「ウエポン：RING、フレアドアース！」

ボアツ！！

女郎花

「うああああっ！！」

コナン

「な、何？」

哀

「何が起こったの？」

「ダメやない、コナン君・・・宝を見つけただけで油断しとったら・・・まあ、ボクはそんな君に負けたとやけどねえ・・・」

ザッ・・・

コナン

「あ、あなたは・・・越水七槻さん！！！！」

ファイル142：七槻達の賭け

コナン

「七槻さん!!どうしてここに!!」

越水七槻

「うーん、説明したいのは山々なんやけど・・・先にこの変なヤツ片づけんのが先とちゃうか?」

コナン

「そつみただね。」

女郎花

「ナメんじゃないわよ!!」

ダツ!!

哀

「わっ!!」

コナン

「哀、下がって!!」

スツ・・・

コナン

「出てきて、フウちゃん!!」

ドン!!

女郎花

「な、何よコイツは!?!」

コナン

「ガーディアン：RING・フレアマン。愛称はフウちゃん、ボクのお気に入りだよ。」

哀

「コ、コナン君も持ってたんだ!」

コナン

「うん、フレアドアースも持ってるよ。」

七槻

「さあ、やるわよコナン君!」

コナン

「はい!」

コナン・七槻

「ダブルフレアドアース!」

バババババ!!

女郎花

「ぐう……今日のところはここまでにしておくわ……」

そう言うと、女郎花は消え去った。

七槻

「とりあえず、難は逃れたわね。」

コナン

「うん。ところで七槻さん、どうしてここに？」

七槻

「本堂瑛祐君、知ってるやろ？」

コナン

「うん、FBI捜査官なんだよね？」

七槻

「そうよ。実はボク、釈放された後彼に誘われて、FBIに入ったんよ。」

哀

「じゃあ、瑛祐君は七槻さんの上司？」

七槻

「そうなるね。その彼経由で、ボスから伝言があったんよ。イズナを復活させよとね。」

哀

「でも、封印は私しか破れなかったみたいでしたよ。」

七槻

「だから命じられたのよ。イズナの所有者を見守れとね。この子は、

とても危険な子だから・・・」

哀

「彼女が・・・危険？」

七槻

「そやよ。その子は8年前、ペンデュラムアッドのダゴンの所有する：RINGやったんよ・・・」

コナン

「えー!!」

哀

「ダゴンの!？」

イズナ

「・・・」

七槻

「この子は8年前の第一次組織大戦の時、数百人のFBI捜査官の命を奪った、危険な：RING・・・ボスは言ったわ。本当なら、破壊した方がいいって・・・」

コナン

「破壊・・・」

七槻

「でもこの子、どうやら8年前の記憶はないようだし・・・それに、哀ちゃんになついているみたいだし・・・しばらくあなたに預ける事にするわ。」

哀

「ありがとう、七槻さん！」

七槻

「それよか、気をつけた方がええとよ？」

哀

「え？」

七槻

「イズナは：RINGの中でもレア中のレア・・・復活したとわかつたら、みんな我先にと狙ってくるはずやから・・・」

コナン

「じゃあ、体鍛えた方がいいのかな？」

七槻

「かもしれへんね。じゃ、ボクはもう行くから・・・」

タタタ・・・

コナン

「さて・・・これからどうしたものかねえ・・・」

哀

「まず、一回家に帰りましょ。」

コナン

「そうだな。」

コナンと哀は、イズナを連れて家に帰った。

琴美

「七槻ちゃん、よかつたの？イズナをあのまま放つといて・・・」

七槻

「ええんよ。な、瑛祐君？」

瑛祐

「ああ、それもボスの『賭け』の1つ・・・哀ちゃんなら、きっとイズナでペンデュラムアッドを倒してくれるだろうさ・・・（そう・・・ペンデュラムアッドから一度世界を救った、明美さんの妹である彼女なら、きっとね・・・）」

ファイル143：狙われたイズナ

コナンと哀がイズナと出会って、3日がたちました。

今2人は、米花山へ遊びに来ています。

哀

「不思議だ！」

コナン

「不思議だね!!」

イズナ

「確かに・・・不思議ね!!!!」

哀

「あなたが不思議なのよ!あ・な・た・が!!」

コナン

「冷静に考えるとメチャクチャな存在だよね、イズナちゃんは・・・
：RINGの分類はたぶん、ガーディアン：RINGになるんだよね?人間の女の子みたいな姿をしてる。あと気になる事といえば・・・
・おでこ、両肘、両手の甲、両膝それぞれに空いている7つの穴・・・
・でも一番の不思議はやっぱり・・・『生きてる』って事なんだけどね・・・」

某国

『盗賊ドルギに属する、すべての者達に告ぐ!!』IZUNA』を奪い、手に入れよ!! 持ち主は殺してもかまわない。賞金総額は、100兆円だ!!』』

コナン

「さて・・・何しに行く？」

哀

「何か食べに行こうよ。」

コナン

「そうだな。イズナちゃんもそれでいい？」

イズナ

「いいよ! 私は哀ちゃん達に任せるし。」

コナン

「んじゃ、行くか・・・」

杯戸町のカフェテリア

コナン、哀、イズナは杯戸町のカフェテリアで、食事をしていた。

コナン

「うーん、ここの料理はおいしいな。」

哀

「本当だね。」

イズナ

「うん、おいしいー!」

コナン

「お腹いっぱいになったところで、外に出るか・・・」

コナン達3人は、外に出た。

その3人を、背後からつけている者達がいた。

コナン達がしばらく進んで、十字路に差し掛かった時・・・

次の瞬間、コナン達は数人の集団に取り囲まれていた。

ザザザザザ・・・

コナン・哀
「!!!」

「コイツが100兆の女・・・」

コナン

「な、何者だオマエ達！」

哀

「私達に何か用？」

「用なら大アリさ！」

「オレ達は、盗賊団だ!!!」

そう言うが早いか、集団はコナンと哀の腹部を殴った。

ドガ!!!

コナン・哀

「う・・・」

ドサツ・・・

イズナ

「コナン君!!!哀ちゃん・・・」

バッ!!!

イズナ

「むぐぐっ!!!!うう……」

イズナはハンカチで口を塞がれ、眠らされた。

「さて……この2人、どうする？」

「顔を見られてるんだ。とにかく、アジトまで連れていくぞ。」

集団はコナン、哀、イズナを抱き上げると、大きな布袋を取り出し、その中に3人を放り込んだ。

そして袋の口をヒモで縛ると、そのまま袋を抱えてどこかに運び去っていった。

その様子を、屋根の上から1人の少女が見つめていた……

ファイル144：新たな刺客『前編』

イズナ

「キャツ!！」

ドサツ・・・

イズナは乱暴に床に投げ出された。

イズナ

「タタタ・・・」

「さあ、教えてもらおうか？力を解放するマジックボールはどこにある？」

イズナ

「さあね・・・」

「いいのか？しらばっくれて・・・」

「そのままトボケてると、この2人が大変な目にあうぜ・・・」

コナン・哀

「う・・・」

イズナ

「ひ、卑怯者!！」

「卑怯者でけつこつ・・・さあ、在処を教えろ。」

イズナ

「わ、わかったわ・・・マジックボールの在処を教える・・・」

ニヤ・・・

イズナ

「んなワケないでしょ!!」

ドカツ!!

「がっ・・・」

イズナ

「コナン君、哀ちゃん!こっち!!」

イズナはコナンと哀の手を握ると、一目散に走り出した。

イズナ

「ハア、ハア・・・」

コナン

「イズナちゃん、大丈夫?」

イズナ

「正直言って、キツいかも・・・」

哀

「松葉ちゃん、大丈夫かしら？」

コナン

「大丈夫さ、彼女なら！」

イズナ

「・・・」

コナン

「！2人とも、止まって！！」

ピタッ！

「あらあら、子供よ！」

「でも見て。おもしろいのが一緒にいます。スレイプニルさんの情報では、この辺りにいるって聞いてたから、任務の遂行をするついでに探そうと思ってましたけど・・・向こうから来てくれちゃいましたね。『IZUNA』。」

オオオオオオオ・・・

ファイル145：新たな刺客『中編』

松葉

「魔力の強いヤツが・・・また1人、近づいてきてるね。アタシの繭に隠した『あの女の子』・・・しっかりやってよね。」

哀

「あの子達、このまま私達を通してくれる気はなさそうね。どうする、イズナちゃん？」

イズナ

「邪魔する者は・・・倒すまで!!」

「・・・私達邪魔だってさ。あの：RINGの性格、話と全然ちがわくない？前からあーいう子なの？」

「別人格。記憶がトンでるのかもしれない。」

キュラソー（本堂瑛美）

『ペンデュラムアッド構成員

』
『クラス』

ルーク』

「とりあえず遊んじゃっていいかな、シャルト君。ここ数日、宴でお酒ばっか飲んでたじゃん。汗かきたいのよねえー。」

シャルトリユーズ(?????)

『ペンデュラムアッド構成員

』クラス」

ルーク』

「シャルトはやりません。お酒も飲みませんでしたし。あと、年上に君づけやめてください。」

キュラソー

「……んじゃ、私だけ……」

ドン!!

ゴッ!

哀

「ぐっ……行って、イズナちゃん!!」

イズナ

「ハッ!!」

ダンッ!!

キュラソー

「フッ!」

バシィ!!

イズナ

「キャアアア!!」

ズザザザ・・・

シャルトリーズ

「・・・なんですか、その使い方？変形させないの？そんな使い方なら誰でもできます。やっぱりイズナは、ダゴンが一番使いこなせるみたいです。」

哀

「変形？この子が・・・？」

キュラソー

「どうやら、何も知らないみたいだし・・・やっっちゃうかぁ！」

ゴツ！

ガン！

哀

「うっ！！」

キュラソー

「フフフ・・・そのままあ男の子、連れてこようかしら？」

哀

「ハアハア・・・あなた達、8年前にも大暴れしたらしいわね？いつたい、何がしたいの？」

キュラソー

「さぁー？私、前の戦争の時、ペンデュラムにいなかったから詳しくくないのだ！どーなの、シャルト君？」

シャルトリューズ

「ペンデュラムは、わりと勝手気ままな連中の集まりですから、いろいろな理由があります。暴れるのがただ単に好きとか・・・：RING欲しいとか、富が欲しいとか、女が欲しいとか。クイーンは『この世界あらゆる世界が全部欲しい』って言うてるみたいですけどね。そのために：RINGや財産を奪い、反発する者は殺す。」

哀

「それで私達までも狙うのか!？」

シャルトリューズ

「必要なのでしたら、当然。」

キュラソー

「この子、弱すぎ。シャルト君、ドレイクまだ?つまんないから、私シャワー浴びに城に帰りたーい。」

シャルトリューズ

「ドレイクが来ないと、江戸川コナンは連れ帰れません。もう少し待っていてください、キュラソー。あと君づけやめてください。」

キュラソー

「アイツ、絶対時間守らない・・・」

哀

「私、頭きた!絶対に倒す!今は弱いかもしれない。イズナちゃんだってうまく使いこなせてないかもしれない。でもね・・・いつかあなた達1人1人、全員たたきつぶしてやるからねえ!!!」

キュラソー

「嫌いじゃないよ、君みたいなタイプ！けど、ここで負けたら次はない……」

グオツ……

キュラソー

「!!!」

哀

「今は勝てない。相討ちだ!!!」

イズナ

「ああああ……」

ドズズズズウウウン!!!

シャルトリユーズ

「イズナを上で巨大化させて……自らの危険も省みずに落とした!!!?……ダゴンでもやらないよ、あんな事……!!!」

哀

「……」

キュラソー

「やるじゃん、君！今のよかった!!!予想外の攻撃！右腕折れたっ！あーイッター!!!」

コナン

「哀ちゃん……」

コロコロ・・・

コナン

「ん？繭・・・？」

ピカッ！

カアアアア・・・！！

ピシピシピシッ・・・

バリン！！

リアン

「お休み・・・そして、おはようございます。」

ファイル146：新たな刺客『後編』

リアン

「お休み・・・そして、おはようや。」

哀

「リ、リアンちゃん!!」

リアン

「アタシが来たからには、もう大丈夫よ!哀ちゃん・・・」

キュラソー

「おい、FBIの嬢ちゃん!!また邪魔しちゃうの?君最近、ウチのメンバーから評判悪いよおー?」

リアン

「哀ちゃんに腕折られたクセに吹いてんじゃないよ、瑛美さん。消えなさい。」

キュラソー

「腕一本でもさあ・・・」

ヒュオ!!

ガシッ!

リアン

「腕輪型ウエポン:RING『パイソンチェーン』か。いい物持ってるじゃないの。使い手の腕はまだまだへたくソだけどね。」

キュラソー

「・・・」

シャルトリユーズ

「引いてください、キュラソー！相手が悪いです。」

ウン・・・

シャルトリユーズ

「！」

ドレイク『遅くなったな、シャルト！江戸川コナン、見つけたか？』

シャルト

「ズイブンとお早い事で、ドレイク。おかげで状況はよろしくありません。シャルトは今、怒っています。」

ドレイク『そう言うな、こっちの状況も変わったんだ。宴も終わった。新しい指令伝えに来たぜ。』第二次組織大戦の準備をするため、ペンデュラムアッド全員集結せよ』！！』

シャルトリユーズ

「第二次組織大戦・・・またFBI達や世界に、ケンカを売っちゃうんですね。」

ドレイク『YES。江戸川コナン連行指令も一時中断！ダゴンは言ったよ。』忘れた者達にもう一度思い出させなくてはならない。我らペンデュラムアッドの存在を』とね。どうだ？楽しくなりそう・・・

』・

リアン

「おいコラ!! さっきから何コソコソしゃべってる。カボチャ野郎
」!!」

ドレイク『ホウ・・・話には聞いていたが、本当にオマエか、アニ
ゼット・・・』

リアン

「ちがうわね。今は『剣野刃』や。8年ぶりやなあ、オイ。」

ドレイク『お互い生きてて何より・・・ヒュヒュヒュヒュ・・・』

哀

「待て!!」

ドレイク『?』

哀

「あなたも・・・ペンデュラムアッドか!!」

ドレイク『なんだ? あの小さい茶髪娘。』

キュラソー

「私の右腕折った灰原哀っていうのよ!!」

ドレイク『・・・冗談だよな?』

キュラソー

「本当!!」

まったのか、イズナ？帰って来い！ホレホレ！」

イズナ

「私を犬のように扱うな、ボケ！！その頭、食べるわよ！！」

ドレイク『・・・??？』

キュラソー

「記憶とんでるらしいよお。」

コナン

「オマエら、哀ちゃんをナメない方がいいよ！哀ちゃんは元黒の組織なんだからね！！」

ドレイク『それは・・・本当の事かア？』

ギシイイイ！！

コナン

「ヒツ・・・！！」

哀

「本当よ！コードネームはシェリーよ！！だから何なの？」

ドレイク『ヒュハ・・・ヒュハハハハハ！！元黒の組織・・・

！！あの女と同じか！！それならば、キュラソーの腕を折るのも理解できるか。』

シャルトリユーズ

「シャルトが今倒します！いいですか？」

ドレイク『指令は『全員、城に集結』！それ以外、今は許されない。
『江戸川コナンを連行する』のも『イズナを持ち帰る』のも次にま
わさなくてはならない！』裏切り者を始末する』のも同様だ！しか
し・・・ヒュハハハ・・・今回も楽しい・・・面白い戦争になるか
もなア・・・ヒュハ・・・ヒュハハハハハハ！！！！』

ヴン・・・！！！！

ファイル147：魅惑の危険なラブレター『前編』

某マンション 屋上

瑛祐

「そうか・・・やっぱり姉さんは生きてたのか・・・しかも、組織の構成員として・・・」

リアン

「瑛祐君、瑛美さんを連れ戻さないの？」

瑛祐

「無理に連れ戻すつもりはないよ。姉さんだって、何か理由があって組織に留まっているんだろっからね・・・」

リアン

「そう・・・ま、いつか。じゃあ、アタシは引き続き緑の組織の情報を集めておくわね・・・」

瑛祐

「任せたよ、リアンちゃん。」

リアン

「ええ・・・」

帝丹小学校

ゲタ箱

コナン達はゲタ箱で、上履きにはきかえていた。

哀

「ハア……またたくさんラブレター入ってるなあ……」

コナン

「哀、全部貸せ!!」

哀

「あ、は、はい……」

ビリビリ!

ポイツ!

コナン

「哀はオレが守る!」

哀

「コナン君……」

歩美

「相変わらずラブラブだね!コナン君と哀ちゃんは……」

光彦

「ええ！それにしても・・・」

ジーツ・・・

刃

「・・・何？」

元太

「なんで刃ちゃんのゲタ箱って、女の子からのラブレターばかりなんだ？」

マリア

「そら、あれや！刃がよー弱い者イジメするヤツ、コテンパンにしとるやる？あれで女の子達が刃に惚れてまいよんねや・・・」

刃

「・・・悪かったわね・・・男勝りで・・・」

風月

「クツククク・・・」

たくま

「風月ちゃんのゲタ箱もいっぱい入ってるな。」

風月

「まあ、私は男女に均等にモテてるからあ！」

チラツ・・・

刃

「（風月ちゃん・・・いつかシバく・・・）」

コナン

「そういえば、ユリちゃんのゲタ箱はどう？」

ユリ

「え？」

哀

「ラブレター入ってた？」

ユリ

「は、入ってない！入ってないって！！」

ガチャ！

バサバサバサバサツ・・・

ユリ

「あゝっ、風月ちゃん！！」

風月

「男女からのラブレター、合わせて合計300通・・・」

歩美

「ええ、そんなに？」

たくま

「1人で複数枚書いてるヤツもいるみたいだな・・・」

マリア

「ユリちゃん、モテモテやんか！」

ユリ

「だからみんなには見せたくなかったのに・・・」

光彦

「そういえばユリちゃんって、好きな人はいるんですか？」

ユリ

「い、いない・・・」

歩美

「え、ダメじゃない！もうすぐクリスマスよ？一人でクリスマス過ごすつもりなの？」

ユリ

「は、博士一緒なんだけど・・・」

コナン

「でも博士ってさ、たいていクリスマスは学会とか行くよなあ？」

哀

「そっねー・・・」

ユリ

「コナン君、哀ちゃん・・・余計な事を・・・」

マリア

「何にしてもや、早う彼氏作らな、婚期逃してしまつてえ？」

ユリ

「なっ……」

マリア

「冗談や、冗談！」

ユリ

「もっ、マリアちゃんたらっ……」

授業が終わつて、放課後。

ユリは足早に阿笠邸に向かつていた。

ユリ

「彼氏かぁ……考えてみれば、私だつて本当は17歳で、ピチピチの女子高生……恋人がいたつて、おかしくない年齢なのに……私つて組織の中に長い事いたから、彼氏なんか作つた事ないのよねえ……」

ユリはハア〜とため息をついた。

ユリ

「私が唯一好意を寄せている相手と言えば、新一君と元太君だよな……だけど、新一君には志保ちゃんがいるし……元太君はそういうの、鈍いからなあ……ハア〜……」

ユリは、少し俯き気味でいた。

そのせいだからだったのだろうか。

彼女は、背後から自分をつける影に気づいていなかった。

そして、次の瞬間・・・

ガバツ！！

ユリ

「キヤツ！？」

突然ユリは背後から人影に体を抱き上げられ、羽交い締めになされてしまった。

ユリ

「だ、誰・・・うつ！！！」

ユリは叫ぼうとしたが、口をハンカチで塞がれてしまった。

ユリ

「うつっ！！うつっ！！！」

ユリは必死にもがいたが、ハンカチに染み込まれた妙な薬のせい、目がトロンとなっていた。

ユリ

「う、ううん・・・（ね、眠い・・・）」

ガクツ・・・

ユリは人影の腕の中で気を失った・・・

ファイル148：魅惑の危険なラブレター『中編』

ユリ

「ん……うう……」

朦朧とする意識の中、ユリはやっと目を覚ました。

ユリ

「ここはどこ……？」

ユリは頭を抑えようとしたが、彼女の両腕は動かない。

ユリ

「手が縛られてる!？」

そう、ユリの両腕は後ろ手に回され、キツくロープで縛られていたのだ。

その上、体にもぐるぐるにロープが巻かれ、足は2ヶ所も縛られている。

口が塞がっていないのは、唯一の幸いだろう。

ユリ

「うっ!?!」

ユリは縄をほどこうともがいたが、まったくもって動けなかった。

ユリ

「私……誘拐されたの……？」

そう思ったユリは、何か足りない事に気がついた。

ユリ

「髪留めがない!!」

そう、ユリの髪留めは外され、髪型はポニーテールからセミロングになっていたのだ。

ユリ

「どうして、髪留めが外されてるの……？」

そんな事を考えていると、突然ギギーッと音がした。

ドアが開けられたのだ。

どうやらユリは、部屋の一室の中にいたらしい。

「起きていたのか……ちょうどいい……」

太い声を出しながら、男が3人入ってきた。

ユリ

「あなた達、誰？」

「私達は宝石泥棒……君を拉致し、髪留めの宝石を奪うように依頼された者だ。」

ユリ

「か、髪留めの宝石・・・それって、私の!？」

「どうやら、君は問題の髪留めをどこかに隠しているらしいね。ラ
ンドセルの中にも、それらし

い物はなかった。教えてくれないか?どこに宝石はある?」

ユリ

「あなたになんか、教えないよ!」

「まあ、いいさ。君の携帯電話は奪ってあるんだからね。君の保護
者かお友達に頼んで、持ってきてもらえばいい・・・」

ユリ

「ちょっと、返してよ!」

「うるさい嬢ちゃんだ。おい、口を塞いでおけ。」

「了解。」

ガバツ!

ユリ

「キャツ!」

1人がユリを抱え込むと、もう1人がガムテープを持って近づいて
きた。

ユリ

「は、放して!!--むぐぐっ・・・」

「静かにしてなよ。」

ユリは口にガムテープを貼られてしまった。

ユリ

「ん〜!」

男は携帯電話のアドレスを調べ始める。

ユリは止めようとしたが、もう2人の男に羽交い締めになされて動けない。

ユリは男が電話をかけるのをただ見ているしかなかった。

数分後

阿笠邸

阿笠

「何？ユリ君をさらったじゃと!？」

「そうだ。返してほしいければ、金色の宝石がついた髪留めを渡せ。1時間後、子供の携帯にかける。」

そう言って電話を切ると、男はユリの方を向いた。

ユリ

「!?!」

「このお嬢ちゃんを2階の部屋に閉じ込めておけ。見張りつきでな。」

「了解。」

男はヒョイとユリを担いだ。

ユリ

「んゝ、んゝ!?!」

ユリは2階に運ばれた。

ユリ

「んゝ、んゝ・・・」

ユリは男に担がれ、2階の部屋に運ばれてきた。

男が部屋に入ると、もう1人の男がイスの足を机の足に縄でつないだ。

2人の男達は体の縄を解いたユリをイスに座らせると、ユリをイスに縄で縛りつけた。

ユリ

「んゝ、んゝ!?!」

コナンと哀はユリの探偵バッジを頼りに、彼女の行方を探していた。

コナン

「早くユリちゃんを見つけられないとな・・・」

哀

「ええ・・・」

元太

「あれ？オマエら、何やってんだ？」

コナンと哀が振り返ると、元太がいた。

コナン

「元太君！なんでここに？」

元太

「母ちゃんにおつかい頼まれて、いろいろ買いに来てたんだよ。それより、何か事件でも起きたのか？」

哀

「実は、ユリちゃんがさらわれたの・・・」

元太

「ユリちゃんが!？」

コナン

「だから、彼女を探してるんだ。」

元太

「よっしゃ！オレも一緒に探すぜ！」

哀

「助かるわ。」

コナン

「じゃあ、行くぞ！（待ってるよ、ユリちゃん！！）」

ファイル149：魅惑の危険なラブレター『後編』

コナン、哀、元太の3人は、さらわれたユリを助けるために、彼女の行方を探していた。

ピピピ・・・

コナン

「発信機の反応は、杯戸シティホテルから出てるな・・・」

哀

「杯戸シティホテル・・・」

元太

「前にコナン君と灰原が、黒の組織と少しやり合った場所だな・・・」

「

コナン

「待ってるよ、ユリちゃん・・・」

杯戸シティホテル

407号室

ユリはその頃、杯戸シティホテルの407号室の中に監禁されていた。

実はあの電話の後、男達の手によってアパートから杯戸シティホテルに移動させられたのだ。

ユリ

「ん〜、ん〜・・・」

ユリはもがきながら、部屋を見回していた。

ユリ

「（暖炉がある・・・）」

暖炉から入って煙突を登れば、脱出は簡単にできる。

しかし、今のユリにはそれができない。

なぜなら、ユリはアパートにいた時と同じ状態にさせられていたからだ。

イスに縛りつけられ、さらにイスを机につながれた状態では、逃げる事などできなかつた。

ユリ

「ムウ〜ツ！！（こんな縄〜っ！！）」

ユリは縄を引きちぎろうともがいたが、まったくのムダだった。

ユリ

「んっ、んっ……（助けて、コナン君……哀ちゃん……元太君……!!）」

コナン

「着いたな……」

哀

「中に入りましょ……」

元太

「ああ……」

3人は、杯戸シティホテルに入り込んだ。

「そろそろ、電話をかけるとするか……」

「電話をかけ終わったら、お嬢ちゃんの役目は終わりだ……」

3人の男は、笑っている。

ユリ

「んっ、んんっ、んんんっ……」

ユリは必死に首を左右にふる。

「恨むのなら、運命を恨むんだな・・・」

ユリ

「（もうダメ・・・）」

ユリが泣きかけた、その時だった。

コナン

「そこまでだ！！」

「!?!?」

3人の男は、辺りを見回した。

パシユ!

「フニヤ・・・」

ドゴオ!!

「がつ!!」

2人が同時に倒れた。

コナンの放った麻醉銃と、哀の蹴ったサッカーボールが原因だ。

「!?!?」

コナンと哀が、目の前に現れた。

コナン

「見つけたぜ、誘拐犯!!」

哀

「ユリちゃんを返してもらっわよ!!」

「そうはいくかよ・・・」

男はしゃがみ込むと、ユリにナイフを突きつけた。

キラリ!

ユリ

「んん!!」

「ハッハッハッ・・・」

ボキ!!

「ハッ!?!」

男が見ると、ナイフをにぎり叩き折った元太の姿があった。

「ウ、ウソ・・・?」

元太

「だああああ!!」

ゴッ!!

「がつ……」

腹部に激痛が走り、男は気絶した。

コナン・哀

「ユリちゃん!!」

コナンと哀はユリに駆け寄ると、縄とガムテープを解いた。

コナン・哀

「大丈夫？」

ユリ

「う、うん、私は……それより元太君!! 血が……」

元太

「これぐらいどうって事ねえよ。仲間を助けるためならな！」

ユリ

「うえ〜ん!!」

ユリは元太に抱きつくくと、大泣きした。

コナン達は部屋のドアを塞ぐと、警察に通報し、ホテルを後にした。

「ちくしょう、あのガキ共・・・」

「覚えてろ・・・」

「必ず復讐してやる・・・」

トッ！

「あ！」

「依頼主の葛様・・・」

パシュパシュパシュッ！！

「な、なぜ・・・」

ドサッ！

葛くず

「まったく、使えないね、君達は・・・この失敗の償いは、君達の死をもって償ってもらおうよ・・・」

グビ・・・

葛

「スピリタス・・・アルコール度数96パーセントの超強烈な酒・・・この酒が気化しているそばで、煙草を吸うとどうなるか・・・」

ポイ！

バリン！

シュツ！

チリチリ・・・

ポツ！！

葛

「答えは『火がつき、燃え出す』さ・・・」

そう言うと、葛は煙突から逃走していった。

数日後・・・

哀と歩美が本屋に入ると、料理本のコーナーにユリがいた。

ユリは、お菓子のあるページを熱心に読んでいる。

ユリ

「フムフム・・・」

歩美

「ユリちゃん！」

哀

「何してるの？」

ユリ

「チョコレート作り方を見たのよ。」

歩美

「ええっ、チョコレート!？」

哀

「ユリちゃん、もうバレンタインにチョコあげる相手決まったの？」

ユリ

「まあね〜」

そう言うと、ユリはその本を持ってレジに向かい、本を購入した。

ユリ

「（助けてもらったお礼は、2月14日に心を込めてお返しするわ・
・・楽しみにしててね・・・愛しの小嶋元太君）」

ユリは、とても上機嫌だった。

『次のニュースです。先日未明、帝丹小学校1年B組の金田一ユリちゃんを誘拐した犯人の3人組が、同日杯戸シティホテルの407号室内で焼死体となって発見されました・・・3人組は死亡時に煙草を吸っていた形跡があり、割れたウオッカも落ちていた事から、警視庁では煙草の火が割れたウオッカに引火したものと見て、捜査を進めています・・・』

ファイル150：番外編・潜入捜査のその後に

歩

「キヤー！！コナン君カワイイ！！」

哀・刃・ユリ

「へー。」

哀達3人は見惚れている。

女装させられたコナンを見ての女子皆さんの感想である。

しかし、コナン本人の心はおだやかではなかった。

コナン

「（女装した姿言われても、ちっともうれしくないぜ。とっとと脱ぎてえ。）」

しかし、そうもいかなかった。

朝美

「本当にコナン君、カワイいわねえ。スツピンでこれなんだから、お化粧したらどうなるのかしらねえ？ウッフッフ・・・」

コナン

「（イヤな予感・・・）」

コナンは逃げ出した。

朝美

「あ！待ちなさい！！」

コナン

「（冗談じゃねえぜ、これ以上なんかされてたまるか！！）」

しかし、慣れないスカートであったため、転んでしまった。

コナン

「（ウソ！！）」

そして、あっという間に女子達に捕まった。

朝美

「さ、お姉さんと一緒にこっちに来ましようね。」

コナン

「イヤだあああ！！！！」

この後彼は数時間オモチャにされるのであった。

しかも、その後家に帰ってからも悲劇は続くのであった。

ようやく開放されたコナンは、工藤邸にやって来た。

気まぐれママの有希子が突然帰って来て、呼び出されたからだ。

コナン

「母さん、来たよ。」

有希子

「あら、新ちゃん遅かったわね。何かあったの？」

コナン

「実はさ……」

コナンは紅百合女学院潜入捜査の事と、その後の事を有希子に話した。

コナン

「……で、女装して潜入する羽目になったってワケなんだ……」

有希子

「フーン……でも今の新ちゃんの体ならとくに女の子と大差はないし、それに顔も美形だから、確かに女装すればスゴクカワイイかもねえ……ウフフフ……」

有希子の目が不気味に光るのをコナンは見逃さなかった。

コナン

「う……それじゃあ母さんオレはこれで。」

有希子

「あら、もう帰るの。けど、せっかくだから私も、新ちゃんのカワイイ姿見たくなっちゃったなあ。」

そういつて彼女はコナンにじわじわ近づく。

コナンは一步一步後ろに後ずさりするが、ついに壁に追い込まれてしまった。

そして、有希子はコナンを捕まえ抱き上げた。

有希子

「さ、新ちゃん。ウフフフフ・・・」

コナン

「イヤだ〜!!母さんまで〜!!止めてえ〜っ!!!!」

この日、コナンは人生で一番最悪な日だと思ったという・・・

江戸川コナン君、ご愁傷様。

ファイル151：美保とエルの1日『前編』

エルと美保の2人は、ある場所に集まっていた。

『遅かったじゃないか・・・』

エル

「ゴメンゴメン！」

美保

「寝過ぎしちゃって・・・」

『つたく、しっかりしてよね・・・』

『オマエ達はオレ達と同じ、『探偵七天王』なんだからな！』

エル

「わかってるって！」

『本当にわかってるのか・・・？』

エル

「大丈夫よ！」

美保

「それより、日本各地に配属された『ディティクティブマスター』達の状態は順調なんですか？」

『今のところはな・・・』

『日本全国、47都道府県・・・各地に配属したディティクティブ
マスター・・・』

『日本の、いや世界の未来は、彼らにかかっていると書いてもいい。
・・・』

『しっかり、やってもらわなきゃね・・・』

『では、解散!!!』

バババババババ!!

エル

「ねえ、美保。そういえば、あなたの彼氏は大丈夫なの?」

美保

「な、何言ってるの! 銀一はいつでも大丈夫よ!!」

エル

「おやおやあ? 私、『銀一』だなんて一言も言ってないけど?」

美保

「エ〜ル〜!!」

エル

「ジョ、ジョークだってば・・・」

美保

「銀一の事は心配いらないよ！彼の姉の金美さんと2人で、ジムを守ってるんだから・・・それより、エル・・・」

エル

「な、何！？」

美保

「私を怒らせたお詫びに、甘い物いっっぱいおごってもらってからね！！」

エル

「ええ〜っ！！そ、そんなあ〜っ！！」

美保

「私をからかうからいけないのよ！！」

エル

「ガックシ・・・わかったよお・・・」

美保

「じゃあ、行こー！」

エル

「う、うん・・・」

ファイル152：美保とエルの1日『後編』

喫茶『SANOU』

美保

「パクパク、モグモグ・・・うん、おいしい」

エル

「美保、食べ過ぎだよ？」

美保

「いいじゃない！好きなんだから・・・ん？」

エル

「どうしたの？美保・・・」

美保

「誰かが、私達の事を監視している・・・」

エル

「え!？」

美保

「出てきなさいよ!..!」

「チッ！やはり気づかれていたか・・・」

ザッザッ!

美保

「あなた達、何者？」

桔梗ききょう

「アタイは桔梗。そんでこっちは薄ね。」

薄うす

「ボスの命により、青い女を捕らえに来た……」

桔梗

「そういうワケだから、おとなしく捕まりな!!」

ドン!!

美保

「おっと!!」

サツ!

エル

「美保!このままじゃ、一般客を巻き込むわ!」

美保

「コイツらを引きつけるしかないわね!」

ダツ!

薄

「逃げたか……」

桔梗

「追っわよー!!」

ダダダダダ・・・

ピタッ!

美保

「ここまで来れば、誰にも迷惑はかからないわね・・・」

エル

「さあ、かかってきなさい!!」

桔梗・薄

「ウエポン：RING、リーフランス!!」

カツ!

薄

「いくぞおー!!」

ダンッ!!

美保

「ウエポン：RING、ユニコーンランス!!」

エル

「ウエポン：RING、イツカフランス!!」

カツ!

エル

「だああ!!」

ガキイイ!!

薄

「フン、そろそろ本気でいくか・・・ガーディアン：RING、ハ
ンミョウ!!」

桔梗

「ガーディアン：RING、マンティス!!」

ズズン!!

桔梗

「さあ、この2体相手に何を出す!？」

美保

「あなた達は、実に運がいいね・・・」

エル

「伝説のガーディアン2体に倒されるのだからね・・・」

スツ・・・

エル

「ガーディアン：RING、ホウオウ!!!」

美保

「ガーディアン：RING、ルギア!!!」

ガッ!!

コオオオオ・・・

美保

「エアロ・プラスト聖空気弾!!!」

エル

「ヒールング・フレイム聖爆炎弾!!!」

カツ!!

ドギヤアアアア!!

美保

「フウ・・・これで倒したわね・・・」

エル

「ちょっと待って、美保!!!倒したのは、2体のガーディアンだけよ!!!」

美保

「何!?!」

ズズウン!!!

パリン・・・

美保

「逃げられた・・・」

薄

「桔梗、放つといてよかったのか？あの2人・・・」

桔梗

「どつって事ないわよ。あの程度の強さ、我ら緑の組織の敵ではないわ！！」

ファイル153：今までの事件のおさらい（前書き）

今回は、第1章並びに第2章の事件のおさらいです。

ファイル153：今までの事件のおさらい

今までのおさらい

ファイル01 - リアン、ジンとウオツカに襲われる。

服部平次、幼児化したリアン・ハートネスと出会う。

ファイル02 - リアン、服部家に居候。

『剣野刃』の名を作る。

刃、大阪で江坂繭美、八木幹彦、大沢健太と友達になる。

浪花の少年探偵団を結成。

ファイル03 - 刃、帝丹小学校に転校、コナン・哀と出会う。

同時に2人の正体が刃にバレる。

ファイル04 - 毛利蘭、スネイク達に襲われ、幼児化する。

ファイル05 - 毛利蘭、黒羽兄妹に救われ、居候。

『遠蘭鈴』の名を作る。

鈴、江古田小学校に転校する。

コナンと哀達、ドッジボールで賢橋小学校の平尾隆太達と対決。

以後、隆太と仲良しに。

ファイル06・07 - 哀、怪盗レディーと出会い、ライバル関係になる。

ファイル08 - コナンと哀、下校中にジンとウオツカを発見。

杯戸シテイホテルまで追跡するが、コナンが一度捕まる。

哀が間一髪、コナンを救出する。

シールドル、ジンに射殺される。

クラレット初登場。

哀、コナンから手編みのセーターをプレゼントされる。

回想シーンその1。

ファイル09 - 服部平次、ゲームセンターで殺人事件を解決。

ユーリ・マラスキーノ、改方学園教師に就任。

ターゲットのうちの1人を見つける。
回想シーンその2。
ファイル10 - 哀達、バスジャックに遭遇。
犯人達を捕まえる。
何者かの気配にコナンがおびえる。
青井玲子初登場。
回想シーンその3。
ファイル11 - 哀達、愛犬行方不明事件を解決。
コナンに笑顔が戻る。
回想シーンその4。
ファイル12・13 - コナン、哀、刃の正体が隆太にバレる。
隆太、コナン達の仲間に加わる。
播磨紅子初登場。
仲間探しの旅行開始。
ファイル14～16 - コナン達、瀬藤銀一（瀬戸川レオン）と白野美保（笠原麻衣）に出会う。
2人の友達4人（天幕深雪、鳳美香、月島弓雁、エル・シーバス）と共に仲間に加え、青年探偵団を結成。
ファイル17～23 - 桜野松葉、ジンとスコッチにそそのかされ、コナンと哀を誘拐する。
松葉、その後ジン達の悪事を知る。
松葉、哀達と共にスコッチを倒し、青年探偵団に加わる。
蜂野鈴也も初登場。
ファイル24 - 日向琴美が初登場、帝丹高校に転校してくる。
本堂瑛祐の秘密発覚。
黒の組織で不穏な動き。
ファイル25 - コナン達男性陣、哀達女性陣を海での特訓で全員泳げるようにする。
ベルモット、宮野明美の亡霊の手により幼児化し、組織から逃亡する。

ファイル26・27 - ベルモット、阿笠邸にやって来る。
コナンと哀、ベルモットを金田一ヨリとして迎え入れる。
ヨリ、阿笠邸に居候開始。
コナン、哀、刃、ヨリの正体が吉田歩美にバレる。
歩美、コナン達の仲間に加わる。
ファイル28・29 - コナン、カゼを引く。
強盗が毛利探偵事務所の自宅に押し入り、コナン、捕まる。
少年探偵団、強盗を逮捕。
弥生と鈴、黒羽盗華の日記と謎の緑のカケラを発見する。
スネイクが国際犯罪組織『ペンデュラムアッド』の1組織、『緑の組織』と判明。
ファイル30 - 美保、自宅の図書館で祖母からの手紙を発見、泣き崩れる。
美保、青の組織を必ず倒すと心に誓う。
同時に、謎の青のカケラを発見。
白羽弥生、三千院伊澄初登場。
ファイル31 - 刃、繭美、幹彦、健太と共に探検に参加。
兄の書いた手紙を見つけ、その下に自分の名を書き加える。
瑛祐がFBIの一員と発覚。
赤の組織、名前で初登場。
謎の『赤のカケラ』の存在が判明。
ファイル32 - 松葉、時雨山大学院で鈴也達の補習の講師をする。
黄の組織、名前で初登場。
謎の『黄のカケラ』の所有者が松葉と判明。
佐々木メトロ、柳生清兵衛、風魔雷蔵、宮本フレア初登場。
何かの作戦を企む。
ファイル33 - 36 - コナン、女装して哀と共に紅百合女学院に潜入。
途中、コナンこと愛子、ストーカー達に誘拐され、大ピンチに。
愛子と哀、殺人事件を解決。

青の組織が事件に関わっていた。

ファイル37～40 - 美保、仲間達と九州旅行に行く。

美保、殺人の容疑者にされたり、元介護ロボに捕まったりで大ピンチに。

銀一、殺人事件を解決。

謎の組織が事件に関わっていた(どの組織かは不明)。

怪盗キッドが美保と出会う。

ファイル41 - 作者とコナン達の生対談

ファイル42 - コナン達青年探偵団、ペンデュラムアッド打倒を誓う。

ファイル43 - ペンデュラムアッドの5大組織幹部の存在が発覚。

ファイル44～45 - 劇の練習の小道具に使うアクセサリーが原因でコナンが誘拐される。

少年探偵団が犯人を逮捕。

ファイル46～48 - 美保、バーチャルウェディングの花嫁役をする。

その夜に殺人事件発生。

事件を解決するが、途中で美保が拉致される。

ファイル49～50 - 松葉が鈴也や仲間達と肝試しをする。

ファイル51 - コナンにそっくりな男の子、コナー王子が初登場。

ファイル52 - 本堂瑛祐が姉の生存の可能性を見いだす。

ファイル53～54 - 美保が大学院受験生の家に家庭教師に行く。

訪問先の家にいた受験生の父親を殺害した男を逮捕。

ファイル55～56 - 刃、繭美達浪花の少年探偵団と共にプールに行く。

プールで出会った麻薬の取り引き男並びに、暴力団2組を逮捕。

ファイル57～70 - スペシャル版・呪われたクルージングツアー！
ツアー後、園子にコナンの正体がバレる。

ファイル71 - 坂本たくまと東尾マリアにコナンと哀の正体がバレる。

ファイル72 - 刃、大阪で和葉や繭美達に正体がバレる。
ファイル73 - 74 - 刃、怪盗の中風雷達を捕まえるために標的の
女の子と入れ替わるが、自分が誘拐されて大ピンチに。
平次と和葉が中風雷達を逮捕。
ファイル75 - 哀がコナンを、コナンが哀を名前で呼ぶ。
ファイル76 - 77 - 黒の組織のコンニク並びに亜戸川愛理と戦う。
ファイル78 - 79 - 刃が瑛祐と密会。
コナンと哀、刃にハメられる。
ペンデュラムアッドの1人、ドレイクの標的が刃と発覚。
ファイル80 - コナンが誘拐される。
哀と小五郎が元銀行強盗を逮捕。
ペンデュラムアッドの1人、トード登場。
ファイル81 - コナンと哀、怪盗キッドと怪盗レディーを撃退する。
ファイル82 - コナンと哀、危険なファン達から逃避行を決行（笑）
ファイル83 - 哀達転校生の1年B組編入の秘密が明かされる。
ファイル84 - 85 - 怪しげな転校生、如月風月が転校してくる。
ファイル86 - 金田一ユリがクリス・ヴィンヤードではなく、その
妹リリースである事が判明。
ファイル87 - 89 - 仲間達の束の間の休息（美保、銀一、松葉編）
。
ファイル90 - 黒の組織で不穏な動きが起こる。
ファイル91 - ドッペルゲンガー騒動勃発（笑）。
ファイル92 - 束の間の休息の隆太編。
隆太に恋人ができる。
宝極真初登場。
ファイル93 - 95 - 播磨紅子の過去が明かされる。
ファイル96 - 98 - コナン達の休息。
運動会を大いに楽しむ。
帰り道、ジンに密かに写真を撮られる。
ファイル99 - 110 - スペシャル版・天空上の恋愛劇。
ラブアース

コナンと哀の精神が一時入れ替わる。
ジンと和解。
ジン、部下達と共に組織を脱退。
ファイル111 - 第1章、完結。
ファイル112 ～ 113 - 第2章、始動。
ファイル114 ～ 116 - 刃、銀行強盗と遭遇。
単独で犯人を逮捕。
犬に襲われ、全治1ヶ月の重傷に。
ファイル117 ～ 119 - 山王学園演劇部の劇に、刃がゲスト出演。
途中、刃が誘拐される。
美保、自分に恨みを抱く男、近藤を逮捕する。
ファイル120 ～ 123 - コナンと紅子、姫川啓作の同窓会に参加。
啓作、同級生の殺人犯を逮捕する。
ファイル124 ～ 127 - コナンと哀、コナー王子と再会。
気が強い哀似の女の子、アイ王女初登場。
ちよつとした騒動に巻き込まれる。
ファイル128 ～ 139 - スペシャル版・伝説の蝶彦。
ファイル140 - 謎の少女、イズナ初登場。
ファイル141 - コナンと哀、イズナと出会う。
緑の組織の刺客、女郎花初登場。
ファイル142 - コナン、越水七槻と再会。
ファイル143 - イズナに100兆円の賞金がかけられる。
コナンと哀、盗賊に襲われる。
ファイル144 ～ 146 - コナンと哀、新たな刺客のキュラソー・シャルトリューズと対峙する。
ファイル147 ～ 149 - ユリ、怪しい男達に誘拐される。
ユリ、事件がきっかけで元太に恋心を抱くようになる。
事件の裏に緑の組織の葛が関わっていた。
ファイル150 - 番外編・紅百合女学院潜入捜査の後日談。
ファイル151 ～ 152 - 美保とエル、緑の組織の刺客の薄・桔梗

の襲撃にあつ。

ファイル154：6500万年前の亡霊（ファントム・オブ・ダイナソー）『1

10年前・・・

中国

「やめなさい！！アンタ達の目は節穴か！？どうしていつもあの男の命令を聞くの！！早くスイッチを止めなさい！！」

「ダメです！もう爆発します！！」

カツ！！

ドゴオオオオ！！

「ああ・・・生命いのちの記録が砕け散る・・・これでまた、数十年研究が遅れる事になったわ・・・警察・・・国連・・・いや、誰でもいい・・・誰かあの男の破壊活動を・・・食い止めてくれる者はいないのか・・・！！！！」

『名探偵コナン・6500万年前の亡霊』
ファントム　ダイナソー

私は元黒の組織の科学者、宮野志保。

組織で薬の研究をしていた私は、姉が殺された事をきっかけに組織に反抗し、その結果ガス室に閉じ込められてしまったの。

どうせ殺されるのならば、私は隠し持っていた薬を自ら飲み、なんと体が縮んでしまったの！！

私が生きているとヤツらにバレたら、また命を狙われ、周りの人間にも被害が及ぶ・・・

阿笠博士に介抱された私は『灰原哀』と名乗り、転校生として帝丹小学校に転がり込んだ・・・

ではここで、今回の仲間達を紹介しましょう。

まずは最初の仲間であり、私の薬の最初の犠牲者、江戸川コナン君。今は私が想いを寄せている相手なの。

FBIの捜査官であり、仲間の中でも最強の剣野刃ちゃん。

剣術と雷を使わせたら、彼女の右に出る者はいない！！

少年探偵団のレギュラーメンバー、吉田歩美ちゃんと円谷光彦君と小嶋元太君。

彼らには、かなり助けてもらってるわ。

新メンバーの東尾マリアちゃんと、坂本たくま君。

2人とも短気だけど、とてもすごいよね。

元黒の組織の仲間で、実はクリスとは別人だった金田一ユリちゃん。母と姉の仇を討つべく、私達の仲間になってくれたの。

今は小嶋君に想いを寄せているわ。

7歳にして黒の組織の上位クラスの女の子、如月風月ちゃん。

彼女に関しては、いまだに疑惑が解けないでいるの。

そして今、私達に太古の時代から蘇った亡霊達が襲いかかろうとしている！！

小さくなっても頭脳は同じ！

迷宮無しの女名探偵！！

真実は、いつも1つ！！！！

ファイル1555:6500万年前の亡霊(ファントム・オブ・ダイナソー)『』

夏休み

元太

「おおー！！ティラノサウルス！トリケラトプス！プテラノドン！
行きたいよなー、『世界恐竜博』！」

ユリ

「今度北杯戸町でやるヤツね。ものすごい数の化石が展示されるそ
うよ。」

たくま

「始まつたらみんなで行かないか？どうせみんな夏休みはヒマだろ
？」

風月

「そつねー、北杯戸なら杯戸町から近いし・・・」

歩美

「行こ行こ！」

光彦

「あー！見てください、これー！！」

『入場料

大人 6000円

子供 3000円』

元太

「うわっ、高っけ〜!!」

コナン

「ほとんどぼったくりじゃねえか!」

哀

「子供が3000円なだけマシかもね・・・」

ユリ

「私、みんなの分なら出せるけど・・・」

歩美

「マジ!?!」

光彦

「待てよ・・・1人が3000円だから、ボク達10人分で3万円にもなりますよ!」

マリア

「小学1年生がそんな大金ポンと出したら、メッチャ怪しまれるんとちゃうか?」

刃

「確かに・・・」

ユリ

「ダメかぁ・・・」

元太

「そつだ、いい事考えた！」

米花町 裏山

元太

「あんな大金払って化石見るくらいなら、オレ達で掘ればいいんだよ！」

光彦

「そつか！ナイスアイデアですね。」

元太

「見つけたら教えてよ。」

ザッザッ・・・

コナン

「おいおい。」

哀

「化石なんて出てくるワケないじゃない。」

刃

「ユリちゃんまで一緒になって・・・」

「そつだよ、いくらやってもムダさ。今掘ってる場所は関東ロー

層といつて、1〜60万年前の新しい地層。恐竜が絶滅したのは6500万年前。もつと古い地層がむき出しになつてゐる所を掘らなくちゃ。それに関東ローム層は酸性だから、化石は残らないんだよ。地質図つていう地図が大きな本屋さんで売つてゐるから、それを参考に掘つた方がいいよ。」

光彦

「へ〜・・・」

歩美

「お兄さん詳しい。」

「まあね。」

哀

「ねえ、お兄さんの仕事つて、古生物学者かなにかでしょ。」

「どつして?」

哀

「化石の事に詳しいのもあるけど、日焼けした肌と腰にぶら下げたハンマー、そして極めつけは手のハンマーダコよ。いつもそのハンマーで昔の生き物の化石を探してゐるんですよ。」

「あ、ああ、まあね。」

歩美

「じゃあ恐竜の化石も探してるの?お話聞きたいな。」

「残念、今日は忙しいから、また今度会つたらね。とにかく化石を

掘るなら、他をあたっての方がいいよ。じゃあね！」

光彦

「もつと話を聞きたかったね。」

コナン

「あれ？元太君は？」

マリア

「あっこ……」

ガツガツ……

コナン

「おいおい、まだ化石掘ってたのかよ。」

元太

「るせー、あきらめられるか。関東ローム層があるっていつんなら、その下まで掘ればいいんだよ。」

哀

「バカ言わないでよ、何メートル彫る気なの。」

元太

「やればできるっていうだろ。」

ガチツ！

元太

「ん？なんだ何かあるぞ。」

ガツガツ・・・

元太

「あ、あった・・・見るよこれ！恐竜の化石だー！」

コナン

「んなワケないだろ。」

風月

「そうよ、化石がむき出しで埋まってるワケないじゃない。」

元太

「じゃあ、これはなんだって言うんだよ？」

風月

「うーん・・・」

コナン

「そうだ、これを世界恐竜博の人達に見せに行ってみよう。何かわかるかもしれない。」

哀

「うん！でもまだ開催されてないけど誰かいるかしら・・・」

元太

「あ、あった・・・見るよこれ！恐竜の化石だ！！」

コナン

「んなワケないだろ。」

風月

「そうよ、化石がむき出しで埋まってるワケないじゃない。」

元太

「じゃあ、これはなんだって言うんだよ？」

風月

「うーん・・・」

コナン

「そうだ、これを世界恐竜博の人達に見せに行ってみよう。何かわかるかもしれない。」

哀

「うん！でもまだ開催されてないけど誰がいるかしら・・・」

タタタ・・・

コナン
「！」

啓作

「何やってるんだ？大きな袋持って・・・」

コナン

「啓作さん！どうしてここに？」

紅子

「お父さんとアタシね、これから仕事で世界恐竜博の会場に行くのよ。」

哀

「え？世界恐竜博に？」

世界恐竜博

元太

「うわー、すげー！！」

マリア

「まさか、開催前に入れるとは思わなかったな！」

たくま

「しかもタダだよ。」

コナン

「へー、これって自動で動くんだけ。」

哀

「電磁石で動くりニアカーね。」

啓作

「おい、あまりはしゃぎすぎるなよ。ったく、勝手についてきやがって……」

紅子

「でも、見た事ないほどたくさん恐竜の化石がありますね。」

浦沢敏江うらざわとしえ『ゴウゾウグループ 秘書』

「もちろんですわ。この『ゴウゾウ世界恐竜博』は、化石の種類と数、共に世界一をほこる恐竜博ですよ。」

「ちがう！！世界一なのは種類と数だけじゃない。質もだ！！ガハハハッ！！」

ユリ

「ブラキオサウルス……あれも乗り物なのね。」

刃

「タイヤのようなものが見えるけど……」

元太

「なんだ、あの変なじーさんは。」

「コラ、そのガキ！言葉を慎め！！世界のメディア王、富山轟蔵氏を知らないのか！？」

富山轟蔵『ゴウゾウグループ総裁』

「フン、子供の言う事だ、大目に見てやれ。」

元太

「知らねーよ、なんだよメディア王って・・・」

風月

「たくさんテレビ局や新聞、雑誌社を持つてる人の事をそう言うのよ。」

啓作

「で、今日はどういったご依頼で？」

轟蔵

「君達に頼みたい事というのは他でもない。何者かが毎晩のようにこの会場を荒らしまくってるんじゃないよ。これまでも何個も化石を盗まれたり、化石を吊ってあったワイヤーを切断されたりと大変なんじゃない。このままでは一週間後に控えた開催日を無事に迎えられるか心配だ。ぜひ犯人捜しと警備をやってもらえんだろうか。」

哀

「ねえ、警察はなんて言ってるの？」

轟蔵

「いや、通報はまだしとらん。この手の話は、イメージダウンにつ

ながりかねないしな。そこで、刑事の中でも優秀だと評判の高い君達親子を呼んだという訳だ。」

啓作

「わかりました、やってみましょう。」

紅子

「で、この広い会場のどこら辺を重点的に警備すればいいんですか？」

轟蔵

「案内するから、ついてきなさい。」

ユリ

「ずいぶんと厳重に警備されてるのね。」

轟蔵

「ああ、これが世界恐竜博最大の目玉だからな。さあ、見なさい。これが世界一大きな恐竜！ゴウゾウサウルスの化石じゃよ！」

哀達の目の前には、見た事もないほど大きな恐竜の化石がそびえ立っていた。

刃

「お、大きい！！」

轟蔵

「賊はきつと、この化石を狙っているはず。姫川君、播磨君、なん

とか犯人を捕まえてくれんか？」

啓作

「わかりました。」

紅子

「全力を尽くします。」

ヒタツ・・・

「・・・」

ファイル157：6500万年前の亡霊（ファントム・オブ・ダイナソー）

9年前

北極

ゴオオオ・・・

ゴゴゴゴ・・・

「そろそろ限界か！？もうクレパスが閉じ始めている。いや！アイツならもつと行ってたはずだ・・・ん！うおおおお！！」

「この館に展示されているゴウゾウサウルスは、なんと全長48メートル、推定体重115トン！！ジュラ紀後期にいた全長ヤク35メートルのセイモサウルスよりも長く、白亜紀後期にいた推定体重50トンのアルゼンチノサウルスよりも重い！まさしく世界一のスケール！！それにご覧ください！この美しい漆黒の輝きを！保存状態も非常によく、まるで美術品のような美しさを持っています。」

紅子

「うわー、スゴイ化石なんですわね！」

啓作

「よし、犯人とは持久戦になるかもしれないが、今晚からここで張り込むか・・・」

哀

「ねえ、ひよっとしてこのゴウゾウサウルスって名前は、おじさんがつけた名前なの？」

轟蔵

「そうだ、世界最大の恐竜にワシの名前をつけるのが夢だったんだ。わざわざ自分の研究チームを作って、世界中発掘させたかいたわい。」

「とにかくこれで、総裁の名前は恐竜史にしっかりと残りますな。」

轟蔵

「フッフ、そうだな。だが、まだまだだ。もっともっとワシの名前を世界に知らしめてやるぞ。」

「では、次はどこを発掘しましょう。何か計画はありますか？」

轟蔵

「次の計画か・・・フッフ、さあてどうしようか・・・なあ、チーフ。」

八千草晶ちたけいへい『古生物研究チーム 主任』

「さあ。どうでしょうか・・・」

啓作

「おい、待ってくれ。なんで中に入れなんだ。警備ができないだろう!!」

「この建物は夜間立ち入り禁止です。館内には防犯センサーだけでなく、赤外線センサーや温度センサーも張り巡らされているので、人間が入ると作動してしまうんですよ。とにかく出口は1つしかありませんから、ここさえ見張ってれば大丈夫でしょう。」

光彦

「さて、ボク達はどうします?」

歩美

「ここで張り込むか、犯人を捜すか・・・」

元太

「うーん・・・」

たくま

「あ!」

マリア

「それ、まだ持ってたん?」

元太

「いっけね!」

コナン

「見たところ、レプリカって感じだけだな・・・」

哀

「誰かに渡しませよ。」

ウイイイン……

「ダメダメ、話なら後！　たく、犯人め。ブラキオサウルスの首を吊ってるワイヤーを切りやがって……」

「でも今までかなり首を持ち上げて展示してたけど、本当のブラキオサウルスはあるに首が上がらなかつたんだろ？」

「ああ、結果的に犯人が直したって事になるな。」

「盗まれた復元骨格もそうだ。本当はあれ、総裁がチーフに言っで作らせた偽物のレプリカだもんな。」

「しかし、総裁も総裁だ。恐竜に迫力を出させるためにいろいろ手を加えるから……」

コナン・哀

「……」

夜・・・

カッ！

フワッ！

タンタン！

タタッ・・・

「！いったいどういう事！？富山のヤツ冗談にもほどがある！今度はアロサウルスにツノをつけるなんて・・・」

哀

「ちがうよ！それは富山さんがやったんじゃない。」

ザッ！

「！！！」

コナン

「元太君が持ってたレプリカをくっつけただけさ。アンタをおびき出すためにね。」

哀

「今まで犯人はまちがった復元骨格にばかり反応してたから試して

みたけど、まさかここまでうまくいくとは思わなかったわ。」

「くっ!!」

ダッ!!

歩美・ユリ

「逃げてもムダよ!!」

元太・光彦・たくま

「オレ達少年探偵団の、」

刃・マリア・風月

「チームワークをナメるな!!」

ガッ!

ザザザザ!!

「わっ。」

元太

「よし、捕まえた・・・」

光彦

「あ! 昼間のお兄さん!!」

「痛っっ。」

歩美

「あ、そういえば裏山にあったこのレプリカ・・・」

ユリ

「あれはここから盗まれた物だったのね。」

「そうだよ、あれを盗んだのはボクだよ。さあ、警察でもどこでも突き出しな。」

コナン

「ちよつと待つてよ！まちがった復元を直したり、ボクらに化石の事を教えてくれたじゃない。お兄さんつて、本当は恐竜が好きなんでしょ？」

哀

「古生物学者つてのはウソじゃなさそうだし、そんな人がどうして恐竜博の邪魔なんかしてるの？」

「こんなの恐竜博じゃない。『怪獣博』だよ！迫力を出すためだけにとらされた、絶対にありえないポーズや、勝手に付け加えられた作り物のパーツばかり！まるで怪獣だ。ここの恐竜博の目玉、ゴウゾウサウルスだってそうなんだよ。磁鉄鉱でできたあの黒い頭部の化石は非常に価値のあるものだけど、体の部分は全部ウソ！！世界一の大きさにするために、いろいろと手が加えられてるんだ。だからボクは、ウソのレプリカを盗んで邪魔してたんだよ。」

哀

「（あれ？じゃあ盗まれたレプリカがこの物なら、どうしてあの博士・・・）」

晶

「ちょっと、光樹！もうこんな事は止めなさい。」

哀

「八千草博士！！」

晶

「光樹、あなたに話がある！あなたと連絡が取れる方法を教えて！」

「・・・冗談だろ、自分のやった事忘れたのか！？アンタとは口も聞きたくないね。」

晶

「ち、ちがうのよ、あれは・・・」

「チーフー。どこですかー！」

「どうしたんです？こんな所で。」

晶

「いや別に・・・」

「総裁が呼んでましたよ。」

晶

「わかった、すぐ行こう。」

光彦

「ふー、ビックリした。」

元太

「おいおい、なんでオレ達まで隠れるんだよ。隠れるのはこの会場荒らしだけで充分だろ。」

新庄光樹

「なんだよ、その呼び方。ボクにだってちゃんと名前はあるんだから。光樹だよ、新庄光樹！」

風月

「でも、あの博士が黙っててくれたおかげで助かったわね。」

歩美

「2人とも知り合いだったのね。」

光樹

「とんでもない！アイツはボクの母を裏切ったんだよ。自分の娘だというのに！」

ユリ

「え、母？娘！？」

刃

「・・・という事は、八千草博士はコウキさんのおばあさん！？」

哀

「ねえ、何があったの？よかつたら教えて。」

光樹

「もう死んで10年たつけど、ボクの母新庄光莉は、恐竜学者だっ

たの・・・ゴウゾウグループの研究員だったから世間では無名だったけど、世界中飛び回ってたくさんの化石を発掘してたんだ。ここに置いてある貴重な復元骨格は、ほとんど母が発掘した物だよ。ゴウゾウサウルスの頭部を発掘したのもそう・・・そうだね、君達と同じくらいの年だった。ボクも母のようなりっぱな古生物学者になるって決めたのは・・・でも、そんな楽しい思い出もあの事故で木っ端微塵に砕けちゃった・・・事故が起きてしまうような安全管理、ボク達遺族への説明不足・・・ゴウゾウグループにはほとほと頭にくる。だけど一番許せなかったのは、母の研究ノートを持って失踪した、八千草晶^{アイツ}だ！自分の目を疑ったよ、テレビで恐竜博の特集をやってるのを見てたら、名前を変えたアイツが映ってたんだもん。しかもゴウゾウに言われて、こんなウソのレプリカを作ってたなんて！..」

ガッ！！

歩美

「なんでそんな事をしたのかしら？」

光樹

「知らないよ、あんなヤツの考えてる事なんて！突然自分の研究分野とちがう古生物の研究を始めたたり、自分から失踪したクセにボクと連絡を取りたいなんて言い出したり。」

ピシ・・・

バキッ！！

元太

「お、おい見ろ！レプリカの中に本物の化石が入ってたぞ！！」

光樹

「ちょっと見せて。」

光彦

「どうでした？」

光樹

「これは化石なんかじゃない。骨だ！何かの生き物が焼かれて残った骨だ。ほ乳類ではないようだな・・・でもいつたい何の骨だろう。古生物を研究する上で、いろんな骨を見てきたけど、こんな骨、見た事ない！は虫類！？鳥！？どちらでもないように見える・・・いつたいこれって、何の骨だろう・・・！？」

歩美・元太・光彦

「ええ!？」

コナン・哀・刃・ユリ

「ボク（私）達がまるで知らない、」

たくま・マリア・風月

「動物の骨!？」

光樹

「ああ、詳しく調べないとわからないけど、見た事のない骨だ。さ
しずめ未確認生物（UMA）ってとこだね。だけどどこでこんな骨
手に入れたんだろう。なんかアレの化石にスゴくよく似てるけど・
」

385

哀

「え?アレって何?」

ババババ・・・

ババババ・・・

コナン

「あ!博士!!」

ババババ・・・

元太

「あーあ、行っちゃった・・・」

ユリ

「こんな夜中にどこ行ったのかしら。」

歩美

「他の人達に聞いてみない？」

光樹

「じゃあボクはどこかに身を隠してるね。」

哀

「あ、待って。これ持つといてよ。このバッジ、トランシーバーなの。何かわかったら連絡するわ。」

光樹

「ありがとう。へー、最近はこんなオモチャを売ってるんだね。」

「え？チーフ？」

「ああ、さっきチーフ専用の研究所に帰ったよ。」

「ずっと研究中の仕事があるんだってさ。」

哀

「ねえ、その研究所ってどこにあるの？」

「それがボクらにもわからないんだ。知っているのは総裁とチーフの2人だけ。」

たくま

「そっか・・・あの総裁のおっさんに聞かなきゃダメか。」

マリア

「そやけど聞いても教えてくれるやるか。」

啓作

「おい！オマエら！！まだ帰ってなかったのか！？いったい何時だと思ってるんだ！！」

コナン

「いや、その・・・」

啓作

「なんなら一緒に家に帰るか？犯人だってあの警備を前にして来るとは思えないし・・・」

カツ！！

ドオン！！！！

啓作

「た、大変だ！爆発したぞ！！」

「おそらく今のは爆弾でしょう！被害は壁だけで済みましたが、まだ次のがあるかも知れません。危険ですからしばらく近寄らない方

がいいでしょう。火事の方は、爆発の直後にスプリンクラーが作動したので、それほど心配はないと思われます。」

「くそー！まさか爆弾を使うとは・・・恐竜博を邪魔するためには、手段を選ばんというワケか・・・」

ブロロロ・・・

轟蔵

「どうしたー!?」

「会長！今、突然爆発があつて・・・」

轟蔵

「バッカモーン！！ワシのゴウゾウサウルスは無事か！？早く扉を開けんかー!!」

「は、はい・・・ただいま開けます。」

シャツ！

ピピッ！

ウィイイン・・・

「まだ室内に煙が残ってますから、気をつけてください。」

元太

「うわー、スプリンクラーの水でビショビショだ。」

歩美

「滝の中にいるみたい。」

コナン

「（でもいつたい誰が爆弾なんか仕掛けたんだ！？）」

哀

「（確か今までこの恐竜博を邪魔してたのは、コウキさんだけのハズだけど・・・）」

轟蔵

「フウ、だんだん霧が晴れてきた。どうやらワシのゴウゾウサウルスは無事のように・・・。！！うわあああ！！！」

ザアアア・・・

コナン

「頭の部分が、ない！！！」

目暮

「なるほど・・・で、爆発の後ここに来てみたら、学術上非常に貴重な頭部の化石だけが、なかったというワケか。」

啓作

「しかしいまだに信じられん。犯人はどうやってここに侵入し化石を盗み出したんだ。爆弾で我々の気をひいたところで、出入り口はあそこだけ。犯人の侵入は不可能なハズなんだが・・・。」

歩美

「ねえ、コウキさんに連絡取ってみる？」

コナン

「そうだね。」

哀

「たぶんこの騒ぎは知ってると思うけど、一応今の状況を伝えておこうか。」

「警部！容疑者が判明したそうです。」

目暮

「なんだって！！」

轟蔵

「防犯カメラがこの会場で起きていたイタズラ事件の犯人を写していたんです。」

敏江

「見てください。」

ブン・・・

目暮・啓作

「こ・・・これは！！」

敏江

「残念ながら今日の犯行をカメラで捕らえる事はできませんでした
が、」

轟蔵

「ホラ、今まで化石を盗んでいる姿がバッチリ映ってるだろ。」

目暮

「よし、この子を捜せ！おそらく今日の化石もこの子が盗んだん
だろうー！」

「はいー！」

目暮

「しかし正直ビックリだ・・・こんな男の子が爆弾を使って泥棒を
するとは・・・」

元太

「ちがうよ！ぜったいちがうー！」

歩美

「ほうひはんはばってはい！コウキさんはやってない・・・むが
っ。はにぶんほほ（なにすんのよ）。」

コナン

「ダメだよ、歩美ちゃん。」

コリ

「今、警部達にコウキさんの名前出しちゃまずいわ。そんな事した
らよけいコウキさんが捕まりやすくなるわよ。」

哀

「とにかくコウキさんに伝えなきゃ。」

光樹

「え〜！？ボクが犯人！？冗談じゃないよ！なんでボクが爆弾を使
って泥棒をしなきゃならないんだよ。だいいち、盗んだ化石も持っ
てないんだよ。でもどうしたらいいのかな！このままじゃボク、爆
弾強盗だよ。」

哀

「もう少し隠れて待ってて！きっとなんとかするから。」

光樹

「え？なんとかするって、どうする気なの！？警察は完全にボクの
事疑ってるんでしょ！？？」

哀

「なーに、任せて・・・」

コナン

「江戸川コナン！」

歩美

「吉田歩美！」

光彦

「円谷光彦！」

元太

「小嶋元太！」

マリア

「東尾マリア！」

たくま

「坂本たくま！」

刃

「剣野刃！」

ユリ

「金田ユリ！」

風月

「如月風月！」

哀

「そして、灰原哀！私達は少年探偵団！！きつと犯人を突き止めて、すぐにコウキさんを助けてみせるよ！！とにかく今は隠れててよ、恐竜の時代に生きてたほ乳類みたいだね。」

ブツツ。

光樹

「あ、ちょっと・・・わかったよ、隠れりゃいいんでしょ、隠れりゃ。メガゾストロドンもこんな気持ちでビクビクしてたのかな。でもボクったら相当精神的に追い詰められてるな・・・心のどこかで、

あの子達ならなんとかしてくれるなんて思っちゃってるんだから・・・」

元太

「なあ、灰原。」

風月

「コウキさんにはああ言ったものの、どうやって犯人を見つける気？」

哀

「まずは盗まれた頭の化石を探そう！あれだけの重さの物を持って、早々遠くには逃げられないはずよ。」

元太

「本当にそうかな？ここにある車みたいなの使ったら、遠くまで逃げれるんじゃないのかな・・・」

たくま

「それはないよ、だってそれリニアカーだもん・・・」

マリア

「ええか？リニアカーいうんはな、磁石の反発する力で動くんや。だから、地面の下に電磁石が埋められていないと走れないってちゅうワケ。」

元太

「そっかー。」

「おー、ちゃんと動いてるじゃないか。」

ユリ

「え？どういう事？」

「実はさっきの事件前後、リニアカーがどれも動かなかったんだ。てっきり故障か停電だと思ってね・・・」

歩美

「あれ？でもあの時リニアカー動いてなかった？」

風月

「ええ、ここの総裁が乗ってたヤツね。」

「いや、会長のは電気自動車さ。自分だけは好きな場所を走りたいたんだって。」

光彦

「ホントにワガママですねー。」

元太

「アイツらしいや。」

コナン

「・・・（しかし犯人はあの大きな化石を、どうやって持ち出したんだ！？）」

哀

「（あの完全な密室から、どうやって・・・）」

『オビラプトル。』

意味は『卵泥棒』。

オビ〓卵

ラプトル〓泥棒

この恐竜の化石が発見された場所は、恐竜の巣の化石の中でした。巣の周りにプロトケラトプスの化石がたくさんあったため、プロトケラトプスの卵を盗んで食べようとしたのではないかと考えられ、『卵泥棒』と名付けられました。

ところが最近オビラプトルが卵を抱いている姿の化石が発見され、最初に発見されたオビラプトルもその巣の親である可能性が高まったのです。

『卵泥棒』という不本意な名前と呼ばれるこの恐竜。

本人が聞いたなら、「早く改名してくれ」と私達に訴えてくるかも知れません。」

歩美

「なんか、今のコウキさんみたいだね。」

光彦

「ええ、忍び込んで復元骨格を直してただけで、爆破強盗の容疑者だもんね。」

シャアアア・・・

コナン・哀

「恐竜の生態調査も推理も想像力をたくましくしなければ解答に到達できないものだけど・・・」

刃・ユリ・風月

「それが時には、真逆の答えに行き着く事だってあり得るのよ。」

たくま

「あ、コナン君。灰原さん。刃ちゃん、ユリちゃん、風月ちゃん。」

マリア

「どやった、そっちは。」

刃

「ダメだわ、なんにも見つからない。」

ユリ

「仕方ない、もう一度探し直してみましようか。誰も入れないはずのこの特別館から、ゴウゾウサウルスの頭が盗まれたワケだけど・
」

元太

「やっぱりここにはなんの手がかりも残ってないのかなー……」

風月

「あら？ねえ見て。あの池……1ヶ所だけ水位がやけに低くない？」

マリア

「ホンマや。スプリングラーの水がここにだけあんま入らんかったって事か？」

コナン

「そんな事があり得るのかな？」

目暮

「それより姫川君、富山氏の事だが・・・彼には充分注意した方がいいぞ。」

コナン・哀

「え？それどういう事？」

目暮

「ああ、コナン君達もいたのか。実はな、彼の周囲では国の内外を問わず、常に金のトラブルや不審な事故・事件が多発してるんだ。今日盗まれた化石にも、世界中の保険会社に総額500億円もの保険をかけてあったそうだしな。」

啓作

「じゃあ、ひょっとしてこの事件は、保険金目当ての犯行という事も・・・」

目暮

「しかし、恐竜博の目玉をわざわざなくすなんて事はするかなあ・・・」

哀

「あら？あれってゴウゾウサウルスの化石じゃ・・・」

刃

「いや、あれはレプリカよ。おそらく恐竜博を予定通り行うつもりなのね。」

ユリ

「はー、強気な人ね・・・」

「さて、この頭部と体、どうやってくっつけよう。総裁ー、この接着剤でいいですか？」

轟蔵

「接着剤なんかいらん！ネジでしめとけ！..」

「よかった、ネジでいいんだって。」

「この接着剤、普通のとちがって本当に使いづらいんだもんな。」

コナン

「ねえ、その接着剤、普通の接着剤とどうちがうの？」

「ああ、ゴウゾウグループ特製の化石復元用の接着剤だよ。強くキレイにくっつくんだけど、乾くのがすごく遅くて本当に使いづらいんだ。」

「前にこの接着剤をしっけいして風呂場の割れたタイルを直した時、あんまりくっつかなかったし。」

「あ、オレもカサがちっとも修理できなかつたよ。」

「総裁はこれを魔法の接着剤って呼んでるけど、やっぱり接着剤は通常の物にかぎるよなあ・・・」

「しかしなんで総裁は頭部にだけこの接着剤を使ったんだろう？」

コナン

「（割れたタイル・・・カサ・・・）」

刃

「そういえば、ここで見た化石には黒の他に白、茶色と色が付いてたけど、どうして元々骨だった化石に色が付くの？」

「それは骨が化石化される時の地中に含まれる鉱物の成分によるんだよ。黒はマンガン、白はカルシウム、茶は赤鉄鉱が多く含まれた土地から発掘された化石なんだ。ゴウゾウサウルスの化石の主な成分は磁鉄鉱。だからあんなに黒い色をしていたんだよ。」

コナン

「そうか・・・埋まっていた地面によって色が変わるのか・・・ハッ！！」

哀

「待って！じゃあ、ひよつとしてあの時、あの人がいた場所は！！」

ダッ！！

歩美

「あ、」

光彦

「コナン君！灰原さん！」

中央制御センター

「ああ、あの人ならここに来てたみたいだよ。本当に困るんだよねー。オレ達がない間に、ここにある機械をいろいろいじってみたいなんだ。つたく、ちゃんとこの操作パネルの使い方教えたのにメチャクチャな使い方しちゃって！つたく電力を最大限にして、壊れたらどうするんだ。なんか他にも勝手にスイッチいじってたみたいだし、ホント勘弁して欲しいよな！」

コナン

「あれ？このスイッチは……」

『切』

『入』 - - 『排』

『丁館 - 1』

哀

「なるほど、やっぱりそうか！だからあの人は爆弾を使ったんだわ！」

光彦

「あ、また……！」

タタタタ……

元太

「今度はどこ行くんだよ！」

コナン

「盗まれた化石を取り戻しにさ！」

歩美

「え？じゃあ・・・」

哀

「わかったのよ！この事件の真犯人がね。」

コナン

「そうだ、コウキさんに教えてあげないと！これであの人の無実の罪もはれる！」

「・・・」

哀

「あれっ？出ない・・・」

「はい！どうしたの？」

哀

「あ、コウキさん聞いてよ、犯人がわかったの！」

「え？どういう事？もっと詳しく教えてくれない？」

哀

「？あれ？コウキさんさっきと少し声がちがってない？」

「気のせいだよ。それよりも君達どこまで知ってるか教えてくれない？でないといくら子供だからって、」

コッ・・・

敏江

「お姉さん、手加減はしないわよ。」

コナン・哀・刃・ユリ・風月・歩美・元太・光彦・たくま・マリア
「！！！！」

キキツ・・・

轟蔵

「あの小僧同様、モニターで監視していたが、まさかここまでかぎつけるとは・・・いったい何者なんだ、オマエらは!？」

元太

「オレ達は、少年探偵団。」

光彦・歩美

「盗まれた化石を盗んだ犯人を捕まえ、」

たくま・マリア

「そしてコウキさんを助けるために、」

刃

「事件の真相を調べに来たのよ!!」

コナン

「アンタがこの事件の黒幕だって事はわかってるんだぜ！」

ユリ

「富山轟蔵さん！！」

風月

「それより、どうしてそのバッジを！？」

哀

「コウキさんはどこにいるの！？」

轟蔵

「ワハハハ！まあ、近くに警察の連中の連中もウヨウヨしてるし、
ここでの長話もなんだ。話しの続きは、場所を変えてする事にしよう。」

ウイイイン・・・

バフツ！！

刃・ユリ・風月・歩美・元太・光彦・たくま・マリア
「わっ！！！」

コナン

「（しまった！）」

哀

「（麻酔ガス！！）」

歩美・元太・光彦・たくま

「うつ……」

バタツ!!

刃・ユリ・風月・マリア

「うつ……」

バタツ!!

コナン

「歩美ちゃん、元太君、光彦君、たくま君!!」

哀

「マリアちゃん、刃ちゃん、ユリちゃん、風月ちゃん!!」

コナン

「(まずい、うつかり吸っちゃった……)」

哀

「(か、体が……動かない……)」

ドサツ……

轟蔵

「浦沢、ヘリの用意だ!これから研究所へ向かう!!」

敏江

「はい、総裁!」

轟蔵

光樹

「大丈夫？しつかりして・・・」

コナン

「あ・・・」

光樹

「よかった、目が覚めた！」

コナン

「コウキさん・・・みんなは？」

哀

「全員無事よ。」

風月

「少し頭がボンヤリするけどね・・・」

カツ！！

轟蔵

「おはよう、諸君。気分はどうだね？」

コナン

「富山！！」

刃

「あ！八千草博士！！」

哀

「って事は、ここは・・・」

轟蔵

「さよう！ここは、ワシの秘密の研究所だ。言うておくが、誰かに助けを求めてもムダだぞ。ここは、地図にも載っていない南の孤島。誰も来る事のできない場所だ。しかしオマエ、なぜワシが犯人だとわかった？姫川啓作や播磨紅子も、気づいていない様子だったが・・・」

コナン

「ずっと疑問だったんだ。なぜ犯人が化石を盗む際、静かに盗まず爆弾なんかを使ったのかを・・・」

哀

「だけど、わかったよ。爆弾を使ったのは、他でもない。スプリングラーから水を出させるためだったのよ。」

コナン

「これはさっき元太君がスタッフに見せてもらった、ゴウゾウグーループ特別の接着剤でつけられた金具。この接着剤の何が特別かというと・・・」

ポイツ！

ポチャン！

パカッ！

元太

「は、外れた!!!」

哀

「そう、これは水につけるとはがれ落ちる、水溶性の接着剤だったのよ。この接着剤で組み立てられた頭部の化石は、スプリングラーの水によって胴体から外れたってワケ。」

コナン

「だからあの接着剤は、タイルやカサの修理には使えなかったのさ。両方とも水に濡れる物だからね。」

轟蔵

「なるほど、あの接着剤の正体を見破ったか……だが、落としただけでは盗んだ事にはならん。ワシは一切、あの館には近づいておらんぞ。」

コナン

「聞いたよ、事件の時中央制御室にいたんでしょ？だけどアンタはその場所から見えない力を使って、まんまとあの巨大な化石を盗み出したのさ!!!」

哀

「磁鉄鉱は、砂に混じっている砂鉄と同じ石。見えない力って言うのは、磁力！つまり、磁鉄鉱でできたあの化石は、磁石で引っ張られて動いたのよ。」

コナン

「あの館内で強力な磁力を発生させる物と言えば、ただ1つ……」

リニアカーを誘導する床の電磁石を使って、ゴウゾウサウルスの頭部を盗み出したのさ。」

哀

「その後、池の中に化石を落とし、排水口から化石を流したのよ。リニアカーの操作パネルの他に富山さんがいじったスイッチは、排水口のスイッチだったのよ。排水し終わった後、スプリンクラーの水がたまっただけど、他の池とは水の量がちがうから、バレバレってワケ！」

コナン

「それに、頭の骨って1つではできてないんだ。そうだね、コウキさん！」

光樹

「うん、人間もそうだけど、頭骨ってたくさんパーツでできているんだよ。化石になるともっと大変！分離してたり、足りなかったり、まともな状態で発掘されるのはほとんどまれで、ジグソーパズルを作るようなものだよ。」

コナン

「もちろんあのゴウゾウサウルスの頭部も、多くのパーツを接着剤で1つにまとめた物！その接着剤に、さっきの特別な接着剤が使われていたとしたら・・・スプリンクラーの水や池の水でバラバラになり、あの排水口を通るには十分なサイズになっていたはずだよ！」

哀

「だからあの化石は、まだ排水口か下水管の中に隠されているんじゃないっしょ？」

轟蔵

「くっ！恐れ入ったよ、子供2人ながら見事な推理だ・・・」

哀

「だからあの化石は、まだ排水口か下水管の中に隠されているんですよ？」

轟蔵

「くっ！恐れ入ったよ、子供2人ながら見事な推理だ・・・夜な夜なワシの恐竜博を荒らす小僧がいるんで、アイツらを使って保険金をせしめてやろうと思ったんだ。」

コナン

「でも、なんでそんな事を！ゴウゾウサウルスは恐竜博の目玉ですよ。」

哀

「いくら保険金が入るからって、メディア王のあなたならお金にも困っていないはず・・・」

轟蔵

「それが必要なんだよ。今やってる計画には、莫大な金がかかってるんだ。」

晶

「ちょっと待ってください、総裁。あの化石を盗んだですって！？いったいどういふつもりです。計画の最終段階まで、まだまだほど遠いんですよ。オマケに、こんな子供まで誘拐してきて、いったいどういふつもりです？今からでも遅くありません、この子供は帰してあげましょう。頭がキレるとはいえ所詮は子供、証拠がなければ

誰もこの子達の言う事など信じませんよ。」

轟蔵

「フン！その手にのつてたまるか！ウソにウソを重ねおつて・・・
本当は、自分のカワイイ孫を救いたただけなんだろう！？八千草チ
ーフ、いや新庄博士！！フン！オマエが事故で死んだ娘の無念を晴
らすためにここに潜り込んだ事ぐらい、最初から知っておったわい。」

「

光樹

「え？どういう事？富山の手先になって働いているんじゃないか
の？」

晶

「ええ・・・10年前、光莉が私の研究所に手帳を送ってきたのよ。
光莉が全力で調べあげた世界中の化石の発掘ポイントや、化石から
わかった知られざる恐竜の歴史など、当時、素人の私が見ただけで
も、スゴイとわかるような事がびっしりと書き込まれていた。そし
てこの手帳の最後のページにこう書かれていたのよ。『お母さん、
今アタシは中国で新種の恐竜の化石を発掘している最中です。この
化石は恐竜の進化の歴史を解明する上でとても貴重な化石になるで
しょう。ですが今、非常に困った事態に陥っています。先日の調査
でこの発掘現場の地下に巨大な恐竜の化石がある事が判明してしま
い、富山総裁が小さな恐竜などかまわず爆破しろと言うのです。な
んとか彼を説得しようと思いますが、アタシの身に何かあった時の
ために、この手帳を託します・・・』とね。光莉は結局、この爆発
に巻き込まれて死んだ・・・これを読んで私は光莉の意志を継ぐ事
に決めただ。ゴウゾウグループに潜り込み、資金や設備を使い光
莉の研究を完成させるためにな！」

歩美

「じゃあ、八千草博士は最初からコウキさんの味方だったんだ……」

マリア

「それより、ひどいやつやな！なんで強引に爆破なんかしたんや！

！」

轟蔵

「人聞きの悪い事言うな。強引なのはアイツの方だろ？まったく信じられんよ、あんなつまらん化石を守るために危険な場所に飛び込むなんて……なにが恐竜の進化の歴史だ！そんなもの知るか！！ワシが興味あるのはでかい恐竜かっこいい恐竜！そして金になる恐竜だけだ！！しかし八千草博士、オマエには感謝しとるよ。オマエがいなければこの計画は実現できなかったしな。」

哀

「ねえ、ひよっとしてその計画って……このツメに関係ある事？」

轟蔵

「！！おい小娘！どこでそれを！！そうか、キサマの仕業だな……」

」

コナン

「ねえ八千草博士、なんでこんな物を復元骨格の中に仕込んだの？」

晶

「コウキに対するメッセージだよ。監視カメラに写っているコウキを見て、このままではまずいと思ったんだ。コウキはコウキで母の意志を継ぐため、あんな事をしたのだろうが、あれでは富山に逆に

利用されかねない。しかし私の言う事など聞く耳持たないでしょう。それで思いついたのが、コウキに盗まれそうな復元骨格の中に、あの骨を仕込む事だった。もしコウキがその骨の持つ意味に気がつけば、この恐竜博のチーフである私の所に来ると思っただ。結果的にはうまくいかなかったけどね。」

光樹

「でもこのツメは何のツメなの？ほ乳類でも普通のは虫類でもないなんて・・・」

晶

「それは今やってる研究の過程で出た、ある個体の骨なのよ・・・」

コナン

「ねえ、コウキさん。八千草博士って、もともとは古生物学の研究者じゃなかったんでしょ。」

哀

「ひょっとして、八千草博士が昔やってた研究って・・・」

轟蔵

「遺伝子工学だよ。それもかなりの権威だそうだ。」

哀

「や、やっぱり・・・じゃあまさか・・・その研究って・・・」

轟蔵

「仕方ない、オマエ達にも見せてやるか・・・しかし、まだ最終段階が終わってはおらん。最終段階が終わるまで・・・オマエ達11人にはワシの地獄の恐竜ツアーに参加してもらおう事にしよう。」

ピッ!

ガコン!

コナン

「お、落とし穴!？」

コナン・哀・刃・ユリ・風月・歩美・元太・光彦・たくま・マリア・
光樹

「う・・・うわあああゝっ!!！」

ヒュウウウウウウ…

ドサッ！

コナン

「ってー…」

哀

「イタタ…」

光樹

「痛っ…」

コナン

「哀、コウキさん、大丈夫？」

哀

「な、なんとかね…」

光樹

「それにしても、みんなはいつたいたいどこに…」？

轟蔵

「他のヤツらは、皆別々の場所に飛ばしたよ。」

コナン

「何!？」

哀

「あれ、立体映像だわ！」

轟蔵

「これからオマエ達には、ワシが生み出した恐竜達と戦ってもらおう。
・見事退けてワシの所に来れば、ワシのとおっておきをご覧に入れよう……」

ブウウウ……ン……

ガサガサ……

コナン

「なんだ？」

ガサツ……

ディロフォ『キュウウン……』

哀

「あれ、ディロフォサウルスだわ！実物を見るの初めて！カワイー！こつちにおいで！」

ディロフォ『……』

グルル……

光樹

「いけない！逃げろ！！」

哀

「え？」

ガバア！

ブシュツ！！

コナン

「危ないっ、哀っ！！」

バツ！

ザザザア・・・

コナン

「哀、大丈夫か？」

哀

「う、うん・・・ありがとう・・・」

バジュ！

ジュウウウ・・・

哀

「い、石が溶けてる・・・」

光樹

「そう・・・ヤツの通称は『猛毒のハンター』！！！！1・5メートル

は飛ぶ猛毒を獲物に吐きかけ、動けなくなったところを襲うアロサウルス科の恐竜だよ！！しかも、あの襟巻きが小刻みに揺れている時は、相手を威嚇している証拠だ……」

哀

「そうなんだ……これからどうする？」

コナン

「とりあえず、アイツを倒すしかない……」

カチカチ……

パリパリ……

プクウ！

コナン

「行っけー！！」

ドン！！

デフロフォォゴアア！！！！」

ブシュツ！！

バジュー！！

コナン

「サ、サッカーボールを溶かしやがった……」

光樹

「直接ぶつける物は、全部あの毒で溶かされる・・・」

コナン

「なら、これだ！ディメンション：RING、フラッシュボール！」

ブン！

ディロフォ『！』

ブシュツ！

バジュ！

カツ！！

ディロフォ『！？』

シュウウウ・・・

ディロフォ『！！』

キョロキョロ・・・

コナン

「フウ・・・ひとまずここに隠れて、対策を・・・」

光樹

「イヤ、ムダだ・・・」

哀

「え？」

ディロフォ『……』

ピンピン……

ピイイ！！

ディロフォ『ゴアア！！』

ブシュツ！！

コナン・哀

「えっ！？」

バツ！

ザザザア……

バジュ……

コナン

「な、なんで……」

哀

「どうして居場所がバレたの……？」

光樹

「ヤツは獲物を見失った時、頭のトサカをレーダーのように使い、獲物が隠れている場所を捜し当てる・・・これは、トサカを持つオスだけの特殊能力だ・・・」

コナン

「つまり、隠れてても見つけれちまうってワケか・・・」

哀

「そ、そんな・・・こんなヤツ相手に、どうやって勝てばいいって言うの!?!」

光彦

「まいりましたねー、完全にコナン君達とはぐれちゃいましたよ。」

歩美

「哀ちゃん達、大丈夫かな？」

元太

「大丈夫だよ、みんなどっかで生きてるって！な、ユリちゃん！」

ユリ

「え！？あ、あ、う、うん・・・それよりも・・・いつ刺客が襲ってくるかわからないわ。ここは警戒してた方がいいわよ。」

元太

「そうだな。」

ガサガサ・・・

元太

「何かいるぞー!!」

ガサツ！

ラプトル『キュー・・・』

光彦

「ヴェロキラプトルですね！」

歩美

「カ、カワイー!!!」

光彦

「近づいちゃダメですよ、歩美ちゃん。」

歩美

「え?」

光彦

「ヴェロキラプトルは、映画『ジュラシックパーク』にもあったように、知能が高く集団で狩りをする恐竜なんです。ですが、そういう化石はまだ発見されていません。ホラ、仲間が4体いるでしょう?」

元太

「ホントだな。でも幸い、オレ達も4人だ。4人で戦えばなんとか・・・」

ガサガサ・・・

ガサツ・・・

歩美

「また何か出てきた・・・」

光彦

「ト、トロオドンです!」

ユリ

「こりゃ、相手が悪いわ・・・いったん走るわよ!!」

ダッ!!

ラプトル・トロオドン『!!』

スッ・・・

ラプトル『（ガキ共、逃げたな・・・）』

トロオドン『（追うぞ、ラプトル!!）』

ラプトル『（おう!!）』

ダダダダ・・・

元太

「なあ、光彦、ユリちゃん!なんで逃げるんだよ!!」

歩美

「どうせやられるなら、戦いたかったのに・・・」

光彦

「2人ともバカですね。ヴェロキラプトルもトロオドンも、とても頭がいい恐竜なんですよ!!」

ユリ

「そうよ。その抜群のチームワークとズバ抜けた知能の高さに、当時の恐竜学会では、『もしこの恐竜が絶滅せず現代まで生き残っていたとしたら、『ディノサウロイド恐竜人間(Dinosauroid)』に進化していたであろう』と言われているほどよ!!!」

元太

「なるほど、だから一度逃げて、対策を立て直そうと・・・」

ズルツ!

歩美

「キヤア!!」

ザツ!!

ユリ

「歩美ちゃん!大丈夫?」

歩美

「うん・・・」

ザザザザザザ!

元太

「!!! 囲まれた!!!」

ラプトル『ムダな抵抗は止めな・・・』

トロオドン『あきらめた方が身のためだぜ?』

光彦

「しゃ、しゃべってます……」

歩美

「この恐竜達、人間と同じようにしゃべれるって事……?」

光彦

「そうみたいですネ……」

元太

「スツゲー……」

ユリ

「3人とも、感心してる場合じゃないでしょ!?!このままじゃ、私達……コイツらのはんになっちゃっわよ!?!」

タタタタタ・・・

『キイイイ！！』

たくま

「コイツら、いったい何なんだ!？」

風月

「コイツらは、コンプソグナトウス（Compsognathus）よ!」

マリア

「ジュラシックパークに出とった、コンプーっていうヤツやな？小説の中では、草食恐竜の掃除屋やっていうてたのに・・・」

429

刃

「小説と事実はたまにちがう事もあるわ!とりあえずあの速い足を止めましょうか・・・」

パリパリ・・・

バシユ!!

キンキン!!

刃

「ダメ、止まらない!!!」

風月

「足が速すぎるのよ!~!」

たくま

「くそ! いったいどうすれば・・・」

マリア

「! そうや・・・ピュッ!~!」

バサバサバサツ・・・

たくま

「な、なんだ!？」

風月

「始祖鳥だわ! この孤島ではこんなヤツまで蘇らせていたのね・・・」

「

刃

「ひとまず、これに乗りましょ!~!」

ヒョイ!

バササツ・・・

バサバサ・・・

マリア

「とりあえず、逃げ切れたな！」

たくま

「ああ！さすがに空まで追ってくる恐竜はいないだろ！」

風月

「そ、そうでもないみたいよ……」

たくま・マリア

「へっ……？」

『ギガアアア！！』

『プシイイイ！！』

マリア

「メガネウラとパレオディクティオプテラや！！」

たくま

「初めて空を飛んだ動物であるパレオディクティオプテラと、トンボの祖先といわれるメガネウラ……オレ達、ヤバいんじゃないか……？」

マリア

「そやね……大きいヤツでは、羽を広げると70センチメートルに達するのもいて、まちがいになく史上最大の昆虫や……まずいな……」

メガネウラ『ギガアアア……』

ティオプテラ『プシイイイ・・・』

ギャン!!

風月

「急に速度を速めた!?!」

たくま

「まずい!!コイツら、オレ達を始祖鳥の上からはたき落とす気だ!!」

マリア

「もう間に合わへん!!」

ドガッ!!

たくま・マリア・風月・刃

「うわぁっ!!!!」

ヒュッ!!

トサッ!!

マリア

「アタタタタ・・・たくまぁ、大丈夫か?」

たくま

「なんとかな・・・着地したところが茂みでよかつたぜ・・・」

マリア

「そういえば、風月ちゃんと刃ちゃんは？」

風月

「私はここよ！ちょうど近くを通りかかったムカデさんに乗せてもらったの！」

『ギイイ！！』

風月

「え？なんで怒るの？」

たくま

「当たり前だよ！それはただのムカデじゃなくて、最大級のムカデ・アースロプレウラだもん・・・」

マリア

「草食性で温厚な、現代のムカデにはつながってない種類やな・・・」

┌

刃

「アタシは上よー！」

たくま

「なーんだ、木の上にいたのか・・・ん？」

マリア

「や、刃ちゃん！！！」

風月

「後ろ、後ろ!!」

刃

「へっ？」

ガシッ!

刃

「キヤッ!!」

バサバサッ・・・

たくま

「まずい!!」

マリア

「アイツは最強の翼竜・・・プレテリノドゥンガ!!」

ディロフォ『ガアア!!』

バシユ!!

バシユ!!

ジュウウウ・・・

コナン

「くっ・・・まずいな・・・」

哀

「このままじゃ、私達負けるわね・・・」

光樹

「どっしたらいいんだ・・・」

ディロフォ『グルル・・・』

コナン

「!今、名案が浮かんだぞ!!」

ボソボソ・・・

ダダダダ・・・

ディロフォ『ゴアア!!』

バシユ！！

サツ！

コナン

「だああ・・・」

ドンツ！！

バシユ！！

ジュウウウ・・・

バァン！！

ゴツ！！

ディロフォ『ゴア・・・？』

ズズン！！

コナン

「前方から来るものは溶かせても、突然真上から降ってくるものは、さすがのディロフォサウルスも対応できないだろう・・・」

哀

「ディロフォサウルスって、知能はあまり高くなかったらしいしね・・・」

光樹

「それにしても、他の子達は大丈夫かなあ……」

歩美

「どつするの、ユリちゃん？」

元太

「このままじゃ、オレ達本当に食われちゃうぞ……」

光彦

「ユリちゃん？」

ユリ

「大丈夫……ちゃんと考えてるから……」

ダツ!!

歩美

「……って、森の中に逃げた!!」

光彦

「なんでですかー!？」

元太

「いや、ちゃんと考えてるんだ、ユリちゃんは……」

ユリ

「おーい、ラプトルとトロオドンのバーカ!!」

ラプトル・トロオドン』なっ……』

ユリ

「ここまでおいで……！」

ラプトル『ナメやがって……』

トロオドン』たたき落としてやる……』

ドン……！

ドン……！

ユリ

「わわわっ……」

ラプトル『もう少しだ……』

ユリ

「ニヤリ……」

ラプトル・トロオドン』へっ……？』

ユリ

「ハアッ……！」

ドン……！

ラプトル『何！？』

トロオドン『急に速度が・・・』

ユリ

「ネイチャー：RING、スタンガンガトリンガー!!」

ガガガガガガ!!

ラプトル・トロオドン『ぐああああああ!!』

ズウウ・・・ン・・・

スタツ!

元太

「ユリちゃん、ナイス!!」

ユリ

「あ、ありがと元太君・・・」

カアアアア・・・

たくま

「大変だ、刃ちゃんが!!」

マリア

「大丈夫や・・・刃ちゃんやったら・・・」

プテラ『キイー……』

ハアハアハア……

刃

「そろそろ疲れてきたでしょう？実際にプテラノドンが子供をつかみ連れ去るのは、かなりムリがあるからね……制御装置リミッター、解除！」

バリバリバリ……

プテラ『グギヤアアア！！』

パツ！

刃

「あつ……キャアアアア！！」

ヒュウウウウ……

ガシツ！

風月

「フウ……危ない危ない……」

コナン達は、仲間達と合流した。

轟蔵

「フッフ・・・まさか本当にアイツらを倒すとは・・・だが、もう遅い・・・まだアイツらがいる・・・浦沢、ゲートを開ける!!」

敏江

「はい。」

カタカタ・・・

ピッ!

ゴゴゴゴゴゴ・・・

歩美

「ウ、ウソでしょ・・・」

光樹

「でもまちがいないよ。アイツらはまさしく、竜盤目獣脚類・・・肉食性のスピノサウルス(Spinosaurus)・・・南半球の王者ギガノトサウルス(Giganotosaurus)・・・そして、暴君竜のティラノサウルス!!!!」

風月

「コイツら、全部クローンってワケ?」

刃

「そうみたいね・・・でも、危険な事には変わらないわ・・・」

ユリ

「さつさと逃げた方がよさそうね・・・」

コナン

「ハアッ!」

ドンッ!!

バコッ!

轟蔵

「ハハハ、ムリムリ・・・このガラスは対3大暴君竜用に作られた硬質ガラス!バズーカで撃つても割れんわい。なあ博士、ワシから1つ提案がある。今までの事を水に流してやる代わりに、死ぬまでワシに服従してもっと恐竜を生み出せ!」

晶

「バカな、そんな約束ができるか!」

轟蔵

「別に断るなら断るでかまわん。その代わり断った場合・・・あの3体の拘束器具を外して、オマエの孫や子供達がアイツらのエサになるだけだかな・・・さあ、早く答える。イエスか、ノーか!」

グイグイ・・・

テイラノ・スピノ・ギガノト『!!!』

ドン!

ミシミシッ・・・

ギギギ・・・

メキメキ・・・

ズン！！

コナン・哀・刃・ユリ・風月・歩美・元太・光彦・たくま・マリア・
光樹

「うわあああ！拘束具を引きちぎったー！！？」

轟蔵

「え？なんだって！？」

ドオン！！

ティラノ・スピノ・ギガノト『ゴアアアア！！！！』

ドゴオ！！

轟蔵

「ヒイヒイ！硬質ガラスがく！！！！」

ティラノ・スピノ・ギガノト『ガアアアア！！！！』

ガゴツ！！

轟蔵

「た、助けてくれー！！！！」

ノトがどんな恐竜か知ってるの！？アイツらは地球の歴史上、最強
クラスの肉食動物なんだよ！！！！」

哀

「だったら、よけい助けなきゃ！！」

ギユワアアア・・・

哀

「ふせて！！」

光樹

「え？」

グワア！！

光樹

「うわあああ！！」

哀

「これが最短距離なのよ！！」

ゴオオオオ・・・

哀

「さあ、飛び乗って！！」

バツ！

バキッ！！

光樹

「どこにけってるんだよ！逆方向じゃないか！！」

ゴオオオオ・・・

バキヤツ！！

メキメキメキ・・・

ズン！

哀

「これでいいのよ、あれだけ大きな動物がスピードに乗ったら、そうそう急には止まらない。だから足下に簡単な罠を仕掛けるだけで・・・」

ギャギャギャ！

ガッ！

ティラノ・スピノ・ギガノト『！！！！』

バツ！

哀

「吹っ飛んでくれるのよ！さあ、海に落っこちなさい！！」

ティラノ・スピノ・ギガノト『ゴアアアア・・・』

ブワッ！

哀

「しまった！！シッポがこっちに！！！」

ズガッ！

哀・光樹

「うわあああ！」

ドドオン！！

テイラノ・スピノ・ギガノト『ゴアアアア・・・』

コナン・刃・ユリ・風月・歩美・元太・光彦・たくま・マリア
「哀ちゃん！！コウキさん！！！」

ファイル167：6500万年前の亡霊（ファントム・オブ・ダイナソー）『1

哀・光樹

「うわあああ！」

ドドオン！！

ティラノ・スピノ・ギガノト『ゴアアアア・・・』

コナン・刃・ユリ・風月・歩美・元太・光彦・たくま・マリア

「哀ちゃん！！コウキさん！！！」

ブクブクブク・・・

コナン

「哀！」

ユリ

「コウキさん！！！」

晶

「コウキ！！！」

光樹

「ここだよ、ここ！フー・・・間髪セーフだよ。お母さんが助け
てくれたみたい。」

コナン

「これだけの事件が明るみになったら、」

哀

「いくらメディア王でも、どうしようもないね。」

刃

「ねえ、2人はこれからどうするの？」

晶

「とりあえず私は旅に出るよ。この光莉の手帳と一緒に、世界の化石を探す旅にね。そこそこ頼りになる助手も見つかったし。」

光樹

「何言ってるんだよ。古生物学者としては、ボクの方が先輩だよ。おばあちゃん！いつか君達を、本物の恐竜公園で遊ばせてあげるからねー。」

コナン・哀・刃・ユリ・風月・歩美・元太・光彦・たくま・マリア

「やったー！！！！」

たくま

「だけど、なるべく安全なヤツにしてくれる？」

光樹

「当然だよー！！」

ファンファンファンファン・・・

スツ・・・

カツ！

ドゴォー！！

メラメラメラ・・・

「ヘッヘッヘッ、富山と浦沢もバカなヤツだ・・・ちゃんと指示通りやってくれば、命は助けてやったのによ・・・」

「『?????』、あまり目立つ行動はすると言われてただろう?」

「わかってるよ、『?????』・・・」

「さあ、そろそろ帰ろう・・・リーダーが城でお待ちだ・・・」

シューウウウ・・・

翌日・・・

コナン達は、阿笠邸に集合していた。

目暮から、阿笠邸で待ってて欲しいと連絡があったからだ。

数分後、目暮がリビングに入った。

目暮

「お待たせ、新一君。今日君達に集まってもらったのは他でもない。実は、富山轟蔵氏と浦沢敏江さんが昨日、護送中に何者かによって爆死させられたんだ・・・」

コナン・哀・刃・ユリ・風月・歩美・元太・光彦・たくま・マリア
「ええ〜っ!!?」

目暮

「車内には爆薬のにおいは残されていなかったから、何者かが2人を殺す目的で爆弾を撃ち込んだと推理できる・・・これはワシなりの推理だが・・・富山轟蔵氏ならびに浦沢敏江暗殺の裏には、あの『ペンデュラムアッド』が関わっていると思う・・・」

コナン・哀・刃・ユリ・風月・歩美・元太・光彦・たくま・マリア
「・・・」

コナン達10人の表情が、いつせいに曇った・・・

ファイル167:6500万年前の亡霊(ファントム・オブ・ダイナソー)『1

『名探偵コナン・6500万年前の亡霊』
ファントム ダイナソー

主題歌・ONE

挿入歌・君がいれば『世紀末バージョン』

メインテーマ・名探偵コナンメインテーマ『天国バージョン』

サウンド・名探偵コナン『天国へのカウントダウン』 オリジナル・
サウンドトラック

ファイル168：伊豆埋蔵金伝説『1』

美保

「ウワツホーイ」

ザパツ！

刃

「あら、何をボーツと見てるの？」

哀

「あ、イヤ・・・なんか美保ちゃん、いつもより子供っぽく見えちゃってさ・・・」

松葉

「当たり前でしょ？ここは彼女の別荘のプライベートビーチなんだから・・・」

風月

「それに、いつも事件続きだからって骨休めにここに連れて来てもらったんだから、もっと楽しまなきゃ・・・」

ユリ

「それにしても、6人も魅力的な女がいるのに男の子が少ないなんて・・・もうちょっとイケてる水着着てきたらよかったかな・・・」

レオン

「何がイケてないの？」

ザッ・・・

麻衣

「ぎ、銀一・・・」

レオン

「6人で仲良く水着の自慢しあいだなんて・・・琴葉さんが聞いたら泣くだろっねえ・・・」

麻衣

「ちがうちがう！志保ちゃん達がやるっやるっってうるさいから仕方なく・・・」

松葉

「美保ちゃんスゴいのよ！『今日の銀一トラジマの水着で決まりよ』ってピッタリ当てたもの！！」

麻衣

「バ、バカ！！」

レオン

「ト、トラジマ・・・？この緑の水着のどこがトラジマだ！？」

コナン

「これはゼブラ柄！シマウマだよ・・・」

麻衣

「トラもシマウマも同じでしょ！関西でシマっていったらトラだし・・・」

コナン

「そ、そだね・・・」

麻衣

「銀一・・・あなたまさか、この前の外食で待ちぼうけくらわしたのまだ根にもってんじゃないでしょうね？」

レオン

「ハ・・・何言ってるんだ？いー加減な女にたったの5時間待たされた事なんて・・・ぜーんぜん怒ってねえよ！！全然な！！！」

麻衣

「！！！」

コナン

「怒ってる・・・」

哀・刃・ユリ・風月・松葉

「（ま、当然ね・・・）」

コナン

「まあまあ・・・その穴埋めのために美保ちゃんがこの伊豆に呼んでくれたんだから！」

レオン

「まあね・・・」

麻衣

「（新一君が銀一と仲良しで助かった・・・）」

昼食の時間・・・

哀

「え、晚ご飯の後に宝探しを考えてる？」

刃

「本当？美保ちゃん。」

麻衣

「ええ、いつもやってるゲームなんだけど・・・もしかしたら、本当のお宝に巡り合えちゃうかもしれないわよ。昔、この辺りを治めてた大名が隠した財宝らしくてね。徳川の埋蔵金みたいなものかしら？じゃあ、くじ引きでペアを決めておきましょう。」

麻衣

「はい、決まりました！発表しまーす！！第1ペアは私と銀一！第2ペアは志保ちゃんと松葉ちゃん！第3ペアは刃ちゃんと風月ちゃん！そして第4ペアは新一君とユリちゃんよ！」

コナン

「君とペアは初めてだね、ユリちゃん。」

ユリ

「ええ、よろしくお願いね。」

松葉

「がんばろうね、志保ちゃん！」

哀

「ええ。」

刃

「絶対勝とうね、風月ちゃん！」

風月

「ま、お互い死なない程度にがんばりましょ。」

刃

「あのねえ……」

麻衣

「というワケでよろしくね、銀一。」

レオン

「う、うん……」

麻衣

「もう、照れ屋なトコまで昔のままなんだから……」

その夜

麻衣

「では、今から開始よ！地図を頼りに宝を探すの！宝を見つけたら、みんなに持たせてある携帯にメールで知らせるの！見事手に入れた

ら『完了』、非常事態になったら『SOS』。携帯は2人に1つずつ渡すから、どちらがメールしてもかまわないけど、必ず2人一緒にゴールしなきゃダメよ！一番早かったペアにはステキな商品があるから、がんばってね！それでは、そろそろ行きますか・・・」

30分後

銀一

「やっと見つけたよ。」

麻衣

「30分もかかったわね。」

25分後

松葉

「わりと楽勝だったわ・・・」

20分後

麻衣

「まずまずのタイムね。」

刃
「それより、こんなものが落ちてたけど？」

ポイツ！

パシツ！

麻衣

「毒蛇！？こんなのを放した覚えはないわよ！」

風月

「って事は、私達以外にも財宝を探している人がいるって事？」

刃

「ええ、それも危なそうなのがね・・・」

松葉

「でも、あの2人もう行っちゃったみたいよ・・・」

哀

「大丈夫かなあ？コナン君とユリちゃん・・・」

コナン

「あまりくっつかないでよ・・・」

ユリ

「だ、だって・・・」

バサバサッ!

ユリ

「キャ〜ッ!」

ガバ!

コナン

「だからくっつかないでっば!」

ユリ

「仕方ないでしょ、怖いんだから!」

コナン

「羽音1つにビビってて、黒の組織がやってられますか!」

ユリ

「あなただって1つぐらい苦手なものあるでしょ!」

ユリ

「あ、見つけたよコナン君!」

コナン

「ん?ここに埋まってるのって...」

ガサガサ...

コナン

「これ、本当の宝の地図か？」

ユリ

「え、じゃあ私達、本当の宝に巡り合えるの。メール送信、メール送信と……」

コナン

「ん？……！！（し、死体！？……銃創！？まさか……！？）」

ユリ

「コナン君、後はみんなと合流するだけ……。！！あ……あ……」

バツ！

コナン

「しっつ！！」

ユリ

「コ、コナンく……」

コナン

「大声を出しちゃダメだ！」

ユリ

「うん……それにしてもなんなの？この死体……」

コナン

「さあ……まだなんなのかわからない……ん？」

ユリ

「どうしたの？」

コナン

「ジッとしてて！」

ユリ

「あっ……フガッ……」

コナンはユリの口を塞ぎ、大木の後ろに隠れた。

「おい、どうした？」

「イヤ、何かいた気がするんだが……」

「しかしついてないよな、銀行強盗したら仲間が面見られるし……」

「ソイツをバラしたんだ、大丈夫だろ……」

「念のために、この辺りを見回ってみるとするか……」

ザッザッ……

コナン

「もう行ったか……S・O・Sと……」

ピッピッ……

コナン

「走るよ、ユリちゃん！」

ユリ

「え？」

コナン

「さっきの死体は、あの2人組の仲間だったんだ……きっと、後で石灰をかけて始末する気だったんだろう……」

ユリ

「じゃあ、その死体を私達が見ちゃったって事は……」

コナン

「ああ……ヤツらの計画は丸つぶれ……オレ達を殺したくて、ウズウズしてるだろうな……」

ユリ

「だったら、携帯のメールでみんなにこの状況を伝えれば……」

コナン

「ダメだ！この携帯にはマナースイッチがない……いちいちボタンを押してる間に、ヤツらに見つかるとよ……そう……助かるには、人気のない所に隠れながらみんなにメールを送り続けるしかないんだ。」

ユリ

「コナン君……」

コナン

「大丈夫・・・あの6人なら、きっと気づいてくれるよ・・・おしやべりはここまで。走るよ!」

ダッ!

タタタ・・・

「おい、いたか?」

「ああ、やっと見つけた。森の奥に逃げるみたいだな。」

「おい、すぐに捕まえなくていいのか?」

「安心しろ、2人ともただのガキだ。疲れ果てて倒れたところで捕まえてやればいいのさ。あの2人が、どのくらい体力があるかは知らんがな・・・」

ファイル169：伊豆埋蔵金伝説『2』

風月

「一向に帰ってこないわね、あの2人……」

レオン

「美保、もしかして難しい地図を書いたとか？」

麻衣

「イヤ……そんなハズはないんだけど……」

松葉

「ひよつとして、2人共道に迷って……」

刃

「2人でひつついて寝てたりしてー」

哀

「……」

カチン……

刃・松葉

「あ……」

レオン

「美保、もしかしてメール見てねえんじゃないのか？」

麻衣

「え？」

チラ・・・

麻衣

「あゝっ！メール来てたっつ！」

レオン

「（やっぱり・・・）」

麻衣

「（え、SOS・・・！？）・・・メールには、SOSって書いてあったわ・・・」

レオン

「何っ！？」

麻衣

「私が言ってた本当のお宝っていうのは、達の悪い強盗団が塾から地図の予備盗み出して探してるって母さんから聞いてたから、もしもの時に備えて、SOSも打つようにみんなには言ってたんだけど・・・もしかしたらあの2人、メールを受け取れる状況じゃないのかもしれないわね・・・」

哀

「じゃあ、まさか・・・」

風月

「今頃2人とも、ソイツらの手に落ちて・・・！？」

麻衣

「でも、まだそうだと決まったワケじゃないわ。この辺りを手分けして探してみよう。」

ユリ

「だいぶ走ったわ・・・そろそろメールしてもいい頃じゃない？コナン君・・・」

ヨロツ・・・

ユリ

「コ、コナン君？」

ドッ！

タタタ・・・

ユリ

「ど、どうしたの!?!」

コナン

「さ、最初に逃げた時足首ひねっちゃって・・・我慢して歩いてたんだけど・・・」

スポツ！

ユリ

「ちょっと！紫色に腫れているじゃないのよ!?!じゃあ今から応急

手当てをするから、ジツとしててよ!」

コナン

「応急手当でって・・・包帯なんか持ってるの?」

ユリ

「大丈夫!大きなハンカチに互い違いにミニバサミを入れてけば・・・」

ジヨキジヨキジヨキ・・・

ユリ

「ホーラ、長い包帯でしょ?」

コナン

「・・・」

ユリ

「まず足首に2回巻いて、足の裏から足の甲を通り再び足首へ・・・これを少しキツメに何度も繰り返して・・・最後にギュツと結んで固定すれば、完成よ!」

コナン

「へー、スゴいじゃない!」

ユリ

「実は昔私が捻挫した時に、クリス姉が・・・ク、クリス姉が私にこうやってくれたんだ・・・クリス姉、何でも知っててスゴいよね・・・」

コナン

「・・・バカだね・・・大切なのはその知識を誰に聞いたかじゃなく、どこでそれを発揮するか・・・今のユリちゃんは、オレにとつて最高のレスキュー隊員だよ！ありがと、助かったよ・・・」

ユリ

「あ、イヤ・・・そう言ってもらえると、恐縮だわ！」

ポワン！

ユリ

「とにかくここは危険だわ！もう少し落ち着ける場所まで行って、メールを送りましょ！きつとみんなが助けに来てくれるわ！」

コナン

「ああ、そつだな・・・」

ザッザッザッザッ・・・

コナン

「そろそろメールしておくか・・・」

ピッピッ！

コナン

「メール送信完了つと・・・それにしても、これからどうするの？」

ユリ

「そうね……いつもなら2人ぐらいなんともないけど、今日は2人共丸腰だし……」

「ほう、それは好都合だぜ……」

コナン・ユリ

「え!?!」

「やっと見つけたぞ……」

コナン

「く……」

「おっと、動くな。」

ジャカ!

「おとなしくついてくれば、痛い目には遭わせねえよ。」

コナン

「ユリちゃん、君だけでも早く逃げて……」

ユリ

「ダメよ!捻挫したコナン君を置いては行けないわ!」

コナン

「ユリちゃん……」

「よし、相棒!この2人を連れていくぞ!」

「ああ、わかった。」

麻衣

「2人からのメールが来てるわ・・・宝の手がかりは見つけたけど、同時に死体も見つけたの。強盗団の2人組に追われてる。そして、コナン君が足首を捻挫してる・・・」か。2人共かなり焦ってるわね・・・犯人と出会っちゃっているかも・・・」

哀

「そ、そんな・・・」

麻衣

「最悪の事態は避けたいわね・・・」

その頃・・・

コナンとユリは強盗団にさらわれ、2人組の隠れ家に閉じ込められていた。

コナンとユリは背中合わせの状態で体をロープで縛られ、床に座らされている。

ユリ

「コナン君・・・そこじゃないわ・・・もっと左よ・・・」

コナン

「この辺りか？」

チクツッ！

ユリ

「痛あつ！！どこに突っ込んでるの！？左だって言ってるでしょ！！」

コナン

「バカ、大声出すな！あの2人組に聞こえるだろ？」

グツグツ・・・

ズルツッ！

ピン！

コナン

「ダメだ！安全ピン、床に落ちちまった・・・」

ユリ

「何やってるの？あれがなかったらこの縄、切れないじゃない！」

コナン

「他に何か、針金みたいな物はないの？」

ユリ

「あれ1つだけよ。ミニバサミはアイツらに取り上げられちゃった・
」

チャツ！

「おとなしくしてるか？」

コナン・ユリ

「・・・」

コクン・・・

「そろそろ仲間に電話をかけてもらおう。言われたとおりにはしゃべれば、何もしないからね。」

475

麻衣

「一刻も早く探さなきゃ・・・」

ピリリ・・・ピリリ・・・

麻衣

「電話だわ。はい、もしもし・・・！！コナン君！ユリちゃん！無事だったのね？」

コナン

「なんだよ美保ちゃん、そんなに大声出して。」

ユリ

「ビックリするじゃない。」

麻衣

「なについてあなた達、捕まったんじゃないの？」

コナン

「そんなワケないだろ？今は2人で仲良く宝探し中さ。」

ユリ

「それでヒマだから、イタズラメールを送ったのよ。」

コナン

「まだだいがかりそうだし、今日はユリちゃんと野宿でもして、ゆっくりやる事にするよ。」

ユリ

「電源切っちゃうから、かけてもムダよ。じゃっあねっ」

麻衣

「ちょ、ちょっと待ちなさ・・・」

ブツッ！

麻衣

「コナン君、ユリちゃん!？」

「よし、電源OFFつと。おつかれさま、カワイイボウヤとお嬢ちゃん。2人共名演技だったよ。」

コナン・ユリ

「ん〜、ん〜。」

「しかし、まさか君達も宝探しに来ていたとは知らなかったよ。ゆっくりさせてもらうよ。ハハハッ！」

ボタン！

コナン・ユリ

「ん〜、ん〜!！」

ファイル170：伊豆埋蔵金伝説『3』

哀

「え？2人を探しに行く？」

刃

「あの2人は無事なんじゃないの？」

麻衣

「ちがうと思うわ。なぜなら、メールで送ってきた言葉と、さつきかけてきた2人の言葉は、まったく一致しない・・・明らかに矛盾してるわ！..」

松葉

「でも、どうすればいいの・・・？」

麻衣

「大丈夫よ。私がいみんなに渡した携帯には、超小型発信機が取り付けられているよ！しかも、発信機には映像を映し出す小型チップが内蔵されていて、たとえ電源が切られても、チップのデータを組み込んだフロッピーがあるから、パソコンで調べればすぐに出るわ・・・」

美保の別荘

麻衣

「よーし、これで・・・」

カタカタカタ・・・

ブウウ・・・ン・・・

麻衣

「やっぱりそうだわ・・・」

刃

「ウ、ウソ・・・」

風月

「2人が縄で縛られて、口にガムテープを貼られてる・・・」

レオン

「どういう事!?!」

松葉

「言つてたのとまるで逆じゃない!!」

麻衣

「たぶん2人共、犯人達に拳銃か何かを突きつけられて、さらわれてしまったのよ・・・そして、脅されてさっきのセリフを言わされたみたいだわ・・・しかも、あの会話の後すぐに電源を切られたし、2人が口を塞がれている事を考えると・・・身代金を要求してくれる可能性は、限りなく低いわ・・・」

哀

「そんな・・・もう2人に会う事はできないの・・・?うっ、うっ・・・」

風月

「泣かないで！落ち着いてよ哀ちゃん！まだそうだと決まったワケじゃないじゃない！！」

レオン

「少なくとも、明日の朝までまだ時間はある・・・そうだよね、美保！！」

麻衣

「ええ・・・（フン・・・本当は・・・『明日の朝までしかない』と言いたいトコだけどね・・・）とにかく、あの2人は探偵バツジを持つてる・・・みんな協力して、探し出しましょ！！」

翌朝、犯人達のアジトでは・・・

「どうだね、味の方は？料理には自信があるんだ。」

コナン

「あ、おいしい・・・」

ユリ

「料理の腕もプロ並ね。」

「オレらは2人共両親がいなくてな、教会で一緒に育ったんだ。」

「8年前、1人のシスターがいなくなつて、後はその後継ぎにお世

話になったよ。当時まだ10歳だったのに、大したもんだったな。今は何て言ったつけ・・・？メアリードってトコの女ボスをやってるらしいけどね。」

コナン

「その名前、わかります？」

「イヤ、思い出せるのはそこまでだよ。」

ガチャ！

『何やってるんだ、オマエら？』

『さつさとソイツらを縛るんだ。』

「イヤだね。」

「たかが盗賊の命令を・・・」

ザン！！

ズバ！！

ドウツ・・・

ズザツ・・・

コナン・ユリ

「えっ・・・」

ザッザッザッザッ……

コナン・ユリ

「あ……ああ……」

ガタガタガタガタ……

ピポッ……

麻衣

「コナン君とユリちゃん、移動してるわね……」

哀

「え？」

麻衣

「夜中に追跡メガネのスイッチを入れた時と比べると、位置がちがうわ。」

刃

「じゃあ、今2人は別の場所にいるって事？」

麻衣

「ええ。でも少なくとも自力じゃないわ。連れて行かれたの……監禁場所から連れ出されてね……とりあえず、第一の監禁場所の様子を調べておきたいけど……松葉ちゃん、刃ちゃん、風月ちゃ

ん・・・任せられるっ」

松葉

「ええ、任せて。」

バサアツ・・・

松葉

「2人とも、乗って!!」

トツ・・・

バヒュン!!

麻衣

「さて、私達も行くのでしょうか？3人でね・・・」

哀

「イヤ・・・4人よ。」

レオン

「そっか、イズナちゃんを連れてきてたよね。」

麻衣

「さ、行くわよ!!」

その頃・・・

「ちよろいもんだぜ。3人も殺つちまったが、金も手に入ったし・
」

「へっ、アイツらもバカなヤツだ・・・おとなしく命令を聞いてり
や、命は助けてやったのよ・・・」

「ホント・・・でもこれからどうするの？あのガキ共・・・」
チラツ・・・

そこには、背中合わせに手足と体をロープでグルグル巻きに縛られ、
口にはさるぐつわをされているコナンとユリがいた。

コナン・ユリ

「うん、うん・・・」

「アイツらの顔を見ているからな、コイツら・・・」

「やはり、始末するか・・・？」

コナン・ユリ

「んっ、んんっ・・・!!」

「まあ、すぐに殺つてもつまらんからな・・・」

「向こうで酒でも飲みながら、ゆっくり考えようぜ。コイツらを今
後どうするかをよ・・・」

「おとなしくしてる事ね、ボウヤ達・・・」

ファイル171：伊豆埋蔵金伝説『4』

麻衣

「早く2人を助け出さないと、まずいわ・・・」

レオン

「そうかなあ？案外、2人でよろしくやってんじゃないの？たとえば・・・」

ユリ

「いけないわ、コナン君。あなたには哀という大事な恋人が・・・」

コナン

「何を言ってるんだ、ユリちゃん。ボクの運命の女性はやはり君だ・・・」

ユリ

「コナン君・・・」

コナン

「ユリちゃん。」

レオン

「なーんて事に・・・」

麻衣

「ちょっと、銀……」

哀

「コナン君……もし、そんな事してたら絶対に許さないんだから……!!」

麻衣

「し……志保ちゃん？」

ゴ……

レオン

「あ、哀ちゃんの中に紅蓮の炎が……」

イズナ

「火に油を注いだわね……」

・
レオンの想像が現実になっているはずもなく、犯人のアジトでは……

「アイツら、なかなかビッグジュエルの場所を吐かないな……」

「本当に大丈夫なの？リーダー。」

「ああ、大丈夫だ。あの拷問方法なら、いくら口が固いガキでもすくなく口を割ると思うぜ……」

その頃、コナンとユリは部屋の柱に縛りつけられ、拷問されていた。

その拷問方法とは、大量のへびを放し、けしかける事であった。

シユルシユルシユルシユル・・・

ユリ

「イ、イヤ・・・へびはイヤアッ!!」

ユリはガクガクとふるえていた。

コナンは心配になり、ユリに話しかける。

コナン

「ユリちゃん、君ひよつとして・・・」

ユリ

「そうなの・・・私、へびが大の苦手なの・・・小さい頃、クリス姉にイタズラでランドセルに大量のへびを押し込まれて・・・」

コナン

「そりゃあ、怖くもなるわな・・・」

ユリ

「とにかく、このままじゃ私失神しちゃう!!コナン君、なんとか助けて!!」

コナン

「よし、じゃあこれの出番だな・・・」

そう言うと、コナンは自分の体を拘束しているロープを解き、ユリに近づいて彼女をロープから解放した。

そして、ヘビ達を追い払った。

コナン

「大丈夫か、ユリちゃん？」

ユリ

「うん、ありがと・・・でも、どうしてすぐにロープが切れたの？」

コナン

「これだよ。『ボタン式仕込み刀』！万が一の時のために、こっちの腕時計を持ってきてたんだ。」

ユリ

「だったら、早く使えばよかったのに・・・」

コナン

「アイツらにバレたら、後々面倒だからね・・・さあ、早く脱出しよう・・・！」

コナンとユリは、監禁場所の窓から逃げ出した。

しばらくして、3人が入ってきた。

「ああ！アイツら、いねえしー！！」

「逃げたわね・・・」

「追っぞー！！」

コナン・ユリ

「ハアハア、ハアハア・・・」

コナンとユリは、森の中を必死に逃げていた。

ガッ！

ドテッ！

ユリ

「キャッー！！」

コナン

「ユリちゃんー！！」

コナンはユリを助け起こした。

コナン

「大丈夫か、ユリちゃん？」

ユリ

「う、うん・・・」

ザッ・・・

コナン・ユリ

「!?!」

「追いついたぜ。」

「ガキ共がふざけやがって!?!」

「今すぐ殺してやるわ!?!」

コナン

「くっ・・・」

コナンはユリを後ろ手でかばった。

ユリ

「コ、コナン君・・・」

その時、上空から声が聞こえてきた。

「祇園精舎の鐘の声、諸行無常の響きあり。沙羅双樹の花の色、盛者必衰の理を表す。驕れる者も久しからず、ただ春の夜の夢の如し。猛き者も遂には滅びぬ、ひとえに風の前の塵に同じ・・・」

トッー!

コナン

「松葉ちゃん!!」

ユリ

「刃ちゃんと風月ちゃんも・・・」

松葉

「今の歌は、目の前にいるあなた達3人への鎮魂歌^{レクイエム}・・・」

刃

「どれだけ権力があるうとも、いつかは法の裁きを受ける・・・」

風月

「なんなら、今私達がここであなた達を裁いてもいいのよ？」

「チツ、ここはいったん引くか・・・」

3人は、足早に逃げていった。

風月

「いったん引く、か・・・残念ながら、私達があなた達に会う事はもう二度とないわ・・・」

風月はそうつぶやいた。

ファイル172：伊豆埋蔵金伝説『5』

3人組が逃げた後、哀、レオン、麻衣、イズナが追いついてきた。

哀

「コナン君、ユリちゃん！」

麻衣

「2人とも、無事だったのね！」

コナン

「みんな・・・」

レオン

「なんか、大変だったみたいだな？」

コナン

「大変だったよ。死体見つけたり、悪いヤツらに捕まったり・・・」

イズナ

「それ以外には何かあったの？」

コナン

「な、何もなかったよ・・・」

ユリ

「強いて言えば、私がコナン君に抱きついた事ぐらいで・・・」

哀

「抱きついたあ……?」

ゴウ……

コナン・ユリ

「う……(イ、イヤな予感……)」

哀

「後でしっかり説明してもらいますからね!」

コナン・ユリ

「は、はい……」

ゴウゴン『へエ、あなた達も失敗したんだ……』

「も、申し訳ございません……」

「つ、次からがんばります……」

「で、ですからお許しを……」

ゴウゴン『何言ってるの?あなた達に次はないわよ。』

そう言つと、ゴウゴンは長い体で3人を縛り上げた。

ぐるぐるぐるぐる……

そして、一気に3人を丸飲みした。

バクッ！

グイッ！

バクバクバク・・・

ゴックンー！！

ペロリン。

ゴーゴン『あゝ、おいしかった。』

盗賊ドルギ『メアリード』の砦

「¥／」

「『イズナ捜しはもういい』って・・・どついう事なんだア！？ス
レイプさんよオ・・・！！！」

「こっちは100兆欲しさに死ぬ気で捜してんだよ。今さら『いない』はねえぜ。冷やかしか？」

「テメエ・・・メアリードをナメてやがったのか!？」

「誰の使いだったのか知らねえがざけんな!!」

「ぶっ殺してやる!!!!」

『やれやれ。これから始まる地獄に巻き込ませないように、』
『この優しい心も解せぬらしいな・・・』

グオオオオ・・・

『盗賊ドルギメアリード・・・』『チェックメイト』・・・』

その後、出かかっていた盗賊団員が皆に帰ってくると、そこには全身の血を吸い尽くされたメアリード盗賊団の死体達があった・・・

スレイプニル『さあ・・・同志達・・・新たな『戦』の幕開けだ・・・』

ファイル173：番外編・コナン笑点（前書き）

今回の話は、テレビ番組の『笑点』を参考にしています。

ファイル173：番外編・コナン笑点

コナン

「新年、明けましておめでとございます。コナン笑点の時間がや
つて参りました！」

刃

「コナンくん、ソレ、アタシらのセリフちゃうで……」

風月

「っていうか、正月からだいぶ日にち経ってるわね……」

麻衣

「いいんじゃない？たまにはこういふほのぼのなのもたまないと
ね……」

ユリ

「これをほのぼのっていうのかしら？」

レオン

「まあ、事件ばかりじゃ疲れるしな……」

松葉

「皆様、お待ちかねの大斬り（ダイギリ）のコーナーです。まずは
メンバーのご挨拶から……」

コナン

「今年もゆっくり事件を解決していく、ご存じ名探偵の江戸川コナ

ンです！」

真

「……本年も作者共々よろしくお願ひします。ど〜せ、今年も影が薄い……宝極真です。」

隆太

「大丈夫だつて、真ちゃん！そのうち出番が来るさ！えっと、真ちゃん、彼の氏、平尾隆太です！」

ユリ

「どもです、皆さん！男女合わせて300通のラブレターに加え、念願の彼氏候補ゲットで幸せの金田ユリです！」

刃

「どうも、皆さん！大阪生まれだけど標準語も大得意、一番得意な言語はロシア語の剣野刃です！」

麻衣

「まあ、自分の自慢話をして粹がってる人達は放つといて、会場の皆様、私が本命ですよ？着物も青がよく似合う、笠原麻衣です。」

レオン

「いきなりなんか暗いなー……今年も麻衣のお兄さん役を務める、瀬戸川レオンです。」

風月

「今年もよろしくお願ひします。緑黄赤青の着物がお気に入り、の如月風月です！」

鈴也

「水色の着物が大好き、八千忍者の蜂野鈴也です。」

松葉

「えっと、今回のコナン笑点の司会者を務める、料亭『桜野亭』の女将、桜野松葉です！」

哀

「私は今回参加しませんが、私は愛するコナン君の応援ができれば満足です。座布団と幸せをお運びする、コナン君の愛妻候補、灰原哀です！」

コナン

「／／／／．．．／／／／」

1 問目

松葉

「では、笑点ネタなので、1問目は『く』とかけて、『く』と解く』。そしてアタシが『その心は？』と聞くから．．．なんか、面白い答えを返すんや。ちなみにテーマはなし！」

全員

「テーマなしかよ！」

真

「はい！」

松葉

松葉

「（・・・チャレンジャーねえ・・・）そ、その心は？」

刃

「どつちも中身は黒い。」

刃・麻衣以外全員

「・・・」

麻衣

「・・・いい度胸ね？刃ちゃん（バキボキ・・・）」

松葉

「そ、それでは第2問を・・・」

風月

「終わるの早っ！」

第2問

松葉

「え、年始という事もありますが、最近の子供達はゲームやマンガに興じています。みんな、そんな風に正月を過ごす子供を演じてください。で、アタシが親になって『お正月なんだから、お正月らしい遊びをなさい』と言います。そこで面白い答えを返しなさい・・・では、ユリちゃんから。」

ユリ

「ウフフフ Wiiのリモコン操作っておもしろーい！」

松葉

「お正月なんだから、お正月らしい遊びをなさい。」

ユリ

「どっちにしても『人生ゲーム』じゃん！」

松葉

「うまい！座布団あげなさい。」

哀

「はーい！」

風月

「Wiiのソフトで人生ゲームなんか出てたっけ……？」

コナン

「ま、細かい事は置いて……」

松葉

「はい、次はコナン君。」

コナン

「あーあ、もうDSのポケモン全クリしちゃったよ……」

松葉

「お正月なんだから、お正月らしい遊びをなさい。」

コナン

「だって、羽根突きで勝ったら相手の顔に墨塗るんでしょ？哀ちゃん
の顔汚したくないもん……」

哀

「コ、コナン君……なんて優しいのお〜!!」

松葉

「哀ちゃん、コナン君に5枚あげて……」

哀

「は〜い」

コナン

「やった……」

観客席の歩美

「やるわね、コナン君……」

松葉

「次は鈴也。」

鈴也

「わ〜、この玩具楽しい〜。」

松葉

「お正月なんだから、お正月らしい遊びをなさい。」

鈴也

「これで遊ばないとパパが『クビ』になっちゃうんでしょ？だから
これで遊ぶの。」

「はいはい」

麻衣

「よし！」

松葉

「次、刃ちゃん！」

刃

「うーん、このゲーム難しいなあ・・・」

松葉

「お正月なんだから、お正月らしい遊びをなさい。」

刃

「だって、ゲーム以外やった事ないんだもん・・・」

松葉

「哀ちゃん・・・刃ちゃんから2枚没収。」

哀

「はい。」

刃

「そ、そんなあゝ!!！」

3 問目

松葉

「最後の問題です。哀ちゃん、みんなに『礼の物』を」

哀

「はい（帽子を配っていく）。」

松葉

「アタシがこれから阿笠博士として『哀君、礼の物を出してくれ』と言う。そこであなた達はそのアイテムを確認して、何か面白い一言をつけなさい。ちなみに最終問題やからな。」

風月

「はい！」

松葉

「はい、風月ちゃん。では礼の物を出してくれ。」

風月

「また、『おジャ魔女どれみ』のDVD？もう、いい加減諦めたらどう？続編はないって……」

全員

「（うつわぁ……言っちゃったよ、この人……）」

松葉

「哀ちゃん、風月ちゃんから一枚取りなさい。」

哀

「はいはい！」

風月

「ええ！？なんで、どうして!？」

松葉

「(風月をシカト) はい、隆太君。では、例の物を出してくれ。」

隆太

「コナン君の女装写真ね、この前のはもう擦り切れてしまったの？」

コナン

「……(哀ちゃん……!?)」

ギロツ……

哀

「……(「う、ごめんなさいコナン君……)」

松葉

「……はい、次ユリちゃん。では礼の物を出してくれ。」

ユリ

「南国ハワイ旅行の宿泊券ね、これ以上お金の無駄遣いはやめましよう。」

松葉

「そんなに使っていないわよ!……ハッ!」

ユリ

「(ニヤリ!)」

ファイル174：許されざるFBIの裏切り者

帝丹高校

琴美

「ねえ、瑛祐。なんか最近、妙だと思わない？」

瑛祐

「ああ・・・なぜ、オレ達FBIしか知らない『コナン君達の体内にあるビッグジュエル』の情報がペンデュラムアッドに漏れているんだ？」

琴美

「それはあれよ、瑛祐。私達FBIを裏切ったヤツが、ペンデュラムアッドに情報を漏らしているのよ・・・私が昨日受け取った、このメールの差出人がね・・・」

スツ・・・

瑛祐

「やっぱりな・・・」

翌日

西杯戸公園

琴美

「約束通り、瑛祐と2人で来てあげたわよ！」

瑛祐

「さあ、出てこい！！！」

ザッ！

「2人共来てくれるだなんて、嬉しいわね。そんなにアタシに会いたかったのかしら……？」

瑛祐

「ああ、会いたかったよ……8年前の組織大戦の直後、姿を眩ました火野炎香……通称『フレイム炎のジャンヌ』！！！」

琴美

「私達は、8年前からあなたの行方を探していたわ！見つけ出して、逮捕するためにね……」

火野炎香ひのほのか

「ハハハ……アタシもあなた達を探していたのよ。今度こそFB Iから引き離し、ペンデュラムアッドに入れるためにね。ねえ、剣也？」

ザッ……

美剣剣也みつるぎ けんや

「・・・」

瑛祐

「チツ・・・『フレイド剣のジャロン』の美剣剣也・・・」

琴美

「あの戦いの後、彼もFBIから消えたけど、まさか炎香とつるんでいたとはね・・・」

瑛祐

「オマエ達、忘れたのか？ペンデュラムアツドの城を完全に叩き潰した、あの日の戦いを・・・」

回想・・・

バリー

「ディオガ・イグリユウル！！！」

ドン！！

アスカ

「ディオガ・スプラドン！！！」

ジャガガガガガ！！

炎香

「ヴァルセム・ガリュウドン……！」

ジュビー……！

剣也

「ゼマリオン・ジャスバード……！」

ギヤドン……！

キース

「アルバトロオウ・アクアリオ……！」

ジャゴオ……！

リアン

「ゴレイオウ・リバウレン……！」

ドゴツ……！

リリー

「ギゴリオウ・ミオドルク……！」

ズボオ……！

サスケ

「ディオガ・リファルドン……！」

ゴバアアア……！

瑛祐

「ジエボルオウ・ギードン!!!!」

ザルチム

「ゴースオウ・シャードン!!!!」

ゾゴオオオ!!!

琴美

「ジャン・バギヤム・ジェムドン!!!!」

ガキイイイ!!!

ユーリ

「レオウ・リオウ・クロウ・ディスグルグ!!!!」

ゴオオオオ!!!

ガガガガガガガガガガ...

ズズズズズ...

明美

「これで、ペンデュラムアッドも終わりね。」

ジヨディ

「ええ、一応は...」

秀一

「だが、まだ何かありそうな気がするな・・・」

ユリ

「そうだな・・・ん？」

スツ！

瑛美

「ちよつと、炎香、剣也！」

リリー

「どこ行くんや！」

炎香

「別にどこ行くところが勝手にしょ？」

剣也

「オレ達はオマエ達とはちがう道を行く事にするよ・・・」

ジエイムズ

「き、君達・・・」

ザッザッザッ・・・

瑛祐・琴美

「・・・」

瑛祐

「あの時、オマエ達を引き止めておけばよかったと、今さらながら後悔したよ……」

琴美

「あなた達の裏切りがきっかけで、仲間達は次々と殺されていった……瑛美さんも、今はあなた達の支配下におかれてる……」

炎香

「それで、今ここでアタシ達を捕まえるとしても？」

瑛祐

「イヤ、今はしない……」

琴美

「まだ緑の組織を潰していないからね……」

炎香

「そう……わかったわ、今日のところは引いてあげる。でも、あなた達に1つ忠告しておくわよ。我々ペンデュラムアッドに手を出す者は、必ずや不幸な最期を遂げる……その事を、せいぜい肝に命じておく事ね……行きましょ、剣也。」

剣也

「ああ。」

ザッザッザッ……

瑛祐

「そんな伝説、必ずや覆してみせるよ……」

琴美

「哀ちゃん達という、希望ヒカシの力でね……」

ファイル175：苦くて甘いバレンタイン『1』

正月気分が抜けた頃・・・
女の子達が苦くて甘い洋菓子に義理や本命^{マシ}を込めて送る・・・
真冬のお中元・・・
それは・・・
バレンタインのチョコレート・・・

2月14日 -

毛利探偵事務所

哀

「今日、私はやる事があるから・・・学校には1人で行って!!」

コナン

「あの、哀ちゃん・・・」

バタン!

コナン

「えーと・・・どうしよう、おっちゃん・・・」

小五郎

「いいんじゃないか? 今日ぐらいは・・・今日は女の子にとって・・・」

・色々大変な1日だしな・・・」

山王学園高等部

生徒会室

波香

「バレンタインって、女の子が男の子にチョコを渡すイベントじゃなかったっけ・・・？」

エル

「な・・・何よ・・・私だってそれぐらい知ってるわよ・・・」

波香

「しかし・・・エル、毎年毎年スゴいわね。」

エル

「なぜかしら、年々量が多くなっているんだけど・・・」

波香

「エルは男子よりかっこいいからモテるのよ。」

エル

「でもおかしいわ。っていつか陰謀よ。私、こんなに女の子らしくしてるのに・・・」

波香

「確かに昔に比べたら多少は・・・」

エル

「やめてよ、一応、反省はしてるんだから・・・」

波香

「でもこんなに食べたたら太るわよ？」

エル

「わかってるけど、捨てられないじゃない・・・1つ1つ・・・女の子の想いがこもったチョコなんだもの・・・」

波香

「・・・そっか・・・じゃ・・・私からも・・・」

ズイ!

エル

「な!!!」

波香

「一生懸命食べてね。」

エル

「イ・・・イジワル・・・」

波香

「ハハ。でも太ったりしてはダメよ。エルは・・・どんな時でもかっこよくなくちゃいけないんだから・・・」

ボタン！

エル

「（うう・・・でもせめて食べるには牛乳がいるわ、牛乳が・・・でも校内の購買で買っと、またチョコをもらつ可能性が・・・）しかたない・・・コンビニで買って来よう・・・」

ガタ・・・

『サンオウマート』

エル

「フウ・・・あら？美保に美香！」

美保

「あ、エル！」

エル

「あなた達も牛乳買いに来たの？」

美香

「ええ・・・私も美っちゃんもチョコもらいすぎて・・・」

エル

「ハ、ハハ・・・」

美保

「それに、私や美香もあげる相手いるから・・・」

エル

「ああ、美保は銀一君でしょ？美香は・・・？」

美香

「同じく・・・」

エル

「じゃあ、銀一君は4人からチョコももらえるワケだ・・・幸せ者ね
く・・・」

美保

「4人じゃないでしょ？銀一、金美さんからもチョコもらってるか
ら・・・」

美香

「そうそう、銀一君シスコンなのよね・・・」

エル

「まあまあ・・・とりあえず、目当てのもの買っていきましょ・・・
」

ガーツ・・・

美保

「ん？見て、エル。」

美香

「たちの悪そうなヤツらに女の子が絡まれてるわね・・・」

エル

「しょうがない、助けに行きますか・・・」

そんなワケで、いつものように暴漢達をぶちのめした美保達は・・・

「あ、あの・・・助けてもらったお礼がしたいんですけど・・・こんなものしかなくて・・・」

美保・美香・エル

「これ、ありがたく受け取っとくわ。」

と、いつものようにお礼をもらって・・・

美保

「うーん、いい事した後は気持ちがいいわね。」

美香・エル

「本当ね。」

波香

「そんな風に男らしいところを見せるから・・・あなた達は年々チヨコの数が増えるのよ？」

ボソツ・・・

美保・美香・エル

「ハッ！……！そ、そういう事か……！」

人助けを少し後悔してみたり。

ファイル176：苦くて甘いバレンタイン』2』

大阪

月島弓雁つきしま ゆかりは、バレンタインデーの1週間前、試験期間の休み中に大阪に里帰りし、自宅でのんびりとしていた。

そして、バレンタインデーの前日の事・・・

弓雁

「ふあーっ・・・何も考えずゴロゴロできる幸せ・・・ホンマ、試験期間休み様々やなあー・・・」

スツ・・・

月島諸刃つきしま もろは『弓雁の母』

「コラ、弓雁！今日という今日は覚悟してもらおうでえ！？」

弓雁

「へ？」

諸刃

「見合いや、見合い！！オマエもあと3年したら二十歳はたがひなんやから、そろそろ決めんとアカンで！？」

ドサッ。

弓雁

「ヤダもおく、カンベンしてえなおかーちゃん……」

諸刃

「何言つてんねんな！ずっと1人でおるつもりなんか？」

弓雁

「そない言つたかて……見合いつてウチあんま好きやないし、好きでもあらへん相手と結婚やなんて考えられへんよ。ほな、ちよつと外散歩行つてくるわ。」

諸刃

「あ……ちよ……ちよつと弓雁……」

バタバタバタ……

弓雁

「あーもお、見合い見合いつて……そないにウチの事、家から追い出したいんかいな。なんかハラたつてきた……気晴らしにコンビニでも行こ……」

『サンクス
THANKS』

弓雁

「あれ？あそこにおるんつて松葉ちゃんやん……おーい、松葉ち

やーん！」

松葉

「ん？あー、弓雁ちゃん！こっちに帰ってきてたんだ？」

弓雁

「うん！ウチの高校、試験期間で休みやねん・・・」

松葉

「ヘーツ・・・あ、そうだ！弓雁ちゃん、ウチの店に寄ってかない？おいしい善哉ぜんざいでも「ちそうするからさ！」

弓雁

「ウチ、善哉むっちゃ好き！！行く行く！！」

料亭『桜野亭』

松葉

「ヘーツ・・・諸刃さんにお見合い写真をねえ・・・」

弓雁

「そやねん！あとまだ3年もあるいつのに、ヒマさえあれば見合い写真や・・・」

松葉

「アタシもおおじさまに言われてるな・・・『早く所帯もってワシを楽しせんか』って・・・急がなくても別にいいのにさ・・・」

弓雁

「ええよな、松葉ちゃんは・・・鈴也君いう許嫁がおって・・・」

松葉

「い、許嫁とちゃうて！！アタシと鈴也はただの幼なじみで・・・」

弓雁

「隠したかてアカン！全部顔に書いてあるで！」

松葉

「う・・・」

弓雁

「松葉ちゃんはまだええやん！ウチなんか好きな相手すらおら入んのやから・・・」

松葉

「弓雁ちゃん・・・」

弓雁

「なんか暗くなってもうたな！ゴメン！明日チョコレート作るの手伝ったるから・・・」

松葉

「アタシの方こそゴメンね。アタシは許嫁がいて幸せなのに・・・」

バンバン！！

松葉

「イタツ・・・」

弓雁

「気にしいなて！ウチは大丈夫やから！」

松葉

「う、うん・・・」

弓雁

「ほな、明日の朝にな！」

松葉

「うん！」

タタタ・・・

ファイル177：苦くて甘いバレンタイン』3

翌日

弓雁

「たくさん買い物したなー。」

松葉

「そうね。鈴也、チョコ受け取ってくれるかしら・・・」

弓雁

「大丈夫やって！松葉ちゃんがつけてるその宝石と、『アタシをあげる』なんて言われた日にゃ、鈴也君かてクラッとくるでー!!」

松葉

「恥ずかしいよ、弓雁ちゃん・・・」

ニヤ・・・

ブロロロロ・・・

弓雁

「危ない、松葉ちゃん!!」

松葉

「え？」

ギョオオオ・・・

バツ！

松葉

「キヤツ！！」

ブロロロロ・・・

弓雁

「大丈夫か、松葉ちゃん！！」

松葉

「うん・・・あ！！アタシの指の宝石が取られてる！！」

弓雁

「今のヤツ、引ったくりやな・・・追うで、松葉ちゃん！！」

松葉

「あ、うん！！」

バサア！！

バサバサバサツ・・・

弓雁

「待て〜っ！引ったくり〜！！」

「なんなんだ、コイツらは！？空から追ってきてやる・・・」

ザッ！！

「うっ！！」

弓雁

「もう逃げられへんよ。さっさと返し！！」

「ふざけんなあ！！」

ダッ！！

ガシッ！

バツ！！

弓雁

「ハアアアッ！！美つちゃん直伝一本背負い！！」

ドオン！！

弓雁

「いっちょあがりや。さー、警察に連絡しよ！」

松葉

「ちよっと、弓雁ちゃん！後ろ、後ろ！！」

弓雁

「？」

ガバツ！！

弓雁

「わっ！！」

松葉

「弓雁ちゃん！！」

「そのオマエ、動くなよ。動いたら、この娘の首を絞め……」

弓雁

「アホか、オマエ……」

「何？」

弓雁

「相手がウチやったんが、オマエの不幸や……で！！」

ゴツ！！

「がはぁ！！」

ヒュオツ！！

ズドオオオン！！

ドッ！

松葉

「ヒ、ヒジ打ちとかかと落とし……」

その後、弓雁と松葉は警察に通報したが、2人が電話を探しに行っている間に男は逃走していた……

弓雁

「あゝ、逃げられてしもたな……」

松葉

「そうね。でも、きつとすぐに捕まるよ！指名手配したんだから……」

弓雁

「そやな。ほな、家行ってチョコ作るか！」

そして、1時間後……

弓雁

「おゝ、つまそつやな……」

松葉

「そ、そつ？」

弓雁

「こんなにももらえる鈴也君は、ホンマ幸せ者やで……」

松葉

「あ、ありがとう・・・」

で、松葉の学校にて・・・

鈴也

「え？これをオレに？」

松葉

「うん・・・バレンタインのチョコレート・・・」

鈴也

「サンキュ！」

そう言うと、鈴也は数分で食べ終わった。

鈴也

「おいしかったぜ、松葉！」

松葉

「あ、ありがとう！」

ガッ！

松葉

「え？」

鈴也

「松葉……」

松葉

「鈴也……」

ドクンドクンドクン……

フレア・雷薙

「あゝ!!!」

松葉・鈴也

「!!!」

ババツ!!!

清兵衛・メトロ

「見たぞ!!!」

フレア・雷薙

「松葉ちゃんと鈴也君の熱いキス!!!」

松葉・鈴也

「//////////」

・ この後、2人は1時間にもわたって4人に冷やかされたのでした……

ファイル178：苦くて甘いバレンタイン『4』

電話中の松葉

松葉

「弓雁ちゃん、手伝ってくれてありがとう！おかげさまで渡すの成功したわ！」

弓雁

「よかったな！」

松葉

「ついでに鈴也とキスしちゃった・・・」

弓雁

「おゝ、もうそこまで進展したん？なら、後は告ったらゴールインやな！」

松葉

「う、うん・・・ところで、弓雁ちゃん結局誰にチョコあげたの？」

弓雁

「ん？ああ、通報した時来た警官おったやろ？あの人がけっこうイケメンやったから、チョコあげておつき合い始めたんや！」

松葉

「ちよつ、弓雁ちゃん・・・年齢とかは聞いたの？もし、30いてるおじさんだったりしたら・・・」

弓雁

「平気や平気！高校卒業してからすぐに警察学校入って、今年卒業して警官になった20歳の人やから・・・」

松葉

「そ、そう・・・ならいいんだけど・・・」

弓雁

「じゃあ、また今度なー！」

松葉

「あ、ちよっ・・・」

ツー、ツー・・・

松葉

「ま、いつか・・・」

伊豆で・・・

隆太

「え？ボクにチヨコくれるの？」

真

「はい・・・隆ちゃんには、いつも心配かけてますから・・・」

隆太

「そりゃそうだよ。冬休みに入ってからずっと試合ぶっ続け・・・少しは休まないと、体に悪いよ?」

真

「そ、そうですね・・・では、お買い物しておいしい物でも食べましょう! 気晴らしに・・・」

隆太

「いいねえ、行こ行こ!」

帝丹高校

琴美

「瑛祐・・・チョコ受け取ってくれる?」

瑛祐

「ああ・・・ありがたくいただくよ。オレの女は昔も今もオマエ1人だからな。」

琴美

「よかった・・・園子ちゃんが、『瑛祐君は蘭に気がある』って言うってたから、アタシ・・・」

瑛祐

「ああ、あれか。蘭さんに接触してたのは、工藤新一君の情報を少しでも得やすくするためだったんだよ。まさか、幼児化してるなんて思わなかったけどな・・・それに、蘭さんもしかしたら・・・」

園子

「『もしかしたら』じゃなく、『絶対に』よ・・・」

琴美

「あ、園子ちゃん・・・」

瑛祐

「聞いてたんですね、今の話。」

園子

「ええ。私もコナン君が新一君だと知ってるし、協力するって彼らと約束したからね・・・あ、そうそう！この前、真さんと一緒に江古田町に買い物に行ったら、新一君にそっくりな子が蘭らしき女の子連れて歩いてたのよ・・・」

瑛祐

「つまり、その人が蘭さんを保護している少年である可能性が高いつてワケですね・・・」

園子

「ええ、おそらくは。それと瑛祐君。新一君からあなた達の事は聞いているし、ムリに敬語で話さなくてもいいのよ?」

瑛祐

「この口調が好きなんですよ。親しい人に対してはこうすると、子供の頃父に言われてましたしね……」

園子

「その事で気になったんだけど、瑛祐君のお父さんって何してた人なの？」

瑛祐

「元FBIのCIA捜査官です。任務中にキールという女に殺されましたけどね……」

園子

「ご、ごめんなさい……イヤな事思い出させてしまって……」

瑛祐

「別にかまいませんよ。新一君達と知り合ったおかげで、あの女の情報も入りやすくなりましたし、あの女はこの手で始末したいと思っただけだから……」

ピリリ……

瑛祐

「あ、失礼。電話みたいです。はいもしもし……あ、ジョディさん。え？キールの意識が戻った!？」

琴美

「どつやら、行かなきゃいけないみたいね。園子ちゃんも来ます？」

園子

「ええ、私も行くわ。」

某病院

瑛祐

「ジヨデイさん、遅くなりました。」

ジヨデイ

「あら、瑛祐君、今日は連れもいるのね？」

瑛祐

「ええ、琴美と園子さんが。」

ジヨデイ

「じゃ、行きましょう。」

ガラツ・・・

キール

「・・・」

瑛祐

「目が覚めたんだな、水無怜奈・・・キール。早速だが単刀直入に聞くぞ。オマエは姉の居場所を知っているか？」

キール

「ああ、本道瑛美の事ね・・・大丈夫、生きて組織にいるわよ・・・

」

瑛祐

「オマエのような最低女に、姉を呼び捨てにされる筋合いはない。」

キール

「フツ、そうね・・・彼女はあの時、私がスキについてクロロホルムで眠らせ、拉致したのよ。その後、髪型をそっくりにした替え玉を現場に放置して、彼女が死んだように見せかけてたってワケ・・・

」

瑛祐

「やっぱりそうだったのか・・・」

キール

「それにしても、よく私が偽者だってわかったわね？目の部分まで完璧に模写したのに・・・」

瑛祐

「そんなの、当たり前だ。ボクを誰だと思ってる。」

キール

「そうよね・・・うっ！？」

瑛祐

「おい、どうした!?!？」

キール

「か、体が熱……い……」

ボツ！！

琴美

「い、いきなり体が燃えだした!？」

園子

「は、早く消化しなきゃ……」

ジヨディ

「ムリよ、間に合わない!!」

キール

「あああああああ……!!!!」

シュウウウウ……

園子

「灰になって消えて、炎も消えた……」

ジヨディ

「おそらく、彼女の体に前もって仕掛けがしてあったのね……万が一組織の秘密をしゃべった場合、いつでも焼き殺せるように……」

琴美

「瑛祐……こんな殺害方法ができるのって……」

瑛祐

「ああ、1人しかいない・・・赤の組織の女幹部、イフリート・・・
こんな殺し方ができるのは、アイツ1人だけだ・・・ちくしょう！
」

そう言うと、瑛祐は怒りで拳をベッドに打ちつけた・・・

ファイル179：苦くて甘いバレンタイン』5

白野邸

美保

「はい、銀一。バレンタインのチョコレートよ。」

銀一

「サンキュ、美保。そういえば、天幕さん達は？」

美保

「深雪と美香、結局エルにあげちゃったみたい。」

銀一

「ハハッ、エルさんも災難だなあ・・・」

帝丹小学校

マリア

「たくま、ちょっと。」

たくま

「ん？」

マリア

「屋上まで来てくれへん？」

たくま

「あ、ああ……」

たくま

「マリア、オレに用って何だよ？オレ何かしたかな？」

マリア

「なーんもしとらへんよ。ただ、アンタがあまりにも鈍感やから……」

スツ……

たくま

「これって……」

マリア

「そ、バレンタインのチョココレートやで。」

たくま

「あ、ありがと。」

マリア

「それもこれも……アンタがちゃんとウチの告白に返事せんから」

やー!!」

バツシイイン!!

たくま

「イテーツ!!」

マリア

「・・・ハツ!!ゴ、ゴメンたくま・・・」

カアアアア・・・

たくま

「(マリアって・・・ツンデレだったのか・・・)」

歩美

「光彦君・・・これ受け取ってくれる?」

光彦

「ええ、もちろんですよ。」

歩美

「(これでよかったのよね・・・今は亡き、私のお姉様・・・)」

元太

「これ・・・バレンタインのチョココレートか？」

ユリ

「うん・・・（私の気持ちは届くのかな・・・元太君って、チョコレートよりうな重の方が好きみたいだし・・・）」

元太

「ありがとう、ユリちゃん。ありがたく受け取るよ。」

パクッ・・・

元太

「これ、うな重よりおいしいよ。」

ユリ

「あ・・・ありが・・・とう・・・」

大阪

和葉

「はい、平次！」

刃

「アタシ達からのチョコレート！」

平次

「あ、ああ、おおきに……」

毛利探偵事務所

哀

「やっと、やっとできたよ……」

コナン

「何ができたんだ？」

哀

「ウツヒヤアツー！！あ、コナン君……」

コナン

「おっ、それバレンタインのチョコレートか？」

哀

「う、うん……あなたにあげる……」

コナン

「少しは素直になりなよ？」

パクッ!

哀

「一言余計だよ……」

コナン

「そういえば、風月ちゃんは？」

哀

「用事があるからって、どっかに行っちゃった……」

風月

「バレンタイン、か……私には渡す相手なんていない……2年前の2月14日に殺されたんだから……だから、私はバレンタインデーなんて大嫌い……」

パクッ……

風月

「苦っ……」

ファイル180：姿なき誘拐犯『前編・1』

コナン

「真希ちゃん、それってきつと、君を誘拐しようとしてるんだよ。」

かたぎり まき
片桐真希

「えっ!?!」

哀

「人の気配を感じて振り返っても誰もいない。何度もそんな事あるなんて、おかしいわ。」

マリア

「ストーカーかもしれないな。」

元太

「とにかく、オレ達少年探偵団が真希ちゃんを守ろつぜ!!」

歩美

「ちゃんと家まで送っていきつね。」

たくま

「それが安全だな。」

元太

「でも真希ちゃんのお父さん、偉い刑事だろ。部下に守らせればいいんじゃないのか?」

真希

「確かな証拠がないのに、部下は使えないって。」

光彦

「警察は簡単には動きませんよ。そのためにボク達がいるんですから。」

真希

「！コナン君、私の家はこっちだけど？」

コナン

「今日はこの道から帰ろう。誘拐犯は真希ちゃんの行動を監視している。毎日同じ道を通ったら、人気のないところで待ち伏せしてるかもしれない。」

哀

「帰る道は毎回変えた方がいい。それに道路側は私達が歩く。真希ちゃんは道路から離れて歩いて。」

真希

「え？」

光彦

「道路側だと、誘拐犯の車に引っ張り込まれる可能性がありますね。」

ユリ

「誘拐が一番多いのは、路上なの。」

刃

「次に多いのが学校周辺。意外だけど、自宅も多いのよ。」

たくま

「それじゃ、気が抜ける場所がないな。」

風月

「ヤツらはたえずチャンスを狙っているからね。」

元太

「オレ達も油断できないな。」

キツ。

「・・・」

北杯戸商店街

歩美

「こんな人ゴミの中入って、大丈夫？」

コナン

「人が多い方が、誘拐犯は手を出しにくいんだ。(クソツ、気配はするのになかなか正体を現さない。)」

哀

「(よっぽど用心深いヤツか、誘拐のプロだね。)」

ヒタッ。

「フフッ、ござかしい真似を・・・」

真希の家

真希

「変だわ、もうベビーシッター来てもいいのに。」

コナン

「ベビーシッター？」

真希

「お父さんは長野県警に出張しているし、お母さんは法事で田舎に行ってるから、今日はベビーシッター協会から人が来るはずなの。電話してみるね。」

真希

「えっ、お父さんが仕事先から帰るから今日はキャンセルって？」

たくま

「お父さん帰ってくるんだ。」

コナン

「念のためにお父さんの携帯に確認してみて。」

真希

「え、いいけど・・・」

真希

「ウソッ、明後日まで帰らない!? そんな!」

哀

「もう一度ベビーター協会に頼みましょう。」

哀

「え、もう人手が足りないからダメだつて!？」

ユリ

「そうか、犯人は郵便ポストに入っていた郵便物を見たのよ。ベビーターを頼めば協会から請求書が来るでしょ？ 犯人はその封書を破いて、電話番号を見たんだわ。」

マリア

「それで真希ちゃんのお父さんの名前でキャンセルの電話をしたんやな。」

哀

「郵便ポストにはちゃんとカギをかけなくちゃ。」

コナン

「（しかし、相手はかなり調べ込んでいる!! 果たして、オレ達だけで手に負えるのか・・・!?!?）」

ファイル181：姿なき誘拐犯『前編・2』

コナン

「（しかし、相手はかなり調べ込んでいる！！果たして、オレ達だけで手に負えるのか・・・！？）」

歩美

「暗い気分になるのは、カーテンが閉まってるからよね。」

哀

「ダメよ！！！」

歩美

「え、どうして？」

刃

「相手はどこから見てるかわからない。カーテンなんて開けたら、中は丸見えや！」

コナン

「真希ちゃん、ビデオカメラ借りるよ。録っていいテープある？」

真希

「それいいよ。」

光彦

「どじするんですか？」

コナン

「犯人はきつとこの町のどこからこの家をのぞいているはずだ。ひよつとしたら、何か手掛かりが写るかもしれない。」

ジーツ・・・

元太

「それにしても、ハラ減ったな。」

ユリ

「もー、元太君！」

真希

「台所見てくるわ、何かあると思うよ。」

マリア

「ウチも手伝う。」

風月

「私も・・・」

元太

「それにしても、何も起きねえな。」

たくま

「起きたら大変だよ。そうならないようにオレ達がいるんじゃないか。」

リリリリリ・・・

光彦

「真希ちゃん、電話ですよ。」

コナン

「待って。」

ガチャ。

コナン

「はい、森田です。」

「クリーニング店ですが、お父さんかお母さんいる？」

コナン

「お母さんは買い物で、お父さんはおフロ。また後でかけてね。」

ガチャン。

元太

「なんでウソつくんだよ。誰もいないじゃないか。」

哀

「まだわかってないね。もし今のが誘拐犯だったら、大人がいないのバレるでしょ。」

元太

「あ、そうか。」

チン！

マリア

「真希ちゃん、チャーハンあったまっただで。」

真希

「他に何かないかなあ。」

ガサゴソ・・・

ニヤーンニヤーン・・・

真希

「いけない。ミケにもごはんあげなきゃ。」

マリア

「ほな、ウチこれ持っていくな。」

真希

「お願いね。」

風月

「私は真希ちゃんと一緒に外に出るわ。」

真希

「うん。」

ガチャ!

真希

「あわっ。」

風月

「少し寒いわね……」

真希

「うん。ミケ、どこにいるの。ミケ?」

風月

「(おかしいわ……どうして何も声が聞こえないのかしら……)」

ガサッ……

コツコツ、コツコツ……

ガサッ!!

真希・風月

「え……!?!?」

マリア

「はい、チャーハンやで。」

たくま

「あつたまるな。」

コナン

「あれ、真希ちゃんは？」

マリア

「裏庭のネコにごはんあげるって、風月ちゃんと外に……」

コナン

「何!？」

ダツ!!

コナン

「あつ。し、しまった!ネコを使って誘い出されたか!？」

タタタ……

コナン

「や、やられた……」

それからしばらくたって、風月は目を覚ました。

ガタガタと揺れる音で気がついたのだ。

風月

「ん……（ここはどこ……？私はいったい……そうか、思い出した……真希ちゃんと一緒に外に出て、2人でミケを探していたら、突然誰かに後ろから口を塞がれて……）！！」

風月はハツとして、自分と回りを見渡した。

すると風月の横には、気絶していてまったく動かない真希が、風月と同じように手足を縛られ、ガムテープで口を塞がれた状態で、転がされていた。

風月

「ムウッツ！！んっつ！！」

風月は拘束を解こうと必死にもがいたが、ムダな事だった。

風月

「（みんな……助けて……！！）」

哀

「な、何ですって！！」

歩美

「真希ちゃんがさらわれた!？」

コナン

「ああ・・・それに、一緒にいた風月ちゃんもさらわれたみたいだ・
・・・」

刃

「風月ちゃんまで・・・」

ユリ

「油断しすぎたわね・・・」

コナン

「クソウ・・・」

哀

「真希ちゃん、風月ちゃん、待ってて！必ず助け出してあげるからね！..!」

ファイル182：姿なき誘拐犯『後編・1』

誘拐の心配があるというので、クラスメートの片桐真希ちゃんを少年探偵団が守る事になった。

気配はするのに、相手はなかなか正体を現さない。

そんな時、飼っているネコにエサを上げるために外に出た真希ちゃんと、彼女と一緒に外に出た風月ちゃんが何者かにさらわれてしまった。

犯人はいつたい、どんなヤツなんだ・・・!?

ガタガタ・・・

風月

「んんう・・・(この揺れ・・・私達今、車の中にいるのね・・・)

」

キキッ。

風月

「(止まったみたいね・・・)」

ガチャ!

風月

「!!!」

「なんだ、1人は起きてるじゃないか。」

「お目覚めかい？お嬢ちゃん。」

風月

「うん、うん。」

風月はギッと、男達をにらみつけた。

「さて、この2人を運び込ませ。」

「ああ。」

ヒョイ！

男は風月と真希を背中にかついだ。

風月

「うん、うん！！」

ザッザッザッ……

コシコシ、コシコシ……

ピタッ。

ガチャ！

男2人は部屋に入ると、風月と真希を放り投げた。

ブン！

ドサツ！

風月

「ううっ！！（キヤツ！！）」

風月は真希の方を見つめた。

風月

「（真希ちゃん・・・）」

真希はまだ気絶している。

「それじゃ、おとなしくしてるよ。」

男達はそう言うと、部屋から出て行った。

風月

「（バカね・・・私がおとなしくしてるワケないでしょうが・・・）」

「

そうつぶやくと、風月はポケットに仕込んでおいたポケットナイフでロープを切った。

そして右手で口のガムテープをはがす。

ピリリ……

風月

「フウ……さてと、真希ちゃんの縄もほどかなきゃね。」

そう言うと、風月は真希に近づき、縄をほどいた。

風月

「真希ちゃん、真希ちゃん！」

風月は真希を揺さぶる。

真希

「あ……風月ちゃん……」

風月

「よかった、気がついたね。さ、アイツらが戻ってくる前にあなただけでも逃げて！」

真希

「え？でも、風月ちゃんが……」

風月

「私の事は心配しなくていいよ。自分でなんとかする……はい、これ。ディメンション：RINGのレスキューロープよ。」

真希

「ありがと……ゴメンね、風月ちゃん！絶対助けを呼んでくるから……」

そう言つと、真希は窓から脱出した。

風月

「フウ・・・これで真希ちゃんは大丈夫だわ・・・」

その時、部屋のドアが開けられた。

「おい、オマエ！」

「何やってる？」

「あ！人質の1人がいないわよ！」

風月

「え？」

風月は男達の後ろを見た。

すると、女が2人いた。

風月

「よ、4人もいたの！？誘拐犯・・・」

風月は驚いた。

「どうやら、この子がもう1人を逃がしたようだな。」

「さて、どうしようかしらね？この子・・・」

4人は風月をにらみつけた。

風月

「う・・・」

1VS4では、多勢に無勢だ。

風月は何もできず、4人によって手足を縛り上げられてしまった。

風月

「うっ、ほどいてよっ!!」

風月はジタバタともがいた。

「黙ってな。」

そう言うと、男は風月の口にガムテープを貼った。

風月

「んっ、んっ!!」

「さて、今から30分後に電話をかけるか。」

風月

「うっん、うっん!!」

それから30分後、真希は片桐家にたどり着いた。

ガチャ・・・

コナン

「真希ちゃん！」

哀

「無事だったのね！」

刃

「あれ？風月ちゃんは？」

真希

「風月ちゃんは私を逃がすために、囹になったの・・・」

ユリ

「そんな・・・」

次の日、片桐家に脅迫状が届いた。

目暮

「東杯戸駅に3時・・・子供に現金5000万円を持って来させるか・・・」

かたぎり まさよし
片桐正義 『真希の父・刑事』

「銀行をかけずり回って、現金は用意した。これで真希の友達を助けてくれ。」

かたぎり まさか
片桐円香 『真希の母』

「皆さん、お願いします！」

目暮

「片桐刑事、後は我々が必ず風月ちゃんを助け出します。」

高木

「尾行の刑事が後ろの車に大勢いるから、心配しなくていいからね。」

「

真希

「うん。」

高木

「混んでるな。」

真希

「もしかして、今日は駅前で祭りがあるんじゃない？」

高木

「じゃ、駅前までこの渋滞が続くって事か？」

千葉

「それでは、約束の3時に間に合いません。」

「車をそこで止めるー!!」

高木

「何!?!なぜヤツらは警察の極秘無線の周波数がわかるんだ。」

千葉

「警察無線解読機が闇で売られているのでしょうか？」

高木

「わからない。だがヤツにはこっちの動きが筒抜けだ！！」

「お嬢ちゃん、ガードレールのそばの自転車が見えるだろ。」

真希

「うん。」

「それを使って駅に向かえ。」

真希

「わかった。」

シヤアアアアア・・・

シュツ！

ガッ！

真希

「キャッ！ー！！」

ドサッ！

ザッ！

スッ!

「フフフ・・・」

ファイル183：姿なき誘拐犯『後編・2』

目暮

「何い、金を奪われただど！？すぐに駅前を封鎖だ！！」

歩美

「真希ちゃん、一向に帰ってこないね・・・」

元太

「まさか、犯人に捕まった・・・！？」

ジーツ・・・

目暮

「そのビデオに何か映っているのかね？」

コナン

「犯人が、この道路側に面した部屋をどこからか双眼鏡でのぞいているんじゃないかと思って、ずっと録画してたんだ。」

哀

「西日が双眼鏡のレンズに反射したのが映っていれば、その場所が割り出せるでしょ。」

目暮

「なるほど。」

ピカッ！

コナン

「光った!!」

哀

「あの5階建てのビルだわ!!」

目暮

「よし、行くぞ!!」

バン!

目暮

「クソッ、立ち去った後か!」

高木

「もともと空き部屋だったんですね。」

コナン

「相手はある意味プロだ。ぬかりはない。尾行でも正体を現さない巧みさ、完璧な誘拐・・・」

哀

「警察無線を盗聴できる技能を持ち合わせるヤツはそうはいない。だけど、具体的にそれがいったい誰なのかとなると・・・」

刃

「ん? ガラスに何か跡が残ってるわ。」

ユリ

「この跡って……」

コナン

「片づけるの手伝いしましょうか？」

「？あ、帝丹の君達か。いいよ、大丈夫だよ。」

光彦

「手伝われるとまずい事でもあるんですか？」

たくま

「アンタが自転車のスポークに警棒を入れて転ばせ、気を失った真希ちゃんをパトカーに連れ込んでバッグを奪った事は、お見通しなんだー！」

「何!?!」

マリア

「うまい事を考えたな。警察なら転んでケガをした少女を車に入れても、怪しまれへんからな。」

元太

「そしてアンタは、金の入ったバッグを三角ポールのどれかに隠した。」

「いったい、何を根拠に……」

コナン

「あなたが真希ちゃんの家を監視するために忍び込んでいた空き室にの窓に、証拠が残っていたんですよ。」

哀

「あのマンションの下の道は、真希ちゃんの通学路になってた。」

刃

「だけど道路は真下にあるため、額を窓につけないと真希ちゃんを監視できない。」

ユリ

「残っていたんですよ。あなたのそのまゆげの上のホクロの跡が、くっきりとね。」

歩美

「いたよ、真希ちゃん！車のトランクの中よ……」

グツタリ……

「クソッ！指紋を消して、完全犯罪になるはずが……」

コナン

「あつ。」

ガバッ！！

真希

「キヤツ!!」

「キサマらガキにオレの気持ちがわかるか!!オレとこの娘のおやじは同期だが、ヤツだけドンドン出世して、このオレはいつまでたつても交通整理の巡査だ!だからオレの本当の実力を見せてやったのさ。オレの考えた犯罪は完璧だ。その証拠に、ヤツら刑事は手も足も出なかった!!」

ガツ!

「アガーツ!」

スルツ!

コナン

「今だ!!」

ドッ!

ドゴォ!!

「ぐはっ!」

ドサツ!

哀

「あなたが証明したのは犯罪者としての素質で、警官としての素質じゃないわよ。」

その後、別の場所で待っていた3人も逮捕され、風月も無事に助け

出された。

コナン

「危なかったな、風月ちゃん。」

風月

「まあね……」

「……」

スツ……

風月

「え？」

ダッ！

コナン・哀

「ちよっと!」

刃・ユリ

「風月ちゃん!」

ダダダダ……

ピタッ。

風月

「ハアハアハア……今の影って……もしかして、サトシ……
!?」

ファイル184：もう1人の金田一ユリ『前編』

杯戸デパート駐車場

阿笠

「まったく！新一君と志保君の買い物長い事つたら……」

ユリ

「スースー……」

阿笠

「いつたい、いつまで……」

スツ……

ゴツ！！

「香花様を誘拐するとは、なんたる不屈き者！！」

鈴円リンエン

「夫の弟の仕業にちがいないわ。」

猛力マオリキ

「コイツを屋敷に連れ帰り、白状させますよ。」

ヒョイ！

鈴円

「香花……かわいそうに。」

コナン

「だいぶ待たせちゃった。」

哀

「きつと怒ってるわね。」

コナン

「！ユリちゃん、ゴメンね。」

哀

「待たせちゃって……」

シヤンファ
香花

「ユリ？」

レシ
恋邸

猛力

「も、申し訳ありませんでした！！」

阿笠

「だから何度も言ったじゃろ、この子はワシの家に居候している女

の子だつて!」

鈴円

「ええ、首の根元にあるはずのホクロがありませんから。」

阿笠

「天才発明家のワシを誘拐犯だとまちがえるとはな。」

猛力

「発明家?」

阿笠

「ああ、天才発明家阿笠博士とはワシの事じゃ。」

猛力

「あ、あの有名な!」

ユリ

「自分で言ってるよ……」

鈴円

「頭がキレる方なら、ウチの香花を見つけてください!」

阿笠

「ん?」

鈴円

「デパートで誘拐されたんですわ。犯人には見当が……」

トウルルル……

阿笠

「はい、もしもし・・・おお、コナン君か。何？ユリ君が妙な事言ってる？」

鈴円

「え？」

阿笠

「詳しい事は後で教えるから、その子をしっかり保護しておくように。」

ガチャ。

鈴円

「ありがとうございます。」

阿笠

「しかしコナン君と哀君までまちがうとは、よほどユリ君と香花君は似ていると見える。」

鈴円

「ええ、ビックリするほど！」

ユリ

「この世には、自分そっくりな人間が3人はいるって言われてるわ。」

阿笠

「しかし、なんでまた自分の娘さんが誘拐されるなど？」

鈴円

「私の夫は、恋という香港にあるIT会社を経営しています。」

阿笠

「えっ、あの華僑系IT大企業の方？」

鈴円

「ITの中でも、暗号ソフトで業界トップになったんです。」

ユリ

「インターネット社会はメールなどで簡単に文書をやりとりできるけど、ハッカーに簡単に中身を見られる恐れがあるよね？」

阿笠

「ああ。十分な知識があれば、簡単だからな。」

鈴円

「そこで、夫の会社は、大事な文書を非常に難しい暗号にして送るソフトを開発したんです。」

阿笠

「存じ上げてます。でも、その風王さんフウオンは先日亡くなったとか・・・」

鈴円

「ええ、その夫がこのような不思議な遺書を残していったのです。」

阿笠

「どれ・・・」頭に触手があるネズミ、ゴールはスタートの中にあ

る。机の壁紙を溶かし、真の跡継ぎとなれ！猶予は、ワシの死後一週間後だ。』か。さすがは暗号ソフト会社の社長だ。意味がさっぱりわからん……」

ユリ

「……」

鈴円

「でも香花がこれを解かなければ、会社を継ぐ資格なしという事で、資産及び会社は夫の弟と一緒に仕事をしてきた雷龍にゆずると遺書に書かれていたのです。」

ユリ

「（パステル画の肖像画とは、珍しいわね。普通、油絵だけど……）」

鈴円

「もう5日過ぎていますから、残りは2日です。」

阿笠

「香花君はその謎を解いたのですか？」

鈴円

「まだですが、香花が頭脳明晰な事は有名ですので、暗号を解く事を恐れた雷龍が邪魔するために誘拐までしてかしたのではと。」

阿笠

「なるほど、そういう事でしたか。わかりました。香花君は大事な跡取り……ここは、ユリ君を身代わりに立てましょう。」

ユリ

「ええっ！？（か、勝手な事言わないでよー！！）」

鈴円

「しかし、それではユリちゃんが危険な目に・・・」

阿笠

「大丈夫、この子はそう簡単に殺されるようなタマじゃありませんよ。」

ユリ

「でも・・・」

ポカッ！

ユリ

「イッタクい・・・」

阿笠

「心配するな！君の命が危なくなる前にワシが謎を解いてやる。」

ユリ

「絶対にありえない・・・」

鈴円

「ユリ様、この私からもお願いします！」

ギィ・・・

ユリ

「！」

雷龍ラウロン

「どうだね香花、お父さんが残した遺言の謎は解けたかな？」

ユリ

「イヤ、まだだけど。」

雷龍

「そうだろうとも。遺言の謎は長年兄と暗号ソフトを作ってきた私にとっても難しいもの。あきらめて財産をすべて私に渡し、この家を去れ。」

ガシッ！

ユリ

「痛っ・・・（そうか。私が遺言の謎を解かなければ、鈴円さんと香花ちゃんは家から追い出されてしまうのね・・・）」

阿笠邸

コナン

「でも、本当によく似てるね。」

ゴシゴシ・・・

パッ！

香花

「いいよ、自分でやれる。」

哀

「食事、香花ちゃんの口に合うかはわからないけど……」

香花

「とっってもおいしそう。いただきますー!」

ニコッ……

香花

「それと母から電話があったら、〴〵迷惑になるから何度も電話しないでって。私は大丈夫だからって言うておいて。」

コナン・哀

「あ、うん。」

コナン

「（大富豪の娘だから、相当ワガママな子だと思ってたけど……）」

哀

「（でも、ユリちゃんの方はうまくやってるかしら……）」

ユリ

「今日はどこに行くんだっけ？」

ロシア
六条

「土日はフランス語とドイツ語、そしてロシア語のお勉強ですが？」

猛力

「六条さんは、この屋敷の事一切を取り仕切っている執事長です。彼に変だと思われないうう、うまく立ち回ってください、ユリちゃん。」

ボソ・・・

ユリ

「だ、大丈夫。ちょっとボーツとただけ。・・・ん？」

タタタ・・・

ユリ

「（この足跡は・・・猛力さんの靴後とはちがう・・・）猛力、ボンネットの中ちよつと調べてみてくれる？」

猛力

「ええ、いいですよ。」

ガコツ！

猛力

「こ、これは！？ブレーキホースが外れて、オイルが漏れている！」

ユリ

「オイルが漏れていたら、ブレーキが効かない恐れがあるよね。この屋敷は高台だから、ブレーキが効かなければ大事故になるよ。」

六条

「な、なんて事だ！猛力、オマエは運転手を20年以上やっているのに、こんな初歩的なミスをするとは何事だ！！」

ユリ

「誰にでも見落としはあるわ。今日は、私がたまたま気づいただけ。それが証拠に、猛力の運転のおかげで、私は今日まで事故に遭わずにこうして元気でいられる。」

六条

「そ、それはそうですが・・・」

ユリ

「これからはチェック怠らないでね。」

猛力

「は、はい!!」

ユリ

「（昨日の夜、今の暖炉から灰を拝借して車の下にバラまいておいて、正解だったわ。だけど、これで香花ちゃんの命を狙っているヤツがいる事がハッキリした・・・）」

コナン

「あーあ、こんなにドロンコになるまで遊んでくるなんて。」

香花

「歩美ちゃん達とみんなでサッカーやってたの！うるさい執事やお母様に邪魔されなかつたから、思い切り遊べたよ！でもあのサッカー場、芝ならもっと安全なのに。ユリちゃんはいつも、あの子達や君達と遊んだりしてるの？」

哀

「基本的にはそうね。」

香花

「いいなあ・・・私は授業が終わると毎日寝るまで習い事と、将来会社を継ぐための勉強づくしなの。」

コナン

「うわあ、大変・・・」

香花

「ところで、私の身代わりになってくれるユリちゃんは大丈夫？」

哀

「えっ？」

ユリ

「（なんとか今日1日乗り切ったけど、明日1日しかないわね・・・）」

カツ・・・

ユリ

「!?!? な、何？」

ジリジリジリ・・・

ユリ

「か、火事だわ!!」

ガチャガチャ!

ユリ

「あ、開かない!!」

ドン、ドン!!

ユリ

「(ク、クソツ! 雷龍^{ヤツ}の仕業か!! 2回が出火場所なの? これじゃ、すぐ3階^{こゝ}も火の海だわ! このままじゃ私、焼け死んじゃう!! いったいどうすればいいの!!?!?」

ファイル185：もう1人の金田一ユリ『後編』

ユリ

「(クソ、ヤバイわね・・・この状況は。)」

ゴオオオオ・・・

ラッロン
雷龍

「(この火の勢いじゃ、逃げ切れまい。)」

ユリ

「(こんな所で、死んでたまるか!!!)」

スッ・・・

ユリ

「スピード：RING・マツハシューズ!!!」

ダンッ!

ゴオオオオオ・・・

ユリ

「ネイチャー：RING・スタングントンファー!!!シザードクロ
ス!!!」

バリイイイイン!!!

ザパン!!!

鈴円 リョウエン

「だ、大丈夫!？」

ゴボゴボ・・・

ユリ

「プハッ!！」

鈴円

「よかった、無事だったのね。怖かったでしょ。」

雷龍

「(ク、クソッ!)」

ユリ

「(このままじゃ、命がいくつあっても足りないわね。)」

ユリ

「・・・」

ガタン!

ユリ

「だ、誰!！」

シャンプア
香花

「ホントだ、よく似てる。」

ユリ

「香花ちゃん・・・？」

香花

「うん。」

ユリ

「な、何しに来たの！！あなたが来たら話がややこしくなるわ！」

香花

「あなたが2度も命を狙われたって聞けば、放っておけないわよ。それに、他人の命を危険にさらしてまで恋家の財産を継ごうとは思わない。そんな事しても、亡き父上は喜ばないはずだわ。」

ユリ

「（さすがだわ・・・）」

香花

「私は私自身で、遺書に残された暗号を解きたいんだ！」

ユリ

「確かに、あなたがいた方がこの謎は解きやすいかもしれないわね。」

香花

「父の遺書は、『頭に触手があるネズミ、ゴールはスタートの中にある。机の壁紙を溶かし、真の跡継ぎとなれ！』最初の2つは簡単だけど、最後の3番目が難しい。」

ユリ

「うん。さすが暗号を作るのを商売にしてただけの事はあるわ。」

香花

「そういえば、父が私によく日本に最初に渡った暗号の話をしてくれたわ。」

ユリ

「えっ、どんな暗号？」

香花

「昔は、朝鮮から届く大事な文書は鳥の羽に墨で書かれてたんだ。でも鳥の羽も墨も黒だから、誰にも読めなかつたんだって。だけどもある知恵者がその鳥の羽を湿気で温めて墨を溶かし、絹布を押し当てて文字を写し取り、読んでみせたって……」

ユリ

「（温めて溶かした！？そ、そうか！！）香花ちゃん、私を信じるなら、みんなの前でやってみてほしい事があるの。」

香花

「うん。私のために命をかけてくれたあなたの事なら、なんでも信じるわー!!」

雷龍

「兄の遺言を解いたというのは本当かね。」

香花

「うん。」

ユリ

「（ヤツをギャフンと言わせてやれ。）」

雷龍

「では『頭に触手のあるネズミ』とはなんだ？」

香花

「それは、パソコンで使うマウスの事よ。これが父さんのパソコンでこれがマウス。ほら、ネズミの頭からコードが伸びているように見えるでしょ。」

雷龍

「なるほどな。では『ゴールはスタートの中にある』とは？」

香花

「それはパソコン自体を指しているのよ。パソコンを終了する時は、スタートボタンをクリックして電源を切るでしょ？」

阿笠

「確かにそうだ！」

鈴円

「（この子、香花だわ！いつの間に・・・）」

香花

「一番難しかったのが、最後の謎の『机の壁紙を溶かし、真の跡継

ぎとなれ!』ってヤツさ。パソコンのデスクトップの画面は、通常壁紙と呼ばれているでしょ。」

雷龍

「ああ、だがパソコンの壁紙を溶かす事なんて不可能だぞ。」

香花

「でも、暗号に『ステガノグラフィ』ってのがあってのは知ってるよね?」

雷龍

「第三者には見せたくない事柄を、専用のソフトを使い写真や絵画などの中に埋め込んで隠す技術の事だ。外見も情報のサイズも変わらないが、専用のソフトを使えば中に書いてあるメッセージが読める。」

鈴円

「じゃあもしかして、夫はパソコンの壁紙に仕掛けを?」

香花

「うん、私も最初はそれを想像したの。でも専用のソフトで壁紙を見てもなにも現れなかった。」

雷龍

「当たり前だ、それはオレもとっくに試したさ!」

香花

「そっか。でも壁紙の元になった、この肖像画は調べてなかったのね。」

雷龍

「な、何！？」

ユリ

「（いいわよ！ここからが勝負だわ！！）」

香花

「この絵はパステルで描かれている。パステルは顔料をゴム糊のりで練ねって棒状にしたもので描くから、熱を加えても溶けないのよ。けど、オイルパステルは蝋ろうやオイルを含んでいるから、熱を加えれば簡単に溶け出す・・・もしこの絵のある部分が、オイルパステルで描かれていたとしたら？」

サツ！

ゴオオ・・・

ドロツ・・・

スツ！

ギユツ！

香花

「ほら、叔父さん。肖像画に埋め込まれた文字が転写できたよ。読んでみて。」

雷龍

「・・・『おめでとう。君が恋家の正式な跡取りだ』・・・クツ、クソーツ！」

パシッ！

香花

「（サンキュ、ユリ。）」

ニコッ！

香花

「私の車のブレーキオイルホースを外させたり、私の部屋の下に放火させたのは、叔父さんの命令でしょう。」

雷龍

「な、何を証拠に・・・」

香花

「執事の六条が全部白状したよ。」

雷龍

「な、なんだと!?!」

六条

「申し訳ありません！雷龍様から多額のお金を渡されて血迷ってました。けどどやはり、この恋家の跡取りは聡明さから申しましても香花様以外ありえませ！今あなたもそれを実感したはずです!!」

雷龍

「クソッ、今さら裏切りやがって!!」

ダッ！

ユリ

「ネイチャー・RING・スタンガントンファー!!!」

ダンッ!

ガガンッ!!

雷龍

「わっ!!」

ドサッ!

鈴円

「ユリちゃん。」

ユリ

「さすが母親ね。わかってたんだ。」

鈴円

「いくら似ててもしゃべればわかるわ。ユリちゃん、これで安心して親子一緒に暮らせるわ、ありがとう!!あなたは、香花と恋家グループの命の恩人よ!!」

翌日・・・

元太

「しかし、驚いたよな。グラウンドが一夜で芝生になってるんだから。」

歩美

「これで思いっきりサッカーができるね。」

コナン

「きつと香花ちゃんのおかげだね。」

ユリ

「香花は勉強のために香港に帰っちゃったけど、帰る前にこのまま入れ替わってくれて頼まれて困っちゃった。」

哀

「世界で五本の指に入る大富豪になれたのに、もったいないわね。」

ユリ

「ハハツ、そう言われればそうね。(でも、私にはそんなの魅力的じゃないのよ。確かに阿笠博士は世話が焼けるし、大富豪の生活は何の不自由もないでしょうけど・・・お金では買えないものが、ここにはあるからね!!)」

大阪

寝屋川霊園

ソツ・・・

刃

「また墓参りに来たよ。茂君、七美ちゃん・・・」

スツ・・・

「リアンさん・・・なぜ、ここに・・・？」

刃

「ここに来れば会える気がしたのよ・・・会いたかったわ。風月ちゃん
の彼氏、常盤暁君・・・」

とまきわ さとし
常盤暁

「・・・」

ファイル186：風月の恋人・常盤暁

刃

「ここに来れば会える気がしたのよ・・・会いたかったわ。風月ちゃん
の彼氏、常盤暁君・・・」

常盤暁（7）

「よくわかりましたね・・・ボクが生きている事を・・・」

刃

「そりゃあ、わかるわよ・・・現場に残された髪の毛の色・・・よく調べてみたらあなたのとちがってたしね・・・あれ、あなたの双子の弟、茂君のでしょ？」

暁

「さすが、DNA鑑定をやらせたらFBI捜査官1だけありますね・・・」

刃

「それほどでも・・・それより、聞きたい事があるんだけどいい？」

暁

「ん？」

刃

「どうして、風月ちゃんと会わないの？」

「それは……」

刃 「『それは』じゃないでしょ！！風月ちゃん、あなたが死んでいる
と思っで、『バレンタインが大嫌いだ』って言ってるのよ！！」

「風月が……？」

刃 「お願いよ、暁君……風月ちゃんに会っであげて……このま
まじゃ、風月ちゃん……かわいそっだよ……」

「確かに、ボクも風月には会いたいよ……」

刃 「だ、だったら……！！」

「でも、今は会えません……」

刃 「ど、どうして……？」

「ボクは今、単独で追っでいるヤツらがいるんです。そしてこの間、
ソイツらの手がかりをやっどつかみかけたんです。リアンさんも」

存じですよね？」

刃

「ええ……『アイツら』の事ね……」

暁

「ソイツらを倒すまで、風月に会うワケにはいかないんです……」

刃

「わかったわ。あなたがそうまで言っんなら、アタシからはこれ以上言わない……」

暁

「あ、リアンさん……」

刃

「え？」

暁

「すぐに連絡を取り合えるように、お互いの携帯番号とメールアドレスを登録しておきましょう。これから先、何があるかわかりませんから。」

刃

「わかったわ。じゃあ、これがアタシの番号とアドレスよ。」

ピュピュピュ……

暁

「完了しました。」

刃 「じゃ、お互いがんばりましょ。」

暁

「はい。」

ブーツ、ブーツ・・・

刃

「来たわね、メール・・・」

パカッ・・・

『リアンさん、風月の事は頼みましたよ。アイツはああ見えて、けっこうデリケートですから・・・』
常盤 暁『

刃

「風月ちゃんの事は任せといて・・・」
『いつくしみのミロカロス』
・・・

ファイル187：ホワイトデーの騒動『前編・1』

刃

「暁君には『風月ちゃんの事はアタシに任せて!』なんて軽々しく言ったけど・・・これからどうしよう・・・」

暁との接触から数週間後・・・

現在、3月12日。

2日後には、ホワイトデーが控えている。

刃は服部邸の自分の部屋で、考え事をしていた。

刃

「よし、そこよ!ムクホーク、インファイトよ!」

おいおい、こんな時にDSやってる場合か、リアンちゃん?

刃

「ゲツ、あまり効かない・・・相手がドラピオンだから・・・」

ピロピロ・・・

刃

「あー、こおりのキバでムクがやられた!!--どうしよう?」

その瞬間、刃はひらめいた。

刃

「あ、そっか！いつけえ、ドータクン！！」

ピコピコ・・・

刃

「やっぱりね！ドータクンははがねタイプだからどくタイプの技であるクロスポイズンを無効化するし、ドラピオンの他の技もあまり効かない・・・今だわ、じしん！！」

ピッ！

刃

「よっしゃあ、1人目を撃破したわあ！やっぱり、守りが固いドータクンで攻めるとうまくいくわね！・・・ん？ああ、そっか！ムリに力で押そうとするから、何事も失敗するんだ！まして、相手はゲームの中のポケモン達じゃなく、風月ちゃんだもんね！よし、いい策が浮かんだわ！」

翌日

帝丹小学校

風月

「……」

クタク……

刃

「……（なんか、日に日に元気がなくなっていつていつて感じね・
・早くなんとかしなきゃ……）」

トントン！

風月

「ん……刃ちゃん……」

刃

「風月ちゃん……学校が終わったら、アタシの家に来ない？まあ、
アタシの家と言っても実際には平次の家なんだけどね。」

風月

「うん、お言葉に甘えるわ。お母さん、ジンの指令を受けて昨日か
ら外国に出かけてるから、1日中ヒマでヒマで……」

刃

「じゃ、学校が終わったらすぐにね。」

放課後……

刃

「さーて、終わった終わった！さ、行くよ風月ちゃん！」

風月

「う、うん。それはいいんだけど・・・どうして私達、屋上にいるの・・・？この辺にはバス停もあるし、タクシーだって・・・」

刃

「何言ってるの？アタシ、いつもそんなもの使ってないわよ。」

風月

「へっ・・・？」

そう言うと、刃は風月を背中に乗せた。

ヒョイッ！

風月

「わわっ！」

ドンッ！！

刃は空高く飛び上がった。

キョロキョロ・・・

刃

「大阪寝屋川市は・・・あの辺りよね・・・では、そろそろ・・・」

キュイイイ・・・ン・・・

風月

「ちがうわよ！私、7年間生きてきて、生まれてこの方、『人の背中に乗って空を高速で飛んだ』なんて事一度もなかったわ！！」

刃

「伊豆で松葉ちゃんに乗ったじゃん。」

風月

「あ・・・そういえば・・・って、そうじゃなくて！どうしてあんなメチャクチャな移動の仕方するのよ！！」

刃

「だって、タクシーや電車、バスじゃ時間かかるんだもん。こっちの方が手っとり早いし」

風月

「・・・私、もう何も言い返せません・・・」

刃

「さて、こんなのではないけど・・・ポテチどうぞ。」

風月

「ありがと。」

モグモグ・・・

刃

「ねえ、風月ちゃん。1つ聞いてもいい・・・?」

風月

「何?」

刃

「もし、死んだと思っていた常盤暁君がまだ生きていたら・・・
・どうする?」

風月

「え・・・」

ファイル188：ホワイトデーの騒動『前編・2』

刃

「もし、死んだと思っていた常盤暁君がまだ生きていたら・・・
・どうする?」

風月

「・・・」

風月はしばらく沈黙している。

やがて、風月が口を開いた。

風月

「会いたいよ。そして、ちゃんと告白したい・・・『私は2年間、
あなたの事を待ってたんだよ』ってね・・・」

刃

「なーんか、風月ちゃんにもようやく春が来たって感じね!」

風月

「ありがと、刃ちゃん。あ、そうだ!家から何かおいしいもの持っ
てくるよ。」

刃

「じゃあ、待ってるね。」

風月

「うん。」

それから1時間後、風月は兵庫県にある自分の家に戻ってきていた。

風月

「冷蔵庫に昨日のブリ大根を取り置きしてたんだよね。刃ちゃん、喜んでくれるかな・・・ん？」

風月は少し変だなと思った。

風月

「カギが開いてる？私、カギ閉め忘れたっけ？そんなワケないよね・・・じゃあ、いったい・・・まさか・・・」

風月はしばらく考えた。

風月

「ま、そんなワケないわよね。」

風月は自分の考えを否定し、家に入っていった。

しかし、それがまちがいだっただのである。

風月

「あつた、あつた。ちゃんと冷蔵庫に料理入ってる！さてと、お金
がけっこう減っちゃったから、私の部屋からサイフ取って来なきゃ。
・・・」

風月は2階に上がっていった。

ガチャ！

風月

「え？」

風月はその瞬間、硬直した。

風月の部屋には、見知らぬ男がいたからだ。

「・・・見たな。」

風月

「あ・・・（これって、スゴくまずい状況じゃない！！たぶん、こ
の人って泥棒よね・・・？け、警察に連絡しなきゃ・・・！！）」

風月は急いで部屋を出たが、次の瞬間、体がフワリと持ち上がった。

風月

「キヤアアア！！」

そう、泥棒は2人組だったのだ。

そのうちの1人に、風月は羽交い締めになされてしまった。

風月

「は、放して〜っ!!」

風月は必死に暴れた。

「おとなしくしろ、お嬢ちゃん。」

キラリ・・・

風月

「ヒッ!」

風月は首筋にナイフを突きつけられた。

風月

「うう・・・」

風月にはもう、暴れる事はできなかった。

男達は、リビング内を物色していた。

そのリビングの床に、風月が転がされている。

風月は手足をロープで縛られ、口をガムテープで塞がれていた。

風月

「うっん、うっん!!」

風月はロープをほどこうと、必死にもがいている。

風月

「うっん!!」

しかし、ロープはキツく結んであるらしく、ビクともしなかった。

「さてと、金目の物は手に入ったが、このお嬢ちゃん、どうする?」

風月

「!?!」

「顔を見られてるし、もうちょっとオレ達につき合ってもらおうか。」

そう言うと、男は風月の口のガムテープをはがし、風月が叫ぶ前にハンカチで口を覆った。

風月

「うっん……」

風月は倒れ、気絶してしまった。

男は風月を背中に担ぎ上げると、仲間と共に外に出た。

そして、裏手に止めてあった車のトランクに風月を押し込むと、何
食わぬ顔で車を発進させ、その場を後にした。

ファイル189：ホワイトデーの騒動『後編・1』

どれぐらいの間、気絶していたのだろうか。

ようやく目が覚めた風月は、体を少し起こしてみた。

ゴン！

風月

「〜！！（イッター！！こ、ここは？）」

風月は辺りを見回してみる。

風月

「（どうやら、私は車のトランクの中みたいね。薬で眠らせた後、ここに押し込んだんだわ・・・）」

そんな事を考えていると、突然車が止まった。

風月

「（犯人の隠れ家に着いたのかしら・・・）」

すると、トランクが開けられた。

「お目覚めか、お嬢ちゃん？」

風月

「うん、うん。」

「もうしばらくオレ達につき合ってもらおうぜ。」

そう言うと、男は風月をかつぎ、建物の中に入っていった。

その頃、刃は服部邸で風月の事を待っていたが、いつこうに風月は戻ってこない。

刃

「変ねえ……いつこうに戻ってこないなんて……ヒマだなあ……あ、そういえば平次が、最近空き巣が多発してるっていったよね……ま、まさか風月ちゃん……」

その時、刃の探偵バッジが鳴った。

ピピピ……

刃

「風月ちゃんからだわ！風月ちゃん、どうしたの？」

風月

「ゴメン、刃ちゃん……私、空き巣に入ってきた2人組に捕まってるの……」

刃

「や、やっぱり……それで、あなた今どこに？」

風月

「ここは、吹田市にある変な倉庫・・・キャ〜ッ!!」

刃

「ふ、風月ちゃん!？」

「ほーう、子供のクセに面白いオモチャを持つてるな・・・」

刃

「アンタ、誰!？」

「オレは、この子の家に押し入った空き巣だよ。」

刃

「な、なんですって・・・あ、風月ちゃんは!？」

「心配するな、この子は今相棒が口を塞いでいるだけ。何も危害は加えてない。」

風月

「う〜っ、う〜っ!!」

刃

「アンタ達、何が目的なの?」

「オレ達空き巣は、金が手に入れば手段は選ばん。そうだ、ちょうどいい。お嬢ちゃん、オマエが身代金を用意しろ。」

刃

「な、なんですって!？」

「この子がひどい目にあってもいいのかな？」

刃

「う……わかったわ……」

「よろしい。3時間後、吹田市倉庫に身代金3000万を持ってこい。警察に知らせれば、娘の命はない。」

刃

「わかったわ、必ず持っていく。その代わりに、風月ちゃんには危害を加えないで……」

「ああ、わかってるぞ。」

ピッ。

バッジを切った後、男は風月を薄暗い部屋に押し込め、カギをかけた。

「しばらくそこでおとなしくしているんだな、『マルサーラ』……」

風月

「んっ、んっ……」

刃は銀行に向かい、自分の口座からお金を引き出していた。

刃

「身代金は30000万か・・・少しおこづかいが減ったわね・・・でも、これも風月ちゃんを助け出すためだもの・・・安いものよね・・・」

お金をバッグに入れ終わると、刃の目つきが変わった。

刃

「待ってて、風月ちゃん・・・必ず助け出してあげるから・・・」

ファイル190：ホワイトデーの騒動『後編・2』

刃

「さて、お金の方は準備できたけど・・・どうやって持っていこうかしら。バッグ重たいし・・・やっぱりかっいでいこう。」

そう言うと、刃はバッグを背中にかついだ。

そして、吹田市倉庫に向かって走り出した。

刃はバッグを抱えた状態で、吹田市内を走っていた。

刃

「ハアハアハア・・・」

しばらくして、古びた建物が見えてきた。

刃

「ここに、風月ちゃんが・・・」

刃は中へと入っていった。

風月は薄暗い部屋の中で、ロープを解こうと体を揺さぶっていた。

風月

「んっ、んんう……」

しかし、しょせん子供の力では縄はビクともしない。

風月がうつむいていると、誰かの声が聞こえてきた。

刃

「風月ちゃん！どこにいるの〜!？」

風月

「（刃ちゃんだ……）」

風月は体を引きずって、ドアの方へと行こうとする。

すると、何やら声が聞こえてきた。

「あの娘、のこのこやって来やがったな……」

「返り討ちにしてやるっぜ……」

風月をさらった、あの2人組だ。

階段を下りている音が聞こえる。

風月

「（た、大変だわ！刃ちゃんを助けなきゃ・・・）」

風月はそう思い、いつそう強く暴れた。

だが、彼女は知らなかった。

刃が恐ろしく強い女だという事を・・・

刃

「それがあなた達の本気なの？そんなんじゃアタシ、レベル4の力でもあなた達に勝てるわよ。」

「テメエ、ナメるなよ！！！」

「オレ達を誰だと思って・・・」

ゴスツ！！

「ガッ・・・」

刃

「知らねーよ、アンタらが何者なのか・・・それにそんな事興味もねー。」

「チッ・・・オレ達は・・・」

「緑の組織の刺客だーっ!!」

ダダダダダ・・・

ドカツ!!

「ガハツ・・・」

ドサツ・・・

刃

「へー、緑の組織の刺客だったの・・・発言ありがとね。それじゃあ、仕上げと行きますか・・・」

そう言うと、刃は倒れている2人に近づくと、2人の足首をつかんで持ち上げた。

ガシッ!

グググッ・・・

刃

「ジャイアント・スイングウ!!!」

グルグルグルグル・・・

ブンッ!!

ヒュー・・・

ドッカーン!!

シューウウウ・・・

刃

「や、やりすぎたかしら・・・でもまあ、これでボスにいい手みやげが・・・ん？」

ボロツ・・・

ガシヤン!!

刃

「コ・・・コイツら・・・傀儡にんぎょうだわ!!」

ガチャ!!

刃

「風月ちゃん!!」

風月

「んっ、んんうんうん!! (や、刃ちゃん!!) (」

風月

「あいがとう、刃ちゃん……」

刃

「ええ。それにしても……いったい誰が、あんな物を……」

萩^{はぎ}

「チツ……壊されたか……さすがはリアン・ハートネスだな……」

阿笠邸

コナン

「そんな事があったのか……」

哀

「またアイツらが襲ってきた時、今のままの私達じゃおそらく負けるわ……」

刃

「そうね……だから決めたのよ……アタシがあなた達を強くし

てあげるとね！…！」

ファイル191：イズナの覚醒『前編』

刃

「よし、ここまでくれば大丈夫でしょ。」

刃の前には、コナン・哀・イズナ・ユリ・風月の5人が集まっていた。

哀

「刃ちゃん、これから先、私達はどうすればいいの?」

刃

「これをつけなさい。マジックボール。イズナの力の源よ。」

カチ・・・

哀

「どっやって使うの?」

刃

「そこから先は・・・自分で考えな。」

ジャラ・・・

刃

「デイメンション：RING・・・『試練の扉!』」

ウオオオン!

ガコン！

コナン・哀・イズナ・ユリ・風月

「う・・・うわあああ！！！」

バタン！

シュツ！

ポウン！

リアン

「明美さんもこれで強くなっていった。どうなるかはあなた達次第よ！」

哀

「コナン君！あのカワイイのまた出して！」

コナン

「うん。えい！」

ボン！

哀

「カッワイー！！！」

コナン

「ガーディアン：RINGで『フレアマムン』っていうの。オレは『フウちゃん』って呼んでるけど。」

哀

「本当にカツワイー！！がんばろうね、コナン君！！」

コナン

「うん！」

イズナ

「うっ！あ・・・あれ？私の体・・・何か変だわ！！」

哀

「（イズナちゃんの体が光ってる！？）」

カツ！！

哀

「イズナちゃん！！」

リアン

「あの子は過去、何人もの仲間を殺した：RINGだ・・・生かすも殺すもあなた次第さ。シエリー。」

イズナ『マジックボールに入力されていた・・・能力データは全て
消去されています。新しい能力データを入力してください。』

コナン

「能力データ？入力・・・！？」

哀

「（ちがう！いつものイズナちゃんじゃない！！）に、入力って何
の事！？」

イズナ『：RING』イズナ』の特殊能力をあなたが想像し、創造
するのです。新しい能力データを入力してください！』

哀

「特殊能力を・・・想像して創造？どういう意味？」

イズナ『頭の中で新しい能力を創り上げてください！その時イズナ
は・・・その思うがままの姿となり、力を発揮する事となるでしょ
う。あなたの持つ『想像力』が強大であれば・・・そのまま『創造
された能力』は比例して強くなります。さあ、1つ目のボールの力
を・・・想像し入力してください！！』

コナン

「イズナちゃん・・・やつぱりスツゴい：RINGだったよ！つま
り・・・：RINGの力を自分の思うままに創れるんだ！！」

哀

「ダゴンが昔、どんな能力を想像して使ったのかわからない。でも、その時とはちがうイズナちゃんになるって事だよね？決めたよ！一つ目の能力！！」

イズナ『あなたの頭の中の想像を入力しました！！変形します！！』

哀

「（いくわよ……新しいイズナちゃん！！）」

キイイイン……！！

ファイル192：イズナの覚醒『後編』

シューウウウ・・・

イズナ

「えっ！？何！？アタシなんで・・・哀ちゃんの右腕になってるの
！？」

コナン

「哀・・・それ・・・何？」

哀

「イズナちゃんのバージョン【1】！『ハンマー』だよ！」

コナン

「意外と・・・シンプルだね・・・」

哀

「実戦向きと言って、コナン君！ちょっとした隠し技もあるのよ！」

コナン

「さーて・・・そろそろ出てくるんじゃない？リアンちゃんの『^{ジャー}兵^{ンル}隊』が！」

ズン！

オオオオオ・・・

コナン

「この魔力・・・初級の上ランク程度のガーディアンだね！じゃあ、お先に！」

ダンッ！

ガシャガシャ！

コナン

「（たくさんの・・・フウちゃん！！）」

カアッ！

ドカドカドカン！！

哀

「あ、あれがあのコナン君なの！？なんか・・・スゴい・・・！！
よーし、私も負けてられないわ！！」

哀達が試練の扉に入って2日後・・・

フランスの漁港近くに、ペンデュラムアッドのトードとトレイクが現れていた。

ザン！！

ズバアッ！！

ゴオオオオ・・・

カナダ

某城

「へ、兵達が石に・・・何者がこれを!？」

「緑の服の女がたった1人!仮面をつけておりました!後、宝物庫にあった全ての:RINGが、根こそぎ奪われております!!代わりになんか物が・・・!!！」

「 「 「

「ペンデュラムの・・・紋章エンブレム!!!!！」

アフリカ

テイターン『フオツフオツフオツ・・・』

ブラジル

サイクロプス『いい射撃訓練になるねえ・・・』

イフリート『アタイにも少しは獲物を残しといてよ!』

サイクロプス『了解!』

西杯戸

「た、確かにこの店にいた!少女の:RINGを連れて5人組!」

瑛美

「サンキュー (まだこの近くにいな?シエリー。今度は・・・殺すよ。)」

シュウウウ・・・

コナン

「何これ！？哀ー！！」

ドレイク『チエツクメイト・・・』

リアン

「（今日で3日・・・さすがに眠いわ・・・）」

「見つけた！！」

リアン

「！！」

瑛美

「リアンちゃん！さすがはFBIだよー。魔力、意識的に封じ込めてたでしょ？見つけるのに苦労しちゃったよお。」

リアン

「何しに来た、瑛美！また、くらわされたいか？」

瑛美

「シェリー、どこ？」

リアン

「・・・さあて？知らないな。その辺で泳いでんじやないの？」

ズバツ！！

瑛美

「今日は反撃しないの？だからって容赦はしないけどね。」

リアン

「ずっと一人で退屈してたのよ。いい眠気覚ましになるわ。来なさい。」

瑛美

「アタシ・・・やっぱり君嫌いだわ。その女の余裕って顔さ・・・泣き顔にしてあげるよ。」

ギャルアツ！！

リアン

「（哀ちゃん達が帰るまで、ここは・・・死守する！！！！）」

ファイル193：敵の襲撃・待つリアン

哀達が『試練の扉』に入って3日目・・・

リアン

「(デイメンション：RING『テオハンマー』！！特殊能力は『一定空間の凝固』！！)」

カアツ！！

ボボボボム！！

ヒュヒュンツ！！

リアン

「チツ！！」

ザンツ！！

瑛美

「さすがにアンタの第六感でもこれ全部は見極められないでしょ？ シェリーっていうより、アンタ用に今回はちがう：RINGを持つてきたんだ。あの時使ったパイソンチェーンは2本・・・ウエポン：RING『キラージェリー』。左右合わせて8本！！しかも、再生能力付きね。シェリー・・・どこ？」

リアン

「その辺でハイキングでもしてるんじゃないの？(今の反撃で・・・限界か・・・)」

ザ・・・

瑛美

「まあまあ リアンちゃんは前の戦争経験者だから、ウチらの階級制つてご存じだよな。ちなみに私は『ルーク』。上のクラス狙ってるけど・・・まあ今はまだ下の方って事だね。アンタの強さ、魔力は・・・ウチのクラスでいうと・・・ナイト級。8年前にあのドレイクと引き分けたっていう伝説もある実力者だ！でもなんでだろうね？今はルークの攻撃も見極められない！考えられる理由・・・アンタはなぜかそこから動いていない。それもここ数日の間！食べる物も食わず、飲む事もしていない。そして・・・眠っていない。：RING使いだってエスパーだって人間だからねえ。最悪の体力時は集中力だつて低下する。集中力が欠ければ：RINGとのシンク口もうまくはいかない。つまり、魔力の低下だ！今のアンタは・・・」

ー

ヒュッ！！

ガクン！！

リアン

「くっ・・・！！」

ドカ！

バシユ！！

ザン！！

瑛美

「ルーク級！そうなってしまっている事への疑問・・・どうしてその場から動かないのか？『動かない』じゃないよね。『動けない』んだ。アンタは何かを守ってる・・・そう、たとえば・・・アンタのその後ろにある・・・扉！ね」

ギシィィ！！

リアン

「そんなサルでもわかるような事、得意気にのべとんとちゃうぞ！興味があるんやったら開けてみな！！動けないアタシをブツ倒す事ができたらね！！！！」

ヒュヒュヒュッ！！

ザンツザンツ！！

リアン

「（哀ちゃん・・・）」

8年前・・・

リアン

「平和を取り戻すためには、ペンデュラムアッドを倒さなきゃいけない。明美さんにその覚悟はあるかしら？」

明美

「任せてよ、リアンちゃん。アタシは強くなる。ペンデュラムアツドとかいうの倒してみせるよ。」

リアン

「口だけならなんとでも言えるわ。とりあえずアタをこれから試練の扉に放り込む！しっかりやってよ。」

明美

「大丈夫よ。アタシならね・・・」

「フーン・・・そう・・・メアリードの皆ぶっ壊したアホウは・・・落とし前をつけなきゃいけないよねえ・・・それがたとえ『ペンデュラムアツド』とかいう集団でも・・・自分には関係ないわ!!」

グシャ・・・

ガク・・・

瑛美

「これでフィニッシュ!!」

ドウー!!

リアン

「・・・」

ヒュッ!!

ザンザンザンザンザンッ!!

瑛美

「!?!」

リアン

「フッ・・・」

コナン

「ただいま、リアンちゃん。」

哀

「・・・」

ファイル194：灰原哀VS本堂瑛美

瑛美

「おおつ、シエリー！！待ってたわ！！アンタと会う……。！！
（ちがう。この魔力、別人……。！？バカな！！）」

哀

「……。ちよつと。リアンちゃん。どうしてやられっぱなしなのよ
！！あなたの力だったら！そんなボロボロにはされてないでしょ！
！？」

コナン

「ちがうんだ、哀……。リアンちゃんは……。動きたくても動けな
かったんだ。デイメンション：RINGの『試練の扉』……。完全
な状態で戦ったり動くためには、この力を：RINGに戻さなきゃ
いけない。でもオレ達がいる状態に戻していたら、オレ達
は異空間の中で永遠にさまよう事になっていたよ。リアンちゃんは
守ってくれていたんだよ。オレ達を信じて……。待ち続ける事で・
」

リアン

「哀ちゃん……。待ってたわよ。」

哀

「ただいま。ありがとう、リアンちゃん。後は任せて。コイツらは
私が倒す！！」

ザ・
・
・

瑛美

「アンタは動くな。私の獲物だよ。」

ドゥツッ!!

哀

「いくわよ、イズナちゃん。」

イズナ『うん!!!!』

コナン

「見ててね、リアンちゃん。哀がイズナちゃんをどう想像したか！」

コナン『ハンマー？意外とシンプルだね。』

哀『実践向きと言って、コナン君！ちょっとした隠し技だってあるのよ!!!!』

ザンザンザンザンツッ!!

哀

「バージョン【1】 - B!!ブレイブダガー!!」

リアン

「ホウ。」

コナン

「あれが1つ目のマジックボールの能力『スピリットハンマー&ブレイブダガー』!!2つの顔を持つウエポン：RING!!」

瑛美

「やるね!!でもキラージェリーは何度でも再生するのよっ!!」
ウンツ!!

哀

「バージョン【2】!!『シャボンガトリンガー』!!!!」

ドンツ!!

瑛美

「イズナが・・・分身!?イヤ・・・これはシャボン玉!!!?目くらましのための技か・・・!?邪魔・・・くさいのよオ!!!!」

ボンボンボンツ!!

瑛美

「ば、爆弾・・・!!!?」

コナン

「どう、リアンちゃん!!」

リアン

「フム・・・（近距離用のバージョン【1】と遠距離用のバージョン【2】ってところか・・・哀ちゃんったら、かなりメチャクチャな力を創造したわね!!）」

ザン!!

瑛美

「!アンタ・・・何者?」

哀

「ペンデュラムアツド・・・一人目エ!!!!」

ドゴオ!!

瑛美

「ガッ・・・!!!!」

ファイル195：残酷な制裁

瑛美

「！アンタ・・・何者？」

哀

「ペンデュラムアッド・・・一人目！！！」

ドゴオ！！

瑛美

「ガッ・・・！！！！！」

ザザザザ・・・

瑛美

「ゴホッ・・・（ウソでしょ・・・あの時からたったの数ヶ月よ！
？今のシェリー（コイツ）のクラス・・・ビショップ級はある！！
！）」

ウン・・・

哀

「！！」

ユリ

「たっただいま。」

風月

「久しぶりね、哀ちゃん。」

コナン

「2人とも、帰ってきたんだね!」

フィズ(?????)

『ペンデュラムアッド構成員

』クラス!」

ポーン!」

「ホーリー：RINGで回復してください、キュラソー。それまでの間・・・時間を稼ぎます!」

ドン!

瑛美

「やめときな、フィズ!アンタのかなう相手じゃないって!」

フィズ

「百も承知。しかしあなたを護らねばならない。あなたはいずれナイト級になるであろう素質があります。ここで潰されたくないのですよ。せめて、2人・・・あそこにいる小娘2人なら!」

ドンッ!」

ユリ・風月

「ネイチャー：RING』マジカルウェイブ!」!」

ゴッ!」

フィズ

「うわっ……あああーっ!!」

ドサツ……

瑛美

「……シェリー。取り引きをしましょう。ホーリー：RING』
愛しの天使』！これはある程度まで痛み、傷を治す！これをフィズ
に使わせて。要求を飲むなら……これをくれてやってもいい。」

リアン

「その子……ただのポーン兵じゃないの？ペンデュラムアッドと
もあろう人間が情け深いわね。」

哀

「いいわよ!!それ使えばあなたのケガも治せる。いいよね、リア
ンちゃん?」

リアン

「……フン。甘い子ね!」

ポウ……

フィズ

「申し訳ありません……キュラソー。」

哀

「男の子……」

瑛美

「シェリー!今回は負けよ。だけどねえ……次はそっちの番。私

はもつと上に行く！アンタにできたのなら、私にできないワケはない！！またアンタの前に現れるわ！忘れるな、シェリー！！！！」

ブン……

リアン

「ひとまず、危機は脱したけど……これからが本番よ。まずは緑の組織を倒す！！アタシが調べたところ、緑の組織は怪盗キッドやレディーとも因縁がある組織らしい！覚悟を……う。」

ドサア！！

哀

「リアンちゃん！！しっかりして！！」

リアンは刃の姿に戻り、一週間寝込んだ……

だが、緑の組織の魔の手が近づいている事に、哀達は気づくはずもなかった……

ペンデュラム城

ドレイク『……勝手な行動したんだってなア……キュラソー……
・しかも……例の小娘に負けて帰ってくるとは……制裁が待っているぜ。』

ジャラ・・・

瑛美

「・・・」

ドレイク「バカだよなあ、オマエは・・・キュラソー。楽しかったぜえ、久々の大暴れは。愚かで腐りきった、マヌケな人間共の悲鳴・・・絶叫・・・血・首・死体・・・宣戦布告指令を無視したオマエは・・・シエリーの所に行き、そして負けた。」

瑛美

「そつちの方が興味あつたのよね。いいわよ。制裁して。」

ドレイク「ヒヤハツ・・・！！ヒヤハハハハハハハハハハ！！オマエには何もしねーよ、本堂瑛美！！」
「御手洗海斗みたらいかいと」って言ったかなあ、あのポーン兵は？」

瑛美

「ちよつと・・・待つてよっ・・・ドレイクッ・・・あの子はアタシが連れ出しただけだ！！制裁はアタシに受けさせなさい！！何考えてんのよアンターツ！！？」

ドレイク「オイオイ、たかがポーンに何をムキになつてんだ。オマエはここでしばらくつながらるだけでいいんだぜ？ありがたく思わんと・・・ヒュヒュ・・・執行するのは誰になるのかねえ？イフリートやテイタンならともかく・・・トードなら悲惨だよなあ。」

瑛美

「ぐっ・・・！！！」

ガシャガシャ！！

海斗『おめでとう瑛美、ルークに昇格したんだってね。これでピアス付き・・・ボクより上位ランクになったね。やっぱりスゴイよ瑛美は！』

瑛美『ありがとう、海斗。』

海斗『いつか2人でナイト級にまでなろう。ダゴンが復活して・・・ボク達もこの世界の浄化をする要になろう。』

瑛美

「やるならアタシにしろ！！殺すわよドレイク！！！」

ドレイク『楽しみにしてるぜ。オマエが・・・オレを殺せる日がやって来るのをな。』

コッ・・・コッ・・・

海斗『大好きですよ・・・瑛美・・・』

瑛美

「うわああああああああああああああああああ！！！！！」

ファイル196：友情と愛の鼓動（ハートビート）『1・序章』

北杯戸プリンセスホテル・スイートルーム

刃

「今回の事は、全面的に風月ちゃんが悪いのよ!！」

風月

「何言ってるの？アンタが事の発端の原因でしょうが!！」

ユリ

「ふ、2人とも落ち着いて・・・」

刃・風月

「ユリちゃんは黙って!！」

ユリ

「な・・・なんですってえ〜!?!言わせておけば〜!！」

刃・風月・ユリ

「う〜!！」

プイッ!!

刃・風月・ユリ

「フンッ!!!！」

イズナ

「（この3人・・・なんか険悪状態だし・・・本当にこれで仲直りできるの・・・？）」

『名探偵コナン・友情と愛の鼓動』ハイトピート

私は元黒の組織の科学者、宮野志保。

組織で薬の研究をしていた私は、姉が殺された事をきっかけに組織に反抗し、その結果ガス室に閉じ込められてしまったの。

どうせ殺されるのならば、私は隠し持っていた薬を自ら飲み、なんと体が縮んでしまったの！！

私が生きているとヤツらにバレたら、また命を狙われ、周りの人間にも被害が及ぶ・・・

阿笠博士に介抱された私は『灰原哀』と名乗り、転校生として帝丹小学校に転がり込んだ・・・

ではここで、私の心強い仲間達を紹介しましょう。

まずは最初の仲間であり、私の薬の最初の犠牲者、江戸川コナン君。今は私が想いを寄せている相手なの。

FBIの捜査官であり、仲間の中でも最強の剣野刃ちゃん。

剣術と雷を使わせたら、彼女の右に出る者はいない！！

京都に住む名探偵のカップル、瀬藤銀一君と白野美保ちゃん。

2人とも剣道、空手の有段者で、特に美保ちゃんは中国拳法も使いこなす！！

蝶一族のくノ一、桜野松葉ちゃん。

炎と蝶の忍法で、私達を助けてくれる。

元黒の組織の仲間で、実はクリスとは別人だった金田一ユリちゃん。母と姉の仇を討つべく、私達の仲間になってくれたの。

そして、もう1人・・・

7歳にして黒の組織の上位クラスの女の子、如月風月ちゃん。

彼女に関しては、いまだに疑惑が解けないでいるの。

そして今私達に、緑の組織の幹部達の魔の手が襲いかかろうとしている!!!

小さくなっても頭脳は同じ!

迷宮無しの女名探偵!!

真実は、いつも1つ!!!

事の起こりは、今から1週間前にさかのぼる・・・

阿笠邸

刃

「だからー、アタシが大きいの食べるんだって!!」

風月

「何言ってるのよ!!私だって大きいの食べたいのよ!!」

ガチャ・・・

コナン

「ただいまー。」

哀

「何を2人で争ってるの？」

ユリ

「博士が買ってきたケーキ、どっちが大きいサイズのケーキ食べるかでもめてるのよ・・・」

コナン

「何それ・・・」

哀

「もー、ジャンケンで決めればいいじゃない！」

刃

「よーし！」

風月

「ジャンケン……」

刃・風月・ユリ

「ポン！！！」

刃・風月

「え？」

ユリ

「私の勝ちね！いただきまーす！」

モグモグ……

ユリ

「おいし」

刃

「どうしてユリちゃんまで参加するのよ……！」

ユリ

「私だって食べたかったんだもん……このスイートイチゴティラミス……」

風月

「ふざけないで〜!!」

刃

「も〜、許さない!!」

ドタバタドタバタ・・・

イズナ

「あーあ、ケンカ始めちゃったよ・・・」

哀

「コナン君、ケンカを止めて・・・」

コナン

「オマエら、いい加減にしろお〜っ!!!!」

刃・風月・ユリ

「ビクッ!!」

ピタッ・・・

コナン

「なんでオマエ達は、いつもいつもケンカするんだよ!!」

刃・風月・ユリ

「だって、この子が・・・」

コナン

「だってもしつてもねえ〜っ！！！！」

刃・風月・ユリ

「ヒッ！！」

コナン

「オマエら、しばらくホテルに泊まって頭を冷やして来い！！イズナちゃん、同行してくれる？」

イズナ

「オツケー！」

コナン

「ディメンション：RING・ワープゲート！！刃ちゃん、風月ちゃん、ユリちゃん、イズナちゃんを北杯戸ホテルスイートルームへ！！」

カツ！！

刃・風月・ユリ

「キャアアアツ……！！！！」

イズナ

「……」

シュパ！！

コナン

「ったく……せっかく哀と泊まる予定だったのに……」

哀

「いいじゃない！料金は前払いで払っておいたし、また払えば・・・」

コナン

「それもそうだな・・・」

スネイク

「撫子、藤袴、萩！！今回の作戦はうまくいくのだろうか？」

萩

「お任せください、スネイク様・・・」

藤袴ふじばかま

「必ずや、我々と部下4人が・・・」

撫子なでしこ

「ヤツらを捕らえて参ります・・・」

スネイク

「では、任せたぞ・・・」

萩・藤袴・撫子

「ハッ！！！！」

シュンツ！！

スネイク

「フフフ・・・よつちやく手中にできる・・・命の宝石」パンドラ
を・・・」

ファイル198：友情と愛の鼓動（ハートビート）『3・米花町の異変』

哀

「ねえ、コナン君……」

コナン

「ん？」

哀

「あの3人、ちゃんと仲直りできるのかなあ？」

コナン

「大丈夫だよ、イズナちゃんを同行させてるんだから……それよ
り、買い物すませようぜ……」

哀

「そうね……」

1時間後……

毛利探偵事務所

コナン・哀

「ただいま……」

小五郎

「おお、お帰り……」

哀

「おじさん、どうしてごはん作ってるの？」

コナン

「おっちゃん、今日のごはん担当はボクだよ？」

小五郎

「あれ、そうだったっけか？どうも最近記憶がな……」

哀

「ハア……」

小五郎

「さあ、できたぞ。」

コナン・哀

「いただきます。」

モグモグ……

コナン

「おいしい……」

小五郎

「ところで、1つ聞きたい事があるんだが……いいか？」

哀

「なんですか？」

小五郎

「オマエ達、大人だろ？」

コナン・哀

「え！？」

その時、2人の体がふらついた。

コナン

「お、おっちゃん……？」

哀

「私達に何を……」

ドサツ……

小五郎

「安心しろ、ただの睡眠薬だ……」

そう言うと、小五郎の体が崩れた。

萩

「フフフ……さすがの君達も、コイツが傀儡だとは気づかなかつただろう……」

崩れた小五郎の傀儡の後ろには、萩の姿があった。

萩

「さて……撫子！オマエは阿笠邸に行っている。」

撫子

「了解……」

そう言うと、萩はコナンと哀を抱えて消え去った。

ジン

「そうか……9つのカラーダイヤを見つけたか……何？それは本当か？揚羽……」

キャンティ

「そうよ、お父様。カラーダイヤは、9人の子供の力がなければ本来の力を発揮できないみたいなの……そう、新一君達9人の力がね……」

ジン

「そうか……やっぱりな……」

キャンティ

「じゃあ、アタイ達はもう少し情報を集めるから……」

ジン

「そうか……がんばれよ……」

キャンティ

「はい。」

ピッ。

キャンティ

「それに、アタイが集めた情報はそれだけじゃない・・・新一君が死なせてしまったと思っていた、あの人・・・実はまだ生きていたのよね・・・」

米花町

イズナ

「けっきょくこの3人、仲直りできなかったわね・・・」

刃・風月・ユリ

「・・・フン！！！！」

イズナ

「ダメだわ、こりゃ・・・それにしても・・・どうしてこの米花町、人の気配が全くないのかしら・・・？」

ファイル199：友情と愛の鼓動（ハートビート）『4・敵からの宣戦布告』

イズナ

「けつきよくこの3人、仲直りできなかったわね・・・」

刃・風月・ユリ

「・・・フン！！！！」

イズナ

「ダメだわ、こりゃ・・・それにしても・・・どうしてこの米花町、人の気配が全くないのかしら・・・？」

阿笠邸

イズナ

「博士もいないのかしら？」

ガチャ！

阿笠

「・・・」

イズナ

「博士ー！よかったあ。なんか町中静かだから驚いたよ！あの3人、

なかなか仲直りができなくてさー。どっすねばいいのかしら・・・」

キラリ！！

ガバア！！

イズナ

「え？」

ユリ・刃

「危ない、イズナちゃん！！」

バツ！！

ズザザツ・・・

バキイ！！

ユリ

「ちよつ、ちよつと博士！？」

ガアン！！

ユリ・刃・風月・イズナ

「わっ。」

風月

「くそっ、ゴ・・・ゴメン博士！ネイチャー：RING『マジカル
ローズ』！！」

シュルルル・・・

ギシギシ・・・

風月

「どっとなってるの？」

ガッ！！

グニャ・・・

刃

「超能力!？」

ガッ！！

バシ！！

風月

「キヤア!！」

刃

「これは・・・サイコキノの初期呪文、『サイキック光線』!？」

ユリ

「まさか・・・博士じゃないの・・・？」

ユラ・・・

刃

「正体を現せ！亡き弟、サスケの能力を借りて・・・ガーディアン：RING『奪いの宿り木』！！」

ボン！！

パシユ！

グサ！

シユルルルル・・・

ユラリ・・・

フオオオオ・・・

刃

「コイツ・・・ガーディアン：RING『フリーディーン』！」

撫子

「ハハハハ、どうかしら？アタシのガーディアン『フリーディーン』の特別な催眠派は？」

イズナ

「誰！？」

撫子

「相手のガーディアンだけでなく、術者に幻覚を見せる事もたやすいわ。」

スーッ・・・

撫子

「今までずいぶん我々の邪魔をしてくれたらしいわね。今日はホンのご挨拶よ。本物の阿笠博士、そしてこの町の人間を救いたければ・
・・沖繩にいらっしやいな。」

イズナ

「町のみんなって・・・まさか、コナン君や哀ちゃん達も・・・」

撫子

「その通り!!」

ギン!!

ドシャ!!

イズナ

「ぐ・・・」

刃

「クソオ!!」

バシユ!

スツ!

刃

「あ・・・ああ・・・」

撫子

「フフフフ。ごきげんよう。少年探偵団の皆さん。」

スウー……

イズナ

「げ、幻覚……？何者なの、アイツ……沖縄に来て……」

ゴォ……

スタツ！

レオン

「もしかしたらと思ったが……」

麻衣

「やっぱりそうか……」

イズナ

「みんな！」

刃

「大変なの！米花町が……」

松葉

「ええ、知っている。」

和葉

「アタシらの大阪も……」

平次

「美保ちゃんらの京都も・・・」

隆太

「オレ達の伊豆も・・・」

真

「住人達が連れ去られていた。」

麻衣

「それに、これを見て。上空から撮った、沖縄の写真よ。」

刃

「！！どうして・・・沖縄に緑の組織の構成員達が・・・」

平次

「島全体にバリアが張られていて、上空からの侵入も不可能。ここがヤツらの本拠地ってワケや。」

刃

「じゃあ、沖縄に来てって事は・・・」

レオン

「その通りだ。」

麻衣

「ヤツらと私達の、最終決戦が始まるって事なのよ！」

ユリ

「どうして・・・緑の組織が沖縄に・・・」

隆太

「見た通りだよ。」

平次

「オレらとヤツらの最終決戦が始まるって事なんや。」

和葉

「さて、行こかイズナちゃん。この3人は放つといて・・・」

刃

「ど、どどういう意味や!!」

隆太

「見たままの意見だよ。」

真

「大ゲンカした状態のあなた達が来たところで、私達の足手まといになるだけなのよ!!」

ユリ・風月

「ぐっ・・・」

レオン

「でも、連れて行くだけならいいんじゃないの?」

麻衣

「そつね。まあ、このままじゃ足手まといのままだけどね……」

和葉

「アンタらが仲直りしないかぎり、アイツらには勝てへんで……」

ユリ・刃・風月

「う……」

沖縄

麻衣

「着いたわ……」

シュウウウ……

レオン

「オレ達が着いた途端、バリアーを解除したか……」

松葉

「アタシ達に勝てる策でもあるのかしらね？ヤツらには……」

麻衣達はゆっくりと、中央にそびえ立つ建物の中に入っていった。

しばらく進んだ時、それは起こった。

突然、床に大穴が空いたのだ。

麻衣達は、深い闇へと落ちていった。

刃

「アタタ・・・ここは、地下室・・・かな？けっこう広いし・・・
そ、そうだ！みんなは・・・」

キョロキョロ・・・

刃

「いない・・・全員ちがうところに落ちたのか・・・とにかく、早くみんなと合流しないとね・・・ユリちゃんと風月ちゃんにも謝りたいし・・・」

「残念だけどさ、オマエは仲間の所にはたどり着けないよ？」

刃

「！！！」

「だって、オレと出くわしちゃったんだもん。」

ザッザッ・・・

刃

「元FBI捜査官の薄・・・？」

薄

「その通り！さあ、リアンちゃん。あの薬、飲めよ。白野美保とか言う子を作ったっていう薬を・・・エスパーとしての実力、オレが見てやるよ。」

刃

「後悔・・・しないでね？」

ヒョイ！

パクッ！

ゴクッ・・・

ムクムクムク・・・

リアン

「さあ、勝負よ薄！！」

薄

「どこからでも、かかってらっしゃーい」

その頃、平次・和葉・隆太・真・松葉・麻衣・レオンの7人は、萩
が作り出した傀儡を倒しながら、奥へと進んでいた。

平次

「ハア、ハア・・・コイツら、キリがないやないか・・・」

和葉

「でも、コイツらを倒さへんと、奥には行かれへん・・・」

レオン

「がんばらないとな！」

麻衣

「ええ・・・」

薄

「ネイチャー：RING『阿修羅腕』！！」

ゴバツ！！

リアン

「ええーっ！？薄の腕が阿修羅に・・・！！」

リアンが驚いている間に、薄は拳銃6丁を取り出した。

ジャギイー!!

リアン

「!」

薄

「死んでも恨むなよ シャアーツ!」

ズガガガガガン!!

リアン

「わあああああ!!」

ズザツ・・・

リアン

「なんてヤツなの・・・攻撃の手数を何倍にも増やせる：RING・
・アンタ、いつの間にこんなのを手に入れてたの・・・?」

薄

「んー?大阪の住人達を拉致りに行った時だよ?撫子ちゃんの超能力のおかげでね!」

リアン

「攻撃は最大の防御なり・・・か・・・」

薄

「あ、そういえば、大阪って君の故郷だっけ?イヤな事言っちゃったなあー。」

リアン

「!!!こ・・・のおお!!!バーガス・リースガン!!!!」

ガガガガガガガガガガガン!!!

薄

「力の差が明確だな」

ズガガガガガガガガガガガン!!!

薄

「はい終了」

リアン

「・・・」

薄

「・・・と見せかけて、狙いは後方こっちだろ!!!?」

ズガガガガガガン!!!

リアン

「ああっ・・・!!!」

薄

「雷の超能力だっけ?そんなモンは・・・クズだ」

ズガガガガンー！！

ズザアアアツ・・・

薄

「おーい、隠れてないで遊ぼーぜー 折角1対1（サシ）で戦^ちり合えるんだからさあ、もつと楽しくやるーぜー！人生、楽しくなきゃダメだろー？」

リアン

「何が『楽しく』よ！仲間を助けに行かなきゃいけない時に、楽しんで戦えるワケないでしょうがー！！」

薄

「えー？じゃあ、どんな事なら楽しめるっつーんだよ。」

リアン

「そりゃあ、あなた・・・アレでしょ。旅館で卓球して汗流して、温泉にゆっくり浸かるのよ・・・露天風呂で何も考えずに景色を眺めて・・・ね？」

薄

「つまんねー・・・」

リアン

「なんですってえ・・・！！！！（イカンイカン、リラックスしないと・・・）」

薄

「どうせ温泉に浸かるなら、やっぱカワイイ女の子と一緒にゃなきゃあ楽しくねえだろ　んで、フロ上がりにはフルーツ牛乳をギューツと・・・」

リアン

「（今だ！）」

タツタツタツ・・・

ガガガガガン！！

リアン

「わああああ！！」

ズザアアア・・・

薄

「あー、でもやっぱ一番楽しいのは、『戦場で戦ってる時』だな」

リアン

「（こりゃ、振り切れそうにないわね・・・やっぱり、美保ちゃん達と合流するには、コイツを倒さないと・・・確かに相手は武器に加えて、あの：RING・・・遠距離戦じゃアタシに勝ち目はない・・・でも、ヤツは今油断してて、手持ちの武器は拳銃一丁のみ！接近戦に持ち込めば・・・）」

薄

「どうせオレからはもう逃げられないんだってば！それくらい実力

の差があるのに、まだわからないの?」

リアン

「(チャンスは一度きり!!) そりゃあ!!」

ギユオ!!

薄

「またその電気球か!!」

サツ!

リアン

「弾ける!!」

ボンツ!!

薄

「!!石つぶて!?!こんなもの・・・」

ダンツ!!

薄

「!こつちか・・・」

バツ!

ガキイ!

薄

「！」

リアン

「（これで丸腰！ここで一気に畳み掛ける！）」

リアン

「ウエポン：RINGエレキハンマー！！」

バシッ！

リアン

「！！！」

薄

「そんなのが防げないとも？」

リアン

「思っ^てないわ！！」

薄

「ハッ……」

リアン

「狙いは最初っから……無防備はお腹よお！！！」

ドゴオ！！

薄

「……ネイチャー：RING『阿修羅腕』！！」

ドガァ!

薄

「痛てて・・・抜け目のない女だな・・・」

リアン

「（お腹に巻いたタオルに電流流してたおかげで・・・あばら1本で済んだか・・・）」

薄

「やっぱオマエスゴいわ!そんなクズみたいな超能力で、オレをここまで楽しませてくれるんだもん けど、ここまでだな。」

ゴソツ・・・

グツ・・・

薄

「今さら、そんなタオル1枚でどうしようってんだ?オマエとオレの実力の差はもうハッキリしたろ?そんな超能力はクズなんだってば!!!」

リアン

「クズって言うな・・・」

薄

「へ?」

リアン

「これは・・・お母さんと修行してた時に初めて手に入れた、大切な超能力なんだ・・・だから・・・誰にも・・・クズだなんて言わせない！！」

薄

「グッバ〜イ」

リアン

「(クソツ・・・今のアタシじゃ・・・どう転んでもコイツには勝てないっていうの？そうよね・・・仲間とケンカして、素直に謝れない今のアタシじゃ・・・アタシは子供の頃、頭を使えばどんな相手にも絶対に負けないって思ってた・・・でも、：RINGが出回ってる今、それだけじゃ埋まらない実力の差もあるっていうの・・・！？アタシの超能力じゃ、コイツ1人倒せないのか！！)」

ドン！！

リアン

「(力が欲しい・・・勝てる力が！！)」

シュウ・・・

リアン

「ハア・・・ハア・・・」

薄

「フツッ！やっぱオマエ、抜け目ないなあ！まだ避ける体力残してあったなんてよ！やっぱ相手が強ければ強いほど・・・戦いって楽しーんだよねー」

リアン

「（避けた……？あの人、自分で外したんじゃないの！？）」

薄

「今度こそ……グッバイ」

ドンドンドン！！

ゴオオオオ……

ヒュン！！

薄

「た……弾丸たまがそれたあ！！？」

リアン

「（ま……まさか……これがアタシの……）」

ファイル202：友情と愛の鼓動（ハートビート）『7・リアンVS薄3』

薄

「た・・・弾丸^{たま}がヤツを避けやがった！！どうなってんだあ！！？」

リアン

「アタシを避けたんじゃない・・・引き寄せたのよ・・・」

薄

「何？」

リアン

「（これが・・・これがアタシの新しい超能力・・・第十の術・・・マグネジオ・・・！！！！）」

ポウウウウ・・・

アメリカ

ジヨディ

「ボス・・・あれは・・・」

ジエイムズ

「ああ！間違いなく、リアン君の新しい術だな！！」

ここで解説。

FBI捜査官は、全員ボスであるジエイムズの作った盗聴器・発信機を体に付けています。

秀一

「しかし、アイツの実力ならもっと早い段階で新しい術を習得してもおかしくなかっただろうに……」

ジエイムズ

「確かに、エスパ―が新しい超能力を身につけレベルが上がるには、それ以前のレベルの術を完全に使いこなせるようになる事が条件だ。そういう意味じゃ、リアン君はもう十分その条件は満たしていた。だが、それだけではダメだ！レベルとレベルの間には大きな壁がある。そしてその壁を破るのは、実力や才能なんかじゃない。『力が欲しい』『強くなりたい』という、心の底からの切実な想いなんだ！！リアン君はきつと、今までのレベルでも頭を使えば絶対に勝てない相手なんかいないだろうと思っていたのだろう。皮肉にもそのせいで、今まで本気で『強くなりたい』と思つた事がなかったんだな。まあ、実際あのレベル9の状態で今までに100人近くのエスパ―を倒してきたところが、あの子の恐ろしいところだな……」

薄

「そうか……新しい超能力だな！？オマエ、新しいレベルの能力を隠してやがったのか！こりゃ、楽しくなってきたな！」

リアン

「（電流を帯びたタオルが弾丸を引き寄せたという事は……この術の正体は、アタシが触れたものに影響を及ぼせる磁力……イヤ、

超磁力の力だわ！これはいろいろ面白い事ができそうね！」

薄

「やっぱり、どうせ戦うなら相手は強けりゃ強いほど楽しいよなあ！
」

ガガガガガガ！！

リアン

「電気玉！！」

ブンツ！

リアン

「第十の術・マグネジオ！！」

カツ！

ギユイツ！

薄

「今さらこんな・・・」

サツ！

ゴオオオオ！！

薄

「！！！？ぬじおおお！！！！」

ドシユドシユドシユ!!

ビタアアアン!!

ガチガチガチ!

ズザアアア・・・

薄

「た、弾丸が戻って来やがった・・・そうか! ヤツの新しい術は磁
力か!! なるほど・・・もう銃の類は通用しねえってワケか・・・
いいぞ! 楽しくなってきやがった!!」

リアン

「まだそんな事を・・・さっさと決着つけて、仲間と合流させても
らうわよ!!」

薄

「言っておくが、この警棒は真鍮製。オマエの磁力は通じない。さ
あ、今度はどうやって楽しませてくれる?」

ガガガガガガ!!

ドン!!

薄

「ムダだ! 振り返ちにして・・・」

リアン

「マジッククロープ!! 絡みつけ!!」

シユルルルル!!

リアン

「マゲネジオ!!」

グググツ・・・

ガチイイ!!

薄

「何イイ!!!?」

ドカツ!!

薄

「ああっ!!」

ブン!

薄

「しまっ・・・とうああああっ!! つぶねええ!!」

ドギヤアア!!

薄

「い・・・今のは結構楽しかった・・・」

グン!!

薄

「どわぁっ!!?」

バツ!

ギャン!

ズザアアア・・・

薄

「っと、あぶね、あぶね!!ブーメランがUターンする事、忘れてた・・・」

シュルルル・・・

ドン!!

薄

「な・・・なぜ何度も戻ってくる!!?」

ギャン!

薄

「くっ!!ハッ!こ、これは・・・アイツのタオル!いつの間に!!この磁力で、アイツが触れて鉄化したブーメランを引き寄せてたのか!!なら、また特殊警棒バトンで叩き落とすまで!!」

ザンツ!!

薄

「(アレさえ取り戻せば今度こそオマエの攻撃を全て叩き落とせる自信はある！しかも、さっきの手でバトンを奪われなきゃ、オマエには防御の手段はないはず！！) オレがバトンを取り戻すのが先か、オマエがオレを仕留めるのが先か・・・最後の勝負だぁー！！！」

バツ！

薄

「ああああ・・・」

ジジツ・・・

ドガン！！

ビイン・・・

薄

「勝った・・・オレの勝ちだぁー！！アツハツハツハツハツ！！ハアツハツハツハツハツ・・・ハ・・・？」

ドドオオン！！

リアン

「フツ・・・かかったわね！！」

薄

「ハ・・・ハガ・・・ハガガ・・・ハガアアアアー！！？ハツ・・・あ、アレは・・・さっきオレが避けて鉄天井に張り付いた電気玉・・・！！まさかそれに、足に巻いたタオルで引っ付いているのか！！？」

リアン

「（後は、この電流を帯びた鉄の竹刀で・・・）」

スッ！

薄

「（し、しまった！今のブーメランと、このバトンは・・・オレをこの場所におびき寄せるためのトラップー！！？まずい！！コイツの狙いはあー！！）」

ゴオオオオ・・・

薄

「う・・・うおおおおっ！！！」

バキイイイツ！！！！

リアン

「アンタのお腹に巻いた鉄に向かって振り下ろせば、重力+アタシの力+超磁力だ！！かなうワケないでしょ！！実験台御苦勞様この超能力はまだまだ面白い事ができそうだわ！」

リアン

「フリー・・・勝った!!」

ピクツ・・・

リアン

「ゲツ！まだ意識があるの！？しぶといわね!!」

薄

「ヘッ・・・安心しろ・・・悔しいが・・・オレはもう立てねえよ・・・オマエの勝ちだ。オレ・・・こんな強い女と戦えたんだ・・・これってスゲー楽しい事だよな・・・なのに・・・なんでか今は全然楽しくねえんだ・・・なんでかなあ・・・？（そーいや、ガキの頃は戦い以外にも楽しい事いっぱいあったなあ・・・）」

薄『見るよ撫子姉、でっけーの釣れたー!!』

撫子『わー！スゴいわ薄!!』

薄『いたぞ撫子姉、オマエんトコのネコ!』

撫子『ありがとー、薄!!』

撫子『アハハハハ!!』

薄

「（そつか・・・オレが楽しかった事って・・・全部、撫子姉が笑ってくれた事だったんだ・・・オレ達が勝てば、アイツが笑ってくれる・・・それがうれしかったんだ・・・）ククク・・・」

リアン

「変なヤツねー・・・泣きながら笑ってる。」

薄

「へっ・・・仲間のために戦うなんて、ダセーと思ってたのによ・・・結局オレもオマエらと同じダセーヤツだったとわかったら、泣けてきたんだよ・・・」

リアン

「なんですつてえ！！」

薄

「（そっぴゃあ、昔みたいな撫子姉の笑った顔、ずっと見てないなあ・・・昔はよくあの笑顔に救われた・・・でも、アイツの閉じた心のドアはオレ達には開いてやる事ができなかった・・・また見たいなあ・・・アイツの笑った顔・・・）」

シーン・・・

リアン

「って、気絶した！！泣いたり笑ったり気絶したり、妙なヤツねえ・・・」

気絶させたのはあなたですよ、リアンちゃん。

リアン

「ともかくこれで、1人倒したわ!!」

シューウウウ・・・

刃

「ちょうど薬も時間切れ・・・結果オーライね!さあ、美保ちゃん達と合流しなきゃ!!」

その頃、ユリはというと・・・

ユリ

「ハッ!!」

バツ!!

バシユツ!!

女郎花

「いつまでも逃げてるんじゃない!!逃げてばかりで、私に勝てるとも思ってるのかあ!!」

女郎花と戦っていた。

女郎花

「ディメンション：RING『蜘蛛の巣』!!」

ブワッ！！

ユリ

「キヤアアッ！！」

バツ！！

ビシュ！！

ネチャ・・・

ユリ

「あ、危ない・・・」

女郎花

「これに捕まると、どんなにすばいやいヤツでも身動きがとれなくなるのよ！！それ、それ、それ！！」

ユリ

「わっ、わっ、わっ！！」

ツルッ！！

ユリ

「あ！！」

ドテッ！

ユリ

「イタタ・・・」

ビシッ！

ユリ

「ああっ・・・」

女郎花

「フッフ、動けないでしょう・・・？ゆっくりとどめを刺してあげるからね・・・」

ユリ

「うっ・・・」

ゴソッ！

ユリ

「ん？」

パッ！

ユリ

「これって・・・確かお姉ちゃんが渡してくれた・・・RING・・・」

ファイル204：友情と愛の鼓動（ハートビート）『9・ユリVS女郎花2』

ユリ

「これって・・・確か前にお姉ちゃんが私にくれた：RINGよね・・・？」

クリス『はい、これ！デイメンション：RING』メロメロメガネ
！その：RINGはあなたにあげる！持っておきなさい。『あなたにピッタリの：RING』だから！』

ユリ

「・・・ってお姉ちゃんは言ってたけど・・・これ、何に使うのよ・・・」

タッタッタッタッタ・・・

刃

「ハアハアハア・・・ようやく出口にたどり着いた・・・ん？あれは、ユリちゃんじゃない・・・戦ってる相手は、確か女郎花・・・」

ユリ

「デイメンション：RING』メロメロメガネ』・・・」

カッ！

女郎花

「新しい：RING？まだ何かするの？これ以上ムダな抵抗は……ん？」

ボツ！！

カアア……

刃

「？（場の流れが変わった？）」

女郎花

「あ……（な……何？何、この胸の高鳴りはー！！？）」

ユリ

「どうしたの？とどめ……刺さないの？」

女郎花

「フ、フン！刺すわよ！ー！覚悟ができたようね！ー！とどめよ！ー！」

オオオオ……

スカッ！

女郎花

「（ああ、ムリッ！ー！できないい！ー！やっぱり傷つける事なんかできないわああ！ー！）」

刃

「（まさかあれは、相手を惚れさせられる……RING……？血を

流さず、互いに心を通わせる・・・なんて愛に満ちた：RINGなの！！」

ユリ

「・・・」

スツ・・・

サツ！

女郎花

「あつ！！」

刃

「ん？」

サツ、サツ！

女郎花

「あ！ああ！！」

ユリ

「やっぱりね！この：RING・・・『相手をメガネ好きにさせる』：RINGだ・・・何よお姉ちゃん、この：RING・・・」

刃

「（・・・はい？）」

女郎花

「な、何言ってるの？メガネなんか好きになるワケないじゃない！

「！」

ユリ

「じゃあ・・・折るよ？」

女郎花

「え!？」

ユリ

「あなた、自分で気絶して？壁に頭ぶつきたりして。でないと、あなたの大好きなメガネ、へし折るよ・・・好きでしょ？この子が・・・」

女郎花

「フン!す、好きじゃないわ!!むしろ、嫌いよ!!折っても何の意味もないわ!やめなさい!!」

ユリ

「そつかあ・・・折るっ!!!!」

ミシ!!

女郎花

「大好きー!!!!」

ドツカーン!!

女郎花

「キユウ・・・」

ドサツ・・・

刃

「(な・・・なんや・・・この戦い・・・)」

ユリ

「あ、刃ちゃん！あなたも敵を倒したのね！」

刃

「え！？あ、うん、まあ・・・(つまりあの・・・RINGは、相手を洗脳する能力を持っているワケね・・・)」

ユリ

「早く先に行きましょう！！他のみんなも、きつとがんばってるだろうから！！」

刃

「そうね！(ユリちゃん・・・この子だけは、絶対に敵に回したくはないかもね・・・)」

タタタタ・・・

刃
「アタシとあなたで、2人倒したけど・・・残りは何人いるのかしら？」

ユリ
「5人よ・・・『薄』に『女郎花』・・・これ、2つとも秋の七草の名前でしょ？」

刃
「あ、そっか。という事は、残りは・・・撫子、萩、藤袴、葛、桔梗ね。」

ユリ
「それにしても、さらわれたコナン君達・・・大丈夫かなあ・・・」

刃
「そっね、無事だといんだけど・・・」

萩
「薄・女郎花両名からの通信が途絶えた・・・侵入者にやられたようだな・・・大丈夫なのか？」

藤袴

「問題はない・・・葛と桔梗は、そう簡単にやられるヤツじゃないからな・・・」

撫子

「それに、いざという時のために子供達を人質に取ってあるワケだし・・・アタシ達が負ける事はないでしょうね・・・」

風月

「もうだいぶ奥まで進んできたわね・・・そろそろ刺客が現れてもおかしくない頃だわ。私、ちゃんと勝てるのかな・・・刃ちゃんとユリちゃんに謝らなきゃいけないし・・・神様なんて信じちゃいなけれど、もしいるのなら・・・私やみんなをお守りください・・・」

「へー、黒の組織の最年少幹部ともあるう子が、神頼みか・・・堕ちた者ね、如月風月・・・」

風月

「その声、その言い方・・・桔梗ね？悪いけど、私はもうずいぶん前に組織とは縁を切ったのよ・・・それに、ジンさんやキャンティさん達だって、自分達の過ちに気づき、ペンデュラムアッドをつぶすために組織を抜けた・・・あなたにはまだわからないの？組織（組織）がどれだけ愚かしいところなのか・・・」

桔梗

「わからないわね・・・アタシはただ、やるべき事を全うするだけ・・・」

・スネイク様は言っておられたわ・・・あなた達9人の子供の体内に隠されたビッグジュエル・・・それがあれば、パンドラは手に入るってね・・・我々が捕らえているコナンと哀・・・そして救出しに来たレオン・麻衣・刃・ユリ・松葉・風月で8人・・・後1人いれば宝石はそろう・・・」

風月

「甘いわね・・・その最後の宝石を持つ蘭さん・・・鈴ちゃんは、怪盗キッドに保護されている・・・絶対に宝石がそろう事はないわ・・・ボレー彗星ももうすぐ近づくんじゃしょ？」

桔梗

「だったらあなた達を捕らえて、彼らを脅せばいい事よ・・・どちらにせよ、もう時間がないんでね・・・」

ドンッ！！

風月

「シールド：RING『バリアグラス』！！」

カッ！！

バン！！

桔梗

「ハアアアア！！」

ドガ！！

ピシピシピシ・・・

風月

「えっ!?!」

バリイイイン!!

風月

「キヤアアアアッ!?!」

ドザアアア・・・

風月

「う・・・素手でこれを砕くだなんて・・・どういう事なの!?!」

桔梗

「アタシは幼少の頃から腕力が強くてね・・・そんな：RINGじや、アタシの足元にも及ばないわよ?」

風月

「なら、もつと強い：RINGを出すまでよ・・・ハアアアッ・・・」

桔梗

「何度やってもムダよお!?!」

ダンッ!

風月

「シールド：RING『ネオ・バリアグラス』!?!」

カッ!!

バン!!

ピタッ・・・

風月

「（こ、拳を止めた!?この子、本能でこの…RINGの強さがわかったの!?）」

桔梗

「ガーディアン：RING『ブレイド・ギルシャーク』!!!」

カッ!!

ドシイイツ!!

風月

「クッ・・・お願い・・・持ちこたえて・・・」

ビシッバキッ・・・

バキアアアアアア!!

風月

「キアアアアアアアアアアッ!!!（そんな・・・『ネオ・バリアガラス』が砕かれた!?ダメ・・・私、勝てない!!!）」

ダンッ!!

桔梗

「ハアアアアツ・・・」

風月

「（私・・・負けちゃう!!!!ごめんなさい・・・刃ちゃん、ユリちゃん・・・暁・・・!!!!）」

ファイル206：友情と愛の鼓動（ハートビート）『11・風月VS桔梗2』

桔梗

「ガーディアン：RING『ブレイド・ギルシャーク』!!!!」

カツ!!

ドシイイツ!!

風月

「クツ・・・お願い・・・持ちこたえて・・・」

ビシツバキツ・・・

バキヤアアアアアア!!

風月

「キヤアアアアアアアアッ!!!（そんな・・・『ネオ・バリア
グラス』が砕かれた!?ダメ・・・私、勝てない!!!）」

ダンッ!!

桔梗

「ハアアアアッ・・・」

風月

「（私・・・負けちゃう!!ごめんなさい・・・刃ちゃん、ユリち
ゃん・・・）」

暁

「風月……!?!?」

ピピピ……

ジェイムズ

「どうしたんだね、暁君？」

暁

「ジェイムズさん……風月がピンチみたいなんです……ボクはどうしたらいいんでしょうか……?」

ジェイムズ

「行けばいい……彼女の事が心配なんだろう?」

暁

「しかし……」

ジェイムズ

「後は私達に任せておけ。なーに、若いモンにはまだまだまだ負けんよ。」

暁

「あ、ありがとうございます……!」

ダッ!!

言うのが早いか、暁は走り出していた。

暁

「（風月・・・無事でいろよ!!）」

その頃、風月は・・・

シュウウウ・・・

刃

「くっ・・・」

風月

「や、刃ちゃん・・・」

ユリ

「私もいるわよ!!」

風月

「ユリちゃんも・・・」

桔梗

「ここまで来るとは、あなた達もなかなかのものね・・・だけど、

最後に勝つのは私・・・」

刃

「そうかしら？アタシだってここに来るまでの間、何も考えてなかったワケじゃないの・・・あなたの事は、もう調べが付いている！！そして、生まれつき固い体を持つあなたを倒す方法もすでに考えてあるわ！！」

桔梗

「ヘエ・・・だったら、見せてもらおうじゃない・・・」

刃

「望むところよ・・・ユリちゃん、風月ちゃんを頼むわ！」

ユリ

「了解！」

そう言うと、ユリは風月を安全なところまで連れて行った。

刃

「さあ、戦いの続きを始めましょうか？」

桔梗

「・・・」

刃

「エレクトリックブーメラン！！」

ギャン！！

桔梗

「（八方塞がりで力技で来るか。）」

ギャオオオオオ

風月

「ユリちゃん・・・私には、刃ちゃんに何かの策があるとはとても思えないんだけど・・・」

ユリ

「大丈夫・・・刃ちゃんを信じましょう。」

ギャオオオオオ

桔梗

「こんな事ばかり続けていてもつまらん！！さっさと決着をつけようぞ！！」

ガキーン・・・

桔梗

「ん？タオルで出来たくさび？なるほど・・・足だけでも封じて、少しでも有利にしようというワケか。おもしろい・・・さあ、こい！！」

グッ・・・

ドバン！！

桔梗

「!?!?な、なんだ、あの加速!!!」

ゴオオオオ・・・

ユリ

「刃ちゃん、まさか・・・自身の雷の力と磁力を組み合わせ、ものすごい移動磁界を発生させているんだわ!!そして、それを利用して加速している・・・」

風月

「リ、リニアモーターカーか、刃ちゃんは・・・」

ゴオオオオ・・・

刃

「ここまで加速してしまえば、あなたのガーディアンを直前で出されようが・・・関係ナッシング!!」

桔梗

「オ・・・オ・・・ウオオオオオオオオオ!!!」

ドゴオ!!!

桔梗

「が・・・が・・・がああああー!!!?」

ドゴオオオオン!!!

ガクッ・・・

ドサッ・・・

刃

「フウッ・・・まあ、こんなモノよ。」

刃

「楽勝、楽勝！」

風月

「っ、強いね刃ちゃん・・・」

ユリ

「もう、無敵なんじゃないの？」

刃

「そうかな？」

風月

「とにかく、先に行きましょう。」

ユリ

「そつね。」

平次

「さっき倒した敵から聞いたんやけどな、どつやら地下室にそれぞれ町のみんなを閉じ込めてあるらしいで。」

レオン

「コナン君達は？」

和葉

「コナン君らは、別の部屋に閉じ込めてるんやて。」

麻衣

「なら、何人かに分かれて助けに行った方がいいわね。」

松葉

「じゃあ、平次君と和葉ちゃんが米花町と大阪の人達を・・・銀一君と美保ちゃんは京都の人達を・・・隆太君と真ちゃんが伊豆の人達を・・・アタシがコナン君達を助けに行くのはどうかしら？」

隆太

「異議なしだね。」

真

「じゃあ、救出に成功したらバツジに連絡しましょう。」

平次達は、それぞれの場所に向かった。

「はい、そろそろ侵入者達がやってくる頃です。スネイク様。」

スネイク

「そうか。オマエはもう少し余裕で勝ってくれよ。」

葛

「わかってますよ。大丈夫、ボクを誰だと思ってるんです？IQ1

98。葛ですよ?」

刃

「あ、目の前に誰がいる!」

葛

「ボクは葛。刺客の葛。さあ、誰がボクの相手をするんだい?」

風月

「ここは私が・・・」

サッ!

風月

「!」

ユリ

「風月ちゃん、ここは私に任せてくれない?」

風月

「大丈夫なの?ユリちゃん。」

ユリ

「大丈夫よ!私にはお姉ちゃんがくれた:RINGがあるから!」

ザッ!

葛

「ボクの相手は君か・・・まあ、別にボクは誰が相手でもかまわないんだけどね。」

ユリ

「さあ、いくわよ！ディメンション：RING『メロメロメガネ』
！！」

カツ！

葛

「！！」

ズキユウウン！！

ユリ

「フッフ！私の：RING『メロメロメガネ』は、相手を『メガネ惚れ』に洗脳して気絶に追い込む最強の：RINGよ！さあ！！このメガネを折られなくなかったら・・・自爆して気絶しなさい！！！！」

オオオオオオオ・・・

葛

「ヤダ。」

ユリ

「え！！！！ヤダ！！？そんな！メガネ惚れ状態になってないの！？」

葛

「メガネ惚れ状態さ。イヤ、メガネ惚れ状態だからこそ、気絶なん

かできないんだよ。だって、倒れた拍子に傷つけてしまっただろう？
このボクのメガネをさ。」

風月

「そ、そうか！メガネが好きになったから、当然自分のメガネも好きになるという事か・・・」

刃

「大丈夫よユリちゃん！！その：RINGは無敵の：RING！」
そのメガネを外して自爆しろ』って命令すれば・・・」

葛

「リアンさん。ボクは戦う相手に応じて、前もって策を用意しておくタイプの人間なんで・・・ユリちゃんの：RINGに対抗する策も、モニタールームでそれを見た後、例外なく考えていたんですよ。」

刃

「何！！？」

葛

「『メガネを外して自爆しろ？ソイツはムリな相談だね。なぜならあー！！・・・接着剤でくっつけちゃったから・・・』」

刃・風月

「（バカだあーッ！！！！）」

葛

「わかつたる？メガネを掛けてるボクを自爆させるのは不可能だ。自分が倒れでもしたら、このボクのメガネを傷つけてしまうからね。ボクにとってこのメガネは、自分の命よりもずっと大切なんだよ。」

ユリ

「いつの間に私の対応策を・・・」

葛

「誰が君だけだと言った？」

ユリ

「え？」

葛

「君だけじゃない。他の人達全員に対しても絶対に勝てる策を事前に用意してきたんだよ。このIQ198、葛にかかれれば破れぬ人間など存在しないからね。傾向と対策・・・それだけで全ての出来事が『予定通り』になる！そして君が負ける事もすでに、予定通りだ。」

┌

ユリ

「（イヤ・・・アイツは私のメガネが傷つくような事は出来ない・・・だったら・・・いける！！！！）」

ドンッ！！

葛

「なるほど、メガネをしてる自分は攻撃されないと踏んだか……
けど、それも予定通りだよ。」

刃

「ダメ、ユリちゃん!! ヤツはあなたのメガネを奪う気だわ!!」

ユリ

「(メガネを奪う気ね? でも、メガネはもうカバンの中よ! そして、
ヤツのメガネを壊してでも奪う!!) コイツのメガネさえ壊せれば・
・自爆させられる!!」

バキ!!

葛

「それも予定内だよ。こうして捕まえてしまえば殴り放題だ。肝心
のメガネはカバンの中……おかげで落として傷つけてしまう心配
がなくなったよ。動けなくしてから、ゆっくりメガネをいただくよ。」

┌

ユリ

「この……放してよ……!! は、放しなさい!!」

バキィ!!

イイイン……

刃

「今よ、ユリちゃん!! メガネが壊れた今なら、ヤツを自爆させら
れる!!」

ユリ

「さあ、このメガネを折られなくなければおとなしく・・・」

葛

「ウオオオオオ！！エリザベスウー！！！」

刃

「エ、エリザベスって・・・あのメガネの事？」

風月

「メガネとの死別にマジ泣きって・・・」

葛

「メガネがアクセシントで壊れてしまう事も予定内だったが・・・まさか・・・これほどの悲しみとはね・・・君は・・・本当にそれを折れるのかい？」

ゾク・・・

葛

「いわばそれは君の命を守る唯一の盾・・・最後の命綱なんだよ？それを折ってしまったら、ボクは容赦なく君を殺すよ？もう一度だけ言うよ・・・それを折ったらボクは君を殺す。」

ユリ

「えい！」

パキン・・・

風月

「折ったあー！！！！」

ブチン……

ザツザツ……

葛

「残念ながら、その行動も予定内だよ。さっきのボクのショックぶりを見て、『次にまた折ればその計り知れないショックで気絶する』と考えた……ちがうかい？計算ちがいだっただね。むしろ君の行動はボクを逆上させたにすぎない。君は、ボクの：RINGで最高にむごたらしい殺し方をしてあげるよ。」

刃

「に、逃げて、ユリちゃん！！」

葛

「君は唯一の命綱である自分のメガネを自ら失ったんだ。君を守るメガネは……もう一つもないんだよ！！！！」

オオオオオ……

ユリ

「100個買ってきました。」

ドバツ！

刃・風月

「（100個買ってきてたー！！！！）」

ユリ

「わかったでしょ？私にはメガネのストックがいくらでもあるの。1つや2つ折ったところで、痛くもかゆくもないのよ。あなたのメガネ折れた時点で、あなたの負け決定よ。」

葛

「（こ……これはさすがに予定外だった！！マズイ！！もうこっちは自爆を防ぐ手段がない！！今『自爆しろ』と命令されたらお終いだあー！！！！）」

ユリ

「30秒あげる。」

葛

「へ？」

ユリ

「30秒数えたらこの岩落として、メガネ共をぶっ壊す！！その前に自分で自爆するか、この岩が落とされた瞬間飛び込んで、メガネ共の身代わりになるか……好きな方を選びなさい！！！！」

葛

「そ、そんなのどっちみち倒されるって事じゃないか！！究極の選択だろそんなの！！」

ユリ

「シーン。」

プルプルプル……

葛
「悪魔か!!!クツソォ・・・(しめた!!!30秒もあれば、キサマを出し抜く策などいくらでも考えられる!!!IQ198のこのボクに30秒も与えてしまったのは大失敗だよ、君!!!)」

ユリ

「じゃあ、数えるよ。」

葛

「ああ。(よし・・・)」

ユリ

「イチ・・・234567891011121314151617181912021222324252627282930!!!」

葛

「速ー!!!」

ドゴォン!!!!

葛

「よ・・・予定外すぎるよ、それは・・・」

ズザザァー!!!

ガクリ・・・

ユリ

「フツ・・・全部が予定通りじゃ、人生つまないっしょ。」

刃

「（あれ？ところで結局アイツの・・・RINGってなんだっただろ。」

「

スネイク

「薄、女郎花に続いて、桔梗、葛までが倒されただと……!?!?ど
うなっているのだ!?!?」

萩

「スネイク様、ヤツらは所詮私達が力を蓄えるまでの時間稼ぎとい
ったところ……私達はあの者達とはちがいます……」

スネイク

「そうか……では任せたぞ。萩、藤袴、撫子……」

萩・藤袴・撫子

「……ハッ!?!?!」

パシユンツ!?!?!

スネイク

「フフフ……ようやく押めるのだな……パンドラよ……」

萩

「フフフ……オレが見つけたこのガーディアン……」

藤袴

「3人それぞれが手に入れた、このガーディアンは……」

撫子

「まちがいなく、あの子達をつぶす切り札。さあ、萩は地下1階。藤袴は1階。そして私が2階。さあ、歓迎してあげましょう!!力ゴの中に迷い込んだ、愚かな小鳥達を!!」

シュウウウ……

平次

「ハア、ハア……キリがないなあ……」

和葉

「こんなに敵が多いっちゆう事は、この先に見られてはマズイものがあるっちゆう事やんな?」

平次

「そや。もう一踏ん張りやで!!」

レオン

「美保、氷のバリアーは、あとどれぐらい保ちそうだ?」

麻衣

「あと6・7分は保つわよ。」

レオン

「じゃあ……一気にコイツらを叩き潰してやるか!」

麻衣

「ヒマつぶしにはなるでしょうね……」

隆太

「真ちゃん、小学生の体じゃなにかと大変だな。」

真

「そうですね、隆ちゃん。でも、子供の体だからこそ有利になる事もあります。たとえば、大人よりも攻撃を避けやすいとかね……」

ドカッ!!

隆太

「そして、小さければ相手の攻撃を受け流しやすい……」

バキ!!

真

「さあ、もう少し……あれ?」

隆太

「この辺にいたヤツら、どこに消えたんだ？」

刃

「あれ？どこにも敵が見当たらない・・・」

ユリ

「いったい、どこにいるのかしら・・・？」

ガコン！！

刃・ユリ

「え！？」

風月

「落とし穴だわ！！2人とも、つかまって！！」

刃

「ふ・・・」

ユリ

「風月ちゃ・・・」

ヒュウウウウウウウウ・・・

風月

「2人とも落ちちゃった・・・どこかで合流できるといいんだけど・・・」

ヒュウウウウウウウウウウ・・・

ドスン！！

ユリ

「イタタタ・・・ここは・・・1階？そうか、私・・・落とし穴にかかって、落ちたんだっけ・・・早く刃ちゃん達と合流しないと・・・」

藤袴

「残念だが、ソイツはムリな相談だ・・・」

スウ・・・

ユリ

「あ、あなたは誰！？」

藤袴

「拙者は緑の組織3幹部・・・忍びの藤袴！！！！」

ユリ

「クツ・・・ガーディアン：RING『ブレイドガール』！！！！」

カッ！！

ドンッ！！

藤袴

「すばやいな・・・敵と判断すると同時に先制攻撃・・・なかなかだ。」

ユリ

「肩に・・・なにかいる!？」

藤袴

「ガーディアン：RING『ベトベトス』!!コイツの粘着性の体には、さすがのするどい剣女でもかなうまい・・・」

ユリ

「く・・・」

スッ!

ズオッ!!

ユリ

「!!!しまっ・・・」

シュル!!

藤袴

「もう・・・RINGは使わせん。」

シュルシュルシュル・・・

ガバッ!!

ユリ
「ん……んんっ。」

藤袴

「さすがのオマエも、…RINGを使えなければどつとどつという事はない。苦しいか、ん？」

その頃、地下1階でも、刃が危機にさらされていた。

ピイン……

藤袴

「見えるか、ん？地下1階の様子だ。」

ユリ

「（ん）、刃ちゃん……」

藤袴

「ク……クク。友の心配をしている場合ではないな。」

ぐぐ……

藤袴

「ムダだ。」

ギッ！

藤袴

「さて、このまま絞め殺すのは簡単だが、オマエには聞いておく事がある。一息くらいさせてやるか。」

ズル・・・

ユリ

「ゲホッ、ゲホッ・・・」

藤袴

「オマエ・・・阿笠に保護されている子らしいな。博士に我々への協力をお願いしたんだが、なかなかOKしてくれなくてね・・・クク。どうしたら博士にご協力願えると思うかね、んん？」

ユリ

「・・・」

藤袴

「あるいはオマエが苦しんでいるところを見れば、気が変わるかな？」

ガッ・・・

藤袴

「さあ！このまま絞め殺されるか、それとも・・・」

ユリ

「・・・」

コク！

ユリ

「どっちも・・・お断りよ！ーブレイドガール！ー！」

ダンッ！！

藤袴

「甘いわっ！！！」

バグッ！！

藤袴

「そんなに死にたくば・・・死ねい！！！」

シュガッ！！

ユリ

「（は・・・かせ・・・）」

ズ・・・

バタッ！！

ヒュウウウウウウウウウウ・・・

ドスン！！

刃

「イテテテ・・・ここは？地下にでも落ちたのかしら？どうも変な感じがするけど・・・」

ズツ・・・

バチィ！！

刃

「！これは・・・電流の壁？」

萩

「その通り！！オレが作った電気の壁だ！！緑の組織3幹部の1人、萩様だぜ！！ホワイトデー前には、よくも邪魔してくれたよなあ・・・」

刃

「ホワイトデー前・・・？・・・！！まさか・・・傀儡を操って、風月ちゃんをさらったのはアンタの仕業ね！？」

萩

「そうさ・・・彼女の体内の宝石が目当てでね・・・今度は手加減なしだぜ！！」

ガチャコン!

ドンッ!!

刃

「・・・」

バシィ!!

萩

「な、何!?!」

刃

「甘いわね・・・アタシは雷を操るエスパー・・・こんな電気玉、痛くもかゆくもないわ!さらに・・・」

ムクムクッ!!

リアン

「雷をたくさん受けると、薬を飲まずともアタシは変身できる!!! 覚悟しなさい!!!」

バシユッ!!

萩

「ぐわああああ!!」

リアン

「やった!!」

萩 「なあんちゃって。」

リアン

「!！」

萩

「ゴム製のアンダースーツ!! 電気牢獄の中で、オレ様だって無事なんだよ!! この砦の中には、あらゆる仕掛けがある! 今頃上じやあオマエさんの仲間がもつとヒドイ目にあってるかもなあ。フンッ。電気がダメか。なら・・・鉄球爆弾ならどうだあ!!！」

ドシユドシユドシユ!!！」

リアン

「キヤアアアア!! (クツ・・・鉄球爆弾はアタシの力じゃ受けきれない!! でも、どうして!!? 最初からパワー全開の攻撃なのに、どうしてエネルギーがなくなるの!!?)」

萩

「ワハハハハ! 知りたいか!? この攻撃が、そしてオレ様の鎧が、どうして底なしのエネルギーなのか知りたいか!? 背中 of エネルギー変換機!! そして、全ての電気エネルギーをまかなうのが・・・伝説のガーディアン・サンダー!!！」

リアン

「そ・・・そんな!!！」

萩

タタタ・・・

風月

「気のせいかしら、さっきからずっと同じところばかりを回ってる
気がするんだけど・・・」

みわわ〜ん・・・

風月

「？ブルルツ・・・今の、何かしら？まあいいわ・・・次はここね
！」

ギイ・・・

風月

「ここは・・・どこ！？建物の中にいたのに・・・なんで!？」

『暁、暁ーっ!ー!』

風月

「あれって・・・私!？」

「記憶の中の最も忌まわしい部分が・・・アタシのガーディアン
念によって・・・今、あなたの目の前に再生されているわ。」

風月

「・・・敵!ー!ガーディアン：RING『キングタートル』!ー!」

カツ!!

スカッ!

風月

「!」

スッ!

「ウフフ……」

風月

「催眠波、そしてテレポーション!! エスパー系の：RING
使い!!」

撫子

「ウフフフ、そうよ。緑の組織3幹部の1人……撫子! 光の壁を
作ってこの砦を覆っていたのもアタシ……!! ようこそ、3階へ。
フリーデーンの念……たっぷり味わうがいいわ。サイコキネシス
!!!!」

ギシッ!

カチッ!

ポトツ……

風月

「!!!!…RINGが……」

撫子

「人の裏をかくのが得意のようだけど、アタシには通じないわ。フーディーン、キングタートルの息の根を止める！」

グオツ！

撫子

「一番強力なガーディアンを出したようだけど・・・逆に言えば、それが倒されれば後がないという事・・・フッフ。金縛り+エレクタパンチ！」

バキィ！！

風月

「タートル！！ああ・・・」

撫子

「アハハハハ、思い知ったかしら？緑の組織にたてつけごとするからこつなるのよ！」

風月

「思い知るの・・・そつちよ！えーい！ー！」

ドカツ！！

ボシュ！！

風月

「本物のキングタートルはこつちよー！！」

バキィ！！

撫子

「な・・・じゃあさっきのは・・・？」

ズルル・・・ン・・・

撫子

「ガーディアン『メタモール』か！！」

風月

「私を見くびらないでね！反撃よ！！ガーディアン：RING『ガ
ストン』！！煙幕！！」

ブシュウ！！

モクモク・・・

風月

「そっちが幻影で来るなら、私も煙幕で対抗よ！！そっちには私の
影が見えなくても・・・（デイメンション：RING『メトロスコ
ープ』！）こっちはバッチリ見えちゃうのよ、お姉さん・・・
ウフ、少しお肌があれてるみたい。こんな組織にいるせいかしら。」

カア・・・

撫子

「（どどどだ・・・）（）」

風月

「ああ……終わらせちゃいませうね……」

ファイル213：友情と愛の鼓動（ハートビート）『18・刃VS萩2』

地下1階

バリバリバリ・・・

萩

「フフフ・・・」

ドシュ！！

リアン

「キヤアアアアアアアッ！！」

ドシャ！！

リアン

「クツ・・・ガーディアン：RING『ラフレシア』！！」

カッ！

萩

「ムダだあつ！サンダー！！」

バサッ！

萩

「電撃波！！」

バリバリバリ……

リアン

「ああ！」

ドシヤ！

萩

「ワハハハハ！自慢の花が、ほとんど散っちゃったな！」

リアン

「ラフちゃん……くそおっ！」

シュン！

萩

「ムダつつつてんだろーがよ……」

バシ！

萩

「そういう往生際の悪いヤツには……最大の一撃で敗北を知らせてやらねえとなあ。サンダー！！最大出力！！」

ガコン！！

ジリ……

萩

「くらえ！か……み……な……り……」

ビビビビ……

リアン

「最大の攻撃！この時を待ってたわ！ラフちゃん！！必殺『マジカルリーフ』！！」

ビシィ！！

シャアアアアアアアアアア……

ザクザクザク！！

リアン

「コードを切ったわ！これで、行き場のなくなった電撃があなたの体に……」

萩

「そうかな？オレがこのアンダースーツを着ているかぎり、電気に感電する事は……」

パラリ……

萩

「ん？」

パラパラリ……

萩

「うおお!？」

バチバチバチバチィッ!!!!

萩

「うわああああ!! スーツが裂けている!!?」

ボン!!

萩

「バカ・・・な・・・」

ブスブスブス・・・

バタリ!

シュウ・・・

刃

「マジカルリーフが切っていたのは、コードだけじゃあなかったのよ。フウ・・・アタシの考えてる事をよくわかってて助かったよ、ラフちゃん。」

ダダダダ・・・

刃

「ユリちゃん……無事だといけねど……」

ダダダダダ・・・

刃

「ユリちゃん・・・無事だといえけれど・・・」

バツ！

刃

「！・・・ユリちゃん！！」

ダンッ！

藤袴

「む・・・！ごぞかしい！！そらあ！！！」

ゴオッ！！

刃

「キヤアアッ！」

ジリ・・・

藤袴

「ククク・・・いいところで邪魔しに来おつて。」

ズルリ・・・

シユルルル!!

刃

「キヤアツ!ぐ……う……」

藤袴

「ここまで上がってきたという事は……萩を倒した……という事か。まあいい、ここは趣向を変えて……友にとどめを刺すところを眺めてもらおう事にするか、クツクツクツ。」

ジャキ!

刃

「ユ、ユリちゃん!!起きて、起きてえ!!」

ジタバタ……

藤袴

「ムダだ。コイツはたった今、我が一撃をくらったばかり。すでに動けぬ状況よ!あとは首をはねるのみ。」

チャツ!

キラリ……

刃

「!!」

藤袴

「今度こそ死ねえ〜い!!」

グオツ・・・

メキ!!

藤袴

「!?!」

刃

「あ・・・」

ユリ

「・・・」

シュー・・・

ユリ

「よくやった・・・ガーディアン：RING『ピジョン』。」「

藤袴

「か・・・かはっ。う・・・ぐぐぐ、バ・・・バカな・・・あの一撃を心臓にくらい、なぜ動ける!?!」

スッ!

パキ・・・

ユリ

「このペンダントは、バリアグラスと同じ効力を持つ^{バリアアイテム}防衛道具よ。

クリス姉が昔・・・私にくれたんだ。倒れたフリして、あの粘着野郎を引っ込める時を待ってたのよ。」

藤袴

「お・・・おのれえ〜！」

スツ！

藤袴

「出でよ・・・ガーディアン：RING『フリーザー』!!！」

カツ！

藤袴

「豪雪吹雪!!！」

ゴオオオオ・・・

藤袴

「調子にのるな、小娘共め！こちらが有利なのは変わらぬ。」

バツ！

藤袴

「これ以上刃向かうようなら、今度はこっちの小娘の首をはねるぞっ！」

キラ！

ゴクツ・・・

ユリ

「クツ・・・」

藤袴

「やれ、フリーザー！ベルモットもろとも吹き飛ばせ！」豪雷ペー
ム！！」

キイイイン！！

ユリ

「くっ！」

藤袴

「そおら、今度はこっちだ！！」

グオ！

刃

「キャアアッ！」

ユリ

「刃ちゃん！！」

ビヨオオオオ・・・

ピキ・・・

刃

「あ、足が・・・」

ユリ

「刃ちゃん!!」

藤袴

「次はオマエだ!!」

グオ!!

刃

「逃げて、ユリちゃん!!」

藤袴

「そろそろ!逃げないと氷付けたぞ!!」

ガガガ!!

ユリ

「くっ!!」

ガコオ!!

ユリ

「壁が・・・」

カキイ!

ユリ

「し、しまった!!」

藤袴

「勝ったな！」

ニイ・・・

藤袴

「フルパワー！！部屋ごと凍れ！！！」

ビヨオオオオオオオオオオオ・・・

ピキパキ・・・

カキイイイイン・・・

藤袴

「クツクク。小娘の氷付けが、2体完成だ。バカな小娘共だ！おとなしくしておけば、部下として使ってやらんでもない・・・というところだったのにな。まあ、小娘共には部屋ごと凍らせるようなスケールの大きな戦いはできまいがな。」

ザッ！

藤袴

「フウ・・・ン？少し・・・暑いな。戦いで汗をかいたせいかな・・・？」

シュッ！

ドカ！！

藤袴

「な・・・何い!!?」

シユー・・・

藤袴

「な、なぜだ!?完全に凍って・・・ま・・・まさか・・・」

ゴオオオオオオオ・・・

藤袴

「ガ・・・ガーディアン：RING『サラマンダー』!!!」

ユリ

「刃ちゃん!!」

刃

「うん!!」

ユリ

「ウエポン：RING『スタンガンガトリンガー』!!!」

刃

「ネイチャー：RING『ライティングバルカン』!!!」

バリバリバリバリ!!!

藤袴

「う・・・ぐあああ!!!!」

ド・・・

ユリ

「壁に穴が開いた時、外にあの子を出しておいたのよ。あなたが部屋全体を凍らすというのなら、私は皆全体を炎で炙るまで。スケールの小さいのはそっちだったわね。」

刃

「ちょっと、ユリちゃん！もう！皆ごと火あぶりだなんて、ムチャしないでよお！ああ、熱かった！！」

ブスブス・・・

ユリ

「チエツ、派手にやられちゃって。」

ピピピ・・・

ユリ

「ん？松葉ちゃんからだわ。コナン君達を見つけたそうよ。ただ、敵がたくさんいて困ってるって。」

刃

「じゃあ、アタシは・・・」

「キヤアアア！！」

刃

「上の階から女の子の悲鳴！！風月ちゃんかしら？」

ユリ

「私は松葉ちゃんと合流して、コナン君達を助け出す！あなたは上に向かって。」

刃

「わかったわ！また後で・・・必ず会いましょう。」

ダッ！！

撫子

「緑の組織3幹部、この撫子をナメるなあっ!!」

ガガガガガ!!

風月

「キヤアアア!!」

ニヤ・・・

撫子

「フ・・・」

風月

「どっして!?!この暗闇の中で・・・」

ジリ・・・

撫子

「小さな頃・・・手に取ったスプーンが突然曲がった。その頃からアタシは超能力戦士。」

風月

「（エスパーガードイアン使いであると同時に・・・彼女自身が超能力者!）」

撫子

「気づいたか！開いた2つの目で見えないのなら、心の目で見ただけの事！！このような煙幕など、吹き飛ばしてくれるわ！！！！」

ゴオオツ！！

撫子

「ぬおおあああ！！」

ビュオオ・・・

撫子

「サイコキネシス！！」

ゴオオオオ・・・

風月

「キャアアア！！」

シュウウ・・・

風月

「ガストンの放った煙幕が・・・」

撫子

「金縛り！！」

風月

「え！？」

ビシ！！

風月

「(しまった!!!う、動けない。)」

シリ・・・

撫子

「フフフ。見たか、これが戦いのプロ!さて、とどめといくか。」

ピタ!

風月

「あつ・・・(くっ・・・)そ・・・そうね、さすがだわ。本当に戦いの事しか頭にないってわかるわ。よく見たらお肌があれいているだけじゃなくて、スタイルも私の方がグラマーみたい。・・・なんちゃって・・・」

ポヨヨン!

撫子

「ま・・・負け惜しみを・・・」

カチン!

撫子

「ええい、切り裂け!フリーデーン!!」

ベリイ!!

風月

「キヤアアア!!」

ベリリ・・・

風月

「かかったわね!!」

撫子

「な!?!胸にボールが!?!」

風月

「デイメンション：RING『フラッシュボール』!!」

ボシュウウウ・・・

パツ!

風月

「幻覚が消えた!今のうちに!・・・そうか!今までずっとわからなかったんだけど・・・本当は戦いたくないのね、あなたとは。」

撫子

「何!?!」

風月

「じゃあね!!」

タツ!

撫子

「ま、待て!!」

タタタ・・・

風月

「くっ・・・しっこいわね!!」

撫子

「待ちなさい!アタシが・・・本当は戦いたくない?フッフ、おもしろい事を言うわね 戦う事は、アタシの生き甲斐なのよ?戦いたくないわけではないじゃない」

風月

「私は刃ちゃん達と合流する。でも、戦いたくもないのに戦ってる人とは戦わない。絶対に!!」

撫子

「ネイチャー：RING『神速』!!」

ダンッ!

ドゴゴゴ!!

ズザアア・・・

撫子

「これでもですか?」

風月

「どうしてあなたが、戦いたくもないのに戦ってるのか私にはわからない・・・でも、とにかくあなたとは戦わない!!」

撫子

「なるほど・・・この：RINGの攻撃など、いくら喰らっても平気・・・戦うにも値しないという事ね・・・では、アタシの最後の切り札で、あなたが戦わざるをえなくしてあげるわ」

スツ・・・

撫子

「伝説のガーディアン『ファイヤー』・・・ネイチャー：RING『オーバーヒート』!!!!」

カツ!!

バガン!!

風月

「!!!!!!」

撫子

「ネイチャー：RING『オーバーヒート』……！」

カツ……！

バガン……！

風月

「……！」

メキメキメキメキ……

ズザアアア……

撫子

「どう？今までの攻撃の比じゃないでしょう？このネイチャー：RINGは、戦闘中、アタシの身体能力を極限まで高め、業火のごとく相手に激突できる：RING……仮に、さっきの『神速』のパUNCH力を100キロとするのなら、『オーバーヒート』のそれは400キロ……そんな攻撃を何度も喰らう気？こればかりは、抵抗せざるを得ないでしょ？」

ザツザツ……

撫子

「（『オーバーヒート』（コレ）を使えるのは、1日合計15回……それを使い切ってしまうと、アタシの体から、ほぼ全エネルギー

を奪われてしまう『諸刃の剣』・・・！！」

パツ！

スウ・・・

撫子

「（まあ、コレはあくまでも風月ちゃんを本気にさせるためのエサ
あなたが戦う気になったら、すぐに止めるわ・・・）」

ザッザッ・・・

撫子

「！ま、まだアタシと戦わないと言っの？」

風月

「戦いたくもない人とは戦わない。」

撫子

「だ、だから・・・アタシは戦いたくないなんて事はないわ！！戦
いたくないなんて・・・絶対に・・・」

『うえーん！！戦いたくなんてありませんわ、お父様あ！！』

『撫子！！戦場じゃ、そんな甘えは通用せんのだぞ！！』

『よう！また隊長にしごかれてんのか？』

『撫子！とつとと強くなって、そんなオヤジブツ倒しちまえ！！』

『隊長も、あんまし厳しくすつと撫子が大きくなってからグレちまうぞ!?!』

『ちげーねえ!ガツハツハツハツハツ!!!』

ズキイイ!!

撫子

「……!!!!!(……誰!?知ってる人?わからない……イヤ!!思い出したくない!!戦わなきゃ!!)アタシと戦って!!!!オーバーヒート!!!!」

ガゴオン!!

撫子

「これで戦う気になって……」

ザン!

撫子

「!!!」

『んじゃ、行ってくるぜ撫子!?!』

『みんな、ちゃんと戦場あつちから帰ってきてね!!』

『よし!んじゃこーしよう!!オレらが帰ってくるまでに、オマエはうんと強くなれ!!戦う事を恐れんな!オマエが人並みに戦えるようになったら、チャツチャと相手やつつけて帰ってくるからな!』

『本当・・・?』

『ああ、約束だ!!』

ズキイ!!

撫子

「(イヤ・・・!!なんでこんな事思い出すの!?) オーバーヒート・・・!!!!」

ドガガアン!!

ズザッ!

ザ・・・

撫子

「思い出したくない!!戦わなきゃ・・・!!戦い続けなきゃ!!」

『お父様・・・みんなはまだ帰って来れないの？』

『ああ、戦況が思ったより悪くてな・・・』

『ああ？なんだ、このガキあ？』

『ハッハッハッ！勝負しろだあ？』

撫子

「（イヤッ！！思い出したくない！！）」

『またかよ！しつげーぞ、毎日毎日！！』

『これが訓練なんだとよ、おかしいんじゃないのこイツ！！』

『撫子・・・またあの連中とやり合ったそうだな・・・もう戦争が
終わって・・・あれから1年経つんだ。訓練の必要なんか・・・』

『うつん、お父様！アタシは強くならなくちゃ！』

撫子

「（思い出させないで……！！これ以上思い出したくない！！！戦争が終わってもみんなが帰って来ないのは、きつとまだアタシが強くなつてないからよ！だって、アタシが強くなつたらみんな帰って来るって約束したもの！！だから……もつともつと戦って、強くならなきゃ……アタシは、みんなが帰って来るように、これからもずつとずつと戦い続ける！！そしたらいつかきつと、みんな帰って来るもの！！きつと、今ごろみんな遠い国で、元気にしてるもの……きつと……きつと……死んじゃってなんかいないもの……）」

バチィー！！

本当は……気づいてました……

撫子

「……うつ……うわあああああああ！！！！あああああ！！！！」

ガガアアン！！！！

撫子

「そうよ！！アタシは……アタシは、戦いなんて大嫌いだわ！！でも、戦っていればみんな帰って来るって……帰って来るって言

つたから!!!アタシだつて途中で気づきかけてたわ!!!みんなが
FBIとペンデュラムアッドとの戦いで死んでしまった事くらい!
!でも気づかないフリをして、自分を騙して戦い続けるしかなかつ
たのよ!!!『アタシは戦いが好き!!!』戦いこそ、アタシが最
も輝ける場所だ』つて!!!だつて・・・だつて今さら気づいちゃつ
たら・・・認めなくちゃいけないじゃない・・・!!!・・・みんな
の帰りを待つて、戦いに全てを費やしてきた7年間で・・・最初か
ら何の意味もなかつたつて・・・」

フツ・・・

撫子

「(・・・もつと早く気づいていねばよかった・・・でも、もう遅
すぎたわね・・・アタシには・・・)アタシにはもう・・・何一つ
・・・残つてな・・・い・・・」

ドサツ・・・

風月

「・・・」

刃

「風月ちゃん!」

タタタ・・・

風月

「刃ちゃん・・・」

刃

「勝ったのね、心配してたのよ！」

風月

「うん……でも、この人……」

「フン……やはり倒れたか……まあ、秋の七草の7人など、最初からあてにしていなかったがな……」

刃・風月

「!!!」

ザッ!

ザッザッ……

刃

「あなたは誰!?!」

スネイク

「ククク……私は……コイツらに影で指示を出し、操っていた……スネイクだ!!!」

スネイク

「私は、彼ら7人を操っていたスネイクだ・・・」

刃

「ス、スネイク・・・」

ザッザッ・・・

スネイク

「それにしても・・・つくづく役に立たん小娘だ・・・」

ドカツ!!

刃

「なっ・・・」

風月

「なんて事するのよ!..!」

スネイク

「ん?役に立たなくなっただから蹴飛ばしただけだが、それが何か?」

風月

「ひどいわ・・・部下として使っていたんでしょう!..?」

スネイク

「フン・・・役立たずなど、部下として置いておく価値もない・・・」

それに、私は早く欲しいのだよ・・・命の石『パンドラ』がね・・・
今まで、あの方の命でパンドラを狙っていたが、もう私にそんな時
間はない・・・私は私の意志で、この宝石の力で、オマエ達の宝石
も奪ってやる・・・」

刃

「コイツ・・・狂ってるわ・・・」

スネイク

「全ては、このスネイクが野望を叶えんがため!!!」

スッ!

スネイク

「ククク・・・ビッグジュエル『レインボー虹色の悪魔デビル』・・・これこそ、パ
ンドラを解き放つ第1歩となる宝石! ガーディアン: R I N G 『フ
ーデーオン』!!! サンダーとフリーザーを呼び戻せ!!!」

フッ!!!

スネイク

「さあ、虹色の悪魔の輝きよ・・・3体の鳥を合成せよ!!!」

ガッ!!!

メキメキメキメキメキ・・・

シユウウウウウウウウ・・・

刃・風月

「こ……これは!!?」

スネイク

「そうだ……これこそ最強のガーディアン：RING……3鳥
一体の魔物『サ・ファイ・ザー』!!!」

刃・風月

「サ・ファイ・ザー……」

スネイク

「フフフ……もはやこのガーディアンに太刀打ちなど出来まい……」

刃

「やってみなきゃ、わからないわよ。そんな事……」

風月

「ええ!!」

ダンッ!!

刃・風月

「オオオオオ!!」

スネイク

「ムダだあ!!オーバーヒート業火滅殺!ブリーズフリーズ豪雪吹雪!!ライトニングジョーボルト雷撃落雷!!!!」

グオッ!!

ゴオオオオオオオオオオオ……

ドガアッ！！

刃

「キヤアアア！！」

ガララ・・・

風月

「壁が・・・」

スネイク

「3鳥一体となったこのガーディアンに対抗するすべがあるか？イヤ・・・あるワケがない！！」

刃

「ふざけないで！！ガーディアン：RING『ラフレシア』！！」

カッ！

風月

「ガーディアン：RING『ガストン』！！」

カッ！

スネイク

「ムダだと言ったハズだぞ！！」

ゴオッ！！

刃・風月

「ああっ……!!」

スネイク

「ハハハハハハッ!!オマエ達は今勝てぬ!!このサ・ファイ・ザーの前では無力だ!!パンドラは復活し、私は世界を支配する!!
!そういう運命なのだ!!」

刃

「そんな事……ない……」

風月

「私達は絶対に……」

刃・風月

「あきらめない!!」

スネイク

「ハハッハッハッ！！オマエ達はもう勝てぬ！！このサ・ファイザーの前では無力だ！！パンドラは復活し、私は世界を支配する！！そういう運命なのだ！！！！」

刃

「そんな事・・・ない・・・」

風月

「私達は絶対に・・・」

刃・風月

「あきらめない！！！！」

ゴオツ・・・

コナン

「その通りだ、刃ちゃん、風月ちゃん！！」

哀

「・・・あきらめるのはまだ早いわよ！」

刃

「・・・コナン君、哀ちゃん！！」

風月

「無事だったのね！！」

レオン・麻衣

「阿笠博士とみんなは助け出し、七草の7人も外に出した!!」

松葉・ユリ

「後はコイツを倒すだけよ!!」

スネイク

「こしゃくな!ムダだと言ってるのが・・・わからないのかあーっ
!!」

ゴツ!!

コナン・哀・刃・ユリ・風月・レオン・麻衣・松葉

「ぐっ!!!!」

ドシャア!!

スネイク

「さあ、とどめだ!!!!」

コナン・哀・刃・ユリ・風月・レオン・麻衣・松葉

「くそ・・・」

カアッ!!

コナン

「な、なんだ!?!この光は・・・?」

哀

「私達全員の体が・・・赤、黄、紫、金、虹、緑、青、桃色に光り出してる・・・」

刃

「まさか、これが・・・」

ユリ

「ヤツらが言っていた『体内の中のビッグジュエル』なの・・・！？」

風月

「きつとそうよー!!」

レオン

「コイツに勝ちたいという、オレ達の強い気持ちが・・・」

麻衣

「体内の中のビッグジュエルを目覚めさせてくれたんだわ!!」

松葉

「勝てる・・・この戦い、勝てるわ!!」

スネイク

「あきらめの悪いヤツらめ!!こうなれば、最強の技で消し去ってくれる!!!!」

コナン

「赤色に光り輝く、クリムゾンシーンよ・・・」

哀

「黄色に光り輝く、フルムーンシェリーよ……」

刃

「紫色に光り輝く、バイオレットリアンよ……」

ユリ

「金色に光り輝く、ゴールデンリスよ……」

風月

「虹色に光り輝く、レインボーアースよ……」

レオン

「緑色に光り輝く、フォレストシルバーよ……」

麻衣

「青色に光り輝く、セルリアンホワイトよ……」

松葉

「桃色に光り輝く、ハートフルアリスよ……」

コナン・哀・刃・ユリ

「今、我らと共に!!!」

風月・レオン・麻衣・松葉

「悪しき力を打ち破れ!!!」

スネイク

「サ・ファイ・ザー、ゴッホ・パニシング・バード『神速爆撃波』!!!!」

コナン・哀・刃・ユリ・風月・レオン・麻衣・松葉

レインボウ・ジュエリアス・バスター
「虹宝石爆撃砲！！！！」

ゴオツ！！！！

ドオン！！！！

コナン・哀・刃・ユリ・風月・レオン・麻衣・松葉
「いっけええええええええーっ！！！！」

コナン

「赤色に光り輝く、クリムゾンシーンよ……」

哀

「黄色に光り輝く、フルムーンシェリーよ……」

刃

「紫色に光り輝く、バイオレットリアンよ……」

ユリ

「金色に光り輝く、ゴールデンリスよ……」

風月

「虹色に光り輝く、レインボーアースよ……」

レオン

「緑色に光り輝く、フォレストシルバーよ……」

麻衣

「青色に光り輝く、セルリアンホワイトよ……」

松葉

「桃色に光り輝く、ハートフルアリスよ……」

コナン・哀・刃・ユリ

「今、我らと共に……！」

ユリ

「後1人、力を貸してくれたら・・・」

「黒色に光り輝く、ダークネスオルキスよ・・・今ここに、その漆黒の力を示せ！！！」

風月

「・・・えっ!?!」

レオン

「この人・・・シルクハットとマントに、片眼鏡モノクルをしているけど・・・」

麻衣

「この人は・・・この口調は・・・」

松葉

「・・・毛利蘭さんっ!!!!!!」

鈴

「みんな、久しぶりね!でも、ここは遠蘭鈴って呼んで欲しいな・・・さあ、一気にアイツをブツ飛ばすわよ!!!!!!」

コナン・哀・刃・ユリ・風月・レオン・麻衣・松葉

「はい!!!!!!」

スネイク

「何!?!8人が9人に・・・」

コナン・哀・刃・ユリ・風月・レオン・麻衣・松葉・鈴

「包囲網から抜けた者はいないそうよ。スネイクもきつと、崩れた
砦に埋もれたわ。」

レオン

「ヤツが持ってた宝石も回収した・・・何はともあれ、一件落着だ
な！」

刃・ユリ・風月

「そうね！」

松葉

「あ・・・」

隆太

「3人とも、声がハモってるよ！」

刃・風月・ユリ

「なっ・・・」

真

「ケンカするほど、仲がいい！」

刃

「ウフフ・・・」

風月

「フフツ・・・」

ユリ

「アハハ・・・」

ファイル219：友情と愛の鼓動（ハートビート）『24・一件落着？』（後書）

『名探偵コナン・友情と愛の鼓動』ハートビート

主題歌 - あなたがいるから

挿入歌 - 君がいれば『世紀末バージョン』

メインテーマ - 名探偵コナンメインテーマ『暗殺者バージョン』

サウンド - 名探偵コナン『瞳の中の暗殺者』スナイパー オリジナル・サウンドトラック

ファイル220：スネイクの最期・そして・・・

コナン・哀・刃・ユリ・風月・レオン・麻衣・松葉の8人は、杯戸シティホテルの屋上に来ていた。

怪盗キッドとレディー、そして鈴から呼び出されたからだ。

キッド

「8人とも来てくれたか・・・」

レディー

「アタシ達がここにあなた達を呼んだワケ、わかってるよね？」

コナン

「パンドラだな・・・」

哀

「私達9人のビッグジュエルのエネルギーをこのレインボーデビルに与えれば、パンドラは復活する・・・」

刃

「そして、それを砕いてしまえば、もう二度と悪の手に渡る事はない・・・」

鈴

「そついう事ね・・・じゃあ、始めましょうか・・・」

コナン

「赤色に光り輝く、クリムゾンシーンよ……」

哀

「黄色に光り輝く、フルムーンシェリーよ……」

刃

「紫色に光り輝く、バイオレットリアンよ……」

ユリ

「金色に光り輝く、ゴールデンリスよ……」

風月

「虹色に光り輝く、レインボーアースよ……」

レオン

「緑色に光り輝く、フォレストシルバーよ……」

麻衣

「青色に光り輝く、セルリアンホワイトよ……」

松葉

「桃色に光り輝く、ハートフルアリスよ……」

鈴

「黒色に光り輝く、ダークネスオルキスよ……」

コナン・哀・刃・ユリ・風月・レオン・麻衣・松葉・鈴

「我らの体内にある、9つのビッグジュエルよ……今こそその力で、パンドラを目覚めさせよ……！」

カッ!!

キュインキュイン・・・

ガアッ・・・!!

キッド

「ついに復活した・・・!!」

レディー

「命の石『パンドラ』が・・・」

鈴

「あとは、これを碎けば・・・」

シュンッ!!

コナン・哀・刃・ユリ・風月・レオン・麻衣・松葉・鈴
「!!!!」

パシッ・・・

スネイク

「ハッハッハッハッハッ!!ごころうだったな、怪盗キッドよ・・・」

キッド

「ス、スネイク!!」

レディー

「死んだんじゃないの!？」

スネイク

「バカめ・・・私は野望のためなら、たとえどんな事でも死なん!
!」

鈴

「そ、そんな・・・」

スネイク

「ハハハ・・・ようやくこの手にパンドラが・・・さてと、後は邪魔者の始末だな・・・クロウ!!」

スツ・・・

スネイク

「ヤツらの始末はオマエに任せる。さあ、ヤツらの息の根を止める
!!!」

クロウ

「・・・」

スネイク

「どうした、クロウ？」

クルツ・・・

スネイク

「?」

ドスッ!!

スネイク

「ガッ……」

コナン・哀・刃・ユリ・風月・レオン・麻衣・松葉・鈴・キッド・
レディー

「なっ!!!?」

クロウ

「今までご苦労様、スネイク……」

ポロツ!

ドッ……

スネイク

「バカな……クロウ、なぜオマエが私を……」

クロウ

「あらあら、まだアタシがクロウだと思ってるのかしら? つくづく
甘ちゃんね……」

スネイク

「ま、まさか……オマエは……」

クロウ

「おしゃべりはそこまで!」

バリバリバリ……

スネイク

「ぎゃあああああつ!!」

ドサツ……

クロウ

「ウフフ……いただきます。」

ガシツ!

ポイツ!

パクツ!

ゴツケン!!

ペロリン……

クロウ

「ウフフフ……」

スウウウウ……

キッド

「ゴ、ゴーゴン!!」

ゴーゴン

「その通り、アタシはゴーゴンよ……クロウを殺して食べた後、

クロウに化けてスネイクの行動を監視していたってワケ・・・まったく・・・役立たずなんだから・・・」

ユリ

「あ・・・」

ドサツ！

コナン

「ユリちゃん！..!」

哀

「目を回して気絶してる・・・」

ゴゴゴン

「なるほど・・・その女の子は、気絶するほどアタシが苦手ってワケね・・・」

コナン・哀・刃・風月・レオン・麻衣・松葉・鈴・キッド・レディー
「・・・」

ゴゴゴン

「安心して、今日は何もしないから・・・それに、このパンドラもあなた達にあげる・・・」

ポイツ！

トサツ・・・

キッド

「ど、どついう事だ!？」

レディー

「あなた達のボスは、パンドラを欲しがっていたはず・・・」

ゴーゴン

「実はねー、ボスももうその宝石には興味なくなったらしいのよ・・・
・『もつとおもしろい事が見つかった』ってね・・・」

鈴

「おもしろい事・・・?」

ゴーゴン

「すべては今後わかるわ・・・ただし、あまりアタシ達にちよつか
い出さない方がいいわよ・・・じゃあね!」

スウウウ・・・

キッド

「ま、待て!ゴーゴ・・・」

「深追いするな、快斗!」

キッド

「えっ・・・!？」

レディー

「今、確かに『快斗』って・・・」

キッド

「ま、まさか……」

「久しぶりだな、快斗……」

「大きくなつたわね、弥生……」

「あれー？なんでリアンがここにおるん？」

キッド

「オヤジ！？」

レディー

「盗華お姉ちゃん！？」

刃

「リリー……姉……！？」

ファイル221：驚愕の再会・パンドラの最期

「深追いするな、快斗!!」

キッド

「えっ……!?!」

レディー

「今、確かに『快斗』って……」

キッド

「ま、まさか……」

「久しぶりだな、快斗……」

「大きくなったわね、弥生……」

「あれー？なんでリアンがここにおるん？」

キッド

「オヤジ！」

レディー

「盗華お姉ちゃん!!」

刃

「リリー姉!!!!」

バサッ……

黒羽盗一

「久しぶりだな、快斗、弥生……ん？そっちの子は確か……」

黒羽盗華

「有希子のトコのボウヤよ。」

リリー

「んで？なんでリアンはここにおるん？」

刃

「リ、リリー姉こそ……なんで!？」

弥生

「そもそも、どうしてこの2人生きてるの!？」

快斗

「オヤジ達は死んだはずだよな!？」

盗一

「その事か……実は、ある宝石を持ち主に返した事がきっかけで謎の組織に狙われているのを知った私は、あのマジックショーの日、友人を替え玉役に立てていたのだ。万が一の時のためにな……結果、ショーの最中に爆発が起き、私の友人は爆死した……それからだよ、私が行方をくらませるようになったのは……」

盗華

「それで、私もこのリリーちゃんも盗一に助けられたってワケ……」

「

コナン

「そういう事だったんですか・・・」

リリー

「そや。緑の組織をつぶす手がかりをつかむまで、ウチらは死んだ事にしよう」と相談してたんや・・・」

盗一

「さあ、快斗。今こそパンドラを破壊するんだ！」

快斗

「わかった。弥生。」

弥生

「うん。」

ガシツ！

快斗

「蘭さん？」

鈴

「・・・」

コクリ。

快斗

「よし、やるぞ・・・」

グググ・・・

バキイイイン!!!!

快斗

「砕けた……」

弥生

「パンドラが……」

鈴

「これで……本当に終わったのね……」

「風月!!」

風月

「……えっ?」

暁

「大丈夫……か……」

ダッ!

バツ……

暁

「ふ、風月……?」

風月

「今までどこに行ってたのよ、暁……私はずっとずっと、あなたの事待ってたんだから……」

暁

「悪かった、風月……『アイツら』をつぶす手がかりをつかめるまで、オマエに会うワケにはいかなかったんだ……」

風月

「それって、もしかして……」

暁

「ああ……ペンデュラムアッドの1組織、『赤の組織』だ……」

ファイル222：動き出す2大組織

某城

ダゴン『そうか・・・緑の組織は崩壊したか・・・』

スレイプニル『まあ、あそこのヤツらにはさほど期待はしていなかったがな・・・』

テイターン『ゴーゴンとトードは、こっちですつとおるそうじゃ。』

サイクロプス『ヤツらが来た時のために、対策を立てておくんだつてよ。』

スフィンクス『まあ、あの頭の悪いゴーゴンが立てる作戦など、あまり意味はないと思いますが・・・』

イフリート『スフィンクス、言う事がキツイねえ・・・』

ドレイク『スフィンクスは事実を言ったままで・・・』

ワイバーン『ハハハ、そうそう!!』

ダゴン『イフリート、スフィンクス！ドレイク、ワイバーン！オマエ達の組織は大丈夫なのだろうな？』

イフリート『大丈夫よ、アタイ達の部下はあそこまで弱くないから・

・・・
』

スフィックス『それに、計画を邪魔されれば倒すまで・・・』

ワイバーン『オレ達が立てている計画・・・』

ドレイク『誰にも邪魔はさせん!!』

ダゴン『よかるう。ではここで・・・解散!!』

バババババババツ!!

アメリカ

パキーン・・・

「ペンデュラム・ブルームの花が1つ・・・緑の花弁が散った・・・つまり、緑の組織が倒されたという事だ・・・しかし、赤の組織と青の組織は強い・・・ウコン、アザミ、コゴミ、ジンダイ、ヒース、ダツラ、そしてリラ!!オマエ達は各地に散り、コナン達のサポートをするのだ!!」

「・・・ハツ!!!!」

ババババババツ!!!

「さて、私は資料を整理しておくか・・・それに、ジヨディ達にも新しい指示を出さねばな・・・」

第2章・・・完。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1016b/>

FBIから来た女:2 ~ 深緑・緑の章

2010年10月9日16時49分発行